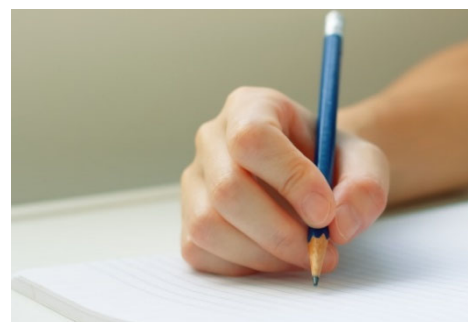


文部科学省国立大学法人運営費交付金（機能強化経費）
健康科学・人間発達科学分野における国際的研究拠点形成

お茶の水女子大学 人間発達教育科学研究所 最終報告書

2016年度～2021年度

健やかで活力ある人生を送るために
子ども期からの幸せを考える
～研究と実践～



お茶の水女子大学
Ochanomizu University



人間発達教育科学研究所
Institute for Education and Human Development

人間発達教育科学研究所 最終報告書

【 目 次 】

はじめに	1
1. 人間発達教育科学研究所の概要	3
(1) 組織（部門）と構成メンバー	3
(2) 組織運営	4
1) 財政基盤（予算配分）	
2) 運営会議等	
3) 情報発信（広報活動）	
4) 附属校園との連携	
2. 研究成果報告	7
(1) 部門の研究概要	7
(2) 研究強化・支援の取り組み	15
(3) 個人別 研究業績一覧	30
(4) 年度別 論文一覧	97
(5) 年度別 書籍一覧	130
3. 活動報告（国際シンポジウム、セミナー等）	149
(1) 研究所主催「年度末成果報告会」	149
(2) 研究所共催/後援シンポジウム/セミナー	156
(3) 部門別 主催シンポジウム/セミナー	158
(4) 年度別 部門共催 / 後援イベント等	168

<資 料>

1. 人間発達教育科学研究所 運営会議メンバー一覧（2016-2021年度）
2. 人間発達教育科学研究所 メンバー一覧（2016-2021年度）
3. 人間発達教育科学研究所 規則
4. 人間発達教育科学研究所 成果概要報告（2022.3.14 最終評価発表資料）

はじめに

お茶の水女子大学では、これまでの教育研究の実績や人材育成の経験を活かし、更に発展させるよう、総合的、国際的な研究・教育活動を行うことを目的とした「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」を、2016（平成28）年に開設しました。本機構は、「ヒューマンライフイノベーション研究所」と「人間発達教育科学研究所」の2つの研究所で構成されており、人間の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーションを実現する教育研究拠点をめざしています。

人間発達教育科学研究所（Institute for Education and Human Development）は、本学の人間発達科学をテーマとする学内教員を組織し、人間の発達と教育に関する総合的、国際的な研究拠点を構築することをめざして、2016年4月に設置されました。人間発達に関する基礎研究と実践研究・臨床研究を結びつける中から、革新的・効果的な成果発信と提言を行ない、子ども達の教育的・社会的格差の解消を志向する研究などを含め、少子化を質的・量的に改善する施策や、子どもから青年期以降までの発達の質の向上に向けた施策の策定に貢献することを目標としています。

本研究所は、子どもの発達過程の解明を基礎としたより良い養育や保育、教育のあり方の提案を目的として、2002年4月に設置された「子ども発達研究センター」が、2003年度に文部科学省に認可された「子ども発達教育研究センター」を前身としています。その後4回の改組を経て、2016年4月、「人間発達教育科学研究所」が誕生しました。現在は、本学「ヒューマンライフイノベーション開発研究機構」傘下の研究所として、学内外の研究・教育者の協力を得ながら、「保育・教育実践研究部門」「人間発達基礎研究部門」「発達臨床支援研究部門」の3部門で研究活動を推進しています。機構のもう一つの研究所、ヒューマンライフイノベーション研究所との文理融合研究にも取り組み、両研究所がめざすコアコンテンツ「生活習慣病」「炎症・感染症」「発達障害」を中心に、様々なライフステージにおける「こころ」と「からだ」に関わる国際レベルの研究を充実させてきました。研究成果を、論文、シンポジウム、教育プログラムを通して広く社会に発信してきております。

2020年には中間評価を受け、ご指摘いただいた課題の対応に努めるとともに、こころとからだの健康に関する研究成果のまとめとして、Q & Aシリーズ「発達障害（ADHD）」「発達障害（ASD）」「発達障害（LD等）」の3巻を作成し、「炎症・感染症」については、文理融合型研究の成果としてヒューマンライフイノベーション研究所と協働作成しました。また、2022年3月には、6年間にわたる取り組みについて最終評価を受け、機構の目的と成果について高い評価を頂戴しました。今後はさらに、人間発達科学の先端的な研究を推進するとともに、他領域との連携や融合を図り、研究成果の社会還元をめざした、人間発達研究を継続・発展させていきたいと考えております。引き続きご支援ご指導のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

令和4年3月 人間発達教育科学研究所 所長 大森美香

ヒューマンライフィノベーション開発研究機構

人の発達段階に即した心身の健康と生活環境の向上を意図したイノベーション実現のための国際的研究拠点形成

重点領域: 人間発達科学、教育科学

重点領域: 生命科学、生活科学

人間発達教育科学研究所

子ども期から高齢期までの生涯にわたる発達プロセスを実証的に明らかにし、良質な保育教育実践や教育・社会格差解消に役立つ発達研究に取り組む

ヒューマンライフィノベーション研究所

人が生涯を通じて健康で心豊かな生活を過ごすための研究・開発と、安全・安心な社会環境構築のためのイノベーションを創出する

「こころ」と「からだ」の両面から諸課題にアプローチ*

子ども期から高齢期までの発達段階に応じた各研究所の成果を発信・蓄積

QOLの向上をキーワードとして革新的な健康イノベーションを創出

融合研究例: 発達障害やストレス性疾患、生活習慣病に関する健康支援・教育プログラムの開発と実践研究

教育研究・実践の場

連携・共同・受託研究

附属学校園
(幼小中高&ナースリー)

文京区立お茶の水
女子大学子ども園



国内外大学、研究機関、企業、行政等
との連携による開発・研究



人間発達教育科学研究所の取り組み

健やかな育ち

健やかに活力と意欲ある
子どもたちの育成

【研究テーマ例】

- ① 保育の質の向上（認定こども園・ナースリー・幼稚園）
- ② 養育格差および教育格差の是正
- ③ 子ども健康・発達に与えるメディアの影響性の解明
- ④ 発達障害児への対応策の提案

活力ある暮らし

QOLの向上と健康寿命の延長

【研究テーマ例】

- ① 親のメンタルヘルスの健全維持、良好なワークライフバランス等へアレンティングのあり方に関する提案
- ② 臨床支援プログラムの開発
- ③ 成人期前期の社会的格差に関する社会科学的解明

ポジティブエイジングを目指して
健康長寿を実現

【研究テーマ例】

- ① 高齢者の生活環境の改善に関する提言
- ② 祖父母世代の次世代育成機能の解明
- ③ 中高年期の社会的格差に関する社会科学的解明

元気な老い

1. 人間発達教育科学研究所の概要

(1) 組織（部門）と構成メンバー

人間発達教育科学研究所の研究組織は、「保育・教育実践研究部門」「人間発達基礎研究部門」「発達臨床支援研究部門」の3部門から構成されており、部門ごとに以下のような研究および実践事業（退職メンバーの研究内容含む）を展開・推進している。

1) 保育・教育実践研究部門

乳幼児期の保育・教育の質向上、保育者の資質・能力育成、地域子育て支援の開発に関する研究を統合的に、学内の乳幼児施設（附属幼稚園、こども園、ナーサリー）を初め、地域との連携も図りながら推進し、乳幼児教育カリキュラムおよび社会人プログラムの開発、評価および発信を行なっている。

また、子どもの実態や国内外の教育政策に関する動向を踏まえた現代的課題にこたえる教育方法のあり方の研究を進めるとともに、初等・中等・高等教育の各学校段階の接続を有効にするシステムやカリキュラムの開発・研究を大学と連携し附属学校園を中心に行なっている。特に、2018度から「連携研究員」を新たに設置し、お茶の水女子大学学校教育研究部のミッションを引き継ぎつつ、本学独自の研究・教育活動をすすめている。

2) 人間発達基礎研究部門

① 発達追跡研究

子ども期の家庭の経済的状況、家族関係、メディアなどの養育環境が子どもの発達やQOLに及ぼす短期的・長期的な影響に関する追跡研究、思春期・青年期の健康行動の発達など心身の健康や発達に関する基礎的研究を展開する。

② 保育・教育格差研究

子どもへの保育や教育にあらわれる格差とその発達への影響に関する長期追跡研究、教育格差に関する国際比較研究を実施する。生涯発達に及ぼす社会的格差の問題について検討を行ない、子ども達の教育的・社会的格差の解消に向けた提言を行なう。

3) 発達臨床支援研究部門

発達障害（自閉症スペクトラム、注意欠如多動症など）を有する子どもや青年への支援に関する調査研究をはじめ、支援が求められる家庭や地域、福祉や教育の現場などに実際に関わりながら、そこに生きる人々を支援するプログラムやコンサルテーション技法などの介入方略や理論を検討していく。

※各部門の構成メンバーは、第2章「研究成果報告」および巻末資料「研究所メンバー一覧」を参照。

(2) 組織運営

1) 財政基盤（予算配分）

(単位：円)

会計年度	人件費	直接経費等※	摘要
2016年度	12,200,000	2,973,000	
2017年度	12,200,000	2,973,000	
2018年度	12,300,000	5,955,372 (1,998,829)	直接経費のうち1,083,543円は2017年度繰越金
2019年度	12,800,000	7,513,979 (1,999,979)	直接経費のうち836,000円は2018年度繰越金
2020年度	12,800,000	9,314,000	直接経費のうち3,800,000円は2019年度繰越金
2021年度	13,050,000	6,500,000 (2,800,000)	

※下段()内は、直接経費のうち、研究目的や機能強化(法人運営活性化支援)を目的とした運営費交付金の金額

2) 運営会議等

人間発達教育科学研究所では、研究所の運営並びに研究・業務に関する事項を審議するため、「運営会議」を設置している(研究所規則第10条)。研究所長が議長を務め、研究所専任教員や各部門の代表者である教員(計9名)から構成されている。オブザーバーとして、ヒューマンライフイノベーション開発研究機構長、ヒューマンライフイノベーション研究所長および事務局、機構の事務を担当する研究協力課職員を迎え、円滑な機構運営をめざした体制で研究所運営を行っている。(詳細は巻末「人間発達教育科学研究所規則」を参照)。

「運営会議」は、原則的に年に2～3回程度(前学期始め、後学期始め等)、対面式の会議を開催するほか、メンバーの海外出張や講師依頼・兼業等については、迅速かつ効率的な決裁をめざし適宜メール会議(電子的決裁)を行っている。特に2020年度からは新型コロナ感染防止対策として、対面式会議にzoomを活用している。

開催実績は2016年度が14回(うち対面2回)、2017年度が14回(うち対面2回)、2018年度が14回(うち対面2回)、2019年度が11回(うち対面2回)、2020年度が9回(うち対面2回:zoom1回)、2021年度が5回(うちzoom2回:2022年1月現在)である。

また、組織運営主体の「運営会議」とは別に、各部門における研究の進捗状況や活動

報告等、研究に焦点をしばった情報交換・情報共有の場として、月に1回程度、コア会議（2018年度からは「研究会議」に名称変更）を開催し、研究ミッションに基づいた研究推進・連携強化をはかっている。

【2021年度運営会議メンバー】 ※2016-2020年度の構成メンバーは巻末資料参照
大森美香（研究所長：基幹研究院人間科学系 教授）

上原 泉（人間発達基礎研究部門：人間発達教育科学研究所 准教授）

今泉 修（人間発達基礎研究部門：人間発達教育科学研究所 助教）

浜野 隆（人間発達基礎研究部門長：基幹研究院人間科学系 教授）

浜口順子（保育・教育実践研究部門長：基幹研究院人間科学系 教授）

富士原紀絵（保育・教育実践研究部門：基幹研究院人間科学系 教授）

岩壁 茂（発達臨床支援研究部門長：基幹研究院人間科学系 教授）

3) 情報発信（広報活動）

①人間発達教育科学研究所パンフレット（和英）

人間発達教育科学研究所では、本研究所の目的や組織体制、研究内容等を広く社会に発信するため、毎年、研究所パンフレット（日本語版、英語版）を発行し、学内外の研究機関や連携団体等に配布している。また、研究所が主催/共催/後援する各種シンポジウムやセミナー等でも配布され、研究所ホームページでもPDF（無料ダウンロード）で公開している。



②人間発達教育科学研究所ホームページ

人間発達教育科学研究所では、2016年8月にホームページ（日本語、英語）を開設し、人間発達科学に関する研究成果を積極的に発信するとともに、国内外、学内外の連携強化をはかっている。特に、3部門（①保育・教育実践研究部門、②人間発達基礎研究部門、③発達臨床支援研究部門）で各々主催（共催/後援）するシンポジウムやセミナー等の多くは一般にも広く公開され、数多くのリピーターがアクセスしている。また、研究所の最新情報のみならず、研究所メンバーがこれまで携わってきた大型研究プロジェクト（21世紀 COE:2002-2006年度、グローバル COE:2007-2011年度等）についても、研究レガシーとしてその成果を引き継ぎ、リンク公開している。

ホームページへのアクセス状況については、開設年度である2016年度の月間平均ユーザー数が356人、月間平均ページビュー（PV）数が992PVであったのに対し、最終年度の2021年度（12月現在）にはそれぞれ1,362人（2016年度の3.8倍）、4,265PV（2016年度の4.3倍）と大きな増加を示している。



【人間発達教育科学研究所ホームページ トップ画面】

4) 附属校園との連携

人間発達教育科学研究所では、お茶の水女子大学附属校園（附属幼稚園、附属小学校、附属中学校、附属高校、いずみナーサリー）及び文京区立お茶の水女子大学こども園との連携研究・事業を推進するため、2018年度より「連携研究員」を新たに設置している（巻末「研究所規則」第7条）。

連携研究員は、本学各附属学校、保育所及びこども園の専任職員並びに本学特任教員及び任期付教員のうちから、学校教育研究部長によって推薦された者を学長が任命（任期1年）し、①人間発達に関する基礎的研究、②教育実践および保育実践に関する研究、③発達臨床支援に関する研究のうち特定の研究及び業務に従事している。特に、Q&Aシリーズの作成や教材化事業においては、学校教育研究部の協力のもと、連携研究員が調整役となり、各校園でのカリキュラム開発や実践研究を進めている。

また、本研究所では、附属校園との連携研究を推進・強化するため、大学所属の連携研究員に毎年、個人研究費を措置するとともに、Q&Aシリーズ教材化事業においては、ヒューマンライフイノベーション研究所と共同で附属校園研究予算を配分している。

2. 研究成果報告

(1) 部門の研究概要

人間発達教育科学研究所は、「保育・教育実践研究部門」「人間発達基礎研究部門」「発達臨床支援研究部門」の3つの研究組織から構成されている。2016年度～2021年度における3部門の研究概要は以下のとおりである。

【保育・教育実践研究部門】 部門長：浜口順子（2016—2021年度）

1. 保育・教育実践研究部門の研究事業

人間発達教育科学研究所において本部門は、特に子ども期の「こころ」と「からだ」の健やかな育ちに関して、学内の乳幼児施設（附属幼稚園、お茶の水女子大学こども園、いずみナーサリー）をフィールドとし、乳幼児期の保育・教育の質向上、保育者の資質・能力育成、地域子育て支援の開発に関する研究を統合的に行なう。大学内の新しい心理学科・子ども学コース、保育・教育現職者社会人講座および附属学校園等の教育研究・実践の場とも連携し、研究成果である教育コンテンツを反映させ、循環的に教育カリキュラム研究を進める。

2. 活動概要

本学の第3期中期目標・中期計画における【K30】および【K35】に該当する活動として、主に下記の活動を行ってきた。

・2016（平成28）年度から東京都文京区の委託を受け、認定こども園を設置・運営してきた。園長は本研究所教員である。新しい保育・子育て支援法に則った認定こども園のカリキュラム開発、地域の保育所不足、地域子育て支援拠点・保育者の研修の場などに対する現代的課題に応えうる、研究—実践の循環的機関となるべく組織化をすすめてきた。2021 人間発達教育科学研究所と協働して、生涯発達を見据えた0歳児からの教育カリキュラムの開発、乳幼児教育・保育の質の評価方法を開発・研究し、地域の保護者対象の保育講座、保育者の現職研修の提供等、地域貢献を行い、その成果は毎年2～3月に開催の「こども園フォーラム」で発表された。2020年度は新型コロナウイルス感染流行にともない、オンライン型の開催とした。また2021年度には研究員と附属幼稚園・こども園・ナーサリーの3園が共同して「保育マネジメント研究会」をつくり、保育評価、保育記録、暮らしのデザイン、園経営研究の4パートからなる共同研究を推進中で、「こどもフォーラム」をオンライン開催する。また、2021年度「研究強化・支援事業研究推進費」により、日本保育学会第74回大会において自主シンポジウム「夕方の保育の探究—認定こども園における教育標準時間以外のカリキュラムの検討を通して—」を行った。

・3つの乳幼児教育現場（附属幼稚園、いずみナーサリー、認定こども園）と文教育学部に2018年度に設置された子ども学コースが連携し、保育者・教員養成に関する実践型の授業（フィールドワーク、インターンシップ等）を行い、研究成果を反映させつつカリ

キュラムの改編を進めてきた。また、2019年度からBP（職業実践力育成プログラム）に認定された社会人講座（科目等履修型）は、文京区、文京区立お茶の水女子大学こども園と連携した募集・評価を行い、学内教育GPによって運営された。2020年度からオンライン型授業を導入し、公開講座型の授業において受講者の急増をみた。2020年度末には履修証明を4人に発行し「ECCELL—BP ミニフォーラムをオンラインで開催した。

- 本学における社会人プログラムの成果と課題について研究をまとめ、『高等教育と学生支援』に論文（英文）が掲載された。Hamaguchi, J., Utsumi, S. (2020) Unlearning-Based Professional Development for Early Childhood Care and Education: Survey of the ECCELL Program at Ochanomizu University, Japan Higher Education and Student Support 『高等教育と学生支援』11 pp. 25-31
- 本学の附属校園（幼小中高）における教育実践研究活動（認定こども園に関する教育研究部門の新設、大学と附属学校等との連携体制の改編、幼小中高・いずみナーサリー・認定こども園の教育カリキュラム改善と基盤となる研究活動の推進、評価に関する研究の支援等）を促進・充実させる上で、学校教育研究部の下で、各校園において自主的に長く継続されてきた部会別研究システムを生かしつつ、それを大学の研究者と有機的につなぎ各々の研究推進にプラスに作用するようなシステムをつくる工夫を重ね、本研究部門の教員と附属校園教員が行う全体会、月1回程度の部会別研究会への大学教員の参加、年度末の研究成果発表会における協働などを行ってきた。特に、2018（平成30）年度から「連携研究員」制度を設置し、3名の研究者が附属園をフィールドに統一的なテーマを設定して研究を進めることとなり定期的な研究の交流を進めてきている。その他、諸外国の幼児教育研究者を招いての公開シンポジウムでは附属校園の教員と場を共有した。幼小中の附属校園とこども園、いずみナーサリーが共同して行う表現系ワークショップの研究会（ライフ×アート展）は、地域からの参加も多く、大学・附属校園・地域一体型の試みとして毎年好評を得ている。2020～2021年度は新型コロナウイルス感染流行によって共同研究は大幅に制約を受けたが、2020～2021年度に順次発行されたQ&Aシリーズ（3冊）制作にむけて協力することができた。

【2021年度構成メンバー】 ※部門長以外、職位順（五十音順）

浜口順子（基幹研究院 人間科学系 教授） ※部門長

小玉亮子（基幹研究院 人間科学系 教授）

富士原紀絵（基幹研究院 人間科学系 准教授）

刑部育子（基幹研究院 人間科学系 准教授）

武藤世良（基幹研究院 人間科学系 講師）

辻谷真知子（基幹研究院 人間科学系 助教）

松島のり子（基幹研究院 人間科学系 助教）

内海緒香（人間発達教育科学研究所 特任講師）

山崎洋子（人間発達教育科学研究所 特任アソシエイトフェロー）
山岸由紀（人間発達教育科学研究所 連携研究員：学校教育研究部特任准教授）
岡田了祐（人間発達教育科学研究所 連携研究員：教学 IR 教育開発学修支援センター講師）
葭内ありさ（人間発達教育科学研究所 連携研究員：お茶大附属高教諭）
大塚みずほ（人間発達教育科学研究所 連携研究員：お茶大附属中教諭）
岡田泰孝（人間発達教育科学研究所 連携研究員：お茶大附属小教諭）
杉浦真紀子（人間発達教育科学研究所 連携研究員：お茶大附属幼稚園教諭）
中澤智子（人間発達教育科学研究所 連携研究員：いずみナーサリー保育士）
内野公恵（人間発達教育科学研究所 連携研究員：文京区立お茶大こども園主任保育士）
宮里暁美（人間発達教育科学研究所 客員研究員：アカデミック・ロダクション教授）
菊地知子（人間発達教育科学研究所 研究協力員：いずみナーサリー主任保育士）
※2016-2020 年度の構成メンバーは巻末資料参照

**【人間発達基礎研究部門】 部門長：菅原ますみ（2016-2020 年度）
浜野隆（2021 年度）**

1. 人間発達基礎研究部門の研究事業

本部門は、生涯にわたる「こころ」と「からだ」の健やかな発達のあり方に関して、おもに心理学・教育学・社会学の領域から研究を展開している。「人間発達と QOL 研究」では、妊娠期からの長期的な縦断研究を通して、家庭の経済状況や家族関係、メディアなどの養育環境のあり方が子どもの健康や発達に及ぼす影響性について検討すると同時に、両親の心身の健康や発達に及ぼすワークライフバランスや職場環境の影響性についても長期的な観点から分析を行い、家族全体の QOL について実証的な知見を提供する。「思春期・青年期・成人期の健康行動研究」では、個人の心身の健康や発達に関する健康心理学的な基礎研究を展開するとともに、インターネットやギャンブル依存に関する調査研究によってリスク行動の発現機序や予防に資する知見を提供する。「教育格差研究」グループでは、子どもに供給される保育や教育にあらわれる格差とその発達への影響に関する長期追跡研究や国際比較研究を実施し、教育的・社会的格差の解消に向けた提言をおこなう。

2. 研究活動の概要

上記の研究事業目的に沿って、2016 年度～2019 年度に実施された主な研究活動は以下の通りである。

【2016 年度】

「人間発達と QOL 研究」では、妊娠期から子どもが成人期に達するまでの家族の健康と QOL に関する長期追跡研究（科研費基盤研究（A））を継続し、成果を英文論文として公刊した。またドイツ日本研究所と共同で子育て世帯（日独男女計 4,000 名）のワークライフバランスと QOL に関する国際比較調査を実施し、成果を英語書籍として出版した。

【2017 年度】

「思春期・青年期・成人期の健康行動研究」において、成人期のギャンブル依存（パチンコ・パチスロ遊戯障害）に関する全国調査（無作為抽出された 5,060 名）を実施し、推計結果より同障害が 40 万人程度であることを日本で始めて公表し多数のマスメディアで報道された。また、スリランカの中高生（1,929 名）を対象とした食行動に関する調査では、同国で初めての痩せ志向を対象とした実証研究として大きく注目され、英文論文として成果を公刊した。「人間発達と QOL 研究」および「教育格差研究」は合同で公開シンポジウム「家庭の経済的不利と学齢期の子どもの諸問題」を開催し、子どもの貧困や教育格差問題に関心を持つ多くの一般市民の参加を得た。また、本学と連携・協力協定を締結した国立精神・神経医療研究センターの児童・思春期精神保健研究部および所沢市とともに、多施設共同の発達障害児の追跡研究を開始した。

【2018 年度】

「人間発達と QOL 研究」では、メディアと子どもの発達に関する乳児期から児童期に至るまでの長期縦断研究（首都圏 1 都市の 1,368 世帯）に関する成果発信を行ったとともに、初等中等教育における教育情報化に関する世界各国の研究者の共同執筆による英文図書に日本の状況について寄稿した。

【2019 年度】

「教育格差研究」では、全国学力調査の大規模全国データの分析をおこない、家庭状況と学力の関係性について公表した結果はメディアで大きく取り上げられ、新・学習指導要領解説資料にも反映された。「思春期・青年期・成人期の健康行動研究」ではボディ・イメージや摂食障害などに関連する 2 件の国際セミナーを開催した。

【2020 年度】

「人間発達と QOL 研究」では、Q&A シリーズの「発達障害 ASD 編」、「発達障害 ADHD 編」、「発達障害 LD、発達性協調運動障害、チック障害編」の編集、発刊作業を行った。併せて、人間発達教育科学研究所のウェブサイトダウンロード用 PDF を公開した。

「思春期・青年期・成人期の健康行動研究」では、フランス、アメリカ、オーストラリア、イタリアの研究者と共同し、COVID-19 感染拡大下、各国がとったロックダウンの健康行動および摂食障害への影響についての国際比較研究を行なった。また、高校生における、インフルエンザワクチン接種意図について、メッセージのフレーミングが意図に及ぼす影響について調査を行なった。さらに、ヒューマンライフイノベーション研究所とともに、Q&A シリーズ「感染症」での執筆を行なった。

「教育格差研究」では、全国学力調査の大規模全国データの保護者調査の分析について日本学術会議のシンポジウムで報告した内容がメディアで大きく取り上げられた。また、家庭の経済状況と学力との関係性に関する研究が新聞で報じられた。学力格差に関する書評を学会誌に掲載し、学界における教育格差研究をめぐる議論を喚起した。行政への貢献としては、

東京都世田谷区の教育政策に対し、研究成果に基づいた指導助言を行った。

【2021 年度】

「人間発達と QOL 研究」では、2020 年度に発刊した Q&A シリーズ（冊子体）を関係各所に寄贈した。また、冊子体の郵送による配布の受付も開始し、希望者への郵送も開始した。人間発達教育科学研究所のウェブサイトで公開した PDF のダウンロード数、冊子体の配布数、また読者アンケートの結果は、機構報告書（pp. 18-27）で報告している。また、IHLI との学内科研（2018 年度・2019 年度）の後続研究として、大学生を対象とした、発達障害傾向やヘルスリテラシーに関する調査研究を実施した。成果については、その一部を 2021 年度の日本心理学会第 85 回大会で発表した。さらに、小児期逆境体験（ACE）とその成長後の悪影響を緩和する肯定的体験（PACE）の効果に関する実証的な検討を開始し、2021 年度にはコロナ禍での大学生の精神的健康に対する ACE 及び PACE の影響に関する大規模な全国調査と発達初期から追跡を実施しているコホートサンプルについての調査を実施した。

「思春期・青年期・成人期の健康行動研究」では、感情が食行動に及ぼす影響について、一般成人の食行動と感情を日常生活下で測定しモデリングを行う、Ecological Momentary Assessment を用いた研究を開始した。また、健康心理学会第 34 回大会（オンライン大会）の共催として、ヒューマンライフイノベーション研究所の所員と共同し、食と心理に関するシンポジウムを開催した。成人の疾病予防のための行動変容をめざした、東北大学による AI を用いたシステムの開発の研究計画への参画を開始した。

「教育格差研究」では、全国学力調査の大規模全国データの分析について、学校現場や行政関係者などより広い読者に向けた書籍として『学力格差への処方箋』（勁草書房、2021 年 5 月）を出版した。学力格差研究の成果は、講演、新聞・雑誌等を通じて、社会に向けて積極的に発信された。コロナ禍における教育格差拡大への懸念、特別活動（特に学校行事）の在り方について、新聞紙上にて現状分析と提言を行った。行政への貢献としては、東京都世田谷区、茨城県行方市の教育政策に対し、研究成果に基づいた助言を行った。

【2020/21 年度の特筆すべき研究業績（上記以外）】

人間発達基礎研究部門に所属するスタッフによる上記以外で特筆すべき業績は次の通りである。

・Imaizumi, S., Asai, T., & Miyazaki, M. (2021). Cross-referenced body and action for the unified self: Empirical, developmental, and clinical perspectives. In Y. Ataria, S. Tanaka, & S. Gallagher (Eds.), *Body schema and body image: New directions* (pp. 194-209). Oxford University Press.

・Ohata, R., Asai, T., Imaizumi, S., & Imamizu, H. (in press). My voice, therefore I spoke: The sense of agency over speech is enhanced by hearing self-voice. *Psychological Science*.

- ・鄭 姝・松尾由美・田島祥・堀内由樹子・寺本水羽・坂元 章 (2020) デジタルゲーム利用に対する保護者の介入が子どもの適応に与える影響, *AI時代の教育論文誌*, 37-42.
- ・Shoun, A. , Sakamoto, A. , Horiuchi, Y, Akiyama, K. , Komoto, Y. , Sato, T. , Nishimura, N. , Shinohara, K. , Ishida, H. and Makino, N., 2021, Pachinko/Pachislot playing participation in Japan: Results from a national survey, *Journal of Gambling Issues*, 46, 132-150
- ・坂元 章, 2021, 令和2年度ネット安全安心全国推進フォーラム「with コロナ時代の情報モラルを考える！」 with コロナ、after コロナ時代の情報モラル教育 ―海外の動向を参照して―, 文部科学省 2021.2.16, オンライン.
- ・Andrew Stickley, Aya Shirama, Shingo Kitamura, Yoko Kamio, Hidetoshi Takahashi, Aya Saito, Hideyuki Haraguchi, Hirokazu Kumazaki, Kazuo Mishima, Tomiki Sumiyoshi, 2021, Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and sleep problems in preschool children: the role of autistic traits, *Sleep Medicine*, 83, 214-221
- ・Takuya Oka, Shin-ichi Ishikawa, Aya Saito, Kazushi Maruo, Andrew Stickley, Norio Watanabe, Hiroki Sasamori, Toshiki Shioiri, Yoko Kamio, 2021, Changes in self-efficacy in Japanese school-age children with and without high autistic traits after the Universal Unified Prevention Program: a single-group pilot study, *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health*, 15, 1-11.
- ・Ishibashi, M., & Uehara, I., 2020, The relationship between children's scale error production and play patterns including pretend play. *Frontiers in Psychology*, 11: 1176.
- ・Cheong, Y., & Uehara, I., 2021, Segmentation of rhythmic units in word speech by Japanese infants and toddlers. *Frontiers in Psychology*, 12:626662.
- ・Uehara, I., 2021, Changes in children's episodic narratives through long-term repeated recall: Longitudinal case studies. *Japanese Psychological Research*, 63(4), 250-264.

【2021 年度構成メンバー】

※部門長以外、職位順（五十音順）

浜野 隆（基幹研究院 人間科学系 教授） ※部門長

上原 泉（人間発達教育科学研究所 准教授）

大森美香（基幹研究院 人間科学系 教授）

大森正博（基幹研究院 人間科学系 教授）

坂本佳鶴恵（基幹研究院 人間科学系 教授）

坂元 章（基幹研究院 人間科学系 教授）

大多和直樹（基幹研究院 人間科学系 准教授）

今泉 修（人間発達教育科学研究所 助教）

齊藤 彩（基幹研究院 人間科学系 助教）
松本聡子（人間発達教育科学研究所 特任アソシエイトフェロー）
猪股富美子（人間発達教育科学研究所 アカデミック・アシスタント）
秋篠宮紀子（人間発達教育科学研究所 特別招聘研究員）
神尾陽子（人間発達教育科学研究所 客員教授）
西村直之（人間発達教育科学研究所 客員研究員）
島田祥子（人間発達教育科学研究所 研究協力員）
松浦素子（人間発達教育科学研究所 研究協力員）
山宮裕子（人間発達教育科学研究所 研究協力員）
※2016-2020 年度の構成メンバーは巻末資料参照

**【発達臨床支援研究部門】 部門長：篁 倫子（2016-2019 年度）
岩壁 茂（2020-2021 年度）**

発達臨床支援研究部門のメンバーは、それぞれ臨床実践に関わり、その中で研究を進めてきた。

＜篁倫子教授＞ 2016-2019 年度

- ① 発達障害の子どもをもつ親を対象にストレスマネジメントを取り入れたペアレントトレーニング、および親がリードする子ども SST を実施し、親のエンパワメントの視点からその心理的効果を検討した。成果は学会大会および学術誌にて報告した。
- ② 発達障害の子どもに対して、情緒的体験を重視した SST を実施し、その効果を検討した。学会大会にて成果報告を行った。
- ③ ハイリスク児（極低出生体重児）の長期フォローアップにおける就学前後の健診についての再検討。

＜伊藤亜矢子准教授＞ 2016-2019 年度

- ① 学級風土コンサルテーションの実践研究
国公立学校および約 500 学級について、小学生版および新版・旧版の学級風土尺度（伊藤，2009；伊藤・宇佐美，2017；伊藤・松井，2001）を用いて学級アセスメントを行い、その結果を媒体として学級経営について教師と検討するコンサルテーションを行った。同一担任による学級経営の変化による学級風土の変化や、特別な支援を要する発達障害を持つ児童・生徒のいる学級での学級風土の変化などについても検討した。
- ② スクールカウンセリング活動についての国際比較調査
17 か国共通の調査項目（the International Survey of School Counselors' Activities）（Fan ら，2019）を用いて、国際比較調査を行った。

<石丸径一郎准教授> 2018年度～

- ① LGBTQに関する心理学的なトピックの中でも、インターセックス／性分化疾患 DSDs と、トランスジェンダーに関するテーマを検討し、学会発表、論文執筆、講演活動を行った。
- ② 性機能不全やセックスストレスのカップルに対する心理社会的介入であるセックス・セラピーについて、セラピストのあり方や認知行動療法との関連について論文を執筆した。
- ③ ジェンダーに関する女性の認知と行動について、性役割態度やジェンダー・アイデンティティとの関連から検討し、論文を執筆した。

<岩壁茂教授> 2018年度～

- ① 修正感情体験を促進するため、関係性的介入を強化したエモーション・フォーカスト・セラピーのプロセスと効果について検討
- ② 加速化体験力動療法 (Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy: AEDP) の効果について検討。また、AEDPにおける初期の変化プロセスについて質的に検討。
- ③ 上記のセラピーにおけるポジティブ感情と作業同盟の関連について構造方程式モデリングをもちいた分析。
- ④ フラワーリッシュング (心理的繁栄) に関する研究
- ⑤ うつの主観的体験に関する質的研究

※①～③は国際大会において発表し、①と②は専門誌に掲載済みである。

<高橋哲准教授> 2020年度～

- ① 覚醒剤取締法により受刑している男女の受刑者を対象に、法務省法務総合研究所および国立精神・神経医療研究センター薬物依存部と合同で得られたデータをもとに、薬物事犯者の再使用の引き金の性差に関する研究等を実施し、成果を学会大会および英文の学術誌にて共著論文として発表した。
- ② 性犯罪者の心理アセスメント、トリートメントおよび研究の現状と課題について、国際学会においてシンポジウムを主催し、座長を務めた。
- ③ 法務省所管の関西地区の4つの少年鑑別所において、少年鑑別所在所者の自傷行為に関する総合的な研究を立案し、倫理審査を経たうえでデータ収集に着手した。

<山田美穂> 2021年度～

- ① ダンス／ムーブメントセラピーとフォーカシングを組み合わせたグループ支援の実践研究を行い、認知症高齢者とのグループ実践事例を英文誌にて発表した。
- ② 知的障害のある成人への心理療法について、学会大会での発表と英文書籍の監訳作業を行った。
- ③ ソマティック・エデュケーションの授業実践における教師の身体知についてデータ収集・分析を行い、学会発表と学会誌への投稿を行った。

- ④ 小学校長による論語教育実践について心理学的観点からの分析と実践への助言を行い、共著論文を執筆した。

<砂川芽吹> 2021年度～

- ① 自閉スペクトラム症者の自己効力感に関する調査について、その結果を国内の学会誌で発表した。
- ② 自閉スペクトラム症のある女性を対象とした英文の質的研究について、質的システマティックレビューを行い、その結果を国内の学会誌で発表した。
- ③ 自閉スペクトラム症のある女性を対象に実施したインタビュー調査について、国内学会での発表を行い、英語論文の執筆に着手した。
- ④ 研修会の講師として、以下のテーマについてそれぞれレクチャーを行った。
「大人の発達障害」「自閉スペクトラム症のある女性とカモフラージュ」

2021年から2022年までの予定

一般向けの公開講座を3月にオンライン開催する。2021年の冬から「自閉スペクトラム症のある女の子とその保護者を対象とした親子支援プログラム「あまなつ茶あむ」を開始する。本プログラムは、本研究所の「部門研究費」支援の助成を受けたプロジェクトである。

【2021年度構成メンバー】 ※部門長以外、職位順(五十音順)

岩壁 茂(基幹研究院 人間科学系 教授)

石丸径一郎(基幹研究院 人間科学系 准教授)

高橋 哲(基幹研究院 人間科学系 准教授)

山田美穂(基幹研究院 人間科学系 准教授)

砂川芽吹(基幹研究院 人間科学系 助教)

※2016-2020年度の構成メンバーは巻末資料参照

(2) 研究強化・支援の取り組み

人間発達教育科学研究所では、研究所(部門)のミッションやKPI(評価指標)に基づいた研究・事業を強化・推進するため、研究員を対象とした独自の研究支援制度を設けている。「所内公募による審査制(所長と部門長による審査)」という形式を採用することにより、ミッション性の高い優れた研究(事業)に戦略的に予算を配分できるメリットがある。また、専門の異なる複数の研究者が協働で展開する研究・事業の推進や若手研究者支援にもつながっている。2018年度～2021年度に実施した研究支援制度の成果は以下のとおりである。

2018年度

- ① 「部門研究費」支援(所内公募・審査制)

【対象者】 人間発達教育科学研究所の研究員（申請代表者）

【申請額】 1件あたり 10～20 万円 ※採択件数は 2～4 件程度

【申請期間】 2018 年 6 月 1 日（金）～6 月 15 日（金）

【申請条件】

- ・ 研究所（部門）のミッションや KPI（評価指標）に基づいた研究・事業であること（学会参加費・旅費、英文校正等も含む）。
- ・ 研究所以外の研究費や助成金を受けていない研究および事業であること。
- ・ 年末の成果報告会で研究成果・事業報告を発表すること。

●**審査結果・・・部門研究費（総額 40 万円）利用申請概況**

申請総額～651,800 円（4 件） 採択総額～40 万円（2 件）

※研究所長と 3 部門長、計 4 名による評価・審査の結果、いずれも研究所にとって有益な研究（事業）であることから、「保育・教育実践研究部門」2 件に対し 20 万円、「人間発達基礎研究部門」2 件に対し 20 万円を配分することになった（配分額は各部門内で協議・調整）。

（単位：円）

	研究（事業）名	部門名	代表者名	金額
1	「国際シンポジウム：中国の幼児教育の現状と課題から、日本の幼児教育を考える」及び、日中研究者・院生との共同セミナー(2018. 10. 3-4)の開催（講師・通訳謝金）	保育・教育実践研究部門	浜口順子	20 万
2	ライフ×アート展事業報告書印刷費		刑部育子	
3	縦断データ分析ソフト(Mplus)の購入とスキルアップセミナー開催	人間発達基礎研究部門	菅原ますみ	20 万
4	研究調査の英文投稿（英文翻訳：BPO）			

② 「研究強化推進（論文支援）費」（所内公募・審査制）

【対象者】 人間発達教育科学研究所の研究員

【補助金総額】 100 万円（1 件あたりの上限は 30 万円）

※研究所の KPI（評価指標）を基準に学術的貢献度の高いもの

（例：雑誌のインパクトファクターなど）から採択（件数は未定）。

【申請期間】 2018 年 9 月 28 日（金）～10 月 5 日（金）

【補助対象条件】

- ・ 研究所（部門）のミッションに基づく研究において、本年度／来年度のいずれかに投稿もしくは発表予定の論文で、以下経費に係るもの（採択の可否不問）を補助する。

① 投稿・発表論文の英訳または英文校閲費

② 投稿論文のオープンアクセス掲載費（APC）もしくは投稿審査料/掲載料

※投稿（発表）先は、査読（審査）付きの学会誌、学術誌、学会に限定。

※申請者である研究員が共著者となっていれば研究員がファーストである必要はない。

●審査結果・研究強化推進（論文支援）費（総額 100 万円）利用申請概況

申請総額～150 万円（5 件）、採択総額～120 万円（5 件）

（単位：円）

	申請論文概要	申請額	採択額
1	<p>【申請者】菅原ますみ（first author）</p> <p>【共著者】松本聡子、NHK 放送文化研究所</p> <p>【論文名】Parental Involvement in television viewing and children's language development</p> <p>【掲載（予定）誌】Journal of children and media（2019 年 3 月 1 日発行予定）</p> <p>【内訳】翻訳（日→英）</p>	30 万	25 万
2	<p>【申請者】大森美香（Third author）</p> <p>【共著者】高村愛、山崎洋子</p> <p>【論文名】“Fat talk” as a mediator between thin-ideal internalization and sensitivity to social rejection and body dissatisfaction among Japanese women</p> <p>【掲載（予定）誌】Journal of Health Psychology（2018 年度中）</p> <p>【内訳】論文強化、掲載料</p>	30 万	25 万
3	<p>【申請者】大森美香（second author）</p> <p>【共著者】合澤典子</p> <p>【論文名】女子大学生の生活リズムとストレス反応の関連に及ぼす認知的評価の調整効果（Moderating Effects of Cognitive Appraisals on Daily Rhythm and Stress Response among Japanese Female College Students）</p> <p>【掲載（予定）誌】プロスワン（PLOS ONE）または Personality and Individual Differences</p> <p>※投稿準備中（英文校閲を行い、投稿予定）Japanese Health Psychology（英文誌、現在休刊中）、Sleep に投稿後リジェクト</p> <p>【内訳】英文校閲、Open Access 掲載料</p>	30 万	25 万
4	<p>【申請者】浜口順子（First）</p> <p>【共著者】内海緒香</p> <p>【論文名】生涯学習モデルとしての保育者現職者研修プログラムの試み（Professional Development Program for ECEC as a Lifelong Learning Model）</p> <p>【掲載（予定）誌】人文科学研究（2019 年 9 月末投稿予定：2020 年 3 月 1 日発行）</p> <p>【内訳】英文翻訳</p>	30 万	25 万
5	<p>【申請者】小玉亮子（second author）</p> <p>【共著者】榊瑞希子（聖徳大学教授）</p> <p>【論文名】未定</p> <p>【掲載（予定）誌】European Early Childhood Education Research Journal（European Early Childhood Education Research Association：EECEAR）※2018 年 9 月に EECEAR で学会発表済み</p> <p>【内訳】投稿料、論文の英文校閲</p>	30 万	20 万

2019 年度

① 「研究推進費（論文支援）」（所内公募・審査制）

【対象者】 人間発達教育科学研究所の研究者

【助成総額】 120 万円（1 件あたりの上限は 30 万円）

※研究所の KPI（評価指標）を基準に学術的貢献度の高いもの

（例：雑誌のインパクトファクターなど）から採択（件数は未定）。

※昨年度採択された人は、別論文であれば申請可能。

【申請期間】 2019 年 6 月 20 日（木）～6 月 30 日（日）

【補助対象条件】

・研究所（部門）のミッションに基づく研究において、本年度／来年度のいずれかに投稿もしくは発表予定の論文で、以下経費に係るもの（採択の可否不問）を補助する。

①投稿・発表論文の英訳または英文校閲費

②投稿論文のオープンアクセス掲載費（APC）もしくは投稿審査料/掲載料

※投稿（発表）先は、査読（審査）付きの学会誌、学術誌、学会に限定。

※申請者である研究者が共著者となっていれば研究者がファーストである必要はない。

●審査結果・・・「研究推進費（論文支援）」（総額 120 万円）利用申請概況

申請総額～38 万円（2 件）、採択総額～38 万円（2 件）

（単位：円）

	申請論文概要	申請額	採択額
1	<p>【申請者】 今泉修 (first author)</p> <p>【共著者】 浅井智久, 宮崎美智子</p> <p>【論文名】 Cross-referenced body and action for the unified self: empirical, developmental, and clinical perspectives</p> <p>【掲載（予定）誌】 Body Schema and Body Image: Phenomenology, Neuroscience and Disorders』(Oxford University Press) を分担（掲載内定：2020 年度以降出版予定）</p> <p>【内訳】 英文校閲費（約 7,500 語）</p>	8 万	8 万
2	<p>【申請者】 大森美香 (first author)</p> <p>【共著者】 Aizawa, N., Yamazaki, Y.</p> <p>【論文名】 Unemployment-related life satisfaction and job-search behaviors</p> <p>【掲載（予定）誌】 Career Development Quarterly, Psychological Report（投稿中：発行日未定）</p> <p>【内訳】 Open Access APC</p>	30 万	30 万

② 「研究推進費（学会発表補助）」（所内公募・審査制）

【対象者】 人間発達教育科学研究所の研究者

【助成総額】 100 万円（1 件あたりの上限：国内 10 万円、海外 20 万円）

※研究所の KPI（評価指標）を基準に学術的貢献度の高いもの

【申請期間】 2019 年 6 月 20 日（木）～6 月 30 日（日）

【補助対象条件】

- ・ 研究所（部門）のミッションに関連する国内外の学会（大会）への参加経費（大会参加費、ポスター印刷等）と旅費（日当・宿泊費含む）の両方もしくはいずれか。
- ・ 補助対象は研究員のみ（研究員がファーストである必要はない）。

● 審査結果・研究推進費（学会発表補助）（総額 100 万円）利用申請概況

申請総額～918,730 円（6 件）、採択総額～918,730 円（6 件）

（単位：円）

	申請学会概要	申請額	採択額
1	①申請者氏名：今泉修 ②学会・大会名：第 28 回日本パーソナリティ心理学会大会 ③開催日時：2019 年 8 月 28 日～2019 年 8 月 29 日 ④開催場所：東京都小平市 武蔵野美術大学 ⑤発表タイトル：行為を制約する身体的特性と自由意志信念の関連（ポスター・単著） ⑥内訳（名目）：27,080 円（大会参加費 10,500 円、旅費 1 泊 2 日、16,580 円）	25,580	25,580
2	①申請者氏名：内海緒香 ②学会・大会名：OMEP(世界幼児教育・保育機構)アジア・太平洋地域大会 2019 in 京都 ③開催日時：2019 年 9 月 5 日～2019 年 9 月 7 日 ④開催場所：京都テルサ（京都府民総合交流プラザ） ⑤発表タイトル：Extracurricular hours in education and care: Toward the development of early childhood education and care center curriculum that is open to the community and society（ポスター・共著筆頭、Accept 済み） ⑥内訳（名目）：93,150 円（大会参加費 2 万円、旅費 3 泊 4 日、73,150 円）	93,150	93,150
3	①申請者氏名：坂元 章 ②学会・大会名：EDUsummIT 2019 ③開催日時：2019 年 9 月 29 日～2019 年 10 月 2 日 ④開催場所：カナダ、ケベックシティ ⑤発表タイトル：Safe and Responsible Internet Use in a Connected World: Teaching Critical Thinking and Accountability to Promote Cyber-wellness. ⑥内訳（名目）：20 万円（大会参加費 3 万円、旅費 5 泊 7 日、17 万円）	20 万	20 万
4	①申請者氏名：大森美香（※筆頭は山崎洋子） ②学会・大会名：7th Asian Congress of Health Psychology 2019 ③開催日時：2019 年 9 月 19 日～2019 年 9 月 21 日 ④開催場所：Kota Kinabalu, Malaysia UMS ⑤発表タイトル：The effects of Instagram photos on women's body image（ポスター：オーサー順位 2） ⑥内訳（名目）：20 万円（大会参加費 57,723 円、旅費 142,277 円）	20 万	20 万
	①申請者氏名：伊藤亜矢子 ②学会・大会名：国際学校心理学会		

5	③開催日時：2019年7月9日～2019年7月12日 ④開催場所：スイス、バーゼル市 ⑤発表タイトル:Strategies used by homeroom teachers in Japan for communication with students to develop a positive classroom climate(ポスター：オーサー順位1位(単独)) ⑥内訳(名目)：20万円(大会参加費60,931円、旅費5泊7日、181,728円)	20万	20万
6	①申請者氏名：大森美香 ②学会・大会名：5th International Congress of Clinical and Health Psychology on Children and Adolescents ③開催日時：2019年11月14日～2019年11月16日 ④開催場所：スペイン、Oviedo ⑤発表タイトル：WHEN BEING HEALTHY IS UNHEALTHY: THE ROLE OF FOOD-RELATED KNOWLEDGE AND INFORMATION ON ORTHOREXIA NERVOSA(口頭：オーサー順位1)採択済み ⑥内訳(名目)：20万円(旅費4泊6日、20万円)	20万	20万

2020年度

① 「研究推進費(論文支援)」(所内公募・審査制)

【対象者】 人間発達教育科学研究所の研究員

【助成総額】 第一次：200万円(1件あたりの上限は30万円)

第二次：100万円(1件あたりの上限は20万円)

※研究所のKPI(評価指標)を基準に学術的貢献度の高いもの

(例：雑誌のインパクトファクターなど)から採択(件数は未定)。

※過去に採択された論文についても、未執行(もしくは一部執行)のものについては再度申請可。

※1人2件まで申請可。

【申請期間】 第一次：2020年5月25日(月)～6月5日(金)

第二次：2020年11月26日(木)～12月10日(木)

【補助対象条件】

・研究所(部門)のミッションに基づく研究において、本年度/来年度のいずれかに投稿もしくは発表予定の論文で、以下経費に係るもの(採択の可否不問)を補助する。

①投稿・発表論文の英訳または英文校閲費

②投稿論文のオープンアクセス掲載費(APC)もしくは投稿審査料/掲載料

※投稿(発表)先は、査読(審査)付きの学会誌、学術誌、学会に限定。

※申請者である研究員が共著者となっていれば研究員がファーストである必要はない。

●審査結果・「研究推進費(論文支援)」(総額：第一次200万、第二次100万)

利用申請概況

申請総額～第一次：1,802,849円(7件)
第二次：606,694円(4件)

採択総額～第一次：1,802,849円(7件)
第二次：606,694円(4件)
合計：2,409,543円(全11件)

※網掛けは第二次 (単位：円)

	申請論文概要	申請額	採択額
1	【申請者】今泉 修 (second author) 【共著者】田上 初夏 【論文名】No correlation between perception of meaning and positive schizotypy in a female college sample 【掲載(予定)誌】Frontiers in Psychology 【内訳】論文掲載費	206,562 (\$1,850)	206,562
2	【申請者】今泉 修 (first author) 【共著者】田上初夏、楊 毅 【論文名】Fluid movements enhance creative fluency: A replication of Slepian and Ambady (2012) 【掲載(予定)誌】PLoS ONE 【内訳】論文掲載費	186,287 (\$1,695)	186,287
3	【申請者】浜口順子 (first author) 【共著者】内海緒香 【論文名】生涯学習モデルとしての保育者現職者研修プログラムの試み (Professional Development Program for ECEC as a Lifelong Learning Model) 【掲載(予定)誌】高等教育と学生支援 【内訳】論文掲載費	30万	30万
4	【申請者】大森美香 (second author) 【共著者】合澤典子 【論文名】女子大生の睡眠習慣とストレス反応に対する認知的評価の媒介効果 (Mediating Effects of Cognitive Appraisals on Sleep Habits and Stress Response among Japanese Female College Students) 【掲載(予定)誌】BMC Psychology 【内訳】オープンアクセス掲載費 (APC:\$2,145+消費税)	26万	26万
5	【申請者】菅原ますみ (first author) 【共著者】室橋弘人、酒井厚、一色伸夫、松本聡子 【論文名】Effects of parents speaking during television viewing on language development in infancy 【掲載(予定)誌】Child Development 【内訳】和文英訳 / 校閲	25万	25万
6	【申請者】大森美香 (first author) 【共著者】合澤典子、山崎洋子 【論文名】Unemployment-related life satisfaction and job-search behaviors 【掲載(予定)誌】Career Development Quarterly, Psychological Report 【内訳】論文掲載 (Open Access APC) 費	30万	30万

7	【申請者】 小玉亮子 (first author) 【共著者】 梶瑞希子 【論文名】 Comparative Study of Family Childcare in Japan and England 【掲載 (予定) 誌】 European early childhood journal 【内訳】 投稿料、英文校閲費	30 万	30 万
8	【申請者】 大森美香 (first author) 【共著者】 Ai Takamura, Yoko Yamazaki, Hiroe Kikuchi, Kazuhiro Yoshiuchi, Yoshiharu Yamamoto 【論文名】 EMA を用いた状態ボディイメージの検討 (EMA investigation of state body image) 【掲載 (予定) 誌】 PLOS One 【内訳】 英文校閲費	15 万	15 万
9	【申請者】 岩壁 茂 (second author) 【共著者】 後藤あゆみ 【論文名】 うつ罹患から回復に向かう体験に関する質的研究 (A qualitative study on experiences of depression in Japan: A path toward recovery) 【掲載 (予定) 誌】 Journal of Clinical Psychology, Journal of Psychotherapy Integration 【内訳】 翻訳料	20 万	20 万
10	【申請者】 山崎洋子 (first author) 【共著者】 大森美香、菅原ますみ、赤松利恵、岩壁茂、松本聡子、藤原葉子、小林哲幸 【論文名】 インスタグラム上の写真のボディイメージへの影響 (Effects of Instagram photo type on body image among young women in Japan) 【掲載 (予定) 誌】 Journal of Health Psychology 【内訳】 英文校閲費 (論文投稿支援パック)	15 万	15 万
11	【申請者】 松本聡子 (未定) 【共著者】 辻百合香、小林哲幸、藤原葉子、菅原ますみ、大森美香、今泉修、山崎洋子、齊藤彩 【論文名】 Mediating Role of Abnormal Sensory Processing in the Relationship between Autistic Traits and Internalizing Problems 【掲載 (予定) 誌】 Journal of Autism and Developmental Disorders 【内訳】 英文校閲費	106,694	106,694

② 「研究推進費 (学会発表補助) (所内公募・審査制)

【対象者】 人間発達教育科学研究所の研究員

【助成総額】 50 万円 (1 件あたりの上限: 国内外 10 万円)

※研究所の KPI (評価指標) を基準に学術的貢献度の高いもの

※1 人 1 件のみ。

【申請期間】 2020 年 5 月 25 日 (月) ~ 6 月 5 日 (金)

【補助対象条件】

- ・ 研究所（部門）のミッションに関連する国内外の学会（大会）への参加経費（大会参加費、ポスター印刷等）と旅費（日当・宿泊費含む）の両方もしくはいずれか。
- ・ 補助対象は研究員のみ（研究員がファーストである必要はない）。

● 審査結果・・・「研究推進費（学会発表補助）」（総額：50万円）利用申請概況

申請総額～79,748円（全3件）、採択総額～79,748円（全3件）

（単位：円）

	申請学会概要	申請額	採択額
1	①申請者氏名：内海緒香 ②学会・大会名：日本心理学会第84回大会 ③開催日時：2020年9月8日～2020年9月10日 ④開催場所：東京都 東洋大学（オンライン開催） ⑤発表タイトル：幼児期の肯定的な養育と自己制御との関連についての交差時差モデルの検討 ⑥内訳（名目）：14,000円（大会参加費：オンライン）	14,000	14,000
2	①申請者氏名：大森美香 ②学会・大会名：International Conference on Eating Disorder (ICED) ③開催日時：2020年6月11日～2020年6月30日 ④開催場所：バーチャル大会 ⑤発表タイトル：Pre-existing Thin-ideal Internalization, Appearance Comparison, Drive for Thinness, and Current Negative Feelings toward Bodily Changes among Pregnant Japanese Women（山宮裕子共著） ⑥内訳（名目）：32,874円（大会参加費：オンライン\$299）	32,874 (\$299)	32,874
3	①申請者氏名：山崎洋子 ②学会・大会名：International Conference on Eating Disorder (ICED) ③開催日時：2020年6月11日～2020年6月30日 ④開催場所：バーチャル大会 ⑤発表タイトル：The association between orthorexia nervosa and Instagram use among Japanese women ⑥内訳（名目）：32,874円（大会参加費：オンライン\$299）	32,874 (\$299)	32,874

③ 「部門研究費」支援（所内公募・審査制）

【対象者】 人間発達教育科学研究所の研究員（申請代表者）

【申請額】 第一次：30万円（1件あたりの上限：10万円）

第二次：30万円（1件あたりの上限：10万円）

※研究所のKPI（評価指標）を基準に学術的貢献度の高いもの

※1部門2件まで申請可。

【申請期間】 第一次：2020年5月25日（月）～6月5日（金）

第二次：2020年11月26日（木）～12月10日（木）

【申請条件】

- ・研究所（部門）のミッションに関連する各部門の教育・研究活動全般。セミナーやシンポジウムの開催諸経費、講師謝金、旅費、役務費、図書・物品費、印刷費等。
- ・補助対象は研究員のみ（申請前に部門長の承認が必要）。

●審査結果・部門研究費（総額：第一次 30 万円、第二次 30 万円）利用申請概況

申請総額～第一次：358,000 円（4 件） 採択総額～第一次：358,000 円（4 件）
 第二次：153,328 円（2 件） 第二次：153,328 円（2 件）

合計：511,328 円（全 6 件）

※網掛けは第二次（単位：円）

	研究（事業）名	申請者	部門メンバー	部門名	金額
1	「環境を評価する 5 つの視点：研修用リーフレット」制作費	内海緒香	浜口順子 宮里暁美	保育・教育実践研究部門	10 万
2	学内科研派生調査データの入力委託費	菅原ますみ	今泉 修 松本聡子	人間発達基礎研究部門	10 万
3	Q&A 集「発達障害」の発刊に係る人件費	菅原ますみ	松本聡子 猪股富美子	人間発達基礎研究部門	10 万
4	パンデミック下の気分や行動に関する調査（クラウドソーシングを用いた調査費用）	大森美香	山崎洋子	人間発達基礎研究部門	58,000
5	統計セミナー（2021.1.8～10：zoom 開催）への参加費	松本聡子	なし	人間発達基礎研究部門	135,328
6	こども園フォーラム（ウェブ開催）における人件費	内海緒香	浜口順子 宮里暁美	保育・教育実践研究部門	18,000

2021 年度

①「研究推進費（論文支援）」（所内公募・審査制）

【対象者】人間発達教育科学研究所の研究員

【助成総額】第一次：250 万円（1 件あたりの上限は 30 万円）

第二次：150 万円（1 件あたりの上限は 30 万円）

※研究所の KPI（評価指標）を基準に学術的貢献度の高いもの

（例：雑誌のインパクトファクターなど）から採択（件数は未定）。

※過去に採択された論文についても、未執行（もしくは一部執行）のものについては再度申請可。

※1 人 2 件まで申請可（最終年度のため 12 月末までに執行予定のものに限る）

【申請期間】第一次：2021 年 4 月 27 日（火）～5 月 10 日（月）

第二次：2021 年 9 月 22 日（水）～9 月 30 日（木）

【補助対象条件】

- ・研究所（部門）のミッションに基づく研究において、本年度中に投稿もしくは発表予定の論文で、以下経費に係るもの（採択の可否不問）を補助する。

①投稿・発表論文の英訳または英文校閲費

②投稿論文のオープンアクセス掲載費（APC）もしくは投稿審査料/掲載料

※投稿（発表）先は、査読（審査）付きの学会誌、学術誌、学会に限定。粗悪雑誌あるいはハゲタカジャーナルに類する雑誌への掲載にならないよう十分ご留意すること。

※申請者の研究員/特任教員/連携研究員がファーストでなくてもよい。

●**審査結果**・「**研究推進費（論文支援）**」（総額：第一次 250 万円、第二次 150 万円）

利用申請概況

申請総額～第一次：2,274,000 円（10 件）採択総額～第一次：1,683,000 円（10 件）

第二次：468,500 円（3 件）

第二次：468,500 円（3 件）

合計：2,151,500 円（全 13 件）

※網掛けは第二次（単位：円）

	申請論文概要	申請額	採択額
1	【申請者】高橋 哲 (first author) 【共著者】Takuya Shimane 他 【論文名】 Adverse childhood experiences, suicidal ideation, and non-suicidal self-injury in justice-involved substance users 【掲載（予定）誌】 Psychiatry Research ほか 【内訳】 英文校閲費	300,000	150,000
2	【申請者】今泉 修 (second author) 【共著者】田上初夏 【論文名】 Visual and verbal processes in right-left confusion: Psychometric and experimental approaches 【掲載（予定）誌】 Frontiers in Psychology 【内訳】 論文掲載費	202,000	202,000
3	【申請者】今泉 修 (second author) 【共著者】武井明日美 【論文名】 Effects of color-emotion association on facial expression judgments 【掲載（予定）誌】 Scientific Reports 【内訳】 英文校閲費	282,000	141,000
4	【申請者】齊藤 彩 (first author) 【共著者】松本聡子・佐藤みのり・坂田侑奈・原口英之 【論文名】 The Relationship between Parental Autistic Traits and Parenting Difficulties in Japanese Community Adult Sample 【掲載（予定）誌】 Journal of Autism and Developmental Disorders 【内訳】 英文校閲費、論文掲載費	300,000	300,000
5	【申請者】大森美香 (second author) 【共著者】合澤典子 【論文名】 Mediating Effects of Cognitive Appraisals on Sleep Habits and Stress Response among Japanese Female College Students)	130,000	130,000

	<p>【掲載 (予定) 誌】 BMC Psychology 【内訳】 オープンアクセス掲載費 (一部補助)</p>		
6	<p>【申請者】 大森美香 (second author) 【共著者】 劉セイ 【論文名】 Family socioeconomic status and depression among Chinese high school students in Maanshan city, Anhui province 【掲載 (予定) 誌】 The Journal of early adolescence あるいはFrontiers in psychology 【内訳】 英文校閲費</p>	300,000	150,000
7	<p>【申請者】 山田美穂 (first author) 【共著者】 Tomoyo Kawano(Antioch University) 【論文名】 Qualitative Data on Dance/Movement Therapy Practice with a Female Elder Japanese with Alzheimer' s Dementia 【掲載 (予定) 誌】 Arts in Psychotherapy 【内訳】 投稿料</p>	70,000	70,000
8	<p>【申請者】 砂川芽吹 (first author) 【共著者】 なし 【論文名】 Social adaptation of female with autism spectrum disorder: a qualitative exploration 【掲載 (予定) 誌】 Journal of Autism and Developmental Disorders 【内訳】 英文校閲費</p>	300,000	150,000
9	<p>【申請者】 山崎洋子 (third author) 【共著者】 大森美香、合澤典子 【論文名】 Uemployment-related life satisfaction and job-search behaviors 【掲載 (予定) 誌】 Sage Open 【内訳】 オープンアクセス掲載費</p>	90,000	90,000
10	<p>【申請者】 松島のり子 (first author) 【共著者】 なし 【論文名】 History of Early Childhood Education and Care Teacher Training in Japan: Focusing on Discussions over the Training Curriculum for Kindergarten Teachers and Nursery Teachers at Junior Colleges in the 1960s 【掲載 (予定) 誌】 ASIA-PACIFIC JOURNAL OF RESEARCH IN EARLY CHILDHOOD EDUCATION 【内訳】 投稿論文の英訳、英文校閲費、投稿審査料/掲載料</p>	300,000	300,000
11	<p>【申請者】 今泉 修 (second author) 【共著者】 西口雄基、丹野義彦 【論文名】 Upward Action Promotes Selective Attention to Negative Words 【掲載 (予定) 誌】 Heliyon 【内訳】 論文掲載費</p>	191,000	191,000
12	<p>【申請者】 辻谷真知子 (first author) 【共著者】 なし</p>		

	【論文名】 Early Childhood Teachers' Experience of "Risky Play" as a Child in Japan: Focusing on Relevance to What They Restrict Children to do in Play 【掲載（予定）誌】 European Early Childhood Education Research Journal 【内訳】 英文校閲費	127,500	127,500
13	【申請者】 大森美香 (second author) 【共著者】 合澤典子 【論文名】 Psychological effects of entertainment: Moderating effect on the relationship between COVID-19 pandemic related stressors and mental health 【掲載（予定）誌】 Leisure Studies 【内訳】 英文校閲費	150,000	150,000

②「研究推進費（学会発表補助）」（所内公募・審査制）

【対象者】 人間発達教育科学研究所の研究者

【助成総額】 20万円（1件あたりの上限：国内5万円）

※研究所のKPI（評価指標）を基準に学術的貢献度の高いもの

※1人1件のみ。

【申請期間】 2021年4月27日（火）～5月10日（月）

【補助対象条件】

- ・研究所（部門）のミッションに関連する国内外の学会（大会）への参加経費（大会参加費、ポスター印刷等）と旅費（日当・宿泊費含む）の両方もしくはいずれか。大会参加費については、オンライン参加費含む。
- ・申請者の研究者/特任教員/連携研究者がファーストでなくてもよい。

●審査結果・・「研究推進費（学会発表補助）」（総額：20万円）利用申請概況

申請総額～169,250円（8件）、採択総額～169,250円（8件）

（単位：円）

	申請学会概要	申請額	採択額
1	①申請者氏名：内海緒香 ②学会・大会名：子ども学会第17回学術集会 ③開催日時：2021年10月23日～2021年10月24日 ④開催場所：滋賀県 滋賀県立大学（オンライン開催） ⑤発表タイトル：研究所保育実践研究部門のミッション ⑥内訳（名目）：4,000円（大会参加費：オンライン）	48,898	48,898
2	①申請者氏名：今泉 修 ②学会・大会名：日本心理学会第85回大会 ③開催日時：2021年9月1日～2021年9月8日 ④開催場所：オンライン ⑤発表タイトル：自閉スペクトラム症及び定型発達の小・中学生における感覚処理異常傾向と内在化問題の関連（ポスター：第二著者）	10,000	10,000

	⑥内訳 (名目) : 10,000 円 (大会参加費)		
3	①申請者氏名 : 刑部 育子 ②学会・大会名 : 日本保育学会第 47 回大会 ③開催日時 : 2021 年 5 月 15 日～2021 年 5 月 16 日 ④開催場所 : オンライン ⑤発表タイトル : 夕方の保育の研究～認定こども園における教育標準時間外のカリキュラムの検討を通して (自主シンポジウム : 口頭 : 筆頭) ⑥内訳 (名目) : 30,000 円 (自主シンポジウム開催費) 9,000 円 (大会参加費、発表登録費)	39,000	39,000
4	①申請者氏名 : 齊藤 彩 ②学会・大会名 : 日本教育心理学会第 63 回総会 ③開催日時 : 2021 年 8 月 21 日～2021 年 8 月 30 日 ④開催場所 : オンライン ⑤発表タイトル : 親の自閉症的行動特性と療育における困難との関係 (ポスター : 筆頭) ⑥内訳 (名目) : 7,000 円 (大会参加費)	7,000	7,000
5	①申請者氏名 : 松本 聡子 ②学会・大会名 : 日本教育心理学会第 63 回総会 ③開催日時 : 2021 年 8 月 21 日～2021 年 8 月 30 日 ④開催場所 : オンライン ⑤発表タイトル : 親の自閉症的行動特性と療育における困難との関係 (ポスター : 第二) ⑥内訳 (名目) : 7,000 円 (大会参加費)	7,000	7,000
6	①申請者氏名 : 大森 美香 ②学会・大会名 : 35th Annual Conference of the European Health Psychology Society ③開催日時 : 2021 年 8 月 23 日～2021 年 8 月 27 日 ④開催場所 : オンライン ⑤発表タイトル : Nutrition information-seeking practices as a double-edge sword in female college students ⑥内訳 (名目) : 30,000 円 (大会参加費 : EUR200)	30,000	30,000
7	①申請者氏名 : 山岸 由紀 ②学会・大会名 : 日本キャリアデザイン学会 ③開催日時 : 2021 年 9 月 11 日～2021 年 9 月 12 日 ④開催場所 : オンライン ⑤発表タイトル : 学校間連携による高校キャリア教育の成果展開 (仮) (ポスター : 筆頭) ⑥内訳 (名目) : 20,000 円 (大会参加費 10,000 円、ポスター印刷費 10,000 円)	20,000	20,000
8	①申請者氏名 : 山田 美穂 ②学会・大会名 : 日本質的心理学会第 18 回大会 ③開催日時 : 2021 年 10 月 23 日～2021 年 10 月 24 日 ④開催場所 : オンライン ⑤発表タイトル : 身体知を教える教師の身体感覚と身体運動の発達 (仮) (口頭 : 第二著者) ⑥内訳 (名目) : 10,000 円 (大会参加費)	10,000	10,000

③「部門研究費」支援（所内公募・審査制）

【対象者】人間発達教育科学研究所の研究者、特任教員、連携研究者

【申請額】60万円（1件あたりの上限：10万円）

※研究所のKPI（評価指標）を基準に学術的貢献度の高いもの

※1部門2件まで申請可（同じ事業でも費目が異なれば2件申請可）

【申請期間】2021年4月27日（火）～5月10日（月）

【申請条件】

- ・研究所（部門）のミッションに関連する各部門の教育・研究活動全般。セミナーやシンポジウムの開催諸経費、講師謝金、旅費、役務費、図書・物品費、印刷費等。
- ・補助対象者は申請前に部門長の承認を得ること。

●審査結果・部門研究費（総額：60万円）利用申請概況

申請総額～680,000円（7件）、採択総額～680,000円（7件）

（単位：円）

	研究（事業）名	申請者	部門メンバー	部門名	金額
1	保育・子育てラーニングプログラム、BPプログラム運営謝金	浜口順子	内海緒香	保育・教育実践研究部門	10万
2	学内科研スピンオフ調査における印刷費及びデータ入力	松本聡子	今泉 修 齊藤 彩 菅原ますみ	人間発達基礎研究部門	10万
3	Q&A ウェビナー及び教材化事業にかかわる費用	松本聡子	菅原ますみ	人間発達基礎研究部門	10万
4	発達障害のある子どもと保護者を対象とした支援者養成プログラムの開発と実践	山田美穂	砂川芽吹	発達臨床支援研究部門	10万
5	発達障害のある子どもと保護者を対象としたグループ支援プログラムの開発と実践	砂川芽吹	山田美穂	発達臨床支援研究部門	10万
6	コロナ禍における大学生の発達障害特性と精神的健康に関する短期縦断研究（大学生を対象とした2回の縦断オンライン質問紙調査）	齊藤 彩	菅原ますみ	人間発達基礎研究部門	10万
7	保育・子育てラーニングプログラムBPの成果発表フォーラム開催	浜口順子	内海緒香	保育・教育実践研究部門	8万

(3) 個人別 研究業績一覧

※2021 年度所属メンバーのみ（それ以前に所属した者の業績は論文/書籍一覧を参照）

人間発達基礎研究部門 上原 泉

現所属/職位：人間発達教育科学研究所・准教授

研究所在職期間/職名：2016 年度-2021 年度 同上

専門分野 教育心理学・実験心理学

所属学会 日本心理学会（認定心理士資格認定委員会委員, 2015/11～2019/10；心理学検定局員, 2017/2～2019/1），日本認知心理学会（編集委員, 2015/10～2019/4），日本発達心理学会，日本理論心理学会（理事, 2014/1～），日本教育心理学会，日本基礎心理学会

学会発表

上原泉

出来事内容の記憶変容に伴い経験時点に関する記憶も変容した事例.
日本基礎心理学会第 40 回大会, 2021/12

浅原正幸・川崎采香・上原泉・酒井裕・須藤百香・小林一郎
「過去」「未来」を主題にした作文の文体分析.
日本語学会 2021 年度秋季大会, 2021/10

加藤正晴・梶川祥世・土居裕和・孟憲巍・大谷多加志・上原泉・辻晶
ライブデータベース部会企画ラウンドテーブル「オンライン型縦断発達データベースの開発」.
日本赤ちゃん学会第 21 回大会, 2021/6

上原泉・川崎采香
小学 4 年生における過去の楽しい出来事と将来経験すると予想する楽しい出来事 予備的検討.
日本心理学会第 83 回大会, 2019/9

Kawasaki, A., & Uehara, I.

Autobiographical memory in young and middle-aged adult Japanese men and women.
The 19th European Conference on Developmental Psychology, 2019/8

石橋美香子・上原泉

幼児期のスケールエラー：ふり，言語能力の発達的变化.
日本赤ちゃん学会第 19 回学術学会, 2019/7

Ishibashi, M., Twomey, K. E., Westermann, G., & Uehara, I.

The relationship between children's scale errors and cultural differences.
The Society for Research in Child Development (SRCD) Biennial Meeting, 2019/3

鄭軟姝・上原泉

乳幼児はモーラ音声をどう区切って聞いているのか.
日本発達心理学会第 30 回大会, 2019/3

上原泉

幼児期における過去形や時に関する言葉の使用：少人数の縦断的な発話データによる予備的検討.
日本心理学会第 82 回大会, 2018/9

川崎采香・上原泉

日本人大学生のライフ・スクリプトの特徴と自伝的記憶からの影響についての検討.
日本心理学会第 82 回大会, 2018/9

鄭牙源・上原泉

幼児の他者感情理解と感情的視点取得の発達.
日本心理学会第 82 回大会, 2018/9

石橋美香子・上原泉

幼児におけるスケールエラー、大きさの理解および言語能力との関係.
日本赤ちゃん学会第 18 回学術学会, 2018/6

Ishibashi, M., & Uehara, I.

Children's scale errors: its relationship to semantic knowledge and pretending behaviors.
Lancaster International Conference on Infant and Early Child Development, 2017/8

川崎采香・上原泉

日本人中高生男女の自伝的記憶に関する検討
日本発達心理学会第 28 回大会, 2017/3

Cheong, Y., & Uehara, I.

An examination of Japanese infants' perception of morae as speech sounds.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Uehara, I.

Pleasant and unpleasant autobiographical memories recalled by students during school days: A preliminary investigation using longitudinal case studies.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

競争的資金

科学研究費基盤研究(C) 「視空間的・時空間的な注意機能と認知発達：非言語刺激と言語刺激による検討」、研究代表者、2017 年度-2019 年度

科学研究費新学術領域研究（研究領域提案型） 「時間の獲得の個体発生と系統発生」、研究分担者、2018 年度-2022 年度

実践活動

お茶の水女子大学附属小学校 高学年「てつがく」共同研究業務と 2 月の教育実践指導研究会での共同発表、2016 年度-2018 年度

人間発達基礎研究部門 今泉 修

現所属／職位：人間発達教育科学研究所・助教

研究所在職期間／職名：2018 年度-2021 年度 同上

専門分野 認知科学・実験心理学

所属学会 日本心理学会, 日本認知心理学会, 日本パーソナリティ心理学会,
日本基礎心理学会, Association for the Scientific Study of Consciousness

学会発表

Takei, A., & Imaizumi, S.
Effects of color-emotion association on facial expression judgments.
43rd European Conference on Visual Perception, 2021/8

Imaizumi, S., & Nishiguchi, Y.
Retrospective but not prospective cues modulate explicit sense of agency.
32nd International Congress of Psychology, 2021/7

Ohata, R., Asai, T., Imaizumi, S., & Imamizu, H.
保育所近隣にある大学構内の入構制限による影響-コロナ禍における都市部保育の実態調査から見えた構造的課題-
1st International Symposium on Hyper-Adaptability, 2021/5

Tagami, U., & Imaizumi, S.
Mindfulness trait mediates between schizotypy and hallucinatory experiences.
2021 APS Virtual Convention, 2021/5

Ohata, R., Asai, T., Imaizumi, S., & Imamizu, H.
My voice therefore I spoke: Sense of agency over speech enhanced in hearing self-voice.
2021 APS Virtual Convention, 2021/5

辻百合香・今泉修・菅原ますみ・生地新
自閉スペクトラム症及び定型発達の小・中学生における感覚処理異常傾向と内在化問題の関連：感覚に関する困り感の媒介効果。
日本心理学会第 85 回大会, 2021/9

今泉修・松本聡子・山崎洋子・西口雄基・大森美香・藤原葉子
陰性統合失調型パーソナリティによる自由意志信念の予測。
日本心理学会第 85 回大会, 2021/9

田上初夏・今泉修
統合失調型パーソナリティと幻覚様体験の媒介要因の探索。
日本認知心理学会第 18 回大会, 2021/3.

辻菜々実・今泉修
ラバーハンド錯覚に交絡した要求特性：Lush (2020) の追試。
第 11 回 Society for Tokyo Young Psychologists, 2021/3.

武井明日美・今泉修

色と感情の連合が表情識別に及ぼす影響.
第 11 回 Society for Tokyo Young Psychologists, 2021/3.

田上初夏・今泉修
意味知覚の偽陽性傾向と統合失調型パーソナリティ.
日本心理学会第 84 回大会, 2020/9

今泉修
日本語版 Waterloo Footedness Questionnaire Revised の信頼性と妥当性.
日本心理学会第 84 回大会, 2020/9

今泉修
行為を制約する身体的特性と自由意志信念の関連.
第 11 回多感覚研究会, 2019/12

Imaizumi, S.
Sense of self through bodily action.
Psychological and Artificial Agency Workshop, 2019/11

Lai, G., Imaizumi, S., Seth, A. K., & Suzuki, K.
Effects of sensorimotor coupling and perspective in virtual reality on subjective time and agency.
UK Sensorimotor Conference, 2019/6

今泉修
主体感と Intentional binding の相関のメタ分析.
日本心理学会第 83 回大会, 2019/9

今泉修
行為を制約する身体的特性と自由意志信念の関連.
日本パーソナリティ心理学会第 28 回大会, 2019/8

受賞

2021 年 日本心理学会第 85 回大会 優秀発表賞
辻百合香・今泉修・菅原ますみ・生地新「自閉スペクトラム症及び定型発達の小・中学生における感覚処理異常傾向と内在化問題の関連：感覚に関する困り感の媒介効果」

競争的資金

科学研究費若手研究(B) 「自己が起こした感覚事象の認知の時空間特性」、研究代表者、2017
年度-2019 年度

科研費・若手研究 研究代表者 「行為が歪める時間知覚とその自伝的記憶・時間的展望への
波及」、2020 年度-2022 年度

分担 科研費・基盤研究(B) 「身体化された自己：ミニマルからナラティブへ」、研究
分担者、2020 年度-2023 年度

発達臨床支援研究部門 岩壁 茂

現所属／職位：お茶の水女子大学 基幹研究院・人間科学系・教授

研究所在職期間／職名：2018年度-2021年度 研究員

(2020年度-2021年度 発達臨床支援研究部門長)

専門分野 臨床心理学・心理療法

所属学会 一般社団法人日本心理臨床学会（業務執行理事、国際交流委員会委員長）、
カウンセリング学会（理事）、The Society for the Exploration of Psychotherapy
Integration（副会長）、The Society for Psychotherapy Research（文化と社会部会部
会長）、American Psychological Association（国際准会員）

学会発表

Yamazaki, Y., Omori, M., Sugawara, M., Akamatsu, R., Matsumoto, S., Iwakabe, S. Fujiwara, Y., & Kobayashi, T.
Associations between dietary intake patterns and psychological factors.
The 32th International Congress of Psychology, 2021/7

Omori, M., Yamazaki, Y., Sugawara, M., Akamatsu, R., Matsumoto, S., Iwakabe, S. Fujiwara, Y., & Kobayashi, T.
Nutrition information-seeking practices as a double-edge sword in female college students.
35th Annual Conference of the European Health Psychology, 2021/8

山崎洋子・大森美香・菅原ますみ・松本聡子 岩壁茂・赤松利恵・藤原葉子・小林哲幸
Instagramの写真の閲覧・投稿行動とボディイメージとの関連
日本健康心理学会第33回大会, 2020/11

Nakamura, K., Iwakabe, S., Yamazaki, W., Okubo, C., Kimura, Y., Arakaki, Y., ...Kawasaki, N.
Verifying a task model of corrective emotional experience.
Society for Psychotherapy Research, 2020/6

Nakamura, K., & Iwakabe, S.
Validation of the Corrective Emotional Experience Scale (CEES).
Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, 2020/5

Yaegashi, M., Yabuki, M., Nakamura, K., Iwakabe, S., Fosha, D., & Edlin, J.
Patient's experiences in the early phase of Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy: Healing from the get-go.
Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, 2020/5

Kizuki, S., Yamazaki, W., Nakamura, K., & Iwakabe, S.
Identifying flourishing events in Emotion-Focused Therapy.
Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, 2020/5

Yamaguchi, C., Kimura, Y., Noda, A., Yamazaki, W., Nakamura, K., & Iwakabe, S.
Clients' subjective experiences in Emotion-Focused Therapy.
Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, 2020/5

- Nakamura, K., Iwakabe, S., Yamazaki, W., Okubo, C., Kimura, Y., & Arakaki, Y.
A process of corrective emotional experience: A theory-building case study.
The international conference of International Society for Emotion Focused Therapy, 2019/8
- Noda, A., Nakamura, K., Yamazaki, W., Okubo, C., Adachi, H., Kawasaki, N., & Iwakabe, S.
The process of transforming shame in Emotion-Focused Therapy: A single case study using Categories of Affective Meaning States (CAMS).
The international conference of International Society for Emotion Focused Therapy, 2019/8
- Nakamura, K., Iwakabe, S., Noda, A., Kizuki, S., Fukushima, T., Yamazaki, W., Kimura, Y., Arakaki, Y., & Okubo, C.
An intensive analysis of the process of corrective emotional experience: Verifying task components.
Society for Psychotherapy Research, 2019/7
- Nakamura, K., & Iwakabe, S.
From in-session corrective emotional experiences to outside-session changes: A theory-building case study using in-session process data and e-mail exchanges.
Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, 2019/6
- Kono, A., Nakamura, K., Iwakabe, S., Fosha, D., & Edlin, J.
Client experiences in the early phase of Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy.
Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, 2019/6
- Tomimasu, R., Iwakabe, S., Nakamura, K., Yamazaki, W., Noda, A., Kimura, Y., Fosha, D., & Edlin, J.
Tracking emotional change process in psychotherapy: The initial validation of The Four State Scale for Emotional Episodes (4-SSEE).
Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, 2019/6
- Kimura, Y. & Iwakabe, S.
Therapeutic courage in Japanese psychotherapists: The self-disclosure of their own past psychological wounds.
Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, 2019/6
- Arakaki, Y. & Iwakabe, S.
The experience of shame in supervision: A qualitative study on Japanese psychotherapists.
Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, 2019/6
- 野田亜由美・木村友馨・向井瑛里・岩壁茂
Emotion Focused-Therapy における恥の変容プロセス－恥の種類・関連して出現する感情の種類に注目して－
第 38 回日本心理臨床学会大会, 2019/6
- Yamazaki, Y., Omori, M., Sugawara, M., Matsumoto, S., Kobayashi, T., Fujiwara, Y., Akamatsu, R., Iwakabe, S., & Kawasaki, Y.
The Effects Of Instagram Photos On Women's Body Image.
7th Asian Congress of Health Psychology, 2019/9
- Goto, A., & Iwakabe, S.
Gender differences in therapists' experience of courage in psychotherapy: A qualitative study.
The Society for Psychotherapy Research, 2019/7
- Iwakabe, S., & Goto, A. (2019, July). Authentic humility or cultural imperative: A qualitative study on the experience of humility in Japanese psychotherapists.
The Society for Psychotherapy Research, 2019/7

野村朋子・岩壁茂
心理職に求められるコンピテンシーと指導者研修のニーズ。
日本心理臨床学会第 37 回大会, 2018/9

Noda, A., Iwakabe, S., Kimura, Y., & Mukai, E.
The Process of Transforming Shame in a Long-Term Emotion-Focused Therapy.
Annual meeting of Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, 2018/6

Iwakabe, S., Edlin, J., Fosha, D., & Nakamura, K.
The preliminary results on AEDP outcome research.
Annual meeting of Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, 2018/6

Iwakabe, S., Kimura, Y., Hayakawa, M., & Gazzola, N.
Therapeutic courage in Japanese therapists: A qualitative research comparing the experience of beginning and experienced therapists.
The 29th International Congress of Applied Psychology, 2018/6

Arakaki, Y, Shoji, Y, Yamagishi, A, Katahira, Y, Furuya, M, Kizuki, S, Ogasawara, M, Nagata, N, Yamazaki, W, & Iwakabe, S.
When therapists put themselves before their clients: A qualitative study on therapists's experience and what they learn from it.
The Annual meeting of the Society for Psychotherapy Research, 2018/6

Edlin, J., Fosha, D., Iwakabe, S., Nakamura, K., & Yamazaki, W.
A systematic case study in Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy: A client with a past medical trauma.
The Annual meeting of the Society for Psychotherapy Research, 2018/6

Yamazaki, W., Fosha, D., Edlin, J., Nakamura, K., & Iwakabe, S.
A systematic case study in Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy (AEDP): A client with depression.
The Annual meeting of the Society for Psychotherapy Research, 2018/6

Goto, A., Kimura, Y. & Iwakabe, S.
Fear and Anxiety around exercising Courage of Japanese Novice Therapists.
The Society for Psychotherapy Research, 2018/6

Iwakabe, S., Fosha, D., Edlin, J., & Nakamura, K.
A study on the outcome of Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy: An interim report.
The Society for Psychotherapy Research, 2018/6

Kimura, Y., Goto, A. & Iwakabe, S.
Therapeutic courage in experienced Japanese therapists.
The Society for Psychotherapy Research, 2018/6

Nakamura, K., & Iwakabe, S.
Comparing the processes of corrective emotional experience along two distinct interpersonal conflicts: A theory-building case study.
The Society for Psychotherapy Research, 2018/6

Nakamura, K., Iwakabe, S., Fosha, D., & Edlin, J.
Corrective Emotional Experience in Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy (AEDP): Development of the Interpersonal Corrective Emotional Experience Model.
Annual meeting of Society for the Exploration of Psychotherapy Integration, 2018/5

Murray, S., Verba, M., Fosha, D., Edlin, J., Iwakabe, S., & Nakamura, K.
Client experiences in the early phase of AEDP.

競争的資金

科学研究費基盤研究(C) 「修正感情体験のプロセスと効果」、研究代表者、2016年度-2018年度

科学研究費基盤研究(C) 「心理療法の終結に関する横断的・縦断的研究」、研究分担者、2016年度-2018年度

科学研究費基盤研究(C) 「対人的楽観性に焦点を当てたメンタルヘルス改善のための統合的アプローチ法」、研究分担者、2018年度-2021年度

科学研究費基盤研究(C) 「修正感情体験を促進する介入の明確化と訓練法の開発」、研究代表者、2019年度-2021年度

実践活動

(教育実践)

臨床心理士会講師「統合療法の実際」「英語で学ぶ心理療法」

法務省矯正研修所講師

関西カウンセリングセンター講師

人間発達基礎研究部門 大森 正博

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・教授

研究所在職期間／職名：2016年度-2021年度 研究員

専門分野 医療経済学

所属学会 日本経済学会、日本財政学会、医療経済学会、社会政策学会（社会政策学会誌査読専門委員）、大洋州経済学会（代表幹事）、日本医療・病院管理学会

学会発表

大森正博
Covid19 への政策対応……国際比較の視点.
財政経済研究会, 2021/3

大森正博
経済学と感染症……Covid-19 とオランダの施策.
生活社会科学研究会総会, 2020/11

大森正博
オーストラリアの医療費調節……国際比較の視点.
第 49 回大洋州経済学会, 2019/12

大森正博
オーストラリアの医療保険財政について医療制度の改革の方向性……インセンティブに注目して.
第 48 回大洋州経済学会, 2018/12

大森正博
オーストラリアの医療保険財政について.
第 47 回大洋州経済学会, 2017/12

大森正博
医療・介護制度の国際比較……日豪比較.
第 46 回大洋州経済学会, 2016/12

競争的資金

科学研究費基盤研究(A) 「家計簿からみた生活水準の推移と社会経済の変容」、研究分担者、
2019年度-2021年度

人間発達基礎研究部門 大森 美香

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・教授

研究所在職期間／職名：2016 年度-2017 年度 研究員

(2018 年度-2021 年度 人間発達教育科学研究所長)

専門分野 健康心理学

所属学会 一般社団法人日本健康心理学会（理事），日本自律訓練学会（評議員），
日本心理学会（代議員），American Psychological Association,
Academy of Eating Disorders

学会発表

山崎洋子・大森美香・佐藤健太
インフルエンザ予防接種意図におけるフレーミング効果の検討。
日本心理学会第 85 回大会, 2021/9

Yamamiya, Y., & Omori, M.
Examining negative emotions for bodily changes associated with pregnancy in young Japanese women.
Australia and New Zealand Academy for Eating Disorders Hybrid International Conference 2021, 2021/8

Yamazaki, Y., Omori, M., Sugawara, M., Akamatsu, R., Matsumoto, S., Iwakabe, S. Fujiwara, Y., & Kobayashi, T.
Associations between dietary intake patterns and psychological factors.
The 32th International Congress of Psychology, 2021/8

Omori, M., Yamazaki, Y., Sugawara, M., Akamatsu, R., Matsumoto, S., Iwakabe, S. Fujiwara, Y., & Kobayashi, T.
Nutrition information-seeking practices as a double-edge sword in female college students.
35th Annual Conference of the European Health Psychology, 2021/8

Oishi, A., Nagasaki, K. & Omori, M.
Examination of effects of telecommunication on post- communication reassurance among adult and
elderly parents: Focus on video-communication.
AASP, 2021/7

合澤典子・千葉咲香・大森美香
エンターテインメントの心理的効果の検討ーコロナ禍ストレスと精神的健康の関係に及ぼす調整効果
日本健康心理学会第 34 回大会, 2021/11

Yamamiya, Y., & Omori, M.
Pre existing thin ideal internalization, appearance comparison, drive for thinness, and current negative feelings
toward bodily changes among pregnant Japanese women.
Academy for Eating Disorders Virtual International Conference on Eating Disorders 2020, 2020/6

Yamazaki, Y., Omori, M., Sugawara, M., Akamatsu, R., Fujiwara, Y. & Kobayashi, T.
The association between orthorexia nervosa and Instagram use among Japanese women.
Academy for Eating Disorders Virtual International Conference on Eating Disorders 2020, 2020/6

山崎洋子・大森美香・菅原ますみ・松本聡子 岩壁茂・赤松利恵・藤原葉子・小林哲幸
Instagramの写真的閲覧・投稿行動とボディイメージとの関連.
日本健康心理学会第33回大会, 2020/11.

Omori, M., Takamura, A., & Yamazaki, Y.
When “Being Healthy” Is Unhealthy: The role of Food Related Knowledge and Information on Orthorexia Nervosa.
5th International Congress of Clinical and Health Psychology on Children and Adolescents, 2019/11

合澤典子・大森美香
学業ストレス状況のコーピング継続的变化に及ぼす楽観性の影響 条件付き潜在成長モデルによる試験前
4時点データの分析.
日本心理学会第83回大会, 2019/9

大石彩乃・大森美香
筆記開示法における利用意欲の上昇：ポジティブな感情・思考への内省.
日本心理学会第83回大会, 2019/9

山崎洋子・高村愛・大森美香
実存的不安尺度（ECQ）日本語版作成の試み（2）—大学生男女を対象とした検討.
日本心理学会第83回大会, 2019/9

合澤典子・大森美香
学業ストレス状況における認知的評価と楽観性の関連：4時点の縦断調査.
日本健康心理学会第32回大会, 2019/9

山崎洋子・大森美香
SNSの利用と否定的な身体像との関連—SNS上での外見比較の影響.
日本健康心理学会第32回大会, 2019/9

大森美香・山宮裕子
妊娠中の身体的な変化に対する嫌悪感の程度を測定するための尺度の作成.
日本心理学会第83回大会, 2019/9

Aizawa, N. & Omori, M.
Optimism And Changes In Depression And Anxiety Under Academic Stressor: A Conditional Latent Growth
Modeling Analysis.
7th Asian Congress of Health Psychology, 2019/9

Yamazaki, Y., Omori, M., Sugawara, M., Matsumoto, S., Kobayashi, T., Fujiwara, Y., Akamatsu, R., Iwakabe, S., &
Kawasaki, Y.
The Effects of Instagram Photos on Women's Body Image.
7th Asian Congress of Health Psychology, 2019/9

Yamazaki, Y., Takamura, A., & Omori, M.
Gender differences in the orthorexia nervosa among Japanese adolescents: An investigation of the Japanese version of
the Eating Habits Questionnaire.
The 2019 International Conference on Eating Disorders, 2019/3

Omori, M., Takamura, A., Yamazaki, Y., & Kikuchi, H.
The Exploration of State Body Dissatisfaction in Everyday Lives: An EMA Study with Japanese Young Women.
The 2019 International Conference on Eating Disorders, 2019/3

Yoshitake, N., Omori, M., & Sugawara, M.
Verifying health literacy skills framework on health beliefs on seasonal influenza infection and health behavior
among Japanese adults.
The International Convention of Psychological Science, 2019/3

Omori, M., Yoshitake, N., Sugawara, M., Akishinonomiya, K., & Shimada, S.
Socio-cognitive aspects of the uptake of influenza vaccination among Japanese adults.
The 15th International Congress of Behavioral Medicine, 2018/11

高村愛・山崎洋子・大森美香
女子大学生における fat talk 従事と個人特性の関連—Ecological Momentary Assessment を用いて.
日本心理学会第 82 回大会, 2018/9

山崎洋子・高村愛・大森美香
実存的不安尺度 (ECQ) 日本語版作成の試み—大学生女子を対象とした予備調査.
日本心理学会第 82 回大会, 2018/9

合澤典子・大森美香
学業ストレス状況のパネル調査によるストレス対処過程の検討—認知的評価とコーピングの縦断的な関連.
日本心理学会第 82 回大会, 2018/9

Takamura, A., Yamazaki, Y., Omori, M., Kikuchi, H., Nakamura, T., Yoshiuchi, K., & Yamamoto, Y.
An EMA investigation of situational cues responsible for fat talk in Japanese women.
The 32nd Annual Conference of the European Health Psychology Society, 2018/8

Omori, M., Takamura, A., & Yamazaki, Y.
When “Being Healthy” Is Unhealthy: The Exploration of Orthorexia Nervosa Among Young Women in Japan.
The 30th annual convention of Association for Psychological Science, 2018/5

Omori, M., Takamura, A., Yamazaki, Y., Takahashi, Y., Nakamura, T., Kikuchi, H., Hiraide, M., Yoshiuchi, K., & Yamamoto, Y.
An EMA investigation of relationships among emotion, fat talk, and state body dissatisfaction.
The XXIIIrd Annual Meeting of the Eating Disorders Research Society, 2017/9

合澤典子・大森美香
楽観性と認知的方略がストレス対処過程に及ぼす影響 高校生における学業ストレス—知覚の検討.
日本心理学会第 81 回大会, 2017/9

李孝婷・大森美香
身体不満と体系変更方略の関連—中国人大学生における性差と身体不満指向性による違いの検討—
日本心理学会第 81 回大会, 2017/9

大石彩乃・大森美香
精神疾患に対する日本語版治療評価尺度の作成
日本心理学会第 81 回大会, 2017/9

高村愛・山崎洋子・大森美香
fat Talk が身体満足度に及ぼす影響—daily diary による検討—
日本心理学会第 81 回大会, 2017/9

高村愛・山崎洋子・大森美香
健康志向・美容志向と fat talk 従事頻度の関連の検討
日本健康心理学会第 30 回記念大会, 2017/9

合澤典子・大森美香
楽観性および認知的方略とコーピングの関連 高校生の学業ストレス状況における対処過程の検討
日本健康心理学会第 30 回記念大会, 2017/9

Aizawa, N. & Omori, M.
Effects of optimistic and defensive pessimistic expectations on coping processes under academic pressure.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Takamura, A., Ikuzaki, F., Yamazaki, Y., & Omori, M.
What are the predictors of fat talk engagement?
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Li, X., Takamura, A., Yamazaki, Y., & Omori, M.
Gender Differences in Relationships between Body-ideal and Body Change Strategies among University Students in China.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Oishi, A. & Omori, M.
The gender difference in self-stigma of mental illnesses and its impact on help-seeking preference.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Kawabata, M., Aizawa, N., & Omori, M.
Development of the Attitude for Kyara Scale and the Kyara-related Fatigue Scale.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Ikuzaki, F., Takamura, A., & Omori, M.
Experiences of weight-related teasing during childhood and their influences on binge eating during later life. The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Takamura, A., Yamazaki, Y., & Omori, M.
The Role of Social Comparison on the Engagement in Fat Talk among Japanese College Women.
2016 International Conference on Eating Disorders, 2016/5

受賞

2017 年日本心理学会学術大会優秀発表賞
「fat talk が身体満足度に及ぼす影響—daily diary による検討—」

競争的資金

科学研究費基盤研究(B) 「EMA を用いたボディイメージと健康行動に関する実証的研究」、
研究代表者、2016 年度-2019 年度

科学研究費挑戦的萌芽研究 「生涯発達に即した‘感情マネジメント’をフェーズに組込んだ危機
予防教育の開発」、研究代表者、2015 年度-2018 年度

科学研究費基盤研究(C) 「妊娠期の身体的変化の受容プロセスに関する縦断的検討」、研究分
担者、2018 年度-2020 年度

挑戦的研究(萌芽) 「声と表情に関する感情リテラシーの発達アウトラインの解明と教育的
支援の開発」、研究分担者、2020 年度-2022 年度

基盤研究(B) 「感情変化と食行動の関連性をリアルタイムにとらえる：EMA を用いた包括的
解明」、研究代表者、2021 年度-2024 年度

挑戦的研究(萌芽) 「リスク認知の発達に応じたヘルス・コミュニケーション教育の導
入」、研究代表者、2021 年度-2023 年度

基盤研究(C) 「摂食障害予防を目的とした基礎的研究および予防的介入プログラムの開発」、
研究分担者、2021 年度-2023 年度

基盤研究(C) 「ツイッター、インスタグラムとボディイメージとの関連の解明：介入方法開発の試み」、研究分担者、2020 度-2022 年度

保育・教育実践研究部門 小玉 亮子

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・教授

研究所在職期間／職名：2016年度-2021年度 研究員

専門分野 教育学、家族社会学

所属学会 日本教育学会（2016—2017 副会長・事務局長・常任理事）、日本教育史学会（2019—2020 機関誌編集長・理事）、幼児教育史学会（2015—2017 理事・事務局長）、ジェンダー史学会（2019—2020 代表理事）、日本社会学会、日本家族社会学会、日本教育社会学会、日本子ども社会学会、日本ドイツ学会、日本保育学会

学会発表

小玉亮子
ペスタロッチ・フレーベルハウスとナチズム その1.
第17回 幼児教育史学会大会, 2012/12

高橋陽子・小玉亮子・佐藤寛子
動き出すドキュメンテーション（1）－保育者と保護者の関係と対話をキーワードにして－.
日本保育学会第73回大会, 2020/5

佐藤寛子・小玉亮子・高橋陽子
動き出すドキュメンテーション（2）－保育者と保育者の関係と対話をキーワードにして－.
日本保育学会第73回大会, 2020/5

What is a quality of early childhood education in the age of measurement?
The annual conference of early childhood education, CSE (2019) / The 2nd academic forum on quality evaluation and promotion of childhood education, 2019/11.

Kodama, R.
“A new trend: 1990’s and after: Social and political change and Ochanomizu University”, in. What is “quality transition”? Examination of transition from early childhood education to primary education from a historical perspective.
WERA, 2019/8

Asai, S., Kodama, R., & Ota, M.
Is a child-centered perspective enough for transition? : A study of transition challenges at Ochanomizu University ECEC settings and elementary school.
EECERA The 29th Conference, 2019/8.

小玉亮子
母親ということと専門家ということーリリー・ドロシャールの直面したものー.
教育史学会第62回大会, 2018/9

Tabu, M. & Kodama, R.
Comparative Study of Family Childcare in Japan and England. Findings from a survey of the Tokyo- Family-Childcare- Association Members”.
EECERA The 28th Conference, 2018/8

Tabu, M., & Kodama, R.
A Comparative Study of the Family Childcare (2): A Review of the Research in Japan and Germany.
EECERA The 27th Conference, 2017/8

小玉亮子
20世紀初頭のドイツにおける母の日と教育.
比較家族史学会第61回大会, 2017/6

小玉亮子
Professionalism と motherness の間でードイツにおける家庭、家庭的保育、施設保育の関係をめぐってー.
日本保育学会第69回大会, 2016/5

Tabu, M., & Kodama, R.
“A Comparative Study of the Family Childcare: Japan, England and Germany”.
EECERA The 26th Conference, 2016/8

メディア掲載

(ウェブ掲載)

2019年6月12日 『「パパ」「ママ」は恥ずかしい？親を下の名前で呼んでみた理由』 (AERA dot)
記事内でコメント
<https://dot.asahi.com/dot/2019061100086.html>

2020年3月 駿台監修「学びのトレンド&入試対策BOOK」
学のトレンド 子どもを通して見る社会
デジタル版パンフレット

競争的資金

科学研究費基盤研究(C) 「保育ユニバーサル化時代の3歳未満児ケア - 日独英3か国の家庭的保育事業の現状と課題」、研究分担者、2014年度-2017年度

科学研究費基盤研究(C) 「20世紀前半のドイツにおける幼児教育の制度化と家族に関する社会史的研究」、研究代表者、2014年度-2018年度

科学研究費基盤研究(B) 「プロジェクト・アプローチの展開とその教育思想——日欧の幼児教育における革新の系譜」、研究分担者、2017年度-2019年度

科学研究費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B)) 「子どもの育ちと学びの記録による保育評価とその国際的ネットワークの展開」、研究分担者、2018年度-2021年度

科学研究費基盤研究(C) 「家庭的保育による多文化家庭の地域支援の試み - 英独の多文化化経験に学ぶ家族支援策」、研究分担者、2019年度-2021年度

科学研究費基盤研究(C) 「ナチス期ドイツにおける幼児教育と家族に関する社会史的研究」、研究代表者、2019年度-2022年度

外部資金 (科学研究費以外)

公益財団法人前川財団 「対話による保育記録の創造ーお茶の水女子大学附属学校園における試みから」、研究代表者、2021年度

人間発達基礎研究部門 坂元 章

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・教授

研究所在職期間／職名：2016 年度-2021 年度 研究員

専門分野 社会心理学・教育工学

所属学会 日本パーソナリティ心理学会（監事），日本シミュレーション&ゲーミング学会（理事），日本教育情報学会（評議員），日本デジタルゲーム学会，日本グループ・ダイナミクス学会，社団法人日本心理学会

学会発表

Sakamoto, A.

Self-introduction and possible contribution: Safe and responsible Internet use in a connected world.

EDUsummit2019, 2019/10

松尾由美・田島祥・鄭姝・堀内由樹子・寺本水羽・坂元章

保護者評定によるデジタルゲーム依存尺度の作成（3）短縮版作成の試み.

日本社会心理学会第 60 回大会, 2019/11

田島祥・松尾由美・鄭姝・堀内由樹子・寺本水羽・坂元章

デジタルゲーム利用に対する保護者の養育的介入が子どもの適応に及ぼす影響.

日本心理学会第 83 回大会, 2019/9

鄭姝・松尾由美・田島祥・堀内由樹子・寺本水羽・坂元章

デジタルゲームに対する保護者のレーティング確認と技術的介入が子どもの適応に及ぼす影響.

日本心理学会第 83 回大会, 2019/9

松尾由美・堀内由樹子・寺本水羽・田島祥・鄭姝・坂元章

保護者評定によるデジタルゲーム依存尺度の作成（2）一項目反応理論による検討一.

日本パーソナリティ心理学会第 28 回大会, 2019/8

寺本水羽・松尾由美・田島祥・堀内由樹子・チェンシュ・坂元章

子どものデジタルゲーム利用と適応 一3 歳から小学校 3 年生を対象とした web 保護者調査一.

日本心理学会第 82 回大会, 2018/9

チェンシュ・倉津美紗子・堀内由樹子・寺本水羽・松尾由美・田島祥・坂元章

子どものデジタルゲーム利用に対する保護者の意識、介入行動(8)一レーティングの確認有無と子どもの適応一.

日本心理学会第 82 回大会, 2018/9

松尾由美・堀内由樹子・寺本水羽・田島祥・チェンシュ・坂元章

保護者評定によるデジタルゲーム依存尺度の作成.

日本心理学会第 82 回大会, 2018/9

寺本水羽・松尾由美・田島祥・渋谷恵・岩坪千晶・坂元章

自動翻訳を介した SNS での国際交流が相手国の人々への態度に与える影響(4)一潜在尺度を用いた直接接触・間接接触・事前知識獲得効果一.

日本社会心理学会第 58 回大会, 2017/10

田島祥・堀内由樹子・松尾由美・寺本水羽・坂元章
子どものデジタルゲーム利用に対する保護者の意識、介入行動(7)ーゲームを通じた交流に対する意識ー。
日本社会心理学会第58回大会, 2017/10

松尾由美・堀内由樹子・田島梓・寺本水羽・坂元章
子どものデジタルゲーム利用に対する保護者の意識、介入行動(6)ー学校段階別の介入行動ー。
日本心理学会第81回大会, 2017/9

堀内由樹子・寺本水羽・松尾由美・田島梓・坂元章
子どものデジタルゲーム利用に対する保護者の意識、介入行動(2)ー親のゲームレーティング制度に対する意識ー。
日本パーソナリティ心理学会第26回大会, 2017/9

寺本水羽・堀内由樹子・松尾由美・田島梓・坂元章
子どものデジタルゲーム利用に対する保護者の意識、介入行動(3)ー養育的介入行動における保護者と子どもの男女差ー。
日本パーソナリティ心理学会第26回大会, 2017/9

松尾由美・堀内由樹子・寺本水羽・田島梓・坂元章
子どものデジタルゲーム利用に対する保護者の意識、介入行動(4)ー各学校段階における養育的介入行動と問題行動との関連ー。
日本パーソナリティ心理学会第26回大会, 2017/9

堀内由樹子・田島祥・寺本水羽・松尾由美・坂元章
子どものデジタルゲーム利用に対する保護者の意識、介入行動(1)ー親と子のデジタルゲームの利用と親のゲームの影響に対する認識ー。
日本応用心理学会第84回大会, 2017/8

寺本水羽・松尾由美・渋谷恵・岩坪千晶・田島祥・坂元章
自動翻訳を介したSNSでの国際交流が相手国の人々への態度に与える影響(2)ー集団間不安による媒介効果の検討ー。
日本パーソナリティ心理学会第25回大会, 2016/9

松尾由美・寺本水羽・渋谷恵・岩坪千晶・田島祥・坂元章
自動翻訳を介したSNSでの国際交流が相手国の人々への態度に与える影響(3)：新奇恐怖の調整効果の検討。
日本パーソナリティ心理学会第25回大会, 2016/9

田島祥・松尾由美・寺本水羽・祥雲暁代・相田麻里・坂元章
オンラインゲームでの社会的相互作用がシャイネスに及ぼす影響。
日本パーソナリティ心理学会第25回大会, 2016/9

祥雲暁代・田島祥・麻生奈央子・坂元章
青少年が視聴するテレビドラマの内容分析ー勤労観および働くことに対する価値観の描かれ方についてー。
日本社会心理学会第57回大会, 2016/9

田島祥・祥雲暁代・麻生奈央子・坂元章
ドラマ視聴が中学生の働くことに対する価値観に及ぼす影響ー内容分析と縦断調査に基づく検討ー。
日本社会心理学会第57回大会, 2016/9

寺本水羽・松尾由美・渋谷恵・岩坪千晶・田島祥・坂元章
自動翻訳を介したSNSでの国際交流が相手国の人々への態度に与える影響ー直接接触・間接接触・事前知識獲得効果ー。
日本社会心理学会第57回大会, 2016/9

麻生奈央子・田島祥・祥雲暁代・坂元章
テレビ視聴が職業の価値観に及ぼす影響ーキャリア形成準備の調整効果ー。

日本社会心理学会第 57 回大会, 2016/9

松尾由美・田島祥・寺本水羽・祥雲暁代・相田麻里・渋谷恵・坂元章
SNS 上での間接接触が外国人イメージに及ぼす影響(2)：3 波縦断調査による検討.
日本社会心理学会第 57 回大会, 2016/9

Matsuo, Y., Tajima, S., Teramoto, M., Shoun, A., Aita, M., Shibuya, K., & Sakamoto, A.
Effects of intergroup contact via SNS on prejudice toward foreign people.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Asoh, N., Tajima, S., Shoun, A., & Sakamoto, A.
The effects of frequency of watching TV dramas on work values for future career, moderated by careereducation: A two-wave panel sur-vey on college students.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Matsuo, Y., Tajima, S., Teramoto, M., Shoun, A., Aita, M., Shibuya, K., & Sakamoto, A.
Mediated effects of intergroup contact via SNS and face to face international communication on attitude toward foreign people.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Shoun, A., Tajima, S., Asoh, N., & Sakamoto, A.
The effect of viewing television on work values: The moderating role of transportation.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Tajima, S., Shoun, A., Asoh, N., & Sakamoto, A.
A two-wave panel survey on career education and television viewing.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Teramoto, M., Matsuo, Y., Tajima, S., i Shibuya, K., Iwatsubo, C., Shoun, A., Aita, M., & Sakamoto, A.
The influences of contacts via SNS on the attitudes toward foreign people: Study on the intergroup anxiety's mediation effect.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

メディア掲載

(新聞)

2018 年 4 月 2 日 『はじめてのスマホ、安全に 高校生が小中学生にマナー授業』(朝日新聞 朝刊)

2018 年 10 月 2 日 『ネット電話友達は目の前「動画・ゲーム…ネット身近に』(日本経済新聞)

受賞

日本シミュレーション&ゲーミング学会 2019 年度優秀賞

競争的資金

科学研究費基盤研究(B) 「テレビゲームにおける暴力シーンの影響を避ける適切なレーティングに関する研究」、研究代表者、2016 年度-2018 年度

人間発達基礎研究部門 坂本 佳鶴恵

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・教授

研究所在職期間／職名：2016年度-2021年度 研究員

専門分野 社会学

所属学会 日本マスコミュニケーション学会, ヨーロッパ社会学会

学会発表

Sakamoto, K.

Japanese Women's magazines, Gender Norms and Fashion.

6th International Conference on Knowledge, Culture and Society ICKCS2017, 2017/9.

メディア掲載

(新聞)

- 2019年3月16日 『情報フォルダー』(朝日新聞 朝刊) 書籍に関する情報掲載
- 2019年4月4日 『新著の余禄』(福井新聞 朝刊) 著者インタビュー 書籍の書評
- 2019年4月4日 『文化の主体化を後押し』(京都新聞 朝刊) 著者インタビュー
- 2019年4月14日 『女性の「主体化」後押し』(熊本日日新聞 朝刊) 著者インタビュー
- 2019年4月14日 『欲望肯定するツール』(秋田さきがけ 朝刊) 著者インタビュー
- 2019年4月14日 『著者が語る』(北日本新聞 朝刊) 著者インタビュー
- 2019年4月28日 『新著の余禄』(四国新聞 朝刊) 著者インタビュー 書籍の書評
- 2019年4月28日 『生活に与えた影響分析』(東典日報 朝刊) 著者インタビュー
- 2019年4月29日 『本の散歩道』(信濃毎日新聞 朝刊) 著者インタビュー
- 2019年5月5日 『著者とひととき』(河北新報 朝刊) 著者インタビュー
- 2019年5月5日 『新著の余禄』(岐阜新聞 朝刊) 著者インタビュー
- 2019年6月12日 『書評 女性雑誌におけるファッションの社会的意味を問う』(週刊読書人)
- 2019年6月15日 『意識・生活様式の変化たどる』(日本経済新聞 朝刊) 書籍の書評
- 2019年7月6日 『女性の仕事と文化—その歴史と現在を捉えるための四冊』(図書新聞)
書籍の書評
- 2020年9月17日 『どう変わった2012→2020、下「ファッション誌」』(朝日新聞)
著者インタビュー

(ウェブ掲載)

2019年3月13日 『女性雑誌とファッションの歴史社会学』 (出版人メールマガジン「文徒」第7巻46号・通巻1464号 書籍の書評

<https://teru0702.hatenablog.com/entry/2019/04/15/082137>

2019年7月8日 『ワセ女・学習院が躍進! 女子大生読者モデルランキングに異変あり』 (AERA dot) 書籍の紹介、インタビュー記事を含む

<https://dot.asahi.com/dot/2019070400068.html>

競争的資金

平成30年度科学研究費助成事業(科学研究成果公開促進費)

人間発達基礎研究部門 客員教授 菅原 ますみ

現所属／職位：白百合女子大学・教授

研究所在職期間／職名：2016 年度-2020 年度 研究員

(2016 年度-2017 年度 人間発達教育科学研究所長)

(2016 年度-2020 年度 人間発達基礎研究部門長)

(2021 年度 客員教授)

専門分野 発達心理学・発達精神病理学・パーソナリティ心理学

所属学会 日本パーソナリティ心理学会, 日本教育心理学会, 日本子ども学会 (常任理事), 日本双生児研究学会, 日本心理学会 (専門別代議員), Society for Research in Child Development (SRCD)

学会発表

菅原ますみ・松本聡子・齊藤彩・吉武尚美
コロナ禍での大学生の精神的健康と小児期体験.
日本発達心理学会第 33 回大会, 2022/3

Yamazaki, Y., Omori, M., Sugawara, M., Akamatsu, R., Matsumoto, S., Iwakabe, S. Fujiwara, Y., & Kobayashi, T.
Associations between dietary intake patterns and psychological factors.
The 32th International Congress of Psychology, 2021/8

Omori, M., Yamazaki, Y., Sugawara, M., Akamatsu, R., Matsumoto, S., Iwakabe, S. Fujiwara, Y., & Kobayashi, T.
Nutrition information-seeking practices as a double-edge sword in female college students.
35th Annual Conference of the European Health Psychology, 2021/8

辻百合香・今泉修・菅原ますみ・生地新
自閉スペクトラム症及び定型発達の小・中学生における感覚処理異常傾向と内在化問題の関連：感覚に関する困り感の媒介効果.
日本心理学会第 85 回大会, 2021/9

山崎洋子・大森美香・菅原ますみ・松本聡子 岩壁茂・赤松利恵・藤原葉子・小林哲幸
Instagram の写真の閲覧・投稿行動とポディイメージとの関連.
日本健康心理学会第 33 回大会, 2020/11.

栗原俊介・吉良文夫・菅原ますみ・飽戸弘
モバイル利用のライフスタイル研究 (2) —保護者の介入スタイルと小中学生の ICT 利用の関係—.
日本社会心理学会第 61 回大会, 2020/11

菅原ますみ・松本聡子・”子どもに良い放送”プロジェクト
親のメディアマネージメントに関する長期縦断研究：“子どもに良い放送”プロジェクト.
第 16 回子ども学会議 (日本子ども学会学術集会), 2019/10

眞榮城和美・村松志野・松本聡子・瀬尾知子・菅原ますみ・榊原洋一
就学移行期における子どもの自尊感情と母親の自尊感情との関連.

第 16 回子ども学会議（日本子ども学会学術集会），2019/10

Yoshitake, N. & Sugawara, M.

The dual-factor model of mental health for Japanese adolescents: Latent growth curve analyses of psychosocial outcomes.

7th Asian Congress of Health Psychology, 2019/9

Yamazaki, Y., Omori, M., Sugawara, M., Matsumoto, S., Kobayashi, T., Fujiwara, Y., Akamatsu, R., Iwakabe, S., & Kawasaki, Y.

The Effects Of Instagram Photos On Women'S Body Image.

7th Asian Congress of Health Psychology, 2019/9

Yamazaki, Y., Omori, M., Sugawara, M., Akamatsu, R., Fujiwara, Y. & Kobayashi, T.

The association between orthorexia nervosa and Instagram use among Japanese women.

Academy for Eating Disorders Virtual International Conference on Eating Disorders 2020, 2020/6

齊藤彩・菅原ますみ

親子双方の注意欠如・多動症的行動特性と親子関係との関連.

日本教育心理学会第 61 回総会, 2019/9

Senoo, T., Muramatsu, S., Matsumoto, S., Maeshiro, K., Sugawara, M., & Sakakihara, Y.

Relationship Between Children's Physique, Eating Behaviors, and Mothers' Dietary QOL.

The 20th Pacific Early Childhood Education Research Association (PECERA) International Conference, 2019/7

Maeshiro, K., Sakai, A., Tanaka, M., & Sugawara, M.

A longitudinal study about the relationship between global self-worth and social acceptance among Japanese children.

The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Yoshitake, N., Omori, M., & Sugawara, M.

Verifying health literacy skills framework on health beliefs on seasonal influenza infection and health behavior among Japanese adults.

The International Convention of Psychological Science, 2019/3

Omori, M., Yoshitake, N., Sugawara, M., Akishinomiya, K., & Shimada, S.

Socio-cognitive aspects of the uptake of influenza vaccination among Japanese adults.

The 15th International Congress of Behavioral Medicine, 2018/11

菅原ますみ・松本聡子・猪股富美子・放送倫理・番組向上機構【BPO】青少年委員会

中高生のテレビに対する行動・意識の形成とその関連要因に関する横断的検討—『青少年のメディア利用に関する全国調査』より—.

第 15 回子ども学会議（日本子ども学会学術集会），2018/11

齊藤彩・田中麻未・菅原ますみ

思春期の注意欠如・多動傾向と情緒の問題との関連における遺伝と環境.

日本教育心理学会第 60 回総会, 2018/9

高岡純子・久保木有希子・田村徳子・佐藤朝美・菅原ますみ・榊原洋一・汐見稔幸

乳幼児のスマートフォン接触に関する要因について—第 3 回 乳幼児の親子のメディア活用調査より—.

日本発達心理学会第 29 回大会, 2018/3

菅原ますみ・松本聡子・室橋弘人・酒井厚

テレビ視聴に対する親のかかわりと子どもの言語発達との関連.

日本教育心理学会第 59 回総会, 2017/10

齊藤彩・菅原ますみ

思春期の注意欠如・多動傾向と情緒の問題に関する縦断研究—学校ライフイベント，自尊感情との関連

一.

日本教育心理学会第 59 回総会, 2017/10

菅原ますみ・松本聡子・高岡純子・孫怡・後藤憲子・Barbara Holthus

子育て期の親の生活満足度に関する日独比較調査 (1) 一職場および家庭でのストレス・心身の健康度との関連一.

第 14 回子ども学会議 (日本子ども学会学術集会), 2017/10

高岡純子・孫怡・後藤憲子・Barbara Holthus・松本聡子・菅原ますみ

子育て期の親の生活満足度に関する日独比較調査 (2) 一親の教育価値観・親役割観との関連一.

第 14 回子ども学会議 (日本子ども学会学術集会), 2017/10

眞榮城和美・酒井厚・田中麻未・菅原ますみ

子どもの精神的健康と全体的自己価値観との関連—双生児を対象とした縦断的研究—.

日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会, 2017/9

酒井厚・菅原ますみ・松本聡子

親・友人との関係性と外在化型問題行動との関連—自尊感情を含めた調整媒介分析による検討—.

日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会, 2017/9

菅原ますみ・松本聡子・吉武尚美・山形伸二

成人期におけるクオリティ・オブ・ライフと精神的健康—個人内資源としてのパーソナリティと生活関連リテラシーに注目して—.

日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会, 2017/9

Yoshitake, N. & Sugawara, M.

Psychosocial Resources and Life Satisfaction: Cross-Lagged Analysis of Japanese High School Students.

SRCD Biennial Meeting, 2017/4

瀬尾知子・村松志野・松本聡子・眞榮城和美・菅原ますみ・榊原洋一

子どもの食行動と性差・母親の食生活 QOL との関連.

日本発達心理学会第 28 回大会, 2017/3

村松志野・松本聡子・瀬尾知子・眞榮城和美・菅原ますみ・榊原洋一

幼保小接続期における幼児の自尊感情の変化.

第 13 回子ども学会議 (日本子ども学会学術集会), 2016/10

菅原ますみ・松本聡子・猪股富美子・BPO 青少年委員会

高校生のメディア・リテラシーに関する探索的研究—バラエティー番組に対する感想をめぐって—.

第 13 回子ども学会議 (日本子ども学会学術集会), 2016/10

榊原洋一・村松志野・松本聡子・瀬尾知子・眞榮城和美・菅原ますみ

子どもの不注意多動行動は QOL を低下させる.

第 13 回子ども学会議 (日本子ども学会学術集会), 2016/10

Sakai, A., Murohashi, H., & Sugawara, M.

Developmental trajectories and predictors of aggression from childhood to adolescence in a Japanese sample.

The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

Yoshitake, N. & Sugawara, M.

Verifying the theoretical model of quality of life with Japanese married couples.

The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

メディア掲載

(新聞)

2020 年 7 月 10 日 きょうだいへの接し方 公平に (北海道新聞)

2020年2月13日 どうする福祉 3歳児神話を「正しく」崩す（産経新聞 朝刊）研究紹介・コメント
2019年9月10日 親子関係に悩んだときは（高校生新聞）
2019年7月23日 動画に夢中の子どもたち（読売新聞 朝刊）

受賞

第14回子ども学会議（日本子ども学会学術集会）優秀発表賞

「子育て期の親の生活満足度に関する日独比較調査（2）一親の教育価値観・親役割観との関連一」

第15回子ども学会議（日本子ども学会学術集会）最優秀発表賞

「中高生のテレビに対する行動・意識の形成とその関連要因に関する横断的検討—『青少年のメディア利用に関する全国調査』より—」

第16回子ども学会議（日本子ども学会学術集会）最優秀発表賞

「親のメディアマネージメントに関する長期縦断研究：“子どもに良い放送”プロジェクト」
平成27年度特別研究員等審査会専門委員（書面担当）及び国際事業委員会書面審査員として表彰

競争的資金

科学研究費基盤研究(A) 「生涯発達におけるクオリティ・オブ・ライフと精神的健康」、研究代表者、2012年度-2016年度

科学研究費基盤研究(B) 「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか～アジアとの比較と要因研究」、研究分担者、2014年度-2017年度

科学研究費基盤研究(C) 「育児・介護離職者の柔軟性のあるキャリア形成のための支援プログラムの開発」、研究分担者、2016年度-2020年度

基盤研究(A) 「養育環境リスク要因の累積が人間発達に及ぼす長期的影響性と影響防御機序の解明」、研究代表者、2020年度-2022年度

基盤研究(B) 「大規模縦断データに基づく多胎児の発育・発達および成人後の体格に関する国際共同研究」、研究分担者、2020年度-2024年度

基盤研究(C) 「発達障害リスク児の幼少期からの発達軌跡に関するコホート研究」、研究分担者、2020年度-2023年度

保育・教育実践研究部門 浜口 順子

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・教授

研究所在職期間／職名：2016年度-2021年度 研究員（保育・教育実践研究部門長）

専門分野 保育学

所属学会

日本保育学会、日本乳幼児教育学会、日本家政学会

学会発表

浜口順子・内海緒香
生涯学習モデルとしての保育現職研修の試み、
日本保育学会第72回大会, 2019/5

Hamaguchi, J.

"Quest for the Sustainable Nature of Early Childhood Education and Care: Having Dialogue with 'the Japanese Froebel' Sozo Kurahashi's life and work as the foundation for questing Sustainable Development Goals for ECEC."
70th OMEP World Assembly and Conference, 2018/6

浜口順子

園児から見た幼稚園主事・倉橋惣三―昭和5~26年度東京女子高等師範学校卒園生への質問紙調査から―
日本保育学会第71回大会, 2018/5

佐藤寛子・上坂元絵里・高橋陽子・灰谷知子・浜口順子
保育を通して倉橋惣三を読み解く―「心もち」の実践的理解―
日本保育学会第71回大会, 2018/5

森志津・浜口順子

幼小接続期における対話的学びを培うカリキュラム研究―「かく」ことからひろがる書きことばの学習―
日本保育学会第71回大会, 2018/5

榎英子・榎沢良彦・中澤潤・浜口順子

倉橋惣三「児童心理」講義録の検討―「川上ノート」から読み解く倉橋惣三の保育者養成―。
日本保育学会第70回大会, 2017/5

メディア掲載

(新聞)

2021年3月25日 今こそ、倉橋惣三 就学前自発的遊びが成長の糧に (東京新聞 朝刊)
インタビュー

(ウェブ掲載)

2020年1月19日 浜口順子先生に聞く 幼児教育の領域『表現』と非認知能力との関係
「非認知能力と音楽」シリーズ⑤ (ヤマハ ON-KEN SCOPE
https://www.yamaha-mf.or.jp/onkenscope/hamaguchijunko1_chapter1/)

2020年8月19日 幼児のかみつき、コロナ禍で増える? (日経ビジネス電子版)

<https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00174/081900005/>

2021年8月26日 【専門家監修】乳幼児教育 本当に大切な「学び」とは 前編
(ミキハウス出産準備サイト 妊娠・出産インフォ)

<https://baby.mikihouse.co.jp/information/post-15370.html>

2021年9月2日 【専門家監修】乳幼児教育 本当に大切な「学び」とは 後編
(ミキハウス出産準備サイト 妊娠・出産インフォ)

<https://baby.mikihouse.co.jp/information/post-15418.html>

競争的資金

科学研究費基盤研究(C) 「東京女子高等師範学校保育実習科における昭和初期の保育者養成－
現存資料からの検討」、研究分担者、2014年度-2016年度

外部資金（科学研究費以外）

フレーベル館（株）奨学寄附金 「保育者の専門性向上のための教材研究『幼児の教育』
誌」、研究代表者、2011年度～2021年度

人間発達基礎研究部門 浜野 隆

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・教授

研究所在職期間／職名：2016年度-2021年度 研究員

(2021年度 人間発達基礎研究部門長)

専門分野 教育社会学・教育開発論・比較教育学

所属学会 日本教育政策学会年報, 日本比較教育学会 (理事), 日本教育社会学会

学会発表

浜野隆

「産業人材育成における非認知能力—概念の整理へ向けた検討—」について,
国際開発学会, 2020/12

メディア掲載

(新聞)

- 2016年11月8日 『荒れた中学、再生への2年』(朝日新聞 朝刊、研究の記事掲載およびコメント)
- 2018年6月27日 『高収入なら高学力 続く 学力テスト分析 正答率2.3ポイント差』(朝日新聞 夕刊) 研究の記事掲載
- 2018年6月28日 『成績・進学期待、収入に比例 文科省、小中の保護者調査』(朝日新聞 朝刊) 研究の記事掲載およびコメント
- 2018年6月28日 『新聞読む習慣 学力高く 学テ分析 保護者アンケート調査』(読売新聞 朝刊) 研究の記事掲載およびコメント
- 2018年6月28日 『学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究』(毎日新聞 朝刊) 研究の記事掲載
- 2018年6月28日 『学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究』(日本経済新聞 朝刊) 研究の記事掲載
- 2018年6月28日 『学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究』(産経新聞 朝刊) 研究の記事掲載
- 2018年7月9日 『学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究』(毎日小学生新聞) 研究の記事掲載およびコメント
- 2018年7月28日 『学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究』(北鹿新聞 朝刊) 研究の記事掲載
- 2019年8月11日 『学力と保護者の深い関係』(朝日新聞 EDUA) 研究の記事掲載
- 2019年12月4日 『国際学力テスト、読解力急落』(毎日新聞 朝刊) コメント
- 2021年1月20日 支援 NPO、期待大きく (日本経済新聞) インタビュー
- 2021年5月23日 コロナ禍、成績低下のおそれ (日本経済新聞 朝刊) インタビュー

- 2021年5月28日 全国学テ、2年ぶり実施（北海道新聞 朝刊） インタビュー
- 2021年9月1日 中3数学、さいたま市1位（読売新聞 朝刊） インタビュー
- 2021年10月7日 学校行事の中止、子どもへの影響は 社会でフォローする必要も
（朝日新聞 デジタル版） インタビュー
- 2021年10月17日 学校行事の中止、親や社会はどう向き合えば…発想の転換も必要？
（朝日新聞 朝刊） インタビュー
- （ウェブ掲載）
- 2019年4月12日 非認知スキルに効く「共有型」のおでかけとは （日経 DUA） L
<https://dual.nikkei.com/atcl/column/17/040300180/040500003/>
- 2019年12月11日 文部科学省 EDU-Port ニッポン 日本の幼児教育、7つの特徴
<https://www.eduport.mext.go.jp/column/2019/12/7.html>
- 2020年4月3日 ダヴィンチマスターズ
お茶の水女子大学 浜野隆教授に聞く 非認知能力の育み方 [2]
<https://davincimaster.com/report/>
- 2020年12月9日 バイリンガル サイエンス研究所英語教育研究コラム
国際社会を生き抜く力になる「英語力」×「非認知能力」
～お茶の水女子大学 浜野教授インタビュー～
<https://bilingualscience.com/english/>
- 2020年11月1日 シャンティ国際ボランティア会 教育協力と「非認知スキル」の向上
<https://sva.or.jp/wp/?p=39617>
- 2021年9月8日 日経 xwoman 小学校受験で非認知能力身に付けられるってホント？
https://dual.nikkei.com/atcl/feature/19/082300084/090100002/?i_cid=nbpdual_sied_pkl_autom
- 2021年9月8日 日経 xwoman 小学校受験 子のためにレールを敷くことは正解か
https://dual.nikkei.com/atcl/feature/19/082300084/090600005/?i_cid=nbpdual_sied_pkl_autom

（テレビ）

- 2017年11月21日 NHK「ニュース7」 OECD 国際学力調査の解説とコメント
- 2017年11月21日 NHK「ニュースウ オッチ9」 OECD 国際学力調査の解説とコメント
- 2018年7月1日 NHK テレビ「おはよう日本」 学力研究の内容紹介およびコメント
- 2019年12月5日 日本テレビ「スッキリ」 PISA 型読解力急落に関する解説・コメント
- 2019年12月13日 TBS テレビ「あさチャン」 PISA 型読解力急落に関する解説・コメント

競争的資金

科学研究費基盤研究(B)「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究（第5次）一就学前環境と養育行動」、研究分担者、2015年度-2017年度

科学研究費基盤研究(B)「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究」、研究分担者、2018年度-2021年度

科学研究費基盤研究(B)「発展途上国の幼児教育における「遊びを通じた学び」への転換過程とその効果の縦断研究」、研究分担者、2020年度-2024年度

文部科学省 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究「保護者に対する調査の結果と学力等との関係の専門的な分析に関する調査研究」、2017年度

文部科学省 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究「平成29年度保護者に対する調査の結果を活用した効果的な学校等の取組に関する調査研究」、2018年度

実践活動

JICA 課題別研修「中西部アフリカ幼児教育」（2016年度～2017年度）

JICA 課題別研修「乳幼児ケアと就学前教育（中東・アフリカ）」（2018年度～2021年度）

保育・教育実践研究部門 富士原 紀絵

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・教授

研究所在職期間／職名：2016年度-2021年度 研究員

専門分野 教育学・教育方法・カリキュラム論

所属学会 日本カリキュラム学会（理事）、日本教育方法学会、日本教育学会、教育史学会

学会発表

仁木和久・緩利誠・内海緒香・岩野孝之・富士原紀絵
アクティブ・ラーニングにおける「ポジティブ感情」の役割：「拡張・形成理論」.
第16回子ども学会議（日本子ども学会学術集会），2019/10

仁木和久・内海緒香・緩利誠・富士原紀絵・岩野孝之
人間固有の学びの構造と機能を知り，学びと教え，教育の再構築を共にデザインしよう.
日本教育心理学会第61回総会，2019/9

仁木和久・内海緒香・緩利誠・富士原紀絵・岩野孝之
アクティブ・ラーニングの脳科学.
日本教育心理学会第61回総会，2019/9

仁木和久・緩利誠・内海緒香・岩野孝之・富士原紀絵・榊原洋一
“Active Learning on Brain” プロジェクト ～「アクティブ脳」を知り・活かす 脳認知科学プロジェクトの発足～.
第15回子ども学会議（日本子ども学会学術集会），2018/11

富士原紀絵
日本のカリキュラム実践史における教科横断型学習.
日本カリキュラム学会第30回大会 課題研究Ⅲ，2019/6

Niki, K., Yururi, M., Utsumi, S., Iwano, T., & Fujiwara, K.
Active Learning on Brain: Constructive, Motivational, Emotional, Goal-oriented and Self-Regulated Integrative Learning Theory.
Cognitive Neuroscience Conference 2019, 2019/3

仁木和久・緩利誠・内海緒香・岩野孝之・富士原紀絵・榊原洋一
情報処理の柔軟性と学習発達を支える脳アーキテクチャの多次元性.
第15回子ども学会議（日本子ども学会学術集会），2018/11

メディア掲載

（新聞）

2019年5月18日 『活字読む姿 子どもに好影響』（産経新聞 朝刊）

（ウェブ掲載）

2019年1月16日 『「読む」週刊で高まるカー学カテストの結果分析から』（新聞科学研究所）
<https://np-labo.com/archives/episode/201901kiji-02>

競争的資金

科学研究費基盤研究(C) 「1960 から 70 年代における日本の教育実践に関する基礎的研究」、
研究分担者、2013 年度-2016 年度

科学研究費基盤研究(B) 「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究（第 5 次）—就
学前環境と養育行動」、研究分担者、2015 年度-2017 年度

科学研究費基盤研究(B) 「青少年期から成人期への移行についての追跡的研究」、研究分担
者、2018 年度-2021 年度

科学研究費基盤研究(C) 「日本の戦後初期授業実践における「表現の指導」に関する基礎的研
究」、研究代表者、2020 年度-2022 年度

発達臨床支援研究部門 石丸 径一郎

所属／職位：基幹研究院・人間科学系・准教授

研究所在職期間／職名：2018年度-2021年度 研究員（発達臨床支援研究部門）

専門分野 臨床心理学、ジェンダー・セクシュアリティ

所属学会 GID(性同一性障害)学会（理事）、日本性科学会（幹事長）、日本心理学会、日本心理臨床学会、日本不妊カウンセリング学会

学会発表

石丸径一郎
構造化ディスカッショングループ 20 LGBTQと心理支援,
日本心理臨床学会第40回大会, 2021/9

庄司悠花・石丸径一郎・針間克己
自閉症スペクトラム障害と性別違和はどのように併存しているのか：当事者たちの「自分史」に注目して。
GID（性同一性障害）学会第21回研究大会, 2019/3

菰田敦子・石丸径一郎
MRKH ロキタンスキー症候群における心理的支援ニーズ。
日本心理学会第82回大会, 2018/9

庄司悠花・石丸径一郎
発達障害者に対して大学生が持つ態度の規定要因の検討—類似性の観点に注目して—。
日本心理学会第82回大会, 2018/9

森裕子・石丸径一郎
女子大学生の性別に関する認知と判断：男女平等主義志向性と自己・他者の行動評価に着目して。
日本心理学会第82回大会, 2018/9

競争的資金

科学研究費基盤研究(C) 「LGBTにまつわる困難・トラブルへの対応策集の作成」、研究代表者、2018年度-2022年度

人間発達基礎研究部門 大多和 直樹

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・准教授

研究所在職期間／職名：2019年度-2021年度 研究員

専門分野 教育社会学

所属学会 教育社会学会

学会発表

原清治・松浦善満・山内乾史・大多和直樹・小針誠・小林至道・浅田瞳・西谷雅史
ネットいじめの構造とその対策に関する実証的研究（VII）ーネットいじめの磁場を探るー。
日本教育社会学会第73回大会, 2021/9

原清治・松浦善満・山内乾史・大多和直樹・小針誠・小林至道・浅田瞳・西谷雅史
ネットいじめの構造とその対策に関する実証的研究（IV）。
日本教育社会学会第72回大会, 2020/9

原清治・浅田瞳・松浦善満・山内乾史・大多和直樹・小針誠・小林至道
中学生のリアル/ネットコミュニケーションの変化に関する実証的研究ーA中学校の悉皆調査の経年変化。
に注目してー。
日本教育社会学会第71回大会, 2019/12

メディア掲載

（新聞）

2020年5月24日 教育実週いつできる?（朝日新聞 朝刊） インタビュー

2020年8月12日 教育実習「なし」容認 質確保に課題も（朝日新聞 朝刊） インタビュー

競争的資金

- ・ 基盤研究(B)「ネットいじめの発生構造に関する日英比較研究ー大規模・同時調査による実態分析ー」、研究分担者、2019年度-2021年度
- ・ 基盤研究(C)「学びの生徒文化研究」、研究代表者、2021年度-2023年度

保育・教育実践研究部門 刑部 育子

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・准教授

研究所在職期間／職名：2016年度-2021年度 研究員

専門分野 保育学・幼児教育学・発達心理学

所属学会 日本教育心理学会, 日本発達心理学会, 日本教育工学会, 日本認知科学会,
日本保育学会, OMEP (世界幼児教育・保育機構), 日本家政学会, 共創学会
(理事)

学会発表

刑部育子・宮里暁美・内海緒香・糸原淳子・山崎寛恵
夕方の保育の探究—認定こども園における教育標準時間外のカリキュラムの検討を通して—.
日本保育学会第74回大会, 2021/5

内海緒香・宮里暁美・刑部育子・山崎寛恵・杉山沙旺美
夕方の保育の探究—認定こども園における教育標準時間外の保育に関する調査報告—.
日本保育学会第74回大会, 2021/5

山崎寛恵・刑部育子・内海緒香
認定こども園における「夕方の保育」の可能性(2) 3園の事例から.
日本保育学会第73回大会, 2020/5

佐木みどり・佐木彩水・野口紗生・齋藤亜矢・刑部育子
アートは幼児にとってどのような意味があるのか: 人・もの・こととのかかわりの視点から.
日本保育学会第73回大会, 2020/5

内海緒香・宮里暁美・刑部育子・山崎寛恵
認定こども園における「夕方の保育」の可能性: (1) アンケート調査の結果から.
日本保育学会第73回大会, 2020/5

Tsuchiya, K., Gyobu, I., Miyasato, A., Utsumi, S., & Yamazaki, H.
Exploration of STEAM framework through 'light table' with young children and teachers.
OMEP(Organisation Mondiale Pour l'Éducation Peéscolaire) Asia Pacific Regional Conference 2019, 2019/9

Utsumi, S., Miyasato, A., Gyobu, I., & Yamazaki, H.
Extracurricular hours in education and care: Toward the development of early childhood education and care center
curriculum that is open to the community and society.
OMEP(Organisation Mondiale Pour l'Éducation Peéscolaire) Asia Pacific Regional Conference 2019, 2019/9

Mori, M., Uemura, T., Gyobu, I., Sayeki, Y., Gunji, A., Fukuda, T., & Katagiri, R.
Listening the hundred languages of children is the key for transformation of practice in Japan.
EECERA The 28th Conference, 2018/8

Mori, M., Gyobu, I., & Uemura, T.
Quest for the Sustainable Nature of Early Childhood Education and Care: Having Dialogue between Loris Malaguzzi and Sozo Kurahashi through Focusing on the Images of Child.
70th OMEP World Assembly and International Conference, 2018/6

小沼律子・中司智朱希・刑部育子・岡本誠
「ミシンプロジェクト 2017」による参加型デザイン(1):羅生門的アプローチによるプロジェクトへの参加過程.
日本デザイン学会秋季企画大会, 2017/10

中司智朱希・小沼律子・岡本誠・刑部育子
「ミシンプロジェクト 2017」による参加型デザイン(2):子どもたちによるミシンを使った創作活動から.
日本デザイン学会秋季企画大会, 2017/10

Mori, M., Uemura, T., Gyobu, I., Sayeki, Y., & Gunji, A.
Expanding the Horizon of Pedagogy of Listening from the Japanese Perspectives: Having Dialogue with Philosophy and Practice of ECEC in Reggio Emilia.
EECERA 2017 Conference, 2017/8

Mori, M., Gyobu, I., Uemura, T., Gunji, A., & Sayeki, Y.
Ensuring Dialogue between Children and Materials for Children to Become Protagonists in Creating a Sustainable Future: Responding Reggio Emilia Approach.
69th OMEP World Assembly and International Conference, 2017/6

Mori, M., Uemura, T., Gyobu, I., Sayeki, Y., & Gunji, A.
Providing Young Children Rich Experience with Intelligent Materials as the Key for Developing Their Aesthetics and Creativity.
EECERA 2016 Conference, 2016/9

メディア掲載

(ウェブ掲載)

2019年6月 『お茶大こども園ラボ：幼児期の教育・保育探求プロジェクト開発』（未来の教室実証事業（経済産業省））
<https://www.learning-innovation.go.jp/verify/z0051/>

受賞

日本学術振興会 平成 29 年度科研費審査委員として表彰

競争的資金

科学研究費基盤研究(B) 「子どもの「アートの思考」を基盤にした保育の可能性に関する理論的実践的研究」、研究分担者、2014 年度–2017 年度

科学研究費基盤研究(C) 「ビデオツールを活用した保育者の暗黙知の可視化と集会的知の形成過程の分析」、研究代表者、2016 年度–2018 年度

科学研究費基盤研究(C) 「美術教育におけるアートの身体的論の構築」、研究分担者、2017 年度-2019 年度

科学研究費基盤研究(C) 「認定こども園教育・保育カリキュラムの開発：地域・社会に開かれた教育課程の視点から」、研究分担者、2018 年度-2020 年度

科学研究費基盤研究(C) 「戸外における幼児のアクティブな学びを記録するビデオツールの開発」、研究代表者、2019 年度-2021 年度

発達臨床支援研究部門 高橋 哲

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・准教授

研究所在職期間／職名：2020年度-2021年度 研究員

専門分野 臨床心理学

(非行・犯罪, 逸脱行動, 再犯リスクアセスメント, 自傷・他害, 嗜癖)

所属学会

日本心理臨床学会, 日本犯罪心理学会, 日本心理学会, 日本カウンセリング学会, 日本犯罪社会学会, 包括システムによるロールシャッハ学会, 日本リスク学会

学会発表

高橋哲

再犯リスクコミュニケーションに関する予備的検討
日本犯罪心理学会第59回大会, 2021/10

受賞

2018年9月24日 公益社団法人日本心理学会優秀論文賞

競争的資金

科学研究費若手研究 「再犯防止に向けた多職種連携のためのリスクコミュニケーション指針の策定」、研究代表者、2021年度-2025年度

発達臨床支援研究部門 山田 美穂

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・准教授

研究所在職期間／職名：2021年度 研究員

専門分野 臨床心理学

所属学会

日本心理臨床学会、日本ダンスセラピー協会、American Psychological Association

日本質的心理学会、日本人間性心理学会、American Dance Therapy Association

日本芸術療法学会

学会発表

山田美穂・橋本有子

ソマティック・エデュケーションを実践する教師の身体知：協働的インタビューとムービングTAEを用いた言語化の試み、

日本質的心理学会第18回大会, 2021/10

山田美穂・小松実知子

日本フォーカシング協会ダンス部～フラットとフォーカシング2～、

日本フォーカシング協会, 2021/6

競争的資金

科学研究費基盤C 「ICT・伝統楽器・動きを用いた重度重複障害児のための音楽教育
」、研究分担者、2018年度-2022年度

科学研究費基盤C 「知的障害をもつ成人への心理療法の研究―実態把握と方法の検討」、
2020年度-2022年度

保育・教育実践研究部門 武藤 世良

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・講師

研究所在職期間／職名：2018 年度-2020 年度 連携研究員
2021 年度 研究員

専門分野 教育心理学

所属学会 日本教育心理学会，日本感情心理学会，日本心理学会，国際感情学会（The International Society of Research on Emotion），日本発達心理学会（国際研究交流委員会 2018 年度委員（広報担当）・2019 年度委員長）

学会発表

武藤世良・白井真理子・中村真
心理学者は「情動」をいつから使い始めたのか？—J-STAGE を対象とした予備的検討—
日本感情心理学会第 29 回大会, 2021/10

武藤世良
子どもの尊敬と憧れを社会化する親の実践—偏相関ネットワークによる探索的検討—
日本教育心理学会第 62 回総会, 2020/9

白井真理子・武藤世良・中村真
日本感情心理学会員が考える「感情とは何か」(1) —感情=情動なのか—
日本感情心理学会第 28 回大会, 2020/6

武藤世良・白井真理子・中村真
日本感情心理学会員が考える「感情とは何か」(2) —ネットワーク分析の試み—
日本感情心理学会第 28 回大会, 2020/6

Sera Muto 2020 4・5 How the conceptualization of feelings can be a shortcut to the integration of the component process model and the psychological construction approach 2020 SAS (Society for Affective Science) Annual Conference 2020/4・5

武藤世良 2020 3 親は子どもの尊敬と憧れの感情表出をいかに知覚するか—テキストマイニングによる予備的検討— 日本発達心理学会第 31 回大会 2020/3

Muto, S.
Five trait respect-related emotions differentially predict happiness in Japanese people.
ISRE 2019: Conference of the International Society for Research on Emotion, 2019/7

菅原大地・武藤世良
特性尊敬関連感情と理想自己のレパトリーの関連。
日本感情心理学会第 27 回大会, 2019/6

武藤世良・白井真理子
感情の上位概念化に伴う個別感情の帰属問題—若手感情研究者を対象とした予備的検討—
日本感情心理学会第 26 回大会, 2018/11

武藤世良
特性尊敬関連感情尺度の修正版作成の試み.
日本心理学会第 82 回大会, 2018/9

受賞

- ・ 2017 年度 日本感情心理学会 精励発表賞 (2013,2014,2015,2016,2017 年度の発表)
- ・ 2021 年度 日本感情心理学会 第 29 回大会 (学習院女子大学: オンライン開催)
独創研究賞「心理学者は『情動』をいつから使い始めたのか? —J-STAGE を対象とした予備的検討—」(武藤 世良・白井 真理子・中村 真)

競争的資金

- 科学研究費若手研究(B) 「尊敬の 3 つのモードの発達過程と促進要因を探る—学校教師の役割に着目して—」、研究代表者、2017 年度-2020 年度
- 科学研究費基盤研究(B) 「全人的視座から情動知性を再考する: 情動特性・生活領域に応じた情動面の賢さとは?」、研究分担者、2017 年度-2021 年度
- 科学研究費若手研究 「現代日本における尊敬関連感情の教育的機能の特徴と独自性—日米比較による探究—」、研究代表者、2021 年度-2025 年度

実践活動

- お茶の水女子大学附属学校園との連携活動 (2018 年度-現在)
- 文部科学省研究開発学校運営指導委員、お茶の水女子大学附属小学校:
「てつがく創造活動」についての教育実践に関する連携活動 (2019 年度-現在)

人間発達基礎研究部門 齊藤 彩

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・助教

研究所在職期間／職名： 2021年度 研究員

専門分野 特別支援教育、インクルーシブ教育、教育心理学

所属学会

日本教育心理学会、日本パーソナリティ心理学会、日本特殊教育学会
日本特別ニーズ教育学会

学会発表

菅原ますみ・松本聡子・齊藤彩・吉武尚美
コロナ禍での大学生の精神的健康と小児期体験.
日本発達心理学会第33回大会, 2022/3

齊藤彩
大学生の発達障害特性とコロナ禍におけるメンタルヘルスに関する検討
日本特別ニーズ教育学会第27回研究大会, 2021/10

齊藤彩
通常学級に在籍する中学生の注意欠如・多動傾向および自尊感情と行為の問題との関連.
日本特殊教育学会第59回大会, 2021/9

齊藤彩・佐藤みのり
自閉スペクトラム症をもつ成人女性の子育てに関する質的検討—母親の語りからみる困難感と支援ニーズ—.
日本パーソナリティ心理学会第30回大会, 2021/9

佐藤みのり・竹山康代・齊藤彩
効果的な就労移行・就労定着支援システムに関する研究(1)—マナビトにおける支援の現状と課題—.
日本パーソナリティ心理学会第30回大会, 2021/9

白間綾・Andrew Stickley・中井昭夫・神尾陽子・高橋秀俊・齊藤彩・原口英之・熊崎博一・住吉太幹
発達性協調運動障害特性をもつ子どもの情緒と行動の問題—自閉的行動特性の影響—.
日本心理臨床学会第40回大会, 2021/9

齊藤彩・松本聡子・佐藤みのり・坂田侑奈・原口英之
親の自閉症的行動特性と養育における困難との関連.
日本教育心理学会第63回総会, 2021/8

佐藤みのり・齊藤彩
親のうつ病と子どもの精神的健康との関連：親の抑うつに対する子どもの認知およびケア行動に注目して.
日本教育心理学会第63回総会, 2021/8

受賞

2017年9月 日本パーソナリティ心理学会 2017年学会賞 受賞

受賞論文題目「齊藤彩・松本聡子・菅原ますみ（2016）児童期後期の不注意および多動性・衝動性と抑うつとの関連—養育要因と自尊感情に着目して— パーソナリティ研究, 25, 74-85.」

2018年8月 日本パーソナリティ心理学会第27回大会優秀大会発表賞 受賞

受賞発表題目「齊藤彩・原口英之・高橋秀俊・住吉太幹・神尾陽子（2018）就学前の自閉症的行動特性は10歳時の情緒・行動の問題を予測するか—地域コホート研究による縦断的検討—」

競争的資金

科学研究費若手研究 「親子双方の発達障害特性と親子関係および子どもの精神的健康との関連メカニズム」、研究代表者、2019年度-2021年度

科学研究費基盤研究（C） 「発達障害リスク児の幼児期からの発達軌跡に関するコホート研究」、研究分担者、2021年度-2023年度

科学研究費基盤研究（A） 「養育環境リスク要因の累積が人間発達に及ぼす長期的影響性と影響防御機序の解明」 研究分担者、2020年度-2022年度

外部資金（科学研究費以外）

公益財団法人前川財団 家庭・地域教育助成、「就学移行期の発達障害特性への気づきと支援が子どもの社会適応に及ぼす影響」、分担者、助成金交付日（2021年10月）～2022年7月31日（日）

発達臨床支援研究部門 砂川 芽吹

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・助教

研究所在職期間／職名：2021年度 研究員

専門分野 臨床心理学

所属学会

日本児童青年精神医学会、日本自閉症スペクトラム学会、日本心理臨床学会
日本発達心理学会、日本発達障害学会

学会発表

砂川芽吹発達障害者の「社会適応」に関する認識.
日本自閉症スペクトラム学会, 2021/8

受賞

2019年8月研究奨励賞 日本自閉症スペクトラム学会

2017年9月研究奨励賞特別賞 日本自閉症スペクトラム学会

競争的資金

科学研究費若手研究 「自閉スペクトラム症の成人女性の「社会適応」に関する臨床心理学的研究」、研究代表者、2019年度－2022年度

保育・教育実践研究部門 辻谷 真知子

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・助教

研究所在職期間／職名：2021年度 研究員

専門分野 保育学・幼児教育（規範、保育缶、観察、面接法、質問紙法）

所属学会

日本保育学会、日本乳幼児教育学会、国際幼児教育学会、日本発達心理学会、
日本教育心理学会、子ども環境学会、日本子ども学会

学会発表

辻谷真知子

規範に関する保育観（5）保育者が課題と感じる内容に着目して。
日本乳幼児教育学会第31回大会, 2021/12

内海緒香・宮里暁美・辻谷真知子・山下智子・内野公恵

生命とのつながりを育む移動動物園における保育の環境設定と子どもの学びの評価。
日本子ども学会, 2021/10

辻谷真知子・秋田喜代美・石田佳織・宮田まり子

未就学児保護者の近隣戸外環境活用に関する認識－大学キャンパスの入構制限に着目して－
国際幼児教育学会第42回大会, 2021/9

宮田まり子・秋田喜代美・石田佳織・辻谷真知子

保育所近隣にある大学構内の入構制限による影響－コロナ禍における都市部保育の実態調査から見えた構造的課題－
国際幼児教育学会第42回大会, 2021/9

辻谷真知子・秋田喜代美・石田佳織・宮田まり子・宮本雄太

3歳未満児の園庭での「危険を回避する力」を育てる取り組み。
日本赤ちゃん学会 第21回学術集会, 2021/6

受賞

- ・子ども環境学会 論文著作賞（2020年5月）：秋田喜代美・石田佳織・辻谷真知子・宮田まり子・宮本雄太著『園庭を豊かな育ちの場に－質向上のためのヒントと事例』 ひかりのくに
- ・子ども環境学会 優秀ポスター発表賞（2016年4月）：宮本 雄太・秋田 喜代美・杉本 貴代・辻谷 真知子・宮田 まり子, 「子どもの遊び観：幼児期・児童期の遊び場や遊びの機能に着目して」
- ・子ども環境学会 優秀ポスター発表賞（2018年4月）：宮本 雄太・秋田 喜代美・辻谷 真知子・宮田 まり子・石田 佳織, 「子どもの活動から捉える遊び場の機能の探求－保育に関与する者の役割・活動時間に着目して－」

競争的資金

科学研究費 研究活動スタート支援 「保育実践における規範に関する検討：園や保育者の保育観に着目して」、研究代表者、2021年-2022年

外部資金（科学研究費以外）

第一生命財団 「園における戸外・地域活用の実態と意識に関する調査研究:コロナ前後の変化に注目して」、分担者、2021年度

東京大学大学院教育学研究科発達保育実践政策学センター プロジェクト 「園庭・地域環境での保育／子どもの遊び観 研究プロジェクト」、分担者、2015年度-2021年度

保育・教育実践研究部門 松島 のり子

現所属／職位：基幹研究院・人間科学系・助教

研究所在職期間／職名：2017年度-2021年度 研究員

専門分野 保育・幼児教育

所属学会 日本保育学会，幼児教育史学会，教育史学会，日本教育学会，日本教育制度学会

学会発表

松島のり子

1963年「幼稚園と保育所との関係について（通知）」後の保育者養成.

日本保育学会第74回大会, 2021/5

松島のり子

「保育に欠ける」規定をめぐる解釈の変遷

日本保育学会第71回大会, 2018/5

Matsushima, N.

The relationship between kindergarten and day nursery in 1960's Japan.

OMEP (Organisation Mondiale Pour l'Éducation Peéscolaire) Asia Pacific Regional Conference 2019, 2019/9

受賞

一般社団法人日本保育学会第53回保育学文献賞受賞（2017年5月、文献：松島のり子『「保育」の戦後史——幼稚園・保育所の普及とその地域差』六花出版、2015年）

競争的資金

科学研究費若手研究 「1963年の通達「幼稚園と保育所との関係について」をめぐる保育制度・政策史研究」、研究代表者、2018年度-2021年度

保育・教育実践研究部門 内海 緒香

現所属／職位：人間発達教育科学研究所・特任講師

研究所在職期間／職名：2016年度-2021年度 同上

専門分野 発達教育心理学・子ども学（子ども環境学）

所属学会 日本教育心理学会，日本心理学会，日本発達心理学会，日本保育学会，
日本子ども学会，日本LD学会，OMEP（世界乳幼児教育・保育機構）

学会発表

宮里暁美・内海緒香

夕方の保育の探究—認定こども園における教育標準時間外のカリキュラムの検討を通して—全国調査の結果とAこども園の実践から—

日本乳幼児保育者養成学会第2回大会，2021/12

内海緒香・宮里暁美・辻谷真知子・山下智子・内野公恵

生命とのつながりを育む移動動物園における保育の環境設定と子どもの学びの評価。

日本子ども学会，2021/10

内海緒香

幼小接続期における親のモニタリング/保育者の見守りと子どもの自己制御・非認知能力との関連。

日本心理学会第85回大会，2021/9

刑部育子・宮里暁美・内海緒香・糸原淳子・山崎寛恵

夕方の保育の探究—認定こども園における教育標準時間外のカリキュラムの検討を通して—

日本保育学会第74回大会，2021/5

内海緒香・宮里暁美・刑部育子・山崎寛恵・杉山沙旺美

夕方の保育の探究—認定こども園における教育標準時間外の保育に関する調査報告—

日本保育学会第74回大会，2021/5

仁木和久・緩利誠・内海緒香・岩野孝之・安藤寿康

「学びの行為」を支える Enactive Brain を知り、学びと自己成長、そして教育を考える。

日本子ども学会第17回大会サテライトポスターセッション，2021/2

内海緒香

幼児期の肯定的な養育と自己制御との関

連-交差時差モデルの検討 日本心理学会第84回大会 2020/9

岡上直子・宮本友弘・山崎佳世・宮里暁美・内海緒香・黒澤聡子・湯川秀樹・山下文一

改訂要領・指針で、保育はどのように変わったか—保育の質向上への具体的方策を探る— 話題提供

「3. 実施状況調査の結果から（1）：質問紙調査」。

日本保育学会第73回大会，2020/5。

山崎寛恵・刑部育子・内海緒香

認定こども園における「夕方の保育」の可能性（2）3園の事例から。

日本保育学会第73回大会，2020/5。

内海緒香・宮里暁美・刑部育子・山崎寛恵

認定こども園における「夕方の保育」の可能性: (1) アンケート調査の結果から.
日本保育学会第 73 回大会, 2020/5

仁木和久・緩利誠・内海緒香・岩野孝之・富士原紀絵

アクティブ・ラーニングにおける「ポジティブ感情」の役割: 「拡張・形成理論」.
第 16 回子ども学会議 (日本子ども学会学術集会), 2019/10

仁木和久・安藤寿康・内海緒香

アクティブ・ラーニングを支える脳を知り、子どもの学びと成長に活かそう!

話題提供「アートや創造性とアクティブ・ラーニングの関係」.

第 16 回子ども学会議 (日本子ども学会学術集会), 2019/10

Utsumi, S., Miyasato, A., Gyobu, I. & Yamazaki, H.

Extracurricular hours in education and care: Toward the development of early childhood education and care center curriculum that is open to the community and society.

OMEPA Asia Pacific Regional Conference 2019, 2019/9

Tsuchiya, K., Gyobu, I., Miyasato, A., Utsumi, S., & Yamazaki, H.

Exploration of STEAM framework through 'light table' with young children and teachers.

OMEPA Asia Pacific Regional Conference 2019, 2019/9

仁木和久・内海緒香・緩利誠・富士原紀絵・岩野孝之

アクティブ・ラーニングの脳科学.

日本教育心理学会第 61 回総会, 2019/9

仁木和久・内海緒香・緩利誠・富士原紀絵

アクティブ・ラーニングの脳科学と教育実践への架橋を目指して.

話題提供「就学前教育の最前線: STEM から STEAM へ」.

日本教育心理学会第 61 回総会, 2019/9

内海緒香

幼小接続期における教師のモニタリング: 「見守り」と関連する行動の内容分析.

日本教育心理学会第 61 回総会, 2019/9

浜口順子・内海緒香

生涯学習モデルとしての保育現職研修の試み.

日本保育学会第 72 回大会, 2019/5

内海緒香

幼児教育保育と家庭における「見守り」一多義性と多様性.

日本保育学会第 72 回大会, 2019/5

内海緒香

幼児期の養育と Cool/Hot 実行機能との関連: 自己決定理論を媒介としたモデルの検討.

日本発達心理学会第 30 回大会, 2019/3

Putnam S., Alexander A., Zweig A., Ellis A., Lipina S., Ruetti E., Segretin M., Castillo K., Ison M., Greco C., Jensen L., Conte E., Akhter S., Urbain-Gauthier N., Gillet S., Galdiolo S., Roskam I., Warreyn P., Loop L., ... Utsumi S., ... Olazabal, D. et. al.

Cultural influences on temperament development: Findings from the Global Temperament Project.

The 2019 SRCD Biennial Meeting, Baltimore, 2019/3

Niki, K., Yururi, M., Utsumi, S., Iwano, T., & Fujiwara, K.

Active Learning on Brain: Constructive, Motivational, Emotional, Goal-oriented and Self-Regulated Integrative Learning Theory.

Cognitive Neuroscience Conference 2019, 2019/3

内海緒香・宮里暁美・仁木和久・森永路子・川辺尚子

反省的実践家としての保育者の対話と省察: 認定こども園園内研究会の記録から.

第 15 回子ども学会議（日本子ども学会学術集会），2018/11

仁木和久・緩利誠・内海緒香・岩野孝之・富士原紀絵・榊原洋一
"Active Learning on Brain" プロジェクト ～「アクティブ脳」を知り・活かす 脳認知科学プロジェクトの発足～.

第 15 回子ども学会議（日本子ども学会学術集会），2018/11

仁木和久・緩利誠・内海緒香・岩野孝之・富士原紀絵・榊原洋一
情報処理の柔軟性と学習発達を支える脳アーキテクチャの多次元性.
第 15 回子ども学会議（日本子ども学会学術集会），2018/11

内海緒香
幼児期の父親と母親の育児不安に関連する個人・家庭・園要因の検討.
日本教育心理学会第 60 回総会, 2018/9

内海緒香
保育の場におけるモニタリング みまもり尺度の開発.
日本発達心理学会第 29 回大会, 2018/3

内海緒香
母親のパーソナリティ、養育と幼児の気質との関連—子どもの困難度に焦点を当てて—.
日本教育心理学会第 59 回総会, 2017/10

内海緒香
幼児期のエフォートフル・コントロールに関する考察：保育実践への発展.
第 14 回子ども学会議（日本子ども学会学術集会），2017/10

仁木和久・緩利誠・内海緒香・榊原洋一・岩野孝之
人間固有の「能動的・主体的学び」を支える脳構造&機能とその生涯にわたる発達～生涯にわたるアクティブ・ラーニング「AO を反映した脳発達～」.
第 14 回子ども学会議（日本子ども学会学術集会），2017/10

内海緒香
保育の場におけるモニタリング —幼稚園教師の配慮に関する内容分析—.
保育学会第 70 回大会, 2017/5

宮里暁美・内海緒香・私市和子・森永路子・石塚美穂子・三浦ゆり・大森杏菜・田島大輔・内野公恵・古賀琢也・根津美英子・鈴木直江・川口耕平・久保文香
発達の連続性に根ざした保育の在り方についての検討（1）～こども園における 2 歳児・3 歳児の姿から～.
保育学会第 70 回大会, 2017/5

内海緒香
エフォートフル・コントロールの測定—4・5 歳児を対象として—.
日本発達心理学会第 28 回大会, 2017/3

内海緒香
健康/安全を守る環境としての幼児期のモニタリングに関する保育実践活動.
第 13 回子ども学会議（日本子ども学会学術集会），2016/10

Utsumi, S.
Preschool teachers' practices of monitoring children to prevent health risks and facilitate adaptation: Multi-method triangulation in a qualitative study.
The 31st International congress of psychology (ICP2016), 2016/7

メディア掲載

(ウェブ掲載)

2019年6月 『お茶大こども園ラボ：幼児期の教育・保育探求プロジェクト開発』（未来の教室実証事業（経済産業省））
<https://www.learning-innovation.go.jp/verify/z0051/>

競争的資金

科学研究費基盤研究(C) 「幼児期の自律的自己制御への動機づけを育む養育者と保育者のモニタリング」、研究代表者、2015年度-2018年度

科学研究費挑戦的研究（開拓） 「生涯に渡り変化するアクティブ・ラーニングの脳認知科学アプローチによる学習理論研究」、研究分担者、2018年度-2021年度

科学研究費基盤研究(C) 「認定こども園教育・保育カリキュラムの開発：地域・社会に開かれた教育課程の視点から」、研究分担者、2018年度-2020年度

科学研究費基盤研究(C) 「幼小接続期における自己制御を育む養育者と保育者のモニタリング」、研究代表者、2018年度-2020年度

保育・教育実践研究部門 山岸 由紀

現所属／職位：お茶の水女子大学 学校教育研究部 特任准教授

研究所在職期間／職名：2018年度-2021年度 連携研究員

専門分野 キャリア教育、キャリアカウンセリング、キャリアカウンセラー教育

所属学会 日本キャリアデザイン学会, 日本産業組織心理学会, 日本カウンセリング学会

学会発表

山岸由紀・藤原健志・大川一郎・吉田裕亮・溝口恵・朝倉彬・藤生英行・熊田亘・河野雅昭
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は高校生の進路意識にどのような変化をもたらしたのか(1).
日本発達心理学会第32回大会, 2021/3

藤原健志・山岸由紀・大川一郎・藤生英行・熊田亘・河野雅昭・吉田裕亮・溝口恵・朝倉彬
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は高校生の進路意識にどのような変化をもたらしたのか(2).
日本発達心理学会第32回大会, 2021/3

実践活動

学校間連携による高校キャリア教育プログラムの開発と実践

高大連携による高校キャリア教育プログラムの開発と実践

高校におけるキャリア教育効果測定尺度の開発

大学におけるインターンシップ並びにキャリア教育の推進と指導プログラムの開発

大学院博士後期課程学生に対するキャリア教育・キャリア支援

キャリアコンサルタントの養成

保育・教育実践研究部門 岡田 了祐

現所属／職位：教学 | R・教育開発・学修支援センター 講師

研究所在職期間／職名：2018 年度-2021 年度 連携研究員

専門分野 教科教育学，社会科教育学

所属学会 全国社会科教育学会，日本社会科教育学会，社会系教科教育学会，日本教科教育学会，日本教育方法学会，教育目標・評価学会，中国四国教育学会，日本教育実践学会，日本学校教育学会，日本教科内容学会，社会科の初志をつらぬく会，The international Social Studies Association，日本生活科・総合的学習教育学会，日本カリキュラム学会

学会発表

梅澤真一・岡田泰孝・坂井清隆・粕谷昌良・岡田了祐・水山光春
社会科で論争問題を話題にする意味－「当事者性」の視点から考える－。
価値判断力・意思決定力を育成する社会科授業研究会，2021/8

梅澤真一・岡田泰孝・坂井清隆・粕谷昌良・岡田了祐・水山光春
社会科における「学びに向かう力，人間性」とは。
価値判断力・意思決定力を育成する社会科授業研究会，2020/10

堀田諭・岡田了祐
コンピテンシー時代における評価研究の拡張に関する基礎的研究－J・レイヴンのコンピテンシ論を手がかりとして－。
全国社会科教育学会第 68 回全国研究大会，2019/11

岡田泰孝・梅澤真一・坂井清隆・岡田了祐・水山光春
小学校社会科において市民の育成はいかに具現化されるのか－価値判断・意思決定学習の意義と可能性－。
全国社会科教育学会第 68 回全国研究大会，2019/11

岡田了祐・白井克尚・村井大介・渡邊巧
社会科に関わる民間教育団体はいかに生活科の成立に向き合ったのか－団体刊行物から捉えるもう一つの生活科成立史－。
日本教科教育学会第 45 回全国大会，2019/10

岡田了祐・福井駿
お茶の水女子大学附属小学校の学校設定教科「てつがく」はどのように実践されているのか－カリキュラムにおける役割に注目して－。
日本教育方法学会第 55 回大会，2019/9

渡邊巧・阪上弘彬・大坂遊・岡田了祐
空間認識形成を通じたシティズンシップの育成はどのように論じられてきたか－日本の初等・中等教育における研究のメタ分析－。
日本教育方法学会第 55 回大会，2019/9

渡部竜也・角田将士・岡田了祐
「本質的な問い」「逆向き設計」を活かして社会科授業を変えるにはどうすれば良いのか－社会科教育学の視点からの議論－。

日本教育方法学会第 55 回大会, 2019/9

Watanabe, T., Sakaue, H., Osaka, Y., & Okada, R.
The Characteristics of Spatial and Geographical Perspectives in Japanese Primary Education : Focused on the National Curriculum “Social Studies” and Educators’ Thoughts.
The 2019 EUROGEO Annual Meeting and Conference, 2019/3

阪上弘彬・渡邊巧・大坂遊・岡田了祐
空間的・地理的見方・考え方の育成を中心とした市民性教育－欧米地理教育界の潮流「Spatial Citizenship Education」に注目して－.
社会系教科教育学会第 30 回研究発表大会. 2019/2

渡邊巧・白井克尚・村井大介・岡田了祐
社会科の専門家たちは、いかに生活科教育論の構想に取り組んできたのか－成立期における議論とその構造に注目して－.
社会系教科教育学会第 30 回研究発表大会, 2019/2

渡邊巧・岡田了祐・白井克尚・村井大介
中野重人はいかに生活科の構想・発展に取り組んできたのか－生活科教育の具体化とその過程－.
初等教育カリキュラム学会第 3 回大会. 2019/1

渡邊巧・白井克尚・村井大介・岡田了祐・永田忠道
社会科の専門家たちは、いかに生活科の構想・発展に取り組んできたのか－各地域における授業論の語りと実際より－.
全国社会科教育学会第 67 回全国研究大会, 2018/10

渡邊巧・白井克尚・村井大介・岡田了祐
生活科カリキュラムにおける教科論の変容とその社会的背景－子どもの生活環境としての「家庭」に注目して－.
日本教科教育学会第 44 回全国大会, 2018/9

渡邊巧・白井克尚・村井大介・岡田了祐
生活科カリキュラムにおける教科論の変容とその社会的背景－子どもの生活環境としての「家庭」に注目して－.
日本教科教育学会第 44 回全国大会. 2018/9

競争的資金

科学研究費基盤研究(C) 「小学校生活科・社会科における空間認識形成の実態調査と指導方略のモデル化」、研究分担者、2019 年度-2021 年度

科学研究費基盤研究(C) 「外国につながる多言語多文化の子どもたちの教育を担う教師教育プログラムの開発」、研究分担者、2017 年度-2021 年度

科学研究費基盤研究(C) 「教員養成における教育実習・教職体験的学習の位置づけ－日韓比較教育史の視点から－」、研究分担者、2020 年度-2023 年度

科学研究費基盤研究(A) 「学校シティズンシップ教育の社会的教育効果の国際比較調査研究」、研究分担者、2017 年度-2022 年度

科学研究費若手研究 「幼児教育と低学年教育（生活科）の評価に関する調査研究：評価による幼小接続に向けて」、研究代表者、2021 年度-2023 年度

外部資金（科学研究費以外）

2020 年度全国社会科教育学会研究推進プロジェクト 「公共圏参入場面における子どもの個の
関心・価値観の折り合わせに関する教育研究－小学校低学年を事例として－」、構成員、
2020 年度-2021 年度

人間発達基礎研究部門 客員教授 神尾 陽子

現所属／職位：一般社団法人 発達障害専門センター 代表理事

研究所在職期間／職名：2017 年度-2021 年度 客員教授

専門分野 児童青年精神医学、発達障害

所属学会 International Society for Autism Research: IMSAR)学会誌(Autism Research) (編集委員), 日本精神神経学会 (精神医学研究推進委員会 委員), 日本発達障害学会 (理事、常任編集委員), 日本自閉症スペクトラム学会 (理事、研究奨励賞・実践研究賞選考委員), 日本生物学的精神医学会 (評議員), 日本小児連絡協議会 (日本小児保健協会, 日本小児科学会, 日本小児科医会, 日本小児科関連学会協議会: 四者協) (発達障害への対応委員会委員), 日本行為依存症医学会 (アドバイザー), 日本精神保健・予防学会 (評議員)

学会発表

白間綾・Andrew Stickley・中井昭夫・神尾陽子・高橋秀俊・齊藤彩・原口英之・熊崎博一・住吉太幹
発達性協調運動障害特性をもつ子どもの情緒と行動の問題－自閉的行動特性の影響－。
日本心理臨床学会第 40 回大会, 2021/9

神尾陽子・岡塚哉・中島洋子
不安を伴う自閉スペクトラム症児に対する集団認知行動療法プログラムの有用性の検討。
第 115 回日本精神神経学会学術総会, 2019/6

Noriuchi, M., Kikuchi, Y., & Kamio, Y.
The orbitofrontal cortex modulates parenting stress in human maternal brain.
International Behavioral Neuroscience Society 28th Annual Meeting, 2019/6

Ishikawa, S., Kishida, K., Oka, T., Saito, A., Shimotsu, S., Watanabe, N., Sasamori, H., & Kamio, Y.
Accessibility and feasibility of the Universal Unified Prevention Program for Diverse Disorders (Up2-D2): A transdiagnostic application for children in school.
Australian Association for Cognitive and Behaviour Therapy 39th National Conference, 2018/10

齊藤彩・原口英之・高橋秀俊・住吉太幹・神尾陽子
就学前の自閉症的行動特性は 10 歳時の情緒・行動の問題を予測するかー地域コホート研究による縦断的検討ー。
日本パーソナリティ心理学会第 27 回大会, 2018/8

高橋秀俊・上野佳奈子・渡邊真之佑・中村亨・山本義春・神尾陽子
室内音環境が子どものメンタルヘルスに与える影響。
こども環境学会 2018 年大会, 2018/5

岡塚哉・石川信一・渡辺範雄・笹森洋樹・桑原千明・山口穂菜美・齊藤彩・近藤和樹・丸尾和司・神尾陽子
小学校通常級におけるメンタルヘルス予防プログラムの有用性に関する研究。
第 10 回日本不安症学会学術大会, 2018/3

市川寛子・岡田真人・山口真美・金沢創・神尾陽子
一般学童における対人応答性尺度 (SRS) と子どもの強さと困難さアンケート (SDQ) の正準相関。

日本心理学会第 81 回大会, 2017/9

竹森啓子・下津咲絵・石川信一・神尾陽子
子どものメンタルヘルスの問題に対する態度質問紙の作成.
日本心理学会第 81 回大会, 2017/9

齊藤彩・Stickley Andrew・原口英之・高橋秀俊・石飛信・神尾陽子
就学前の自閉症的行動特性と就学後の情緒・行動の問題との関連.
日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会, 2017/9

Noriuchi, M., Mori, K., Kamio, Y., & Kikuchi, Y
Maternal Brain and Parenting Stress.
International Behavioral Neuroscience Society 26th Annual Meeting, 2017/6

高橋秀俊・軍司敦子・金子裕・廣永成人・萩原鋼一・稲垣真澄・飛松省三・花川隆・神尾陽子
自閉症スペクトラム障害の聴覚誘発脳磁界反応の高周波振動について.
第 59 回日本小児神経学会学術集会, 2017/6

高橋秀俊・神尾陽子
障害者職業能力開発校における精神科医の役割：地域・多職種との連携を中心に.
第 113 回日本精神神経学会学術総会, 2017/6

Takahashi, H., Nakamura, T., Kim, J., Kikuchi, H., Nakahachi, T., Ishitobi, M., Yoshiuchi, K., Ando, T., Stickley, A., Yamamoto, Y., & Kamio, Y.
The Relation between Locomotor Dynamics and the Acoustic Startle Response and Its Modulation in Children with Typical Development and Those with Autism Spectrum Disorders.
International Meeting for Autism Research Annual Meeting of the International Society for Autism Research (IMSAR), 2017/5

Haraguchi, H., Inoue, M., Noro, M., Stickley, M., Miyake, A., & Kamio, Y.
Outcomes of a low-intensity early behavioral intervention among Japanese preschoolers with autism spectrum disorders: A 1-year follow-up.
International Meeting for Autism Research Annual Meeting of the International Society for Autism Research (IMSAR), 2017/5

Takahashi, H., Gunji, A., Kaneko, Y., Hironaga, N., Hagiwara, K., Inagaki, M., Tobimatsu, S., Hanakawa, T., & Kamio, Y.
Atypical auditory steady-state gamma responses of MEG in children with autism spectrum disorders.
Biomagnetic Sendai 2017, 2017/5

神尾陽子
学校での心の健康対策に児童精神医学ができること.
第 5 回 JASCAP-C 総会, 2017/4.

メディア掲載

(ウェブ掲載)

- 2018 年 8 月 29 日 『ゲーム依存を「病気」とする根拠はまだ不十分. 安易な決めつけは厳禁、不登校問題の歴史に学ぼう』 (WEBRONZA)
<https://webronza.asahi.com/science/articles/2018082700009.html>
- 2020 年 4 月 28 日 第 1 回 「自閉症」ってなんだろう
(ナショナルジオグラフィック日本版 Web 版)
<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/web/19/042000014/042100002/>
- 2020 年 4 月 29 日 第 2 回 これほど違う自閉症の現れ方、3 歳男児と 4 歳女児の例

- (ナショナルジオグラフィック日本版 Web 版)
<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/web/19/042000014/042100003/>
- 2020年4月30日 第3回 病院の外で見つけた自閉スペクトラム症への「最適な取り組み」
 (ナショナルジオグラフィック日本版 Web 版)
<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/web/19/042000014/>
- 2020年5月1日 第4回 自閉症の特性はみんなにあると示した画期的な研究
 (ナショナルジオグラフィック日本版 Web 版)
<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/web/19/042000014/042200005/?P=3>
- 2020年5月2日 第5回 自閉スペクトラム症の早期支援が大切な理由
 (ナショナルジオグラフィック日本版 Web 版)
https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/web/19/042000014/042300006/?ST=m_m_lab
- 2020年5月3日 第6回 自閉スペクトラム症を「愛着」の問題で済ませてはいけない
 (ナショナルジオグラフィック日本版 Web 版)
<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/web/19/042000014/042300007/>
- 2020年6月30日 「新型コロナウイルス後の世界」公開対談(神尾陽子 vs. 渡辺美代子日本学術会議副会長)「新型コロナウイルス感染拡大で顕在化してきたメンタルヘルスの課題：収束期そして収束後に向けて」
 (日本学術会議 「未来からの問い」特設 HP)
<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/tenbou2020/after-corona.html>

(テレビ)

競争的資金

- 科学研究費基盤研究(B) 「小学校通常学級におけるメンタルヘルス予防プログラムの有効性に関する研究」、研究代表者、2015年度-2017年度
- 科学研究費挑戦的萌芽研究 「聴覚環境と聴覚情報処理特性が自閉症スペクトラム児の学校メンタルヘルスに及ぼす影響」、分担研究者、2015年度-2017年度
- 科学研究費基盤研究(A) 「サルと自閉症児を対象とした援助行動の生物学的・進化的要因解明に関する実験的研究」、研究分担者、2016年度-2019年度
- 科学研究費基盤研究(C) 「通常学級に在籍する発達障がいのある小学生への健康支援プログラム開発」、研究分担者、2017年度-2019年度
- 科学研究費基盤研究(C) 「発達障害リスク児の幼児期からの発達軌跡に関するコホート研究」、研究代表者、2021年度-2023年度

保育・教育実践研究部門 客員研究員 宮里 暁美

現所属／職位：お茶の水女子大学 アカデミックプロダクション・教授

研究所在職期間／職名：2016 年度-2020 年度 人間発達教育科学研究所 教授

文京区立お茶の水女子大学こども園園長

2021 年度 人間発達教育科学研究所 客員研究員

専門分野：保育学

所属学会：日本保育学会

学会発表：

内海緒香・宮里暁美・辻谷真知子・山下智子・内野公恵
生命とのつながりを育む移動動物園における保育の環境設定と子どもの学びの評価。
日本子ども学会, 2021/10

刑部育子・宮里暁美・内海緒香・糸原淳子・山崎寛恵
夕方の保育の探究—認定こども園における教育標準時間外のカリキュラムの検討を通して—。
日本保育学会第 74 回大会, 2021/5

内海緒香・宮里暁美・刑部育子・山崎寛恵・杉山沙旺美
夕方の保育の探究—認定こども園における教育標準時間外の保育に関する調査報告—。
日本保育学会第 74 回大会, 2021/5

宮里暁美・内海緒香
夕方の保育の探究—認定こども園における教育標準時間外のカリキュラムの検討を通して—全国調査の結果と A こども園の実践から—。
日本乳幼児保育者養成学会第 2 回大会, 2021/12

大森杏菜・宮里暁美
子どもとともに作る保育～いちょう会議プロジェクト～。
日本保育学会第 73 回大会, 2020/5

宮里暁美・鮫島良一・宮里耕太・伊藤幸子・西山萌・志知紗矢香・古川史子・星野愛
「創る」が身近にある保育環境の意味を探る (1)～「創る」は保育に何をもたらすのか～。
日本保育学会第 73 回大会, 2020/5.

内海緒香・宮里暁美・岡上直子・宮本友弘・山崎佳世・宮里暁美・内海緒香・黒澤聡子・湯川秀樹・山下文一
改訂要領・指針で、保育はどのように変わったか—保育の質向上への具体的方策を探る— 話題提供
「3. 実施状況調査の結果から (1): 質問紙調査」。
日本保育学会第 73 回大会, 2020/5.

内海緒香・宮里暁美・刑部育子・山崎寛恵
認定こども園における「夕方の保育」の可能性: (1) アンケート調査の結果から。
日本保育学会第 73 回大会, 2020/5.

Tsuchiya, K., Gyobu, I., Miyasato, A., Utsumi, S., & Yamazaki, H.
Exploration of STEAM framework through 'light table' with young children and teachers.

OMEP(Organisation Mondiale Pour l'Éducation Peéscolaire) Asia Pacific Regional Conference 2019, 2019/9

Utsumi, S., Miyasato, A., Gyobu, I., & Yamazaki, H.

Extracurricular hours in education and care: Toward the development of early childhood education and care center curriculum that is open to the community and society.

OMEP(Organisation Mondiale Pour l'Éducation Peéscolaire) Asia Pacific Regional Conference 2019, 2019/9

杉浦真紀子・上坂元絵里・新倉理沙・菊地知子・中澤智子・丹羽瞳・七里彼愛・星野愛・宮里暁美
保育をめぐる・保育がめぐる－3施設が共にある環境をいかして
日本保育学会第72回大会, 2019/5

内海緒香・宮里暁美・仁木和久・森永路子・川辺尚子
反省的実践家としての保育者の対話と省察：認定こども園園内研究会の記録から。
第15回子ども学会議（日本子ども学会学術集会）, 2018/11

宮里暁美・川辺尚子
保育者のわかる・かわるにつながる研修の提案1.
日本保育学会第71回大会, 2018/5

川辺尚子・宮里暁美
保育者のわかる・かわるにつながる研修の提案2.
日本保育学会第71回大会, 2018/5

村松直人・木内玲子・久保文香・川口耕平・志知沙耶香・三浦ゆり・内野公恵・宮里暁美
発達の連続性に根ざした保育の在り方についての検討（3）～こども園における2歳児・3歳児の保育実践から～。
日本保育学会第71回大会, 2018/5

宮里暁美・内海緒香・私市和子・森永路子・石塚美穂子・三浦ゆり・大森杏葉・田島大輔・内野公恵・古賀琢也・根津美英子・鈴木直江・川口耕平・久保文香
発達の連続性に根ざした保育の在り方についての検討（1）～こども園における2歳児・3歳児の姿から～。
日本保育学会第70回大会, 2017/5

田島大輔・私市和子・森永路子・石塚美穂子・三浦ゆり・大森杏葉・内野公恵・古賀琢也・根津美英子・鈴木直江・川口耕平・久保文香・宮里暁美
発達の連続性に根ざした保育の在り方についての検討（2）～こども園における2歳児・3歳児の姿から～。
日本保育学会第70回大会, 2017/5

宮里暁美・内海緒香・私市和子・森永路子・石塚美穂子・三浦ゆり・大森杏葉・田島大輔・内野公恵・古賀琢也・根津美英子・鈴木直江・川口耕平・久保文香
発達の連続性に根ざした保育の在り方についての検討(1)―こども園における2歳児・3歳児の姿から―。
日本保育学会第70回大会, 2017/5

副島里美・宮里暁美・芳賀高洋
保育現場におけるドキュメンテーション作成に対する保育者の意識検討。
日本保育学会第70回大会, 2017/5

川口耕平・田島大輔・私市和子・森永路子・石塚美穂子・三浦ゆり・大森杏葉・内野公恵・古賀琢也・根津美英子・鈴木直江・久保文香・宮里暁美
発達の連続性に根ざした保育の在り方についての検討(2)―こども園における2歳児・3歳児の姿から―。
日本保育学会第70回大会, 2017/5

メディア掲載

(ウェブ掲載)

2019年6月 『お茶大こども園ラボ：幼児期の教育・保育探求プロジェクト開発』（未来の教室実証事業（経済産業省））
<https://www.learning-innovation.go.jp/verify/z0051/>

(テレビ)

2020年10月8日 NHK Eテレ「まいにちすくすく」
ゆったりワクワク散歩にでよう（4）散歩の困りごと

2020年10月7日 NHK Eテレ「まいにちすくすく」
ゆったりワクワク散歩にでよう（3）パパと一緒に散歩

2020年10月6日 NHK Eテレ「まいにちすくすく」
ゆったりワクワク散歩にでよう（2）3歳児の散歩

2020年10月5日 NHK Eテレ「まいにちすくすく」
ゆったりワクワク散歩にでよう（1）1歳児の散歩

2020年9月3日 NHK Eテレ「まいにちすくすく」
どう答える？子どもからの質問（4）あかちゃんはどこからくるの？

2020年9月2日 NHK Eテレ「まいにちすくすく」
どう答える？子どもからの質問（3）ニュースや事件

2020年8月31日 NHK Eテレ「まいにちすくすく」
どう答える？子どもからの質問（1）素朴な質問

2018年3月9日 NHK Eテレ「すくすく子育て」
幼児期の終わりまでに育ててほしい姿 ～親はどう関わるか～

競争的資金

科学研究費基盤研究(C) 「認定こども園教育・保育カリキュラムの開発：地域・社会に開かれた教育課程の視点から」、研究代表者、2018年度-2020年度

人間発達基礎研究部門 客員研究員 西村 直之

現所属／職位：医療法人 卯の会 新垣病院 医師

研究所在職期間／職名：2018 年度-2021 年度 客員研究員

専門分野 精神医療・精神保健福祉・依存関連問題・嗜癖行動・レスポンシブル・ギャンブリ
ング

所属学会 日本精神神経学会, 日本社会病理学会

学会発表

Nishimura, N.

RG in Japan: An Opportunity to Set New Standards.

RGC's Discovery conference 2019, 2019/5.

Nishimura, N.

Current Problem Gambling Countermeasures and Responsible Gaming Dissemination Issues in Japan. (Special Topics in the Burgeoning Japanese Market)

The 17th International Conference on Gambling & Risk Taking, 2019/5.

メディア掲載

(新聞)

2020 年 11 月 17 日 依存症対策官民協働を (長崎新聞) 講演主旨 (記者：堂下康一)

2020 年 11 月 17 日 好循環する設計肝に (長崎新聞) 講演主旨 (記者：堂下康一)

実践活動

(臨床診療)

医療法人卯の会新垣病院 精神科にて診療

(電話相談・対面相談システム作製)

認定 NPO 法人リカバリーサポート・ネットワーク (代表理事)

遊技業界従事者の電話相談研修プログラムの作成・提供

パチンコ・パチスロ依存問題の啓発リーフレットの作成と配布

遊技業界従業員の依存問題研修プログラムの作成

(ギャンブル等依存症対策のモデルづくり)

一般社団法人日本 SRG 協議会 (代表理事)

レスポンシブル。ギャンブリング (RG) 概念の理解促進のための啓発事業

大阪府市ギャンブル等依存症対策研究会 委員
公営競技ギャンブル依存症カウンセリングセンター 相談員スーパーバイザ

(多様な依存問題の支援ネットワークの構築)
龍谷大学矯正・保護研究センター研究員
ATA-ネット 研究員 (ギャンブルユニット担当)

(当事者活動支援)
認定 NPO 法人ワンダーポート理事
沖縄ダルク理事

(調査・研究活動)
(公財) 日工組社会安全研究財団パチンコ依存問題研究会研究員
公立諏訪東京理科大学客員教授

保育・教育実践研究部門 研究協力員 菊地 知子

現所属／職位：お茶の水女子大学 いずみナーサリー 主任保育士

研究所在職期間／職位：2016 年度-2021 年度 研究協力員

専門分野 乳児保育・子育て支援・こども文化・絵本人間学

所属学会 日本保育学会・日本教育学会・絵本学会・こども環境学会・乳幼児精神保健学会
OMEP(世界幼児教育保育機構)

学会発表

Yahagi, Y., Kikuchi, T., & Shizui, K.

A study on the diversities and sustainability of the child-rearing practice in Japan.

2019OMEPAPR, 2019/9

菊地知子・中澤智子・濱崎由紀子・丹羽瞳・森義仁

語り合うように書き合う保育.

日本保育学会 2019 年大会. 2019/5

矢萩恭子・菊地知子・濱崎由紀子

被災地における日常性回復の営み—保育再生の契機としての保育士派遣—.

日本保育学会 2019 年大会. 2019/5

杉浦真紀子・上坂元絵里・新倉理沙・菊地知子・中澤智子・丹羽瞳・七里彼愛・星野愛・宮里暁美

保育をめぐる・保育がめぐる—3施設が共にある環境をいかして.

日本保育学会 2019 年大会. 2019/5

矢萩恭子・菊地知子・濱崎由紀子

被災地における日常性回復の営み—保育再生の契機としての保育士派遣—.

日本保育学会 2019 年大会. 2019/5

菊地知子

揺らぎ・スキ・隙間を許容する乳児保育実践について考える.

日本教育学会第 77 回大会, 2018/8

Yahagi, Y., Kikuchi, T., & Shiozaki, M.

Children and the ECEC after the great East Japan Earthquake —Learn from the practice of the childcare reproduction—.

第 70 回 OMEP 世界大会, 2018/6

菊地知子・中澤智子・濱崎由紀子

「揺らぎや転換を許容しつつ安定感のある保育環境」を探求する.

こども環境学会 2018 年大会. 2018/5

中澤智子・菊地知子・濱崎 由紀子

大学内乳児保育施設における普遍性と可変性を考える (2) .

日本保育学会第 71 回大会, 2018/5

塩崎美穂・大宮勇雄・矢萩恭子・菊地知子

NZ における就学移行期プロジェクト—保育実践評価に関する基礎的研究 (1) .

日本保育学会第 71 回大会, 2018/5

矢萩恭子・大宮勇雄・塩崎美穂・菊地知子
NZにおける保育環境改善へのとりくみ—保育実践評価に関する基礎的研究（2）.
日本保育学会第71回大会, 2018/5

浜崎由紀子・菊地知子・唐澤友美・中澤智子
大学内乳児保育施設における保育の実際（3）.
日本保育学会第70回大会, 2017/5

矢萩恭子・塩崎美穂・菊地知子・松田純子
保育者養成校と子育て支援施設との連携に関する研究（5）.
日本保育学会第70回大会, 2017/5

中澤智子・菊地知子・濱崎由紀子・唐澤友美
大学内乳児保育施設における保育の実際（2）.
日本保育学会第69回大会, 2016/5

矢萩恭子・塩崎美穂・菊地知子・松田純子
保育者養成校と子育て支援施設との連携に関する研究（3）.
日本保育学会第69回大会, 2016/5

松田純子・矢萩恭子・塩崎美穂・菊地知子
保育者養成校と子育て支援施設との連携に関する研究（4）.
日本保育学会第69回大会, 2016/5

メディア掲載

（新聞）

2017年7月18日 『金言：お茶大の母子支援』（毎日新聞 朝刊）

（ウェブ掲載）

2019年2月 『「おむつはずれ」はゆっくりでOK！ベテラン保育士がリアルな悩みに答えます！
【ベビーブック4月号育児特集「おむつはずれ ステップ」Q&A】』（小学館公式
ネット配信記事 Hugkum）
<https://hugkum.sho.jp/37956>

（テレビ）

2016年7月9日 NHK Eテレ 「すくすく子育て」
もうこわくない！あせも・おむつかぶれ

2016年7月15日 NHK Eテレ 「すくすく子育て」
もうこわくない！あせも・おむつかぶれ
（2016年7月9日の再放送）

競争的資金

科学研究費基盤研究(C) 「保育者養成における子育て支援力養成の枠組みに関する研究」、研
究分担者、2014年度-2016年度

人間発達基礎研究部門 研究協力員 松浦 素子

現所属／職位：なし

研究所在職期間／職位：2017 年度-2021 年度 研究協力員

専門分野 発達心理学・臨床心理学・産業心理学

所属学会 日本心理学会、日本教育心理学会

学会発表

Matsuura, M.

Re-employment and Family of Japanese Women in child-rearing years: About Highly educated mothers.
American Psychological Association convention 2021, 2021/8

競争的資金

科学研究費基盤研究(C) 「育児・介護離職者の柔軟性のあるキャリア形成のための支援プログラムの開発」、研究代表者、2016 年度-2020 年度

人間発達基礎研究部門 研究協力員 山宮 裕子

現所属／職位：テンプル大学ジャパン 非常勤講師

研究所在職期間／職位：2017 年度-2021 年度 研究協力員

専門分野 ボディイメージ・摂食障害

所属学会 Academy for Eating Disorders, 日本健康心理学会（国際委員会委員）

学会発表

山宮裕子・矢澤美香子・高橋誠・鈴木公啓

日本語版 Mindful Eating Questionnaire の作成（1）妥当性と信頼性の検討。
日本健康心理学会第 34 回大会, 2021/11

Yamamiya, Y., Desjardins, C. D., & Stice, E.

Sequencing of symptom emergence in anorexia nervosa, bulimia nervosa, binge eating disorder, and purging disorder and relations of prodromal symptoms and risk factors to future onset of these disorders.
Eating Disorders Research Society 2021 Virtual Meeting, 2021/9

Yamamiya, Y., & Omori, M.

Examining negative emotions for bodily changes associated with pregnancy in young Japanese women.
Australia and New Zealand Academy for Eating Disorders Hybrid International Conference 2021, 2021/8

Yamamiya, Y., Shimai, S., & Homan, K. J.

Gratitude model of body appreciation: A replication with Japanese women.
Academy for Eating Disorders Virtual International Conference on Eating Disorders, 2020/6

Yamamiya, Y., & Omori, M.

Pre-existing thin ideal internalization, appearance comparison, drive for thinness, and current negative feelings toward bodily changes among pregnant Japanese women.
Academy for Eating Disorders Virtual International Conference on Eating Disorders 2020, 2020/6

大森美香・山宮裕子

妊娠中の身体的な変化に対する嫌悪感の程度を測定するための尺度の作成。
日本心理学会第 83 回大会, 2019/9

Arimitsu, K., Yamamiya, Y., & Shimai, S.

Age and gender differences in self-compassion in a Japanese adult sample.
9th European Conference on Positive Psychology, 2018/6

Shimai, S., Yamamiya, Y., & Arimitsu, K.

Current status of subjective happiness across ages in Japan.
9th European Conference on Positive Psychology, 2018/6

競争的資金

科学研究費基盤研究(C) 「妊娠期の身体変化の受容プロセスに関する縦断的検討」、研究代表者、2018 年度-2020 年度

(4) 年度別 論文一覧

【2016 年度】

Matson, J.L., Matheis, M., Burns C.O., Esposito, G., Venuti, P., Pisula, E., Misiak, A., Kalyva, E., Tsakiris, V., Kamio, Y., Ishitobi, M., & Goldin, R.L. (2017). Examining cross-cultural differences in autism spectrum disorder: A multinational comparison from Greece, Italy, Japan, Poland, and the United States. *European Psychiatry*, 42, 70-76.

Stickley, A., Tachibana, Y., Hashimoto, K., Haraguchi, H., Miyake, A., Morokuma, S., Nitta, H., Oda, M., Ohya, Y., Senju, A., Takahashi, H., Yamagata, T., & Kamio Y. (2017). Assessment of Autistic Traits in Children Aged 2 to 4½ Years With the Preschool Version of the Social Responsiveness Scale (SRS-P): Findings from Japan. *Autism Research*, 10, 852-865.

Stickley, A., Koyanagi, A., Takahashi, H., Ruchkin, V., & Kamio, Y. (2017). Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and loneliness among adults in the general population. *Research in Developmental Disabilities*, 62, 115-123.

Suizu, S., & Gyobu, I. (2016). Back and Forth Exploration in Reflective Educational Practices by Using the Video Tool “CAVScene”. *Proc. of World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications (ED-MEDIA2016)*, 2016, 1449–1452.

Yoshitake, N., Sun, Y., Sugawara, M., Matsumoto, S., Sakai, A., Takaoka, J., & Goto, N. (2016). QOL and sociodemographic factors among first-time parents in Japan: a multilevel analysis. *Quality of life research: an international journal of quality of life aspects of treatment, care and rehabilitation*, 25, 3147-3155.

上原泉 (2017). 児童期以降の快-不快感情を伴う自伝的記憶—縦断的な事例データによる予備的検討— *お茶の水女子大学人文科学研究*, 13, 135-150.

内海緒香 (2017). 5つの保育カリキュラムと OECD 保育白書の議論—カリキュラム策定への示唆— *お茶の水女子大学人文科学研究*, 13, 151-160.

大森正博 (2016). 高齢者医療・介護の抱える問題とその対策 *租税研究*, 800, 106-118.

神尾陽子 (2017). 乳幼児期からの発達支援 (特集 共生社会を目指した発達支援を考える) *発達障害研究*, 39, 75-78.

神尾陽子 (2017). 発達障害児・者の思春期・青年期の社会的課題 (特集 発達障害児・者を支援する) *日本医師会雑誌*, 145, 2337-2340.

刑部育子 (2017). 学習論からみた美術科教育における授業研究の可能性 『美術教育学 美術科教育学会叢書: 美術科教育における授業研究のすすめ方』, 0, 29-33

小玉亮子 (2016). 教育における母なるものの呪縛—ジェンダー視点に立つ歴史研究から教育思想史学会編『近代教育フォーラム』, 25, 129-138.

梶瑞希子・Birgit Riedel・小玉亮子 (2017). ドイツにおける保育政策の動向と家庭的保育の位置づけ - *児童学研究 聖徳大学児童学研究所紀要*, 19, 105-114.

秋山久美子・坂元章・祥雲暁代・河本泰信・佐藤拓・西村直之・篠原菊紀・石田仁・牧野暢男 (2016). パチンコ・パチスロ遊技障害尺度の短縮版の開発 *精神医学*, 58, 993-999.

秋山久美子・祥雲暁代・坂元章・河本泰信・佐藤拓・西村直之・篠原菊紀・石田仁・牧野暢男 (2016). パチンコ・パチスロ遊技障害尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 *精神医学*, 58, 307-316.

堀内由樹子・田島祥・鈴木佳苗・渋谷明子・坂元章 (2016). テレビゲーム利用による攻撃性・規範意識への影響—中学生の縦断調査データに対するレーティング区分ごとの分析— *デジタルゲーム学研究*, 9, 13-23.

菅原ますみ (2016). 母親の精神保健と子どもの精神保健に関する長期追跡 (特集 ころの病理をさかのぼる : 精神医学における乳幼児期の意義) *精神科治療学*, 31, 893-900.

齊藤彩・松本聡子・菅原ますみ (2016). 児童期後期の不注意および多動性・衝動性と抑うつとの関連—養育要因と自尊感情に着目して— *パーソナリティ研究*, 25, 74-85.

酒井厚・中山紫帆・深澤祐介・熊谷好恵・菅原ますみ (2016). 家庭・学校・地域の連携を支える教員の活動—学校のアンカーポイント役割遂行の観点から— *教育心理学研究*, 64, 505-517.

菅原ますみ (2016). 親の離婚を経験する子どもたちの受ける影響及び子どもや親に対する専門的支援の在り方 *家庭の法と裁判*, 5, 6-10.

菅原ますみ (2016). 離婚紛争における合意形成支援の現状と課題 *家庭の法と裁判*, 5, 32-42.

菅原ますみ (2017). 子どもの発達とテレビ視聴 *子どもの健康科学*, 17, 29-35.

菅原ますみ (2017). 抑うつ世代間伝達に関する長期縦断研究—慢性的逆境要因の連鎖の観点から— *インクルーシブ社会研究*, 17, 69-78.

篁倫子 (2016). 学習障害のそだち (特集 そだちからみたおとなの発達障害) — (そだちとそだてられ) *そだちの科学*, 26, 59-64.

浜口順子 (2016). そこにいる子が子どもであるということ—背伸びする赤ちゃんの指さす先には— *幼児の教育*, 115, 43-46.

浜口順子 (2016). そこにいる子が子どもであるということ—「子ども好き」という言説— *幼児の教育*, 115, 54-57.

平岡公一 (2016). Policy Trends, Reforms, and Challenges in Long-Term Care Services in Japan. *当代社会政策研究*, 第11集, 58-83.

浜口順子・内海緒香 (2017). 倉橋惣三と日本の保育について — J・トビン氏、林安希子さんと『育ての心』を読む— *幼児の教育*, 117, 54-57.

浜口順子 (2016). そこにいる子が子どもであるということ—自分の中の「子ども」を手探りする— *幼児の教育*, 115, 54-57.

戸谷(戸井)敦子・浜野隆 (2016). 中西部アフリカ幼児教育研修の成果と課題—異文化論的視点からの省察とともに— *健康科学と人間形成*, 2, 45-54.

浜野隆 (2016). 統計的な分析により効果的な取り組みを検証—自校の取り組みと比較し、内容のチェックを *総合教育技術*, 71, 19-23.

富士原紀絵・宮城信・松崎史周 (2016). 児童生徒作文の基礎的研究：児童生徒作文コーパ

ス構築と活用 お茶の水女子大学子ども学研究紀要, 4, 9-20.

富士原紀絵 (2016). 訪問調査でわかった効果的な取組みを分析 家庭学習の指導を丁寧に行うことが重要 (総合大特集 学力格差解消のカギ! 「効果のある学校(エフェクティブ・スクール)」7つのルール)--(家庭学習 教員研修 小中連携 ノート指導 学力調査の活用 少人数指導 放課後補習 効果を上げる「7つのルール」活用ポイント) 総合教育技術, 71, 24-29.

耳塚寛明 (2016). 都道府県間の学力格差は年々縮小傾向に。今後の課題は家庭による学力格差の改善 総合教育技術, 71, 52-55.

耳塚寛明・合田哲雄 (2016). 特別対談 お茶の水女子大学基幹研究院教授 耳塚寛明×文部科学省初等中等教育局教育課程課長 合田哲雄 社会的に厳しい環境にありながらも高い成果を上げている学校には7つの特徴があった (総合大特集 学力格差解消のカギ! 「効果のある学校(エフェクティブ・スクール)」7つのルール) 総合教育技術, 71, 10-17.

宮里暁美 (2016). こども園をつくる一文京区立お茶の水女子大学こども園の記録―Vol.1 ～設立までの経緯、開園までの取り組み～ 幼児の教育, 115, 40-48.

宮里暁美 (2016). こども園をつくる一文京区立お茶の水女子大学こども園の記録―Vol.2 開園から三か月 始まりの日々 幼児の教育, 115, 44-49.

宮里暁美 (2017). こども園をつくる一文京区立お茶の水女子大学こども園の記録―Vol.3 私達意識が醸成される 幼児の教育, 116, 40-45.

宮里暁美・石倉卓子・井上知香・大方美香・柿沼芳枝・神長美津子・駒久美子・齊藤崇・島田由紀子・鈴木みゆき・竹田好美・永井由利子・中田範子 (2016). 幼保一体化移行に関する実態調査―園運営上の課題や保育教諭への期待に焦点をあてて― 保育教諭養成課程研究会紀要, 2, 31-42.

米田俊彦 (2016). 湯川論文を読んで (論評) 日本教育史研究, 35, 65-67.

米田俊彦 (2016). 小山静子編『男女別学の時代～戦前期中等教育のジェンダー比較』日本の教育史学, 59, 190-192.

【2017 年度】

Omori, M., Yamazaki, Y., Aizawa, N., & Zoysa, P. D. (2017). Thin-ideal internalization and body dissatisfaction in Sri Lankan adolescents. *Journal of health psychology, 22*, 1830-1840.

Ota, M., Matsuo, J., Sato, N., Teraishi, T., Hori, H., Hattori, K., Kamio, Y., & Kunugi H. (2017). Correlation of reduced social communicational and interactional skills with regional grey matter volumes in schizophrenia patients. *Acta Neuropsychiatrica, 29*, 374-381.

Tachibana, Y., Miyazaki, C., Ota, E., Mori, R., Hwang, Y., Kobayashi, E., Terasaka, A., Tang, J., & Kamio, Y. (2017). A systematic review and meta-analysis of comprehensive interventions for pre-school children with autism spectrum disorder (ASD). *PLoS ONE, 12*,

Akimoto, Y., Takahashi, H., Gunji, A., Kaneko, Y., Asano, M., Matsuo, J., Ota, M., Kunugi, H., Hanakawa, T., Mazuka, R., & Kamio, Y. (2017). Alpha band event-related desynchronization underlying social situational context processing during irony comprehension: A magnetoencephalography source localization study. *Brain and Language, 175*, 42-46.

Oi, M., Fujino, H., Tsukidate, N., Kamio, Y., Yoshimura, Y., Kikuchi, M., Hasegawa, C., Gondou, K., & Matsui, T. (2017). Quantitative Aspects of Communicative Impairment Ascertained in a Large National Survey of Japanese Children. *Journal of Autism and Developmental Disorders, 47*, 3040-3048.

Stickley, A., Koyanagi, A., Takahashi, H., Ruchkin, V., Inoue, Y., & Kamio, Y. (2017). Attention-deficit/hyperactivity disorder and physical multimorbidity: A population-based study. *European Psychiatry, 45*, 227-234.

Saito, A., Stickley, A., Haraguchi, H., Takahashi, H., Ishitobi, M., & Kamio, Y. (2017). Association Between Autistic Traits in Preschool Children and Later Emotional/Behavioral Outcomes. *Journal of Autism and Developmental Disorders, 47*, 3333-3346.

Takahashi, H., Nakahachi, T., Stickley, A., Ishitobi, M., & Kamio, Y. (2017). Stability of the acoustic startle response and its modulation in children with typical development and those with autism spectrum disorders: A one-year follow-up. *Autism Research, 10*, 673-679.

Anderson, C. A., Suzuki, K., Swing, E. L., Groves, C. L., Gentile, D. A., Prot, S., Lam, C. P., Sakamoto, A., Horiuchi, Y., Krahé, B., Jelic, M., Liuqing, W., Toma, R., Warburton, W. A., Zhang, X., Tajima, S., Qing, F., & Petrescu, P. (2017). Media violence and other aggression risk factors in seven nations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 43, 986-998.

Komoto, Y., Shoun, A., Akiyama, K., Sakamoto, A., Sato, T., Nishimura, N., Shinohara, K., Ishida, H., & Makino, N. (2017). Development and validation of the Pachinko/Pachi-Slot Playing Ambivalence Scale. *Asian Journal of Gambling Issues and Public Health*, 7,

伊藤亜矢子・宇佐美慧 (2017). 新版中学生用学級風土尺度(Classroom Climate Inventory; CCI)の作成 *教育心理学研究*, 65, 91-105.

屋沢萌・上原泉・御領謙 (2017). 想起内容とその感情的側面からみた高齢者の自伝的記憶 *認知心理学研究*, 14, 57-67.

大森正博 (2017). 医療制度の国際比較 *租税研究*, 815, 19-34.

大森美香 (2017). 肉を食べることとモラル・ジレンマ *Vesta*, 108, 44-47.

神尾陽子 (2018). 大人の発達障害(第2回)発達障害の考えられる環境要因 *保健の科学*, 60, 117-121.

高橋秀俊・神尾陽子 (2017). 離島・過疎地域における児童・思春期精神保健と災害：東京都大島町での学校精神保健の取組(特集 メンタルヘルス研究と社会との接点) *精神保健研究*, 30, 31-36.

神尾陽子 (2017). 地域ベースの研究の枠組みを通じた子どもの発達や心の健康等の向上に資する社会実装(特集 メンタルヘルス研究と社会との接点) *精神保健研究*, 30, 5-10.

野中俊介・石川信一・神尾陽子・岡島純子・三宅篤子・小原由香・荻野和雄・原口英之・山口穂菜美・石飛信・高橋秀俊 (2017). 自閉スペクトラム症児童の不安に対する集団認知行動療法プログラムの開発:一実施可能性に関する予備的検討— *児童青年精神医学とその近接領域*, 58, 261-277.

刑部育子・桐山瞭子・堀井武彦・灰谷知子・浜口順子 (2018). 保育の「根本考察」にチャレンジ! 4: 幼児期の表現を支える材料・道具 *幼児の教育*, 117, 4-13.

小玉亮子・ケレケシュ ジュジャ・盧中潔・水津幸恵・清水美紀 (2017). 幼児教育改革の時代におけるアメリカの保育者養成テキストの変化と課題- Who am I in the Lives of Children. 1st ed.から 10th ed. までを対象として- お茶の水女子大学子ども学研究紀要, 5, 7-16.

秋山久美子・坂元章・祥雲暁代・河本泰信・佐藤拓・西村直之・篠原菊紀・石田仁・牧野暢男 (2017). DSM-5 を用いたパチンコ・パチスロ遊技障害の測定—一般遊技者サンプルにおける検討— アディクションと家族, 32, 143-151.

秋山久美子・坂元章・祥雲暁代・堀内由樹子・河本泰信・佐藤拓・西村直之・篠原菊紀・石田仁・牧野暢男 (2017). パチンコ・パチスロ遊技障害のカットオフ—DSM-5 のギャンブル障害の基準を用いた分析— 臨床精神医学, 46, 463-470.

坂本佳鶴恵 (2018). 「きもの」はなぜ西洋に影響を与えたか—和のファッションの機能性をめぐって 感性工学, 16, 33-36.

坂本佳鶴恵 (2018). 女性雑誌の「ビジュアル化」をめぐって—1950～70 年代の変化の検討 お茶の水女子大学人文科学研究, 14, 41-56.

篁倫子・小嶋美奈子・小林智子・田上友里 (2018). 発達障害の子どもと母親のエンパワメントと支援: ストレスマネジメントを取り入れたペアレントトレーニングの実践. お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 19, 91-97.

内海緒香・松浦素子・菅原ますみ (2017). 「探求力・活用力に関する追跡調査」報告—お茶の水女子大学附属小学校 6 年生データに焦点をあてて— 高等教育と学生支援, 7, 61-68.

榊原洋一・村松志野・松本聡子・瀬尾智子・眞榮城和美・Tran Diep Tuan・Kaewta Nopmaneejumruslers・菅原ますみ (2017). アジアにおける子どもの自尊感情の国際比較 チャイルド・サイエンス, 14, 39-43.

西村直之 (2018). 問われるアディクション—アディクション概念の再考— 龍谷法学, 50, 63-73.

浅原一熙・櫻井哲朗・長澤裕和・篠原菊紀・坂元章・河本泰信・佐藤拓・西村直之・石田仁・牧野暢男 (2018). パチンコ・パチスロ遊技者の年間負け額分布の推定 IR*ゲーミング学研

究, 14, 1-16.

浜野隆 (2017). そもそも学習意欲とは何か (特集 PISA、TIMSS は好成績だが… なぜ、日本の子どもの「学習意欲」は低いままなのか?) *教職研修*, 45, 84-86.

浜野隆 (2017). 全国学力調査をエビデンスとしてどう生かせばよいか *教職研修*, 46, 94.

平岡公一 (2017). 社会サービス市場の諸理論と国際比較研究の可能性 *社会政策*, 9, 75-86.

富士原紀絵・石井恭子 (2018). 第9章 高い成果を上げている学校 事例研究(2) 平成29年度 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究, 154-172.

松島のり子 (2018). 神奈川県立幼稚園の設立と展開——横浜幼稚園を事例として *お茶の水女子大学人文科学研究*, 14, 199-213.

宮里暁美 (2017). こども園をつくる——文京区立お茶の水女子大学こども園の記録—Vol.5 こども園フォーラムの記録 *幼児の教育*, 116, 30-35.

山崎寛恵・佐々木正人・青山慶・西尾千尋 (2017). 子ども住環境の生態学的デザインの解明：保育所幼児室での移動経路と活動エリアに着目して *住総研研究論文集*, 43, 57-66.

【2018 年度】

Yoshitake, N., Omori, M., Sugawara, M., Akishinonomiya, K. & Shimada S. (2019). Do health beliefs, personality traits, and interpersonal concerns predict TB prevention behavior among Japanese adults? *Journal Plos One*, 14.

Stickley, A., Tachimori, H., Inoue, Y., Shinkai, T., Yoshimura, R., Nakamura, J., Morita, G., Nishii, S., Tokutsu, Y., Otsuka, Y., Egashira, K., Inoue, M., Kubo, T., Tesen, H., Takashima, N., Tominaga, H., Koyanagi, A., & Kamio, Y. (2018). Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and suicidal behavior in adult psychiatric outpatients. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 72, 713-722.

Takahashi, H., Nakamura, T., Kim, J., Kikuchi, H., Nakahachi, T., Ishitobi, M., Ebishima, K., Yoshiuchi, K., Ando, T., Stickley, A., Yamamoto, Y., & Kamio, Y. (2018). Acoustic hyper-reactivity and negatively skewed locomotor activity in children with autism spectrum disorders: An exploratory study. *Frontiers in Psychiatry*, 9,

Takahashi, H., & Kamio, Y. (2018). Acoustic startle response and its modulation in schizophrenia and autism spectrum disorder in Asian subjects. *Schizophrenia Research*, 198, 16-20.

Stickley, A., Koyanagi, A., Takahashi, H., Ruchkin, V., Inoue, Y., Yazawa, A., & Kamio, Y. (2018). Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and happiness among adults in the general population. *Psychiatry Research*, 265, 317-323.

Aoki, S., Hashimoto, K., Mezawa, H., Hatakenaka, Y., Yasumitsu-Lovell, K., Suganuma, N., Ohya, Y., Wilson, P., Fernell, E., Kamio, Y., & Gillberg, C. (2018). Development of a new screening tool for neuromotor development in children aged two – the neuromotor 5 min exam 2-year-old version (N5E2). *Brain and Development*, 40, 445-451.

Tachibana, Y., Miyazaki, C., Mikami, M., Ota, E., Mori, R., Hwang, Y., Terasaka, A., Kobayashi, E., & Kamio, Y. (2018). Meta-analyses of individual versus group interventions for pre-school children with autism spectrum disorder (ASD). *PLoS ONE*, 13.

Takahashi, H., Nakahachi, T., Stickley, A., Ishitobi, M., & Kamio, Y. (2018). Relationship between physiological and parent-observed auditory over-responsiveness in children with

typical development and those with autism spectrum disorders. *Autism*, 22, 291-298.

Kamio, Y., Takei, R., Stickley, A., Saito, A., & Nakagawa, A. (2018). Impact of temperament and autistic traits on psychopathology in Japanese children: A nationwide cross-sectional study. *Personality and Individual Differences*, 124, 1-7.

Ota, M., Matsuo, J., Sato, N., Teraishi, T., Hori, H., Hattori, K., Kamio, Y., Maikusa, N., Matsuda, H., & Kunugi, H. (2018). Relationship between autistic spectrum trait and regional cerebral blood flow in healthy male subjects. *Psychiatry Investigation*, 15, 956-961.

Noriuchi, M., Kikuchi, Y., Mori, K., & Kamio, Y. (2019). The orbitofrontal cortex modulates parenting stress in the maternal brain. *Scientific Reports*, 9.

Haraguchi, H., Stickley, A., Saito, A., Takahashi, H., & Kamio, Y. (2019). Stability of Autistic Traits from 5 to 8 Years of Age Among Children in the General Population. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 49, 324-334.

Ogino, K., Takahashi, H., Nakamura, T., Kim, J., Kikuchi, H., Nakahachi, T., Ebishima, K., Yoshiuchi, K., Ando, T., Sumiyoshi, T., Stickley, A., Yamamoto, Y., & Kamio, Y. (2018). Negatively skewed locomotor activity is related to autistic traits and behavioral problems in typically developing children and those with autism spectrum disorders. *Frontiers in Human Neuroscience*, 12.

Tsukada, E., Kitamura, S., Enomoto, M., Moriwaki, A., Kamio, Y., Asada, T., Arai, T., & Mishima, K. (2018). Prevalence of childhood obstructive sleep apnea syndrome and its role in daytime sleepiness. *PLoS ONE*, 13.

Akiyama, K., Shinohara, K., Sakamoto, A., Shoun, A., Komoto, Y., Sato, T., Nishimura, N., Shinohara, K., Ishida, H. & Makino, N. (2018). Risk of gambling disorder based on participation level for the Japanese gambling games of pachinko and pachislot: A preliminary study. *International Gambling Studies*. *International Gambling Studies*, 19, 125-147.

Shoun, A., Sakamoto, A., Akiyama, K., Komoto, Y., Sato, T., Nishimura, N., Shinohara, K., Ishida, H. & Makino, N. (2018). Examination of screening of the pachinko/pachislot playing disorder based on gambling disorder scales. *Open Journal of Psychiatry*, 8, 315-327.

Yukiko Horiuchi, Akira Sakamoto, Kumiko Akiyama, Akiyo Shoun, Naoyuki Nishimura, Kikunori Shinohara, Yasunobu Komoto, Taku Sato, Hitoshi Ishida, and Nobuo Makino (2018). Prevalence of Pachinko-Pachislot Playing Disorder and the characteristics of individuals with the disorder: Analysis of national Pachinko/Pachislot survey results. *Open Journal of Psychiatry*, 8, 120-130.

Sun, Y., Yoshitake, N., Sugawara, M., Matsumoto, S., Sakai, A., Takaoka, J., Goto, N. (2019). Quality of life in Japanese couples during the transition to parenthood. *Journal of Reproduction and Infant Psychology*, 37, 161-175.

Yuko Yamamiya, Hemal Shroff, Lauren M. Schaefer, J. Kevin Thompson, Satoshi Shimai, & D. Luis Ordaz (2019). An exploration of the psychometric properties of the SATAQ-4 among adolescent boys in Japan. *Eating Behaviors*, 32, 31-36.

石丸径一郎 (2018). マイノリティ (性とエスニシティ) *臨床心理学*, 18, 40.

森裕子・石丸径一郎 (2018). 女子会と合コンとで女性の行動は変わるのか: ジェンダー・アイデンティティの強さとの関連に着目して *日本性科学会雑誌*, 36, 45-52.

菰田敦子・石丸径一郎 (2019). 性分化疾患である MRKH ロキタンスキー症候群への心理的支援のあり方 *お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要*, 20, 75-85.

森裕子・石丸径一郎 (2019). 男性の前での行動を女性たちはどのように評価しあうのか: 平等主義志向性の高さと同性間のステレオタイプの偏見に着目して *お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要*, 20, 13-20.

石丸径一郎 (2018). 簡単なようで奥が深い LGB コミュニティ, 161, 89-91.

伊藤亜矢子 (2018). クラスの「空気」の圧力と学級風土 *児童心理*, 1058, 1-10.

岩壁茂 (2019). 傷 — 抱きしめること (embrace) ・手放すこと (let go) *臨床心理学*, 19, 3-8.

上原泉 (2018). 発達段階をふまえて学ぶ意欲を高める *児童心理*, 1059, 17-22.

内海緒香 (2019). 子どもの健康・安全・適応を育む保育の場における見守りプロセスの検

討 お茶の水女子大学人文科学研究, 15, 89-103.

内海緒香 (2018). 子どもの健康・安全・適応はどのようにモニタリングされているのか：幼稚園教師の語りの質的内容分析 お茶の水女子大学人文科学研究, 14, 121-132.

渡邊巧・白井克尚・村井大介・岡田了祐 (2019). 生活科カリキュラムにおける教科論の変容とその社会的背景—子どもの生活環境としての「家庭」に注目して— 初等教育カリキュラム研究, 7, 97-109.

神尾陽子 (2018). 自閉スペクトラム症：自閉症の発見(情緒的交流の自閉的障害：Leo Kanner) (特集 こころの発達の問題に関する"古典"をふりかえる) 精神医学, 60, 1067-1073.

神尾陽子・齊藤彩・原口英之 (2018). 発達障がい児に対する早期アセスメントと早期対応 (特集 発達障害：小児科での具体的な診かたと多職種連携) 小児科, 59, 871-877.

神尾陽子・全有耳 (2018). 自閉症スペクトラム障害 小児科, 59, 549-556.

神尾陽子 (2018). M-CHAT (自閉症児のためのチェックリスト) 小児内科, 50, 1399-1402.

秋山剛・神尾陽子・吉田友子・福田真也・田川杏那・増田紗弓・高橋秀俊・バーニックピーター・尾崎紀夫 (2018). 自閉スペクトラム特性を有する患者へのリワーク支援の手引きの作成と有用性調査 精神神経学雑誌, 120, 469-487.

高橋秀俊・神尾陽子 (2018). 自閉スペクトラム症の感覚の特徴 精神神経学雑誌, 120, 369-383.

神尾陽子・外岡資朗・肥後祥治・梅永雄二 (2019). 特集 (学会企画シンポジウム) 生活者という視点からの発達支援—どんな生きづらさを抱え、どう生きるのか. 教育現場での多領域連携を活かした発達障害者支援 発達障害研究, 40, 430-441.

菊地知子 (2019). 乳児保育における個別性と職員の協働性について 文教大学教育学部紀要, 52, 63-68.

川嶋円香・刑部育子 (2018). 子どもと関わることに対する抵抗感はどこからくるのか：大学生を対象にした質問紙調査から 日本家政学会誌, 69, 811-819.

刑部育子 (2018). アートのまなざし (視点) が保育を変える 発達, 154, 31

刑部育子 (2019). ビデオツール CAVScene を用いたリフレクション(リフレクション大全) 授業づくりネットワーク, 31, 102-107.

小玉亮子 (2018). 母なるものをめぐって—戦後家族のあり方を振り返る— 人間と教育, 98, 28-35.

秋山久美子・坂元章・堀内由樹子・祥雲暁代・河本泰信・佐藤拓・西村直之・篠原菊紀・石田・仁・牧野暢男 (2018). 日本におけるギャンブリング障害の障害疑い率とその比較—方法論による重みづけを用いた検討— アディクションと家族, 34, 75-82.

堀内由樹子・坂元章・秋山久美子・祥雲暁代・西村直之・篠原菊紀・河本泰信・佐藤拓・石田仁・牧野暢男 (2019). パチンコ・パチスロに関する認知の歪み尺度の信頼性・妥当性の検討—パチンコ・パチスロ問題に対する認識に関する2種類の尺度の作成— IR*ゲーミング学研究, 15, 1-12.

山本高美・中山雅紀・桂瑠以・坂元章・藤代一成 (2019). 3D ボディデータ分析に基づく適応的なアイテムの開発—ブラウス・ワンピース— 和洋女子大学紀要, 60, 35-46.

秋山久美子・坂元章・祥雲暁代・堀内由樹子・河本泰信・佐藤拓・西村直之・篠原菊紀・石田仁・牧野暢男 (2018). ウェブモニターを用いたパチンコ・パチスロ遊技障害の症状の出現頻度の検討—項目反応理論による分析— 精神医学, 60, 1045-1054.

堀内由樹子・田島祥・松尾由美・寺本水羽・チェンシュ・倉津美紗子・鈴木佳苗・渋谷明子・坂元章 (2018). 子どものゲーム利用に対する親介入行動の実態調査—2011年と2017年調査の比較—. シミュレーション&ゲーミング, 28, 24-32.

田島祥・堀内由樹子・松尾由美・寺本水羽・坂元章 (2018). ゲームをきっかけとした他者との交流に対する保護者の態度と属性との関連. シミュレーション&ゲーミング, 28, 33-42.

麻生奈央子・坂元章 (2018). 願望による IAT 概念間連合仮説の検証—成人期女性のロマンティック幻想と結婚満足感—. 感情心理学研究, 25, 62-69.

酒井厚・江川伊織・菅原ますみ・松本聡子・相澤仁 (2019). 児童・思春期の親子関係と外在化型問題行動の関連に対する親友関係の調整効果. 心理学研究, 90, 11-20.

吉武尚美・菅原ますみ・孫怡 (2018). 子育て期の夫婦の QOL. *チャイルド・サイエンス*, 16, 13-18.

菅原ますみ (2018). 中高生のテレビ番組に対する行動・意識の関連要因：2017 年度 BPO 青少年委員会『青少年のメディア利用に関する調査』. *新情報*, 106, 1-11.

篁倫子 (2018). 行動発達や情緒発達の評価方法がありますか. *周産期医学*, 48, 1221-1223.

新井清美・森田展彰・内藤献・杉山大三郎・西村直之 (2018). ギャンブル問題を持つ者が電話相談に至る要因の検討. *日本アルコール・薬物医学会雑誌*, 53, 25-39.

浜口順子 (2018). 倉橋惣三との対話⑤「森の幼稚園」という理想(その 3). *幼児の教育*, 117, 40-43.

浜口順子 (2018). 倉橋惣三との対話⑥幼児期の「一人一人」と社会性の成長について(1) *幼児の教育*, 117, 40-43.

浜口順子 (2018). 倉橋惣三との対話⑦幼児期の「一人一人」と社会性の成長について(2) *幼児の教育*, 117, 40-43.

浜口順子 (2019). 倉橋惣三との対話⑧幼児期の「一人一人」と社会性の成長について(3) *幼児の教育*, 118, 40-43.

浜野隆 (2018). エビデンス足り得る調査には何が必要か *教職研修*, 0, 92-93.

浜野隆 (2018). 家庭の社会経済的背景だけで子どもの学力が決まるわけではない *総合教育技術*, 73, 56-59.

平岡公一 (2019). 在宅ケアの研究力を高める 文献レビュー—文献を検索し、理解する *日本在宅ケア学会誌*, 22, 50-55.

富士原紀絵・石井恭子 (2019). 第 8 章 成果が上がっている学校の特徴 第 11 章 高い成果を上げている学校・教育委員会の訪問レポート 平成 30 年度 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究, 88-125.

松本聡子 (2018). 児童・思春期の QOL～縦断研究による検討～ *チャイルド・サイエンス*, 16, 25-30.

菅原大地・武藤世良・杉江征 (2018). ポジティブ感情概念の構造—日本人大学生・大学院生を対象として— *心理学研究*, 89, 479-489.

島井哲志・山宮裕子・福田早苗 (2018). 日本人の主観的幸福感の現状：加齢による上昇傾向 *日本公衆衛生雑誌*, 65, 553-562.

【2019 年度】

Imaizumi, S. (2019). Questionnaire data on visual, perceptual, and emotional characteristics of Japanese adults. *Data in Brief*, 25.

Imaizumi, S., Tanno, Y., & Imamizu, H. (2019). Compress global, dilate local: Intentional binding in action–outcome alternations. *Consciousness and Cognition*, 73.

Iwakabe, S. (2019). Case studies in accelerated experiential dynamic psychotherapy (AEDP): Reflections on the case of “Rosa”. *Pragmatic Case Studies in Psychotherapy*, 14, 58-68.

Takamura, A., Yamazaki, Y., & Omori, M. (2019). Developmental changes in fat talk to avoid peer rejection in Japanese girls and young women. *Health Psychology Open*.

Stickley, A., Kuposov, R., Kamio, Y., Takahashi, H., Koyanagi, A., Inoue, Y., Yazawa, A., & Ruchkin, V. (2019). Attention deficit/hyperactivity disorder and future expectations in Russian adolescents *ADHD Attention Deficit and Hyperactivity Disorders*, 11, 279-287.

Amaral, D.G., Anderson, G.M., Bailey, A., Bernier, R., Bishop, S., Blatt, G., Canal-Bedia, R., Charman, T., Dawson, G., de Vries, P.J., Dicicco-Bloom, E., Dissanayake, C., Kamio, Y., Kana, R., Khan, N.Z., Knoll, A., Kooy, F., Lainhart, J., Levitt, P., Loveland, K., & Minshew, N (2019). Gaps in Current Autism Research: The Thoughts of the Autism Research Editorial Board and Associate Editors *Autism Research*, 12, 700-714.

Ebishima, K., Takahashi, H., Stickley, A., Nakahachi, T., Sumiyoshi, T., & Kamio, Y. (2019). Relationship of the acoustic startle response and its modulation to adaptive and maladaptive behaviors in typically developing children and those with autism spectrum disorders: A pilot study *Frontiers in Human Neuroscience*, 13, 22.

Silventoinen, K., Jelenkovic, A., Latvala, A., Yokoyama, Y., Sund, R., Sugawara, M., Tanaka, M., Matsumoto, S., et al. (2019). Parental Education and Genetics of BMI from Infancy to Old Age: A Pooled Analysis of 29 Twin Cohorts. *Obesity*, 27, 855-865.

Nakatani, H., Muto, S., Nonaka, Y., Nakai, T., Fujimura, T., & Okanoya, K. (2019). Respect and admiration differentially activate the anterior temporal lobe. *Neuroscience Research*, 144, 40-47.

Ishikawa, S., Ishikawa, S., Kishida, K., Oka, T., Saito, A., Shimotsu, S., Watanabe, N., Sasamori, H., & Kamio, Y. (2019). Developing the Universal Unified Prevention Program for Diverse Disorders for School-aged Children. *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health*, 13(1), 1-15.

Swami, V., Tran, U. S., Barron, D., Afhami, R., Aimé, A., Almenara, C. A., Alp Dal, N., Amaral, A. C. S., Andrianto, S., Anjum, G., Argyrides, M., Atari, M., Aziz, M., Banai, B., Borowiec, J., Brewis, A., Cakir Kocak, Y., Campos, J. A. D. B., Carmona, C., Chaleeraktragoon, T., Chen, H., Chobthamkit, P., Choompunuch, B., Constantinos, T., Crumlish, A., Cruz, J. E., Dalley, S. E., Damayanti, D., Dare, J., Donofrio, S. M., Draksler, A., Escasa-Dorne, M., Fernandez, E. F., Ferreira, M. E. C., Frederick, D. A., García, A. A., Geller, S., George, A., Ghazieh, L., Goian, C., Gorman, C., Grano, C., Handelzalts, J. E., Horsburgh, H., Jackson, T., Javela Delgado, L. G. J., Jović, M., Jović, M., Kantanista, A., Kertechian, S. K., Kessels, L., Król-Zielińska, M., Kuan, G., Kueh, Y. C., Kumar, S., Kvalem, I. L., Lombardo, C., Luis López Almada, E., Maïano, C., Manjary, M., Massar, K., Matera, C., Mereiles, J. F. F., Meskó, N., Namatame, H., Nerini, A., Neto, F., Neto, J., Neves, A. N., Ng, S.-K., Nithiya, D. R., Omar, S. S., Omori, M., Panasiti, M. S., Pavela Banai, I., Pila, E., Pokrajac-Bulian, A., Postuvan, V., Prichard, I., Razmus, M., Sabiston, C. M., Sahlan, R. N., Sarfo, J. O., Sawamiya, Y., Stieger, S., SturtzSreetharan, C., Tee, E., ten Hoor, G. A., Thongpibul, K., Tipandjan, A., Tudorel, O., Tylka, T., Vally, Z., Vargas-Nieto, J. C., Vega, L. D., Vidal-Mollón, J., Vintila, M., Williams, D., Wutich, A., Yamamiya, Y., Zambrano, D., Zanetti, M. C., Živčić-Bećirević I., & Voracek M. (2020). The Breast Size Satisfaction Survey (BSSS): Breast size dissatisfaction and its antecedents and outcomes in women from 40 nations. *Body Image*, 32, 199-217.

Iwakabe, S. (2019). Working through shame with an intercultural couple in Japan: Transforming negative emotional interactions and expanding positive emotional resources. *Journal of Clinical Psychology*, <https://doi.org/10.1002/jclp.22864>.

Kawasaki, A., & Uehara, I. (2020). Cultural life scripts of Japanese adolescents. *Applied Cognitive Psychology*, 34(2), 357-371.

Kodama, R., Ohta, T. & Asai, S. (2020). Transitions from Preschool to Primary School Education in Japan, *お茶の水女子大学人文科学研究*, 16, 185-195.

飯田順子・伊藤垂矢子・青山郁子・杉本希映・遠藤寛子・ファーロング, マイケル J. (2019).

日本語版ソーシャル・エモーショナル・ヘルス・サーベいの作成と信頼性・妥当性の検討 *心理学研究*, 90, 32-41.

今泉修・浅井智久・高橋英彦・今水寛 (2019). 主体感の認知神経機構 *精神医学*, 61, 541-549.

今泉修 (2019). 主体感研究の再考と展望 *電子情報通信学会技術研究報告*, 119, 35-38.

田中彰吾・浅井智久・金山範明・今泉修・弘光健太郎 (2019). 心身脳問題：からだを巡る冒険 *心理学研究*, 90, 518-537.

岩壁茂 (2019). スーパービジョンにおける恥 — 失敗・修復・成長 *臨床心理学*, 19, 321-324.

岩壁茂 (2019). 心理領域からみた公認心理師による精神科医療への貢献 *臨床精神医学*, 48, 627-631.

内海緒香 (2019). 実践ファイル 第3回お茶大こども園フォーラム報告 実践や体験を通して語り合い学び合う *幼児の教育*, 118, 24-27.

大森正博 (2019). 医療制度の国際比較：医療財源と効率性,公平性 *租税研究*, 835, 7-24.

山崎洋子・高村愛・大森美香 (2019). Fat Talk 尺度日本語版作成の試み—高校生と大学生を対象にした尺度の妥当性と信頼性の研究— *青年心理学研究*, 31, 35-44.

神尾陽子 (2019). 発達障害サービスは多様性に対応できているか *そだちの科学*, 32, 87-89.

菊地知子・小玉亮子・高田文子 (2019). 大災害と保育—歴史的蓄積のために— *お茶の水女子大学子ども学研究紀要*, 7, 1-11.

堀内由紀子・坂元章・秋山久美子・祥雲暁代・西村直之・篠原菊紀・河本泰信・佐藤拓・石田仁・牧野暢男 (2019). パチンコ・パチスロ遊技の参加、継続、傷害リスクの特徴：全国調査データを用いた検討 *最新精神医学*, 24, 299-305.

菅原ますみ (2019). 小児期逆境体験とこころの発達：発達精神病理学の近年の研究動向から *精神医学*, 61, 1187-1195.

箕倫子 (2019). 特別支援教育 臨床心理学, 19, 420-422.

菊森淳文・熊谷亮丸・仁木一彦・西村直之・溝畑宏・渡辺晶 (2019). 座談会 カジノを含む統合型リゾート(IR)の制度と可能 *ARES 不動産証券化ジャーナル*, 50, 6-20.

西村直之 (2019). 日本における問題あるギャンブリング(Problem Gambling)対策の現状と課題 *現代の社会病理 (日本社会病理学会)*, 34, 109-120

浜口順子 (2019). 幼児の表現を育む保育者の在り方 *幼児教育じほう*, 47, 5-11.

浜口順子 (2019). 津守真の子ども研究における時間性 *発達*, 40, 32-37.

平岡公一 (2019). 高齢期における格差と貧困をめぐって (現代社会における格差・不公平・不平等) *経済社会学会年報*, 41, 24-35.

山岸由紀・岡田昌毅 (2019). 短期インターンシップ経験による大学生の職業意識の変化に関する探索的研究 *日本キャリアデザイン学会*, 15, 59-72.

岡塚哉・神尾陽子 (2019). 不安症. *小児内科*, 51(12), 1932-1936.

岐部智恵子・平野真理 (2019). 日本語版青年前期用敏感性尺度 (HSCS-A) の作成. *パーソナリティ研究*, 28(2), 108-118.

大多和直樹 (2019). 大学生(学生)研究と高校生(生徒)研究の〈溝〉—〈溝〉を超える新しい大学生研究に向けて. *教育社会学研究*, 104, 105-124.

神尾陽子 (2019). シンポジウム9「青年期の素行問題について～外来でできること」. 指定発言 発達障害児の暴力の予防への地域ベースの多職種連携に向けて. *児童青年精神医学とその近接領域*, 60(5) 54-56.

上原泉 (2020). 幼児期のエピソード記憶調査内の発話における過去形や時に関する言葉の使用. *お茶の水女子大学人文科学研究*, 16, 251-263.

内海緒香 (2020). 「子どもの安心安全を守り育む保育実践尺度(FCHWS)」の作成: 見守り概念とモニタリング理論を踏まえて. *お茶の水女子大学人文科学研究*, 16, 157-167.

浜野隆 (2020). 国際比較でみる日本の「非認知能力」の課題－PISA2018「読解力低下」問題を手がかりに－. *日本教材文化研究財団研究紀要*, 48, 42-51.

菅原ますみ・松本聡子・酒井厚・高岡純子・持田聖子・後藤憲子 (2020). 3歳未満時での母親の就業－養育態度を媒介した子どもの行動特徴との関連－. *チャイルド・サイエンス*, 19, 39-44.

岡田了祐・堀田諭 (2020). コンピテンシー時代における評価研究の拡張に関する基礎的研究－J・レイヴンのコンピテンス論を手がかりとして－. *人間発達研究*, 第34号, 17-38.

岡田了祐・福井駿 (2020). 近年のお茶の水女子大学附属小学校における学校カリキュラムの展開－継続的なカリキュラム・マネジメントに着目して－. *人間発達研究*, 第34号, 39-63.

酒井厚・室橋弘人・菅原ますみ・松本聡子・相澤仁 (2020). 小中学生における親友関係の質と情緒の問題との関連. *パーソナリティ研究*, 28(3), 221-232.

松島のり子 (2020). 1963年の「幼稚園と保育所との関係について（通知）」をめぐる研究動向と課題. *お茶の水女子大学人文科学研究*, 第16巻, 169-181.

伊藤亜矢子・Carol Dahir (2020). 国際協働によるスクールカウンセラー教育の試み：ニューヨーク工科大学との多文化理解のための共同授業. *お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要*, 21, 1-10.

鈴木彩音・石丸径一郎 (2020). セクシュアル・マイノリティのアイデンティティは嫌悪感と揺らぎを経て形成されるのか：当事者の語りの質的分析. *お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要*, 21, 45-56.

半田知佳・伊藤亜矢子 (2020). 非認知的能力を育む学校風土の重要性：学校風土研究と非認知的能力研究の概観から. *お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要*, 21, 57-65.

森裕子・石丸径一郎 (2020). 日本の心理学関連分野における青年期の性行動に関する研究の動向と展望：青年期女性の性行動の特徴に着目して. *お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要*, 21, 77-88.

神尾陽子・加藤永歳・高橋脩・中島洋子・藤岡宏・安達潤・山本彩・大石幸二・田中雄一 (2020). 特集 (学会企画シンポジウム) 障害のある人への合理的配慮に基づく支援とは: 連続した支援とするために. 最初の診断を行うことの意味を多職種連携支援の観点から問う. *発達障害研究*, 41(4), 264-275.

岩壁茂 (2019). 傷 — 抱きしめること(embrace)・手放すこと (let go). *臨床心理学*, 19, 3-8.

酒井厚・江川伊織・菅原ますみ・松本聡子・相澤仁 (2019). 児童・思春期の親子関係と外在化型問題行動の関連に対する親友関係の調整効果. *心理学研究*, 90(1), 11-20.

【2020 年度】

Kondo, A., Shimane, T., Takahashi, M., Takeshita, Y., Kobayashi, M., Takagishi, Y., Omiya, S., Takano, Y., Yamaki M., & Matsumoto, T. (2021). Gender Differences in Triggers of Stimulant Use Based on the National Survey of Prisoners in Japan. *Substance Use & Misuse*, 56(1), 54-60.

Imaizumi, S., Tagami, U., & Yang, Y. (2020) Fluid movements enhance creative fluency: A replication of Slepian and Ambady (2012). *PLoS ONE*, 15(7), e0236825.

Tagami, U., & Imaizumi, S. (2020). No correlation between perception of meaning and positive schizotypy in a female college sample. *Frontiers in Psychology*, 11, 1323.

Ishibashi, M., & Uehara, I. (2020). The relationship between children's scale error production and play patterns including pretend play. *Frontiers in Psychology*, 11, 1176.

Amaral, D. G., & de Vries, P. J. (2020). COVID - 19 and Autism Research: Perspectives from Around the Globe. *Autism Research*, 13(6), 844. (2019 IP: 3.727)

Contributors: David G. Amaral, Evdokia Anagnostou, Vanessa H. Bal, Josephine Barbaro, Angela B. Barber, Ricardo Canal - Bedia, Nola Chambers, Stephen R. Dager, Geraldine Dawson, John - Joe Dawson - Squibb, Petrus J. de Vries, Gabriel Dichter, Cheryl Dissanayake, Gauri Divan, Annette Estes, Dani Fallin, Lauren Franz, Naoufel Gaddour, Alan H. Gerber, Melissa Gilbert, Rebecca M. Girard, Ofer Golan, Johathan Green, Michal Harty, Jill Howard, Darren Hedley, Caitlin M. Hudac, Susan M. Hayward, Lisa V. Ibanez, Hiroshi Ishiguro, Angelina Kakooza Mwesige, Yoko Kamio, Rajesh K. Kana, Jennifer L. Keluskar, Daniel P. Kennedy, Connor M. Kerns, Jessica Kinard, Genevieve Konopka, Frank Kooy, Hirokazu Kumazaki, Janet E. Lainhart, Lauren P. Lawson, Kathy Leadbitter, Matthew D. Lerner, Katherine A. Loveland, Maria Magan - Maganto, Masaru Mimura, Peter Mundy, Taro Muramatsu, Declan Murphy, Bethany Oakley, Sarah O'Kelley, Kally C. O'Reilly, Seon - Hye E. Park, Alexia Rattazzi, Melanie Ring, Reetabrata Roy, Amber Ruigrok, Nancy Sadka, Diana Schendel, Liezl Schlebusch, Alison Singer, Tanya St. John, Wendy L. Stone, Helen Tager - Flusberg, Carol Taylor, Julian Tillmann and the AIMS - 2 - TRIALS Consortium, Theodore S. Tomeny, Danielle Toth, Katy Unwin, Vivek Vajaratkar, Jeremy Veenstra - VanderWeele, Marisa Viljoen, Heather Volk, Susan W. White, Andrew J. O. Whitehouse, Christine Wu Nordahl, Yuichiro Yoshikawa.

Haraguchi, H., Yamaguchi, H., Miyake, A., Tachibana, Y., Stickley, A., Horiguchi, M., Noro, F., & Kamio, Y. (2020). One-year outcomes of low-intensity behavioral interventions among Japanese preschoolers with autism spectrum disorders: Community-based study. *Research in Autism Spectrum Disorders*, 76, 101556.

Nakatani, H., Nonaka, Y., Muto, S., Asano, M., Fujimura, T., Nakai, T., & Okanoya, K. (2020). Trait respect is linked to reduced gray matter volume in the anterior temporal lobe. *Frontiers in Human Neuroscience*, 14, 344.

Rodgers, R. R., Lombardo, C., Cerolini, S., Franko, D.L., Omori, M., Fuller-Tyszkiewicz, M., Linardon, L., Courtet, P., Guillaume, S. (2020). The impact of the COVID-19 pandemic on eating disorder risk and symptoms. *International Journal of Eating Disorders*, 53, 1166-1170.

Kawasaki, Y., Akamatsu, R., Omori, M., Sugawara, M., Yamazaki, Y., Matsumoto, S., Fujiwara, Y., Iwakabe, S., & Kobayashi, T. (2020). Development and validation of the Expanded Mindful Eating Scale. *International Journal of Health Care Quality Assurance*, 33(4/5), 309-321. <https://doi.org/10.1108/IJHCQA-01-2020-0009>

Ohata, R., Asai, T., Imaizumi, S., & Imamizu, H. (2020). My voice therefore I spoke: Sense of agency over speech enhanced in hearing self-voice. *bioRxiv*.
<https://doi.org/10.1101/2020.11.20.392308>

Kuru, Y., Nishiyama, T., Sumi, S., Suzuki, F., Shiino, T., Kimura, T., Hirai, K., Kuroda, M., Kamio, Y., & Kikuchi, S. (2020). Practical applications of brief screening questionnaires for autism spectrum disorder in a psychiatry outpatient setting. *International Journal of Methods in Psychiatric Research (IJMPR)*, e1857.

Yamamiya, Y., Satoshi Shimai, S., & Homan, K.J. (2021). Exploring the gratitude model of body appreciation and intuitive eating among Japanese women. *Body Image*, 36, 230-237.

Hamaguchi, J. & Utsumi, S. (2021). Unlearning-Based Professional Development for Early Childhood Care and Education: Survey of the ECCELL Program at Ochanomizu University, Japan. *お茶の水女子大学紀要 高等教育と学生支援*, 11, 25-32..

Jelenkovic, A., Sund, R., Yokoyama, Y., Latvala, A., Sugawara, M., Tanaka, M., Matsumoto, S., ... & Silventoinen, K. (2020). Genetic and environmental influences on human height from

infancy through adulthood at different levels of parental education. *Scientific Reports*, 10(1), 1-11.

Tsubakita, T., Kawazoe, N., Ichikawa, M., Matsumoto, S., & Sugawara, M. (2020). Assessing Knowledge-based and Perceived Health Literacy among Japanese Adolescents: A Cross-Sectional Study. *Global Pediatric Health*, 7, 1-8.

Nakamura, K. & Iwakabe, S. (2021). Connecting In-Session Corrective Emotional Experiences With Postsession Therapeutic Changes: A Systematic Case Study. *Psychotherapy*, Online ahead of print . <https://doi.org/10.1037/pst0000369>.

Iwakabe, S., Edlin, J., Fosha, D., Gretton, H., Joseph, A. J., Nunnink, S. E., Nakamura, K., & Thoma, N. (2020). The Effectiveness of Accelerated Experiential Dynamic Psychotherapy (AEDP) in Private Practice Settings: A Transdiagnostic Study Conducted Within the Context of a Practice-Research Network. *Psychotherapy*, 57(4):548-561.
<http://doi.org/10.1037/pst0000344>

Kawamoto, T., Kubota, K. A., Sakakibara, R., Muto, S., Tonegawa, A., Komatsu, S., & Endo, T. (2021). The General Factor of Personality (GFP), trait emotional intelligence, and problem behaviors in Japanese teens. *Personality and Individual Differences*, 171, 110480.

Rodgers, R. F., Lombardo, C., Cerolini, S., Franko, D. L., Omori, M., Linardon, J., Guillaume, S., Fischer, L., & Tyszkiewicz, M. F. (2021). "Waste not and stay at home" evidence of decreased food waste during the COVID-19 pandemic from the U.S. and Italy. *Appetite*, <https://doi.org/10.1016/j.appet.2021.105110>

Kawasaki, Y., Akamatsu, R., Fujiwara, Y., Omori, M., Sugawara, M., Yamazaki, Y., Matsumoto, S., Iwakabe, S., & Kobayashi, T. (2021). Is mindful eating sustainable and healthy? A focus on nutritional intake, food consumption, and plant-based dietary patterns among lean and normal-weight female university students in Japan. *Eating and weight disorders*.
<https://doi.org/10.1007/s40519-020-01093-1>

Ikeda, K., Ide, S., Omoe, H., Minami, M., Miyata, H., Kawato, M., Okamoto, H., Kikuchi, T., Saito, Y., Shirao, T., Sekino, Y., Murai, T., Matsumoto, T., Iseki, M., Nishitani, Y., Sumitani, M., Takahashi, H., Yamawaki, S., Isa, T., & Kamio, Y. (2021). Required research activities to overcome addiction problems in Japan. *Taiwanese Journal of Psychiatry*, 35, 6-11.

<https://doi.org/10.1007/s00787-021-01732-7>

Shirama, A., Stickley, A., Kamio, Y., Nakai, A., Takahashi, H., Saito, A., Haraguchi, H., Kumazaki, H., & Sumiyoshi, T. (2021). Emotional and behavioral problems in Japanese preschool children with motor coordination difficulties: the role of autistic traits. *European Child & Adolescent Psychiatry*. <https://doi.org/10.1007/s00787-021-01732-7>

Narita, Z., Yamanouchi, K., Mishima, K., Kamio, Y., Ayabe, N., Kakei, R., & Kim, Y. (2021). Training about mental disorder and screening/assessment associated with knowledge/experience in public health workers in Japan. Research Square. <https://doi.org/10.21203/rs.3.rs-558057/v1>.

福田大年・岡本誠・刑部育子 (2020). 協創スケッチ法による協働的な創造活動生成過程の解明: スケッチを用いた協創によって発生する現象に関する研究. *デザイン学研究*, 67(1), 11-18.

富士原紀絵 (2021). 日本の学校教育における「実践」と「実験」の関係 — 及川平治『分団式動的な教育法』の原点を探る (1) . *お茶の水女子大学人文科学研究*, 17, 177-189.

川崎采香・上原泉 (2020). 日本人中高生の男女が想起する重要な自伝的記憶の特徴. *認知心理学研究*, 18(2), 25-40.

篠原菊紀・櫻井哲朗・西村直之・河本泰信・秋山久美子・堀内由樹子・坂元章・祥雲暁代・佐藤拓・石田仁・牧野暢男 (2020). パチンコ・パチスロ全国調査データを用いた遊技場でのギャンブル障害予防対策の検討. *アディクションと家族 (日本嗜癖行動学会誌)*, 35(2), 135-143.

鄭姝・松尾由美・田島祥・堀内由樹子・寺本水羽・坂元章 (2020). デジタルゲーム利用に対する保護者の介入が子どもの適応に与える影響. *A I時代の教育論文誌*, 2, 37-42.

齊藤彩・松本聡子・菅原ますみ (2020). 思春期の注意欠如・多動傾向と不安・抑うつとの縦断的関連. *教育心理学研究*, 68(3), 237-249.

坂本佳鶴恵 (2021). フレーム分析の諸相と課題—メディア論と社会運動論におけるフレーム分析の統合的検討. *人文科学研究*, 17, 17-28.

浜野隆 (2021). 小学校社会科教育における「学びに向かう力」の育成－国際協力 (SDGs) および森林学習を中心に－. *人間学研究論集*, 10, 1-14.

秋山久美子・坂元章・堀内由樹子・祥雲暁代・河本泰信・佐藤拓・西村直之・篠原菊紀・石田仁・牧野暢男 (2021). パチンコ・パチスロの問題における自力での改善の実態. *健康支援*, 23(1), 1-8.

石丸径一郎 (2020). LGBT かもしれない子どもへの学校での対応. *家族心理学年報*, 38, 115-122.

石丸径一郎 (2020). ジェネラリストのための LGBT 講座⑤ LGBT に関する医療の歴史. *治療*, 102(8), 1054-1057.

太刀川ハルナ・石丸径一郎 (2020). 女子大学生の出産に対する意欲と関連する心理的要因. *お茶の水女子大学子ども学研究紀要*, 8, 43-52.

石丸径一郎・針間克己 (2020). 性功能不全. *臨床精神医学*, 49(8), 1428-1447.

中村香理・岩壁茂 (2020). 心理療法におけるクライエントの感情変容を捉える : 修正感情体験尺度クライエント版開発の試み. *臨床心理学*, 20(6), 765-770.

木村友馨・岩壁茂 (2020). 心理臨床家の勇気:熟練臨床心理士へのインタビュー調査. *心理臨床学研究*, 38(4), 300-311.

横田悠季・吉田寿美子・岩壁茂 (2020). 初回面接におけるセラピストの肯定はクライエントにどのように評価されるか:模擬面接ビデオを用いて. *臨床心理学*, 20(2), 209-219.

岩壁茂 (2021). (インタビュー) アセスメントを再起動する. *臨床心理学*, 21(1), 3-11.

山田陽子・岩壁茂・森岡正芳 (2021). 感情と癒やし. *臨床心理学*, 21(1), 119-132.

岩壁茂 (2021). 自分の気持ちがわからない・・・エモーションフォーカストセラピー. *臨床心理学*, 21(2), 157-163.

岩壁茂 (2020). 感情への招待－基礎心理学と臨床心理学のクロストーク. *臨床心理学*, 20(3), 245-248.

伊藤颯姫・石丸径一郎 (2021). 統合失調症における病識の関連要因および心理教育に関する系統的レビュー. *お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要*, 22, 1-12.

森裕子・柳川耀・石丸径一郎 (2021). 改定トランスジェンダー嫌悪尺度日本語版の作成とトランスジェンダー教育における当事者による授業の効果について：女子大学に通う学生を対象として. *お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要*, 22, 13-24.

石丸径一郎 (2021). カミングアウト・パッシング・アサーション—LGBTQ. *臨床心理学*, 21(2), 216-220.

阪上弘彬・渡邊巧・大坂 遊・岡田了祐 (2020). 「空間的な市民性教育」の研究動向とその特質—欧米の地理教育・社会科教育を中心に—. *人文地理*, 72(2), 149-161.

山岸由紀・三宅桃子・新井由紀夫・千葉和義 (2020). お茶の水女子大学附属学校園「教材・論文データベース」の構築と評価—附属学校を擁する国立大学としての機能強化の試み. *お茶の水女子大学紀要, 高等教育と学生支援*, 10, 73-78.

岡田了祐・福井駿 (2021). お茶の水女子大学附属小学校が改革を進めてきた低学年教育の特質—「個—社会」の軸を視点として—. *人間発達研究*, 35, 1-18.

神尾陽子 (2020). シンポジウム 11「児童精神医療へのファースト・コンタクト」. 指定発言 地域ニーズに応える児童精神医療の実現のために何が変わる必要があるのか. *児童青年精神医学とその近接領域*, 61(5), 512-514.

神尾陽子 (2021). マルトリートメントと神経発達症との関係—エビデンスの再整理—. *精神科治療学*, 36(1), 17-22.

神尾陽子 (2021). 第 10 回市民講座 赤ちゃんから社会へのメッセージ: 発達障害の子供に対する需要、見守り、支援のあり方を考える. 発達障害の子どもの子育てにやさしい社会に. *ストレス&ヘルスケア 別冊*, 4-5.

神尾陽子 (2021). 知的障害や発達障害のある子どものストレスへの理解. *特別支援教育研究*, 3(763), 2-5.

神尾陽子 (2021). 心理検査を活用したアセスメント SRS-2 対人応答性尺度. *LD ADHD*

& *ASD*, 24(1), 48-51.

上田紗津貴・栗林千聡・武部匡也・山宮裕子・Eric Stice・佐藤寛 (2020). Ideal-Body Stereotype Scale-Revised 日本語版の作成および信頼性と妥当性の検討. *認知療法研究*, 13(2), 173-181.

刑部育子 (2020). <保育子どもセミナー講演> 保育におけるアートの可能性. 保育子ども研究 2020 年度, 7-13.

【2021 年度】

Cheong, Y., & Uehara, I. (2021). Segmentation of Rhythmic Units in Word Speech by Japanese Infants and Toddlers *Frontiers in Psychology*.
<https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.626662>

Uehara, I. (2021). Changes in children's episodic narratives through long-term repeated recall: Longitudinal case studies. *Japanese Psychological Research*, 4, 250-264.

Ishibashi, M., Twomey, K. E., Westermann, G., & Uehara, I. (2021). Children's scale errors and object processing: early evidence for cross-cultural differences. *Infant Behavior and Development*. <https://doi.org/10.1016/j.infbeh.2021.101631> , 101631

Shimane, T., Takahashi, M., Kobayashi, M., Takagishi, Y., Takeshita, Y., Kondo, A., ... & Matsumoto, T. (2021). Gender Differences in the Relationship between Methamphetamine Use and High-risk Sexual Behavior among Prisoners: A Nationwide, Cross-sectional Survey in Japan. *Journal of Psychoactive Drugs*. <http://0.1080/02791072.2021.1918805>

Yamada, M. & Kawano, T. (2021). Emerging Wisdom through a Traditional Bon Dance in Group Dance/Movement Therapy: A Single Case Study of Dementia. *The Arts in Psychotherapy*. <https://doi.org/10.1016/j.aip.2021.101822>

Kuru, Y., Nishiyama, T., Sumi, S., Suzuki, F., Shiino, T., Kimura, T., Hirai, K., Kuroda, M., Kamio, Y., & Kikuchi, S. (2021). Practical applications of brief screening questionnaires for autism spectrum disorder in a psychiatry outpatient setting. *International Journal of Methods in Psychiatric Research*, 2, e1857.

Stickley, A., Shirama, A., Kitamura, S., Kamio, Y., Takahashi, H., Saito, A., Haraguchi, H., & Kumazaki, H., Mishima, K., & Sumiyoshi, T. (2021). Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms and sleep problems in preschool children: the role of autistic traits. *Sleep Medicine*, 83, 214-221.

Takeshima, M., Ohta, H., Hosoya, T., Okada, M., Iida, Y., Moriwaki, A., Takahashi, H., Kamio, Y., & Mishima, K. (2021). Association between sleep habits/disorders and emotional/behavioral problems among Japanese children. *Scientific Reports*.
<https://doi.org/DOI:10.1038/s41598-021-91050-4>

Narita, Z., Yamanouchi, K., Mishima, K., Kamio, Y., Ayabe, N., Kakei, R., & Kim, Y. (2021). Training types associated with knowledge and experience in public health workers. *Research Square*. <https://doi.org/10.21203/rs.3.rs-644140/v1>

Oka, T., Ishikawa, S., Saito, A., Maruo, K., Stickley, A., Watanabe, N., Sasamori, H., Shioiri, T., & Kamio, Y. (2021). Changes in self-efficacy in Japanese school-age children with and without high autistic traits after the Universal Unified Prevention Program: a single-group pilot study. *Child Adolesc Psychiatry Mental Health*, 1, 1-11.

Saito, A., Matsumoto, S., Sato, M., Sakata, Y., & Haraguchi, H. (2021). Relationship between Parental Autistic Traits and Parenting Difficulties in a Japanese Community Sample. *PsyArXiv*. <https://psyarxiv.com/yfv8w/>

Tsuji, Y., Matsumoto, S., Saito, A., Imaizumi, S., Yamazaki, Y., Kobayashi, T., Fujiwara, Y., Omori, M., & Sugawara, M. (2021). Mediating role of abnormal sensory processing in the relationship between autistic traits and internalizing problems. *PsyArXiv*. <https://psyarxiv.com/t5wy9/>

Takei, A., & Imaizumi, S. (2021). Effects of color-emotion association on facial expression judgments. *PsyArXiv*. <https://psyarxiv.com/bw6es/>

Tagami, U., & Imaizumi, S. (2021). Visual and verbal processes in right-left confusion: Psychometric and experimental approaches. *Frontiers in Psychology*. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2021.753532>

Nishiguchi, Y., Imaizumi, S., & Tanno, Y. (2021). Upward action promotes selective attention to negative words *Heliyon*, 7(11) , e08394. <https://doi.org/10.1016/j.heliyon.2021.e08394>

Hamaguchi, J. & Utsumi, S. (2021). Unlearning-Based Professional Development for Early Childhood Care and Education: Survey of the ECCELL Program at Ochanomizu University, Japan. *Higher Education and Student Support*, 11, 25-31.

Kawasaki, Y., Akamatsu, R., Fujiwara, Y., Omori, M., Sugawara, M., Yamazaki, Y., Matsumoto, S., Iwakabe, S., & Kobayashi, T. (2021). Later chronotype is associated with unhealthy plant-

based diet quality in young Japanese women. *Appetite*.

<https://doi.org/10.1016/j.appet.2021.105468>

Aizawa, N. & Omori, M. (2021). The mediating effect of cognitive appraisal on the relationship between sleep habits and the stress response among Japanese female college students. *BMC psychology*. <https://doi.org/10.1186/s40359-021-00602-w>

Ito, S., Matsumoto, J., Sakai, Y., Miura, K., Hasegawa, N., Yamamori, H., Ishimaru, K., Kim, Y., & Hashimoto, R. (2021). The positive association between insight and attitudes toward medication in Japanese patients with schizophrenia: evaluation with the Schedule for Assessment of Insight (SAI) and the Drug Attitude Inventory-10 Questionnaire (DAI-10) *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 5, 187-188.

Mitsuhashi, M., & Gyobu, I. (2021). How Did the Young Children Encounter the Japanese Urban Landscape?: A Study on Emergent Pedagogy for Sustainability Transformation. *Sustainability*. <http://dx.doi.org/10.3390/su13179723>

岡田了祐 (2021). 主体性を涵養する低学年教育－お茶の水女子大学附属小学校の教育実践に着目して－. *学校教育*, 1249, 6-13.

岡田了祐 (2021). ICT を活用した授業の振り返りと評価－使うべき三つの理由－. *社会科教育*, 8月号, 32-35

辻谷真知子 (2021). 保育における安全のための遊びのルールについての検討－「リスキーな遊び」の分類を手がかりに－. *国際幼児教育研究*, 28, 83-98.

石田佳織・宮田まり子・辻谷真知子・宮本雄太・秋田喜代美 (2021). 幼稚園・保育所・認定こども園での地域活用の実態に関する全国調査:人口規模の視点からの地域の意義や環境の分析. *都市計画論文集*, (56)1, 14-23.

高橋哲 (2021). 非自殺性の自傷行為の機能に関する文献展望. *お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要*, 22, 39-51.

神尾陽子 (2021). 特集 (学会企画シンポジウム) ダイバーシティ社会に向けて－支援からエンパワーメントへの転換－. 高機能 ASD 者の幸せな就労のために: メンタルヘルスを含む包括的な視点. *発達障害研究*, 43(1), 56-58.

神尾陽子 (2021). 特集 (学会企画シンポジウム) ダイバーシティ社会に向けて—支援からエンパワーメントへの転換— 指定討論. *発達障害研究*, 43(1), 58.

神尾陽子 (2021). マルトリートメントと神経発達症との関係—エビデンスの再整理—. *精神科治療学*, (36)1, 17-22.

神尾陽子 (2021). 児童青年期から成人期までのメンタルヘルス—ライフコースアプローチの視点から—. *臨床精神医学*, 50(9), 929-935.

秋葉澄伯・平井みどり・糠塚康江・相澤彰子・小松浩子・高井伸二・石川冬木・岡本尚・神尾陽子・郡山千早・高倉弘喜・中川晋一・三嶋廣繁 (2021). 日本学術会議第二部大規模感染症予防・制圧体制検討分科会が2020年7月に発出した提言「感染症の予防と制御を目指した常置組織の創設について」. *学術の動向*, 26(9), 29-36.

原口英之・神尾陽子 (2021). ASD 児に対するエビデンスに基づく療育—日本におけるABAにおける療育と育児支援—. *精神科*, 39(5), 585-591.

神尾陽子 (2021). 総説. 発達障害の疑いのある子どもとその親への早期対応. *小児科臨床*, 74(11), 1301-1304

砂川芽吹 (2021). 自閉スペクトラム症の女性の主観的な経験理解—海外文献の質的システマティックレビュー—. *自閉症スペクトラム研究*, 19(1), 13-21.

砂川芽吹 (2021). 成人期に診断を受けた自閉スペクトラム症者の自己効力感に関する基礎的研究. *発達障害研究*, 43(1), 120-130.

齊藤彩 (2022). 中学生の注意欠如・多動傾向および自尊感情と行為面に関する問題との関連. *お茶の水女子大学人文科学研究*, 18, (2022年3月発刊予定)

齊藤彩 (2021). 親の注意欠如・多動症的行動特性と養育における困難との関連. *Precision Medicine*, 4(11), 69-71.

河本泰信・坂元章・堀内由樹子・秋山久美子・祥雲暁代・篠原菊紀・佐藤拓・西村直之・石田仁・牧野暢男 (2021). パチンコ・パチスロ遊技障害レベルの重度化に伴うストレス解消行動の推移. *精神医学*, 63(8), 1257-1267.

浜野隆 (2021). 非認知能力とは何か. *季刊理想*, vol.142.

浜野隆 (2021). 幼児教育・保育の国際的動向. *比較教育学研究*, 63, 2-17.

浜口順子 (2021). 子どもの生活世界の現象学的探究—ユトレヒト学派臨床的教育学の意義に関する一考察—. *幼児の教育*, 120(3), 52-62.

菅原ますみ (2021). 小児期逆境体験に関する発達研究の動向—影響緩和要因に注目して—. *Precision Medicine*, 4(6), 589-595.

(5) 年度別 書籍一覧

【2016 年度】

伊藤亜矢子 (2017). 学校教育とカウンセリング 藤澤伸介 (編) 探究!教育心理学の世界 (pp. 102-105) 新曜社

伊藤亜矢子 (2017). 学級風土と学級経営 藤澤伸介 (編) 探究!教育心理学の世界 (pp. 108-113) 新曜社

伊藤亜矢子 (2017). 学級はどう変化していくか 藤澤伸介 (編) 探究!教育心理学の世界 (pp. 236-237) 新曜社

上原泉 (2017). 3.発達研究の方法 向田久美子 発達心理学概論 (pp. 35-50) 放送大学教育振興会

上原泉 (2017). 4.乳児期の発達:知覚とコミュニケーション 向田久美子 発達心理学概論 (pp. 51-66) 放送大学教育振興会

上原泉 (2017). 6.幼児期の発達:言葉と認知 向田久美子 発達心理学概論 (pp. 81-96) 放送大学教育振興会

上原泉 (2017). 8.児童期の発達:認知発達と学校教育 向田久美子 発達心理学概論 (pp. 113-128) 放送大学教育振興会

神尾陽子 (2017). 子どもの心の健康を学校で育て、守る:教育と医療を統合した心の健康支援. 叢書 23 子どもの健康を育むために-医療と教育のギャップを克服する- 編集 神尾陽子, 桃井眞里子, 児玉浩子, 山中龍宏, 高田ゆり子, 衛藤隆, 原寿郎, 水田祥代 叢書 23 子どもの健康を育むために-医療と教育のギャップを克服する- (pp. 99-114) 日本学術協力財団

神尾陽子 (2017). 発達障害児・者の思春期・青年期の社会的課題 日本医師会雑誌 (pp. 2337-2340) 日本医師会

神尾陽子 (2017). 乳幼児における精神保健 編集代表樋口輝彦, 小阪憲司, 荒田寛 精神保健福祉士養成セミナー:精神保健学-精神保健の課題と支援. 第2巻第6版 (pp. 17-24) へ

るす出版

神尾陽子 (2017). 学童期における精神保健 編集代表樋口輝彦, 小阪憲司, 荒田寛 精神保健福祉士養成セミナー:精神保健学—精神保健の課題と支援. 第2巻第6版 (pp. 24-33) へるす出版

神尾陽子 (2017). 思春期における精神保健 編集代表樋口輝彦, 小阪憲司, 荒田寛 精神保健福祉士養成セミナー:精神保健学—精神保健の課題と支援. 第2巻第6版 (pp. 33-41) へるす出版

石飛信・荻野和雄・神尾陽子 (2017). ASD の治療と療育 別冊日本臨牀 新領域別症候群シリーズ 37「精神医学症候群 (第2版) I—発達障害・統合失調症・双極性障害・抑うつ障害—」 (pp. 60-63)

小玉亮子 (2016). ジェンダーと市民性—多様化するドイツ社会と家族 北村友人編 グローバル時代の市民形成 (pp. 217-239) 岩波書店

小玉亮子 (2017). 第1章 接続期における親と教師の連携—グローバル社会の中で問われる家族と学校— 小玉亮子編 幼小接続期の家族・園・学校 (pp. 2-23) 東洋館出版社

清水美紀・加藤美帆・小玉亮子 (2017). 第3章 接続期の親たちの期待と不安 小玉亮子編 幼小接続期の家族・園・学校 (pp. 40-53) 東洋館出版社

小玉亮子・清水美紀・加藤美帆 (2017). 第4章 親と教師のコミュニケーション 小玉亮子編 幼小接続期の家族・園・学校 (pp. 56-70) 東洋館出版社

加藤美帆・小玉亮子・清水美紀 (2017). 第5章 接続期の親たちの教育参加にみる期待と不安 小玉亮子編 幼小接続期の家族・園・学校 (pp. 73-90) 東洋館出版社

Sugawara, M., Matsumoto, S., & Sakai Atsushi (2016). Developmental Psychology in Japan: Developmental Follow-up Studies 岩立志津夫・子安増生・根ヶ山光一 Frontiers in Developmental Psychology Research: Japanese Perspectives (pp. 97-109) ひつじ書房

菅原ますみ (2016). 子どもの発達と貧困 低所得層の家族・生育環境と子どもへの影響 秋田喜代美・小西祐馬・菅原ますみ (編著) 貧困と保育 (pp. 195-220) かもがわ出版

菅原ますみ (2016). 第4章 第2節 子どもの青年期への移行、巣立ちと夫婦関係 宇都宮博・神谷哲司 (編) 夫と妻の生涯発達心理学 (pp. 158-172) 福村出版

菅原ますみ (2017). メディア環境と子どもの発達 神尾陽子他8名 (編) 学術叢書23 子どもの健康をはぐくむために—医療と教育のギャップを克服する (pp. 29-47) 公益財団法人日本学術協力財団

浜野隆 (2016). 経済開発のための教育 小松太郎 途上国世界の教育と開発 (pp. 11-24) 上智大学出版

浜野隆 (2016). 基礎教育 (就学前教育と初等中等教育) 小松太郎 途上国世界の教育と開発 (pp. 163-180) 上智大学出版

宮里暁美 (2017). 第6章 親を支える・親に支えられる—子ども理解を中心において— 小玉亮子編 幼小接続期の家族・園・学校 (pp. 94-114) 東洋館出版社

【2017 年度】

上原泉 (2018). 8.心の発達 繁榊算男 心理学概論 (pp. 120-132) 遠見書房

大森美香 (2018). 第 12 章 肉食行為の心理学 野林 厚志 肉食行為の研究 (pp. 335-363) 平凡社

神尾陽子 (2018). 初期発達 責任編集藤野博・東條吉邦. 日本発達心理学会 編 発達科学ハンドブック 10 自閉スペクトラムの発達科学 (pp. 8-21) 新曜社

神尾陽子 (2018). Map 眼で見る発達障害.発達障害 企画 神尾陽子 最新医学別冊: 診断と治療の ABC130 (pp. 7-14) 最新医学社

神尾陽子 (2018). コラム グレーゾーンという診断閾下 企画 神尾陽子 最新医学別冊: 診断と治療の ABC130 (pp. 53-54) 最新医学社

神尾陽子 (2018). 2 歳までの ASD 早期兆候と早期診断 企画 神尾陽子 最新医学別冊: 診断と治療の ABC130 (pp. 86-92) 最新医学社

神尾陽子 (2018). コラム 発達障害児は児童虐待のリスクが高い 企画 神尾陽子 最新医学別冊: 診断と治療の ABC130 (pp. 147-148) 最新医学社

海老島健・石飛信・高橋秀俊・神尾陽子 (2018). ASD の問題行動および精神医学的へ依存症の治療 企画 神尾陽子 最新医学別冊: 診断と治療の ABC130 (pp. 158-164) 最新医学社

神尾陽子 (2017). SRS-A. 編集 内山登紀夫 最新医学別冊: 診断と治療の ABC130 (pp. 50-53) 医学書院

石飛信・神尾陽子 (2017). 自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害 (ASD) 1336 専門家による私の治療 [2017-2018 年度版] .日本医事新報社, (pp. 1673-1674) 日本医事新報社

神尾陽子 (2018). 発達障害のある児の早期発見と早期支援の意義 企画 神尾陽子 かかりつけ医等発達障害対応力向上研修テキスト (pp. 1-3 - 1-40) 国立精神・神経医療研究センター

神尾陽子 (2018). 発達障害児・者の発達の道筋：子どもから大人へ 企画 神尾陽子 かかりつけ医等発達障害対応力向上研修テキスト (pp. 1-41 - 1-87) 国立精神・神経医療研究センター

刑部育子 (2017). 第2章絵の中で豊かにしゃべり始めた子どもの「ことば」 佐藤慎司・佐伯胖 (編) かかわることば：参加し対話する教育・研究へのいざない (pp. 65-84) 東京大学出版会

小玉亮子 (2017). <教育と家族>研究の展開－近代的孩子観・近代家族・近代教育の再考を軸として 藤崎宏子・池岡義孝編 現代日本の家族社会学を問う 多様化の中の対話 (pp. 33-56) ミネルヴァ書房

Sakamoto, A. (2018). The Influence of Information and Communication Technology Use on Students' Information Literacy. J. Voogt, G. Knezek, R. Christensen, & K.-W. Lai(Ed.), *Second Handbook of Information Technology in Primary and Secondary Education* (pp. 272-291) Springer International Publishing.

坂元章 (2017). メディア影響問題に関する社会貢献活動 都築誉史 ICT・情報行動心理学 (pp. 102-106) 北大路書房

坂元章 (2017). メディアの影響に関する心理学 一方法、実際、仕事一 都築誉史 ICT・情報行動心理学 (pp. 79-101) 北大路書房

西村直之 (2018). ワイリー・ブラックウェルギャンブリング障害ハンドブック デイビッド・リチャード, アレックス・ブラッチンスキー, リア・ノーワー 編著 日工組社会安全研究財団

富士原紀絵・耳塚寛明 (2018). 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究 国立大学法人お茶の水女子大学

Fujiwara, K. (2017). Heiji Oikawa:group-based dynamic teaching and curriculum reconstruction. YAMASAKI Yoko & KUNO Hiroyuki(Ed.), *Educational Progressivism, Cultural Encounters and Reform in Japan* (pp. 41-56) Routledge.

富士原紀絵 (2017). 総合的な学習の時間・子どもの今（現在）と未来を見すえた総合的な学習の時間の展開を 水原克敏 新小学校学習指導要領改訂のポイント (pp. 106-111) 日本

標準

富士原紀絵 (2017). コラム・カリキュラム・マネジメント (CM) とは 水原克敏 新小学校
学習指導要領改訂のポイント (pp. 70-71) 日本標準

松浦素子 (2018). 日本発祥の心理療法 1: 森田療法 矢澤美香子 (編) 基礎から学ぶ心理療
法 (pp. 150-156) ナカニシヤ出版

松浦素子 (2018). 日本発祥の心理療法 2: 内観療法 矢澤美香子 (編) 基礎から学ぶ心理療
法 (pp. 157-162) ナカニシヤ出版

松島のり子 (2018). 日本における保育の歴史 2 ―戦後― 伊藤潔志 (編著) 哲学する保育
原理 (pp. 60-64) 教育情報出版

平岡公一 (2018). 介護保険制度の創設・改革と日本の高齢者ケア・レジーム 須田木綿子・
平岡公一・森川美絵編 東アジアの高齢者ケア―国・地域・家族のゆくえ (pp. 54-80) 東
信堂

平岡公一 (2018). 東アジアにおける高齢者ケアシステム―台湾・韓国・日本の比較と若
干の考察 須田木綿子・平岡公一・森川美絵編 東アジアの高齢者ケア―国・地域・家族の
ゆくえ (pp. 334-353) 東信堂

【2018 年度】

伊藤亜矢子 (2019). 第 12 章 学級づくりの援助 野島 一彦・繁柵 算男 (監修), 石隈利紀 (編) 教育・学校心理学/公認心理師の基礎と実践 18 卷 (pp. 159-170) 遠見書房

伊藤亜矢子 (2019). 第 3 章 教育分野の実践－事例スーパービジョン 事例③学級崩壊・事例④体罰 増田 健太郎 (著, 編集), 野島 一彦 (監修) 教育分野-理論と支援の展開 (公認心理師分野別テキスト 3) (pp. 76-83) 創元社

岩壁茂 (2019). 恥(シェイム)…生きづらさの根っこにあるもの (アスクセレクション 2) アスクヒューマンケア

岩壁茂 (2018). カウンセリングテクニック入門-プロカウンセラーの技法 30 金剛出版

神尾陽子 (2018). 発達障害者の地域生活支援 精神保健医療福祉白書編集委員会編集 精神保健医療福祉白書 2018/2019－多様性と包括性の構築 (pp. 43) 中央法規

神尾陽子 (2018). 発達障害のアセスメント 編著市川宏伸 発達障害の早期発見と支援へつなげるアプローチ (pp. 61-70) 金剛出版

石飛信・海老島健・神尾陽子 (2018). 児童・思春期における自閉症スペクトラム障害(ASD)の薬物治療①－包括的支援環境下における薬物治療－ 中村和彦編集 児童・思春期精神疾患の薬物治療ガイドライン (pp. 63-79) じほう

刑部育子 (2018). 第 9 章領域「表現」の現代的課題と新たな試み 無藤隆 (監修)・浜口順子 (編者代表) 領域 表現 新訂 事例で学ぶ保育内容 (pp. 213-242) 萌文書林

佐伯胖・刑部育子・苺宿俊文 (2018). ビデオによるリフレクション入門:実践の多義創発性を拓く 東京大学出版会

小玉亮子 (2019). 二十世紀初頭のドイツにおける母の日と教育 小山静子・小玉亮子 (編著);比較家族史学会監修 子どもと教育－近代家族というアリーナー(家族研究の最前線 3) (pp. 141-174) 日本経済評論社

坂本佳鶴恵 (2019). 女性雑誌とファッションの歴史社会学 新曜社

Sugawara, M. & Matsumoto, S. (2018). Parental health, personality, and life-satisfaction Barbara Holthus, Hans Bertram(Eds.), *Parental well-being: Satisfaction with work, family life, and family policy in Germany and Japan (Monographien aus dem Deutschen Institut für Japanstudien, Band62)*. (pp. 197-221) IUDICIUM.

菅原ますみ (2019). 第2章-4 家庭の養育力と社会 無藤隆・大豆田啓友・松永静子編著 教育・保育の現在・過去・未来を結ぶ論点 汐見稔幸とその周辺 (pp. 110-126) エイデル研究所

浜口順子 (2018). 第1章 §7 幼児教育と幼児教育と領域「表現」 無藤隆 (監修)・浜口順子 (編者代表) 領域 表現 新訂 事例で学ぶ保育内容 (pp. 38-46) 萌文書林

浜口順子 (2018). 第2章 乳幼児期の発達と表現 無藤隆 (監修)・浜口順子 (編者代表) 領域 表現 新訂 事例で学ぶ保育内容 (pp. 47-68) 萌文書林

浜口順子 (2018). 第5章 §3 友達を受け止める, §4 話し合う 無藤隆 (監修)・浜口順子 (編者代表) 領域 表現 新訂 事例で学ぶ保育内容 (pp. 47-68) 萌文書林

富士原紀絵・耳塚寛明 (2019). 第1章調査研究の概要, 第2章「教育効果の高い学校」の特徴, 第3章「校内格差を克服している学校」の特徴, 第7章「成果が上がっている学校」の抽出, 第11章高い成果を上げている学校・教育委員会の訪問レポート (分担), 第12章知見の統合と教育政策・実践への示唆, 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究 国立大学法人お茶の水女子大学

富士原紀絵 (2018). 教育方法学における歴史研究の動向 日本教育方法学会 教育実践の継承と教育方法学の課題 (pp. 138-149) 図書文化

富士原紀絵 (2019). 第12章 教育課程をめぐる今日の動向 (1) 教育課程の研究校制度 根津朋実 教育課程 (pp. 153-166) ミネルヴァ出版

富士原紀絵 (2019). 日本の教師による子ども哲学の源流 お茶の水女子大学附属小学校 新教科「てつがく」の挑戦: “考え議論する”道徳教育への提言 (pp. 142-143) 東洋館出版社

松島のり子 (2018). 幼稚園におけるコミュニティ・スクールの導入を考える 池田幸代・田中謙 (編著) マネジメントする保育・教育カリキュラム (pp. 36-38) 教育情報出版

宮里暁美 (2018). 第 6 章保育者が支える表現 無藤隆 (監修)・浜口順子 (編者代表) 領域表現 新訂 事例で学ぶ保育内容 (pp. 135-164) 萌文書林

宮里暁美 (2018). 保育がグングンおもしろくなる 記録・要録 書き方ガイド (ひろばブックス) ムック メイト

宮里暁美 (2018). 第 5 章第 2 節子どもと豊かに生活するための保育者の個性 汐見稔幸・大豆生田啓友 (監修)・大豆生田啓友・秋田喜代美・汐見稔幸 (編著) 新しい保育講座 2 保育者論 (pp. 111-122) ミネルヴァ書房

宮里暁美 (2018). 「ツクル×アソブ×イノチ」と出会える園庭 糸長浩司 (監修) BIOCITY 〈2018 No.76〉特集 子どものための屋外環境—校庭・園庭から「まち」へ (pp. 24-28) 株式会社ブックエンド

武藤世良 (2019). 第 9 章 社会関係の生涯発達—社会と関わり続ける— 西村純一・平野真理 (編著) 生涯発達心理学 (pp. 103-120) ナカニシヤ出版

【2019 年度】

Gomez, B., Iwakabe, S., & Vaz, A. (2019). International themes in psychotherapy integration. J. C. Norcross & M. R. Goldfried (Eds.) *Handbook of Psychotherapy Integration* (3rd. Ed.). Oxford University Press.

岡田了祐 (2019). 第 6 章小学校社会科第 3 学年の指導・評価－実際に授業を単元で構想してみよう－ 社会認識教育学会編 小学校社会科教育 (pp. 54-77) 学術図書出版社

神尾陽子 (2019). 特集 発達障害～適切な支援のための医療とは～ 企画 神尾陽子
Pharma Medica Vol.37, No.8. (pp. 7-8) メディカルレビュー社

刑部育子 (2019). 第 2 章乳幼児期の発達と表現 小林紀子・砂上史子・刑部育子 (編) 新しい保育講座①保育内容「表現」 (pp. 19-33) ミネルヴァ書房

刑部育子 (2019). 第 3 章子ども理解における発達の観点 高嶋景子・砂上史子 (編) 新しい保育講座③子ども理解と援助 (pp. 39-53) ミネルヴァ書房

小玉亮子・小山祥子 (2019). 幼児教育 北村友人・佐藤真久・佐藤学 (編) SDGs 時代の教育 すべての人に質の高い学びを (pp. 95-108) 学文社

浜野隆 (2019). 第 1 章調査研究の概要 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究 国立大学法人お茶の水女子大学

浜野隆 (2019).第 2 章「教育効果の高い学校」の特徴 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究 国立大学法人お茶の水女子大学

浜野隆 (2019).第 3 章「校内格差を克服している学校」の特徴 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究 国立大学法人お茶の水女子大学

浜野隆 (2019).第 7 章「成果が上がっている学校」の抽出 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究 国立大学法人お茶の水女子大学

浜野隆 (2019).第 11 章高い成果を上げている学校・教育委員会の訪問レポート (分担) 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究 国立大学法人お茶の水女子大学

浜野隆 (2019).第 12 章知見の統合と教育政策・実践への示唆 学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究 国立大学法人お茶の水女子大学

浜野隆 (2019). 親の年収や学歴が学力に影響するって本当なの？ 教育開発研究所 教育の最新事情がよく分かる本 2020 (pp. 216-218)

富士原紀絵 (2019). (項目) 学校週 5 日制、言語活動、総合的な学習の時間、生きる力、ゆとり教育 橋本美保ほか 改訂教職用語辞典 一芸社

富士原紀絵 (2019). カリキュラムの歴史的研究 日本カリキュラム学会 現代カリキュラム研究の動向と展望 (pp. 284-291) 教育出版

宮里暁美 (2019). 第 4 章保育士の仕事とその一日 汐見稔幸・大豆生田啓友 (監修) 大豆生田啓友・秋田喜代美・汐見稔幸 (編著) アクティベート保育学 02 保育者論 (pp. 55 - 74) ミネルヴァ書房

武藤世良 (2019). 6 章 感情の評価・知識・経験 日本感情心理学会 (企画)・内山伊知郎 (監修)・中村真・武藤世良・大平英樹・樋口匡貴・石川隆行・榊原良太・有光興記・澤田匡人・湯川進太郎 (編集) 感情心理学ハンドブック (pp. 100-141) 北大路書房

武藤世良 (2019). 第 10 章 道徳的情動—クリスチャンソンの情動教育を中心に— 荒木寿友・藤澤文 (編著) 道徳教育はこうすれば〈もっと〉おもしろい—未来を拓く教育学と心理学のコラボレーション— (pp. 104-114) 北大路書房

内海緒香 (2020). 第 6 章 保育の環境と評価 宮里暁美(編集) 思いをつなぐ 保育の環境構成 0・1 歳児クラス編: 触れて感じて人とかかわる (pp. 122-132) 中央法規出版

内海緒香 (2020). 第 6 章 保育の環境と評価宮里暁美(編集) 思いをつなぐ 保育の環境構成 2・3 歳児クラス編: 遊んで感じて自分らしく (pp. 116-126) 中央法規出版

内海緒香 (2020). 第 6 章 保育の環境と評価 宮里暁美 (編集) 思いをつなぐ 保育の環境構成 4・5 歳児クラス編: 遊びを広げて学びに変える (pp. 126-136) 中央法規出版

小玉亮子 (2020). 幼児教育とは何か 小玉亮子編 MINERVA はじめて学ぶ教職 20 『幼児教育』 (pp. 1-13) ミネルヴァ書房

小玉亮子 (2020). 幼児教育の変遷 小玉亮子編 MINERVA はじめて学ぶ教職 20 『幼児教育』 (pp. 15-27) ミネルヴァ書房

小玉亮子 (2020). 幼児の発達と教育 小玉亮子編 MINERVA はじめて学ぶ教職 20 『幼児教育』 (pp. 67-80) ミネルヴァ書房

小玉亮子 (2020). 幼児教育の課題と展望小玉亮子編 MINERVA はじめて学ぶ教職 20 『幼児教育』 (pp. 185-197) ミネルヴァ書房

大森正博 (2019). オランダの社会保障 松村祥子・田中耕太郎・大森正博 編著 『新世界の社会福祉 フランス・ドイツ・オランダ』 (pp. 386-388) 旬報社

大森正博 (2019). II 医療保険 松村祥子・田中耕太郎・大森正博 編著 『新世界の社会福祉 フランス・ドイツ・オランダ』 (pp. 440-466) 旬報社

大森正博 (2019). II 医療・介護制度の問題点と政策的対応 松村祥子・田中耕太郎・大森正博 編著 『新世界の社会福祉 フランス・ドイツ・オランダ』 (pp. 502-522) 旬報社

大島巖・源由理子・山野則子・贅川信幸・新藤健太・平岡公一 (2019). 実践家参画型エンパワメント評価とは 大島巖・源由理子・山野則子・贅川信幸・新藤健太・平岡公一編 実践家参画型エンパワメント評価の理論と方法——CD-TEP 法：協働による EBP 効果モデルの構築 (pp. 2-33) 日本評論社

大島巖・源由理子・山野則子・贅川信幸・新藤健太・平岡公一ほか 10 名 (2019). CD-TEP 評価法アプローチ——実践と理論とエビデンスに基づき協働で「効果モデル」を構築するアプローチ 大島巖・源由理子・山野則子・贅川信幸・新藤健太・平岡公一編著 実践家参画型エンパワメント評価の理論と方法——CD-TEP 法：協働による EBP 効果モデルの構築 (pp. 76-126) 日本評論社

大島巖・源由理子・山野則子・贅川信幸・新藤健太・平岡公一 (2019). 社会的意義、成果と課題、今後の展望 大島巖・源由理子・山野則子・贅川信幸・新藤健太・平岡公一編著 実践家参画型エンパワメント評価の理論と方法——CD-TEP 法：協働による EBP 効果モデルの構築 (pp. 372-388) 日本評論社

菅原ますみ (2020). 巻頭特集 子どもとメディア～乳幼児・児童生徒のメディア接触や依

存の実態 社会福祉法人 恩賜財団母子愛育会愛育研究所編 日本子ども資料年鑑 2020
(pp. 16-21) KTC 中央出版

岡琢哉・神尾陽子 (2020). 心の健康は病気になる前の予防が重要 心の健康発達・成長支援マニュアル (pp. 13-16) こころの健康教室サニタ

原田剛志・岡琢哉・神尾陽子 (2020). 教育と医療（児童精神科）との良い連携のあり方 心の健康発達・成長支援マニュアル (pp. 77-83)こころの健康教室サニタ

石川信一・村澤孝子・岡琢哉・桑原千明・神尾陽子 (2020). 小学校におけるメンタルヘルス予防プログラムの実装心の健康発達・成長支援マニュアル. 心の健康発達・成長支援マニュアル (pp. 101-108) こころの健康教室サニタ

齊藤彩・神尾陽子 (2020). 子どものメンタルヘルスを測る：SDQ 心の健康発達・成長支援マニュアル (pp. 121-145) こころの健康教室サニタ

神尾陽子 (2020). 1 発達心理学と精神医学 - 乳幼児の精神発達理論と最近の神経科学の進歩は精神医学を変えるのか-. 精神医学の科学的基盤 責任編集 加藤忠史, 総監修 山脇成人, 神庭重信 Power Mook 精神医学の基盤[4] 2020 Spring. (pp. 151-161) 学樹書院

【2020 年度】

山宮裕子 (2020). 装いの文化差 鈴木公啓 (編集) 装いの心理学 - 整え飾るこころと行動 (pp. 222-236) 北大路書房

高橋哲 (2020). 第 1 章 犯罪とは? - 犯罪非行理論を概観する 門本泉 (編集) 公認心理師の基本を学ぶテキスト 19 司法・犯罪心理学 (pp. 15-30) ミネルヴァ書房

宮里暁美・刑部育子・森義仁・内海緒香・山崎寛恵・土谷香菜子 (2020). DVD 経済産業省「未来の教室」実証事業の記録 お茶大こども園ラボ 乳幼児保育での STEAM 教育の試み 岩波映像

富士原紀絵 (2020). 第 4 章 2 CD 科が学校カリキュラムに示唆するもの お茶の水女子大学附属中学校編 コミュニケーション・デザインの学びをひらく (pp. 184-190) 明石書店

富士原紀絵 (2020). 第 10 章 専門的スキルとはどのようなものとみなされるのか? ジョン・ハッティ、グレゴリー・イエーツ著、原田信之訳者代表 学習効果を可視化する学習科学 (pp. 132-172) 北大路書房

富士原紀絵 (2020). 第 11 章 いかにして専門的スキルは開発されるのか? ジョン・ハッティ、グレゴリー・イエーツ著、原田信之訳者代表 学習効果を可視化する学習科学 (pp. 132-172) 北大路書房

富士原紀絵 (2020). 第 12 章 学級での指導領域における専門的スキル ジョン・ハッティ、グレゴリー・イエーツ著、原田信之訳者代表 学習効果を可視化する学習科学 (pp. 132-172) 北大路書房

神尾陽子 (2020). Deborah Fein, Michelle A. Dunn 著 神尾陽子監訳, 岩淵デボラ訳 学級担任のための発達障害支援ガイドー自閉スペクトラム症のある子どもが学校生活で輝くために 星和書店

日本保育学会課題研究委員会 (課題研究委員: 大方美香・岸井慶子・佐々木晃・中谷奈津子・三宅茂夫・浜口順子・矢藤誠慈郎・渡辺英則) (2020). 日本保育学会課題研究委員会 (課題研究委員: 大方美香・岸井慶子・佐々木晃・中谷奈津子・三宅茂夫・浜口順子・矢藤誠慈郎・渡辺英則) 幼保一体化の課題と展望ー認定こども園全国調査のまとめー 一般社団法人日本保育学会

大森美香 (2020).第1章 感情のもつ社会的機能とその応用 社会性と感情の理論および実践 (pp. 10-66) 野間教育研究所

小牧元・大森美香 (2020).マインドフル・イーティング 日本評論社

山崎洋子・大森美香 (2021). 第2章 ストレスと心身の疾病 金沢吉展 (編) 公認心理師ベーシック講座 健康・医療心理学 (pp. 31-46) 講談社サイエンティフィック

山崎洋子・大森美香 (2021). 第3章 生活習慣病と疾病の予防 金沢吉展 (編) 公認心理師ベーシック講座 健康・医療心理学 (pp. 47-66) 講談社サイエンティフィック

松島のり子 (2020). 子ども・子育て支援制度の中の幼児教育・保育制度をめぐる課題 秋川陽一・坂田仰・藤井穂高 (編纂) 幼児教育・保育制度改革の展望—教育制度研究の立場から— (pp. 109-127) 教育開発研究所

宮里暁美・内海緒香 (2021). 夕方の保育についての探究: 文京区立お茶の水女子大学こども園の実践 お茶の水女子大学

宮里暁美・内海緒香 (2021). 夕方の保育についての探究: 文京区立お茶の水女子大学こども園の実践 デジタルブック お茶の水女子大学

大森美香 (2021). 食の心理学 野林厚志 (編集) 世界の食文化百科事典 (pp.21-22) 丸善出版

山岸由紀 (2021). 第一章 学生はインターンシップでどのように職業意識を発達させるのか?—プロセスと, その促進・阻害要因 岡田昌毅 (編著) 働く人の生涯発達心理学 Vol.2—M-GTA によるキャリア研究— 晃洋書房

宮里暁美・刑部育子・内海緒香 (2021). II 小さなこども園の大きな挑戦 4つの提案 提案2 真正評価・園内研修での対話による評価・保育の環境構成の評価『5つの視点』文京区お茶の水女子大学こども園 小さなこども園の大きな挑戦 -子どもたちの「やりたい」が発揮される生活— 創立5周年記念 実践報告書 (pp. 15-19)

宮里暁美・刑部育子・内海緒香 (2021). III お茶大こども園ラボ 3つの報告 報告3 探究プロジェクト 経済産業省 未来の教室 文京区立お茶の水女子大学こども園 小さなこども

も園の大きな挑戦 -子どもたちの「やりたい」が発揮される生活— 創立 5 周年記念 実践報告書 (pp. 105-120)

宮里暁美・刑部育子・内海緒香・山崎寛恵 (2021). 絵記録 夕方の保育についての探究 文京区立お茶の水女子大学こども園の実践 お茶大こども園ラボ (pp. 39-44)

内海緒香・川邊尚子・宮里暁美 (2021). 保育環境の評価と「5つの視点」 ていねいに観ることから始まる子どもの探求を支える保育環境を評価するときの「5つの視点」 (pp. 3-14)

富士原紀絵 (2021). 第 8 章 大正新教育と学習経済論 田中智志・橋本美保 大正新教育の実践 (pp. 228-255) 東信堂

大森正博 (2020). Covid-19 感染症とオランダの政策的対応 宇佐美耕一・小谷眞男・後藤玲子・原島博 (編著) 世界の社会福祉年鑑 2020 (pp. 95-136) 旬報社

大多和直樹 (2020). e ポートフォリオの入試利用をめぐる功罪 中村高康 (編) 大学入試がわかる本—改革を議論するための基礎知識 (pp. 129-148) 岩波書店

津川律子・岩壁茂 (2020). 〈特別対談〉 アセスメントからケース・フォーミュレーションへ 津川律子 (著) 改訂増補 精神科臨床における心理アセスメント入門 金剛出版

岩壁茂 (2020). 完全カラー図解 よくわかる臨床心理学 ナツメ社

武藤世良 (2021). 第 2 章第 9 節 Respect 尊敬 尊敬とは 秋山美紀・島井哲志・前野隆司 (編集) 看護のためのポジティブ心理学 (pp. 160-169) 医学書院

石丸径一郎 (2020). 実践だけでなく、研究も学ぶ 下山晴彦・石丸径一郎 (編著) 臨床心理学概論 (公認心理師スタンダードテキストシリーズ 3) (pp. 50-59) ミネルヴァ書房

石丸径一郎 (2020). 心だけでなく、身体も社会も大切に 下山晴彦・石丸径一郎 臨床心理学概論 (公認心理師スタンダードテキストシリーズ 3) (pp. 60-69) ミネルヴァ書房

【2021 年度】

上原泉 (2021). 2章 発達の二大理論と次にくる理論 ――ピアジェの発達段階説とヴィゴツキーの社会的相互作用説 繁榎算男編著 心理学：理論の楽しみと使い方／理論バトル (pp. Pp.17-32.) 新曜社

岡田了祐 (2021). Q5 社会科の目標における「知識・技能」について述べなさい。唐木清志・永田忠道 (編纂) 新・教職課程演習 第11巻 初等社会科教育 (pp. 20-22) 協同出版

岡田了祐 (2021). Q7 社会科における授業の工夫改善につながる学習評価のあり方について述べなさい。唐木清志・永田忠道 (編纂) 新・教職課程演習 第11巻 初等社会科教育 (pp. 100-102) 協同出版

岡田了祐 (2021). Q18 学習材づくりの考え方について述べなさい。石崎和宏・中村和世 (編纂) 新・教職課程演習 第15巻 (pp. 47-48) 協同出版

川口広美・岡田了祐・福井駿 (2021). 現代の社会科教育にみる政治主体形成の実践 教育目標・評価学会 (編集) <つながる・はたらく・おさめる>の教育学―社会変動と教育目標― (pp. 197-212) 日本標準

岡田了祐 (2021). コンピテンス・動機・行動のモデルと評価のためのパラダイム ハロルド・バーラック, フレッド・M・ニューマン, エリザベス・アダムス, ダグ・A・アーチバルド, ティレル・バージェス, ジョン・レイヴン, トマス・A・ロンバーグ(著) 真正の評価―テストと教育評価の新しい科学に向けて― (pp. 113-153) 春風社

堀田諭・岡田了祐 (2021). 子どもの個性やコンピテンシーをいかに評価していけばよいのか? ―観点の多元化・開放化と文脈を重視するジョン・レイヴンの評価論を手がかりに― ハロルド・バーラック, フレッド・M・ニューマン, エリザベス・アダムス, ダグ・A・アーチバルド, ティレル・バージェス, ジョン・レイヴン, トマス・A・ロンバーグ(著) 真正の評価―テストと教育評価の新しい科学に向けて― (pp. 303-315) 春風社

Yamamiya, Y., & Suzuki, T. (2021). Beauty standards and body-image issues in the West and Japan from a cultural perspective Maxine L. Craig (ed) The Routledge companion to beauty politics (pp. 112-122) Routledge

山田美穂 (2021). 心理臨床 セラピストの身体と共感 春風社

倉光修・山田美穂 (2021). ヴァレリー・シナソン著／倉光修・山田美穂監訳 知的障害のある人への精神分析的アプローチ—人間であるということ ミネルヴァ書房

神尾陽子 (2021). 第1章 メンタルヘルスの観点からみた発達障害のある子の支援ニーズ. 神尾陽子編著・柘植雅義監修 発達障害のある子のメンタルヘルスケア—これからの包括的支援に必要なこと (pp. 4-11) 金子書房

神尾陽子・染谷怜・桑原千明・佐藤直子 (2021). 第9章 発達障害のある子の育児支援—メンタルヘルスケアの観点からのペアレント・トレーニング. 神尾陽子編著・柘植雅義監修 発達障害のある子のメンタルヘルスケア—これからの包括的支援に必要なこと (pp. 67-75) 金子書房

Imaizumi, S., Asai, T., & Miyazaki, M. (2021). Cross-referenced body and action for the unified self: Empirical, developmental, and clinical perspectives Y. Ataria, S. Tanaka, & S. Gallagher Body Schema and Body Image: New Directions (pp. 194-209) Oxford University Press

耳塚寛明・浜野隆・富士原紀絵 (2021). 学力格差への処方箋 勁草書房

浜野隆 (2021). 公開されている教育データをどう読むか 耳塚寛明 (監修)・中西啓喜 (編著) 教育を読み解くデータサイエンス (pp. 99-122) ミネルヴァ書房

松島のり子 (2021). 「幼稚園令」「幼保一元化／幼保一体化」「保育一元化論」「幼稚園と保育所との関係について」 中坪史典・山下文一・松井剛太・伊藤嘉余子・立花直樹 (編集) 保育・幼児教育・子ども家庭福祉辞典 (pp. 274-276) ミネルヴァ書房

松島のり子 (2022). 平成の時代と保育 1989 (平成元) 年～2019 (平成 31) 年 社会環境、制度・政策の変遷を中心に 東京都公立保育園研究会 私たちの保育史 平成元年～平成三一年 未来につながる礎として (pp. 11-44) ひとなる書房

松島のり子 (2022). 編集を終えて 東京都公立保育園研究会 私たちの保育史 平成元年～平成三一年 未来につながる礎として (p. 223) ひとなる書房 (2022年3月発刊予定)

山口直子・松島のり子 (2022). 年表で見る社会と保育 1989～2019 (平成元～31) 年 30

年間をふり返る 東京都公立保育園研究会 私たちの保育史 平成元年～平成三一年 未来につながる礎として (pp. 45-84) ひとなる書房 (2022年3月発刊予定)

武藤世良 (2021). 第2章 情動の発達とそのメカニズム 遠藤利彦 (著) 情動発達の理論と支援 (シリーズ 支援のための発達心理学) (pp. 22-34) 金子書房

菅原ますみ (2021). 第1章 子どもの発達と社会への適応 相澤仁 (編集代表)・酒井厚 (編集)・舟橋敬一 (編集) シリーズみんなで育てる家庭養護 3 里親・ファミリーホーム・養子縁組 「アセスメントと養育・家庭復帰プランニング」 (pp. 14-31) 明石書店

Ryoko Kodama (2021). "Education and gender in Japan and Norway from historical perspective", Masako Ishii-Kuntz, Guro Korsnes Kristensen & Priscilla Ringrose (eds.) *Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway. Same but Different?* (pp. 55-69) Routledge

France Rose Hartline & Keiichiro Ishimaru (2021). *The struggle to belong: Trans and gender-diverse experiences in Japan and Norway* Masako Ishii-Kuntz, Guro Korsnes Kristensen & Priscilla Ringrose (eds.) *Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same but Different?* (pp. 157-172) Routledge

石丸徑一郎 (2021). ふつうのヨガとマインドフルネスを意識したヨガの違い 下山晴彦 このころのストレッチ：しなやかで折れない自分になる 30のヒント (pp. 89-95) 主婦の友社

3. 活動報告（国際シンポジウム、セミナー等）

（1） 研究所主催「年度末成果報告会」

人間発達教育科学研究所では、人間の発達と教育に関する総合的・国際的な研究拠点構築をめざし、毎年度末に1年間の研究・活動成果をふりかえる「成果報告会」を開催している。“健やかで活力ある人生を送るために～『子ども期からのしあわせ』を考える”という研究所のミッションのもと、幅広い研究領域の研究成果と実践を学内外に積極的に発信し、さらなる研究推進と連携強化をめざしている。

<2016年度 成果報告会>



【日時】2017年3月13日（月） 13:30～17:30

【場所】お茶の水女子大学 共通講義棟2号館102室

【後援】お茶の水女子大学 ヒューマンライフイノベーション開発研究機構(OHLI)

【プログラム】

司会：内海緒香（特任講師）

13:30～13:35 開会あいさつ（小川温子 OHLI 機構長）

13:35～13:45 研究所の概要と今年度の活動について（菅原ますみ IEHD 所長）

13:45～17:15 部門別研究報告

<教育・保育実践研究部門>

宮里暁美～こども園において「私たち意識」が醸成されていくプロセスを探る

富士原紀絵・田村恵美～附属学校園の研究支援

米田俊彦～高大連携入学者の卒業生に対する調査

浜口順子・安治陽子～多様な人が学び合う場をつくる

-----休憩-----

<人間発達基礎研究部門>

上原 泉～自伝的記憶の発達—想起時期と想起内容の検討（中間報告）—

中西啓喜～就学前教育による教育達成の分析—青少年期から成人期への移行についての追跡的研究（JELS 第5次）より

浜野 隆～国連 SDG4 と国際教育協力の課題

菅原ますみ～家族の QOL に関する長期縦断研究

大森美香～ボディイメージと健康行動に関する実証的研究：経験サンプリング法を用いて

坂元 章～ぱちんこ遊技障害に関する研究 ―測定、実態、規定因、抑止方法―

<発達臨床支援研究部門>

青木紀久代～持続的コミュニティ援助とひきこもり支援

17:15～17:30 今後の研究・活動計画と課題等（菅原ますみ IEHD 所長）

【参加者の声～事後アンケート結果】

●研究報告内容についての意見・感想

- ・研究所内で行われている多岐に渡る研究活動のご報告を拝聴する大変貴重な機会となりました。ありがとうございました。
- ・所員の先生方の研究内容がよくわかり、今後の研究所の方向性を考えることができ良かったです。
- ・最後に研究所全体のミッションをご説明いただいたことで、自分たちの研究の全体の中での位置付けや、他の研究所との関係を明確にできたように感じます。興味深い発表（報告）ばかりで、とても勉強になりました。ありがとうございました。
- ・先生方のご研究をうかがえ、様々な角度から個の発達を生態学的なモデルの中で捉えようとされていることが分かりました。どれも大変興味深く、研究の視点としても学ばせていただきました。
- ・発達の視点で各研究がどの時点に位置づけられるかを明示されるとより一貫性をもったわかりやすい報告会になるように感じました。
- ・普段おはなしをうかがうことのできない先生のお話がきけてよかったです。
- ・各先生が他の様々なご研究の成果を伺うことができ大変勉強になりました。大変貴重な機会を与えて頂き感謝申し上げます。
- ・短い時間の中に内容がしっかりこめられていて参考になりました。
- ・各領域の先生方の最新の研究成果をまとめて伺うことができる場がないので、とても有意義な会でした。短い発表時間ながら、研究成果はもちろん、先生方の研究に対する情熱がひしひしと伝わってきて大変感動しました。
- ・まとまった講演（30分以上～小1時間位）として聞きたかった。
- ・盛りだくさんではあったが、全く時間の長さを感じることなくきき入りました。自らもがんばろうとエネルギーを得ることができたように思います。
- ・先生方の研究についてお話をうかがう機会があまりないので、発表方法や研究手法、内容など、とても勉強になった。
- ・先生が他の最新のご研究や活動を知ることができ大変勉強になりました。定期的で開催していただけると、学生さん、院生さんにとっても有意義だと思います。

- ・国内外問わず先生方のご研究を詳しく聞くことができ良かった。特に、各分野の枠組みやデータ分析のお話まで、自身の研究の参考となる情報が多く良かった。
 - ・さまざまな分野の研究の実際、成果等をじっくり伺うことができ充実した時間を過ごさせて頂きました。ばらばらの研究にみえて、そうではなく、人間の発達、人間を育てることにつながっていて、あらためて研究という取り組みの意義を考え直すこともできたように思います。ありがとうございました。
- 「人間発達教育科学研究所」の今後の研究・活動に望むこと・期待すること
- ・外部発信がさらに必要と感じました。
 - ・個々のプロセスの中で様々な切り口で研究されていることが伝わってきました。先生方の個々の発表に加えて、先生方の研究に対する意見交換のセッションもうかがえたら、なお、おもしろいお話をうかがえそうと感じました。重なり合いそうな（関連のある）テーマを研究されている先生方も多いかと思いましたので、ぜひ、それが立体的になるような場をいただければと思いました。ご発表うかがわせていただきありがとうございました。
 - ・各研究同士の連携を視野に入れられると発展できるのではないかと思います。
 - ・一般への公開を是非、と思います。ニーズがあると思います。
 - ・このような会をひきつづき続けてほしい。
 - ・せっかくの機会なので、事前告知をもう少し大々的にしていただけたら、もっと多くの人が参加できると思った。
 - ・人間発達教育科学研究所での講演や今回のような報告会情報が研究棟のポスター掲示板にあるとさらにありがたいと思います（今回は少しわかりづらい所にあり、先生に偶然伺って参加できたので）。とても良い会でしたので、今後もどうぞよろしくお願い致します。
 - ・このような中身の濃い、しかも豪華なメンバーによる報告会はそうそうないので、もっと多くの学生さんたちが参加できるよう工夫をして頂きたい。
 - ・現在進行中の研究の成果・知見をぜひまた伺いたいと思います。

<2017年度 成果報告会>



- 【日時】 2018年3月21日(水・祝) 13:30～16:00
【場所】 お茶の水女子大学 本館3階306室
【後援】 お茶の水女子大学 ヒューマンライフイノベーション開発研究機構(OHLI)

【プログラム】

司会：内海緒香（特任講師）

- 13:30～13:35 開会あいさつ（菅原 IEHD 所長）
13:35～13:55 青木紀久代・古志めぐみ・・・長期ひきこもりを経験する若者の理解と支援
13:55～14:05 内海緒香・・・保育におけるモニタリング尺度の開発
14:05～14:35 宮里暁美・・・多様性を生かす保育の創造～お茶大こども園2年目の歩みから～
・・・・・・・・・・休憩（5分）・・・・・・・・・・
14:40～15:00 松本聡子・・・平成29年度施設調査報告
15:00～15:20 上原 泉・・・幼児における物体や内面に対する認知—中間報告—
15:20～15:40 坂元 章・・・ぱちんこ遊技障害に関する研究—全国調査の結果と今後—
15:40～15:55 質疑応答&意見交換
15:55～16:00 今後の研究・活動計画と課題等（菅原ますみ IEHD 所長）

【参加者の声～事後アンケート結果】

● 研究報告内容についての意見・感想

- ・ 基礎的知見の蓄積と実践報告の両面での活動が聞けて興味深かったです。
- ・ さまざまな研究分野の最新の研究成果を伺うことができ、研究所の先生方の多様な研究の取り組みの実際を学ばせていただきました。新しく学んだことも多く、興味深かったです。ありがとうございました。
- ・ 先生方の調査をありがとうございました。現場にいる者としては、とてもたのしみであり、大切なことなので、今後もよろしくお願ひしたいです。
- ・ 様々な興味深い研究や成果のご発表ありがとうございました。
- ・ 先生方のお話が分かりやすく、実践を思い浮かべながら聞かせて頂きました。テレビ視聴では、ひきこもりの家族では、テレビでなくてYouTubeを見ているとうかがうことが

多く、親子関係のあり方が家族でのテレビ視聴に影響していると実感しました。

- ・様々な分野で研究が展開されていることが理解できました。それぞれが連携した会が今後あるとより豊かな内容が展開できるように感じる。
- ・著名な先生方のプレゼン方法や資料の作成方法等、とても参考になりました。ひとつひとつの調査の設計や方法論も勉強になりました。
- ・ひきこもりの事業の経過？について長々と聞く必要があるのかわからなかった。
- ・1年間（2年間）の活動状況、取組み成果が良くわかりました。多岐にわたり、様々な視点から真摯に取り組んでおられ、コンパクトですばらしい発表でした。途中経過の報告としては、内容も濃かったと思います。
- ・分野が異なる先生方の実態調査の結果、その後の研究の発展が理解しやすかったです。各先生方の体験から研究につなげている部分、オリジナリティやニーズがわかり、とてもおもしろかったです。研究の勉強になりました。

●今後、人間発達教育科学研究所のイベントで取り上げてほしいテーマ

- ・昨年健康イノベーションに参加をさせていただきました。食事・運動・睡眠のバランスが大切で、くずれた時などにウツがひそんでいることを学びました。つづけて詳しいことをありがとうございます。本日もとても楽しみにしています。
- ・女性に関する研究もうかがいたいなと思いました。

<2018年度 成果報告会>



【日時】2019年3月26日（火） 13:30～16:30

【場所】お茶の水女子大学 本館3階306室

【後援】お茶の水女子大学 ヒューマンライフイノベーション開発研究機構(OHLI)

【プログラム】

司会：内海緒香（特任講師）

13:30～13:35 開会あいさつ（森田 OHLI 機構長）

13:35～13:45 藤原大樹・・・小中高の体系的指導で育てる統計的問題解決力

13:45～14:00 岡田了祐・・・お茶小におけるシティズンシップ教育の展開と構造

14:00～14:15 武藤世良・・・尊敬の発達過程を探るために

- 14:15～14:30 山岸由紀・・・高校における新学習指導要領に準拠したキャリア教育効果測定尺度の開発とキャリア教育プログラムの効果検証
- 14:30～14:40 質疑応答 (10分)
 ・・・・・・・・休憩 (5分)・・・・・・・・
- 14:45～15:00 石丸径一郎・・・お茶大におけるトランスジェンダー学生受け入れ決定の経緯と意義
- 15:00～15:15 西村直之・・・ぱちんこ依存の介入と治療
- 15:15～15:30 菅原ますみ・・・テレビ視聴と子どもの言語発達との関連～“子どもに良い放送”プロジェクト：乳児期からの長期縦断研究から
- 15:30～15:45 堀井武彦・・・ライフ×アート展 2018 報告
- 15:45～16:00 小玉亮子・・・中国における幼児教育の現状と課題
- 16:00～16:10 山崎洋子・松本聡子・・・学内科研アンケート調査報告
- 16:10～16:20 質疑応答 (10分)
- 16:20～16:30 総括&来年度に向けて (大森美香 IEHD 所長)

【参加者の声～事後アンケート結果】

●研究報告内容についての意見・感想

- ・様々な研究がされていて興味深かった。もっと附属にも身近に感じられるとよいと思います。また、幅広い発達段階にまたがっていることが分かり、もっと自分たちの研究にも活かしていけないものかと考えさせられました。
- ・様々な分野からの成果報告があり、大変興味深く聞くことができた。
- ・具体的な研究内容をうかがう貴重な機会でした。
- ・IEHD の研究員の方々、附属、大学で行われている研究についてコンパクトにまとめた報告をうかがうことができるとても良かったです。
- ・成果報告会はそれぞれの方が進めている研究について分かりよかったです。
- ・色々な研究があったが、報告対象としてのメインターゲットをもっと公に出すと良いと思った。そうすれば学外参加者がもっと増えると思う。
- ・報告会の日程が春休みに入ってしまったので、参加できない教員も多くいて残念であった (日程は事前に知らせていましたが)。先生方の春休み中の予定があるので、その点を何とかしたい。
- ・様々なテーマがあり興味深かった。
- ・バラエティのあるテーマで興味深い内容だった。
- ・このようなテーマで研究がすすんでいることをあらためて知りました。どれも身近で、実は教育にとって考えなくてはならないテーマでした。テーマの説明に重きがおかれていた (ものが多かった) ので、私としては理解できたのですが、もう少し、成果や人間発達にかかわるところをじっくりお聞きしたかったです。

- ・多忙面の研究成果の報告が聞け大変有意義でした。
- ・様々な研究成果をうかがうことができ勉強になりました。もう少し詳しくうかがいたいと思う一方、短くまとめていただいているからこそその聞きやすさもあり、今回の形式でよかったのではないかと感じました。
- ・私は算数・数学部会に所属していますが、他の研究を聞くことができたとともに、尊敬など新たな視点にも触れることができた。もっと聞きたいところもあったので、1テーマごとの時間をあと5分ずつでも長くしてほしかった。
- ・魅力的な話題が多くありました。
- ・多様な研究成果（附属学校の実践成果も含め）がなされていて興味深く存じました。
- ・先生方のご研究成果を伺い、さまざまな領域で成果が蓄積されつつあることを知りました。対象、領域、分野、手法などそれぞれに特色がありながら、人間発達にかかわる点では共通しており、研究所のもつスケールの大きさを感じたように思います。
- ・差し支えない範囲で報告資料の Handout 版（6枚 1P などコンパクトなもの）を配布頂けるとありがたい。
- ・一つ一つの発表は興味深いものが多々ありましたが、本成果報告会が誰を対象として、どのような趣旨で行われているのか、目的や意義がよく分からなかった。それは、IEHDの存在意義が見えないということでもあります。

●今後、人間発達教育科学研究所のイベントで取り上げてほしいテーマ

- ・幼児の虐待防止に関することなど、幅広い分野で（乳幼児・児童など）
- ・所員同士のディスカッション、外部の人を含んだパネルディスカッション。
- ・LGBT、トランスジェンダーについては今後も継続的に話を聞きたい。
※附属中も女子の制服のズボンを検討する必要があるか考えている。
- ・研究所の成果の附属学校への還元（？）について
- ・今後も毎年、研究所の特色を生かして多様な研究報告がなされるとよいと思います。
- ・附属学校と大学との連携研究について
- ・無償化して提供すべき幼児教育の内容・質（予定されている幼児教育・保育の無償化は実質的に保育の無償化であり、提供される幼児教育の内容・質の保障はない。今後、我が国において真に必要なのは、一定の基準をクリアした幼児教育であると考えられ、新たなムーブメントにつながるようなイベントを期待します）。
- ・真島先生のご質問にもあった附属校園との連携研究、そのための連携研究の活性化。

(2) 研究所共催/後援 シンポジウム/セミナー

①「グローバルリーダーとは— 今、そして 未来に向けて— (オンライン)」



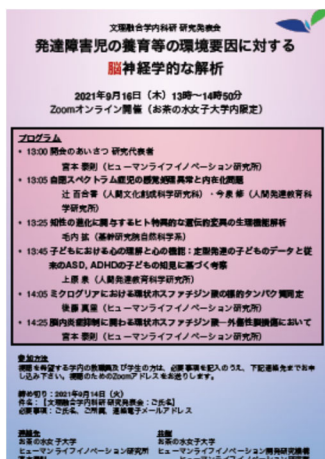
【日時】2021年3月27日(土) 13:00~15:00
 【形式】Zoom ウェビナーによるオンライン配信
 (無料/定員 1000名)
 ※オンデマンド配信: 4月18日(日)まで公開
 【主催(連携共催)】お茶の水女子大学
 ヒューマンライフイノベーション研究所 (IHLI)
 人間発達教育科学研究所 (IEHD)
 グローバルリーダーシップ研究所 (IGL)
 サイエンス&エデュケーションセンター (SEC)
 ライフワールド・ウォッチセンター (LWWC)
 遺伝カウンセリングコース (GCC)

【内容】

- 基調講演「すべての女性の真摯な夢の実現に向けて」室伏きみ子 お茶の水女子大学長
- 鼎談「これからの女性のための高等教育と人材育成のあり方」
 林伴子 内閣府男女共同参画局長
 室伏きみ子 お茶の水女子大学長
 佐々木泰子 お茶の水女子大学理事・副学長

②文理融合学内科研 研究発表会

「発達障害児の養育等の環境要因に対する脳神経学的な解析」



【日時】2021年9月16日(木) 13:00~14:50
 【開催方法】Zoom オンライン開催 (学内限定)
 【共催】お茶の水女子大学
 ヒューマンライフイノベーション開発研究機構
 ヒューマンライフイノベーション研究所
 人間発達教育科学研究所
 【プログラム】
 13:00 開会のあいさつ 研究代表者
 宮本 泰則 (ヒューマンライフイノベーション研究所)

- 13:05 「自閉スペクトラム症児の感覚処理異常と内在化問題」
 辻 百合香 (人間文化創成科学研究科)・今泉 修 (人間発達教育科学研究所)
- 13:25 「知性の進化に関与するヒト特異的な遺伝的変異の生理機能解析」

毛内 拓 (基幹研究院自然科学系)

13:45 「子どもにおける心の理解と心の機能：定型発達の子どものデータと従来の ASD, ADHD の子どもの知見に基づく考察」

上原 泉 (人間発達教育科学研究所)

14:05 「ミクログリアにおける環状ホスファチジン酸の標的タンパク質同定」

後藤 真里 (ヒューマンライフイノベーション研究所)

14:25 「脳内炎症抑制に関わる環状ホスファチジン酸—外傷性脳傷において」

宮本 泰則 (ヒューマンライフイノベーション研究所)

③日本健康心理学会第 34 回大会「アフターコロナ時代の健康心理学をめざして」

大会準備委員会企画シンポジウム

「演題：食行動と心身の健康—心身医学・心理学・栄養学からのアプローチ—」

【日時】2021 年 11 月 20 日 (土) 11:30~17:00

【形式】動画配信

【企画者】日本健康心理学会大会準備委員会

【共催】お茶の水女子大学

ヒューマンライフイノベーション研究所・人間発達教育科学研究所

【登壇者】司会者：大森 美香 (お茶の水女子大学・東北大学)

赤松 利恵 (お茶の水女子大学)

話題提供者：菊地 裕絵 (国立研究開発法人 国立国際医療研究センター)

話題提供者：山崎 洋子 (お茶の水女子大学)

話題提供者：河寄 唯衣 (お茶の水女子大学・ポツダム大学)

指定討論者：藤原 葉子 (お茶の水女子大学)

④生物&HLI・IEHD 研究所共催セミナー

「父加齢の次世代の影響について エピジェネティクスで理解する」



【日時】2021 年 12 月 17 日 (金) 15:00~17:00

【対象】学生・教職員・一般 (参加費無料・事前登録制)

【開催方式】ハイブリッド開催

①オンライン (Zoom Webinar)

②本校共通講義棟 2-201 での開催 (本学関係者のみ)

【主催】お茶の水女子大学生物学科

【共催】ヒューマンライフイノベーション研究所

人間発達教育科学研究所

【講演者】東北大学大学院 医学系研究科 教授

大隅 典子先生

(3) 部門別 主催シンポジウム/セミナー

【保育・教育実践研究部門】

①中国幼児教育訪日代表団訪問受け入れ

人間発達教育科学研究所では、2016年6月10日（金）と同14日（月）の2日間にわたり、中国幼児教育訪日代表団の「お茶の水女子大学視察研修」をホストした。同代表団は、清華大学社会科学院2名、中国四川省成都市教育局地方行政官4名、四川省幼稚園園長等19名（計25名）で組織され、日本の幼児教育視察研修の一環としてお茶の水女子大学を訪れたものである。

第一日目（6月10日）のオープニングセレモニーでは、今回の視察受け入れにご尽力頂いた室伏学長より歓迎の挨拶を頂戴し、受入代表機関である人間発達教育科学研究所の菅原研究所長からも本学の幼児教育施設や研究所の概要が紹介された。午前中は、今年4月に開園したばかりの文京区立お茶の水女子大学こども園を、午後は附属幼稚園といずみナーサリーを見学した。見学の合い間をぬって、附属幼稚園の伊集院副園長より、貴重な歴史資料や写真を交えて附属幼稚園の歴史や教育活動等についてのレクチャーもあった。お茶大にある3つの異なる乳幼児教育・保育施設で実践されているさまざまな教育・保育のあり方にふれ、参加者からは数多くの質問や感想が寄せられた。

第二日目（6月14日）は、本研究所顧問である榊原副学長・理事の挨拶に始まり、日中の学術交流を先導するJST中国総合研究交流センターの米山フェローより挨拶と活動報告があった。その後、中国側からは、①清華大学日本研究センターの概要と研究活動について、②四川省成都市の概要と乳幼児教育の現状について、③同市幼稚園の施設紹介と教育内容についての3件の報告があった。日本からは、本研究所「保育・教育実践研究部門」の浜口部門長より「乳幼児教育を基盤とした生涯学習モデルの構築（ECCELL）事業：H22-27年度」の事業概要についてレクチャーがあり、その後、本視察研修の通訳アテンドを担当する姜娜氏と孫怡氏（いずれもお茶大院出身）が、自らの日本での子育て経験に基づく発表を行った。2時間半という短い研修時間にもかかわらず、双方にとって中身の濃い充実した学びの場となり、意見交換会の時間が終わってもなお白熱した議論が続いた。今回の視察研修を機に、乳幼児教育に関するさらなる情報交流・研究協力を推進していくことを互いに誓い合い、2日間のお茶大視察研修を終えた。



<視察・研修スケジュール>

- 【6/10 (Fri)】 10:00~17:00 場所：本館 103 会議室 (Rm.103)
- 10:00 お出迎え (大学正門) Welcome at the main gate
- 10:10~10:20 オープニングセレモニー Opening Ceremony (Rm.103)
菅原ますみ研究所長 Masumi, SUGAWARA
(Director, Institute for Education and Human Development)
- 10:20~10:30 学長挨拶 Greetings from the president (Rm.103)
室伏きみ子学長 Kimiko, MUROFUSHI
(President, Ochanomizu University)
- 10:40~11:40 こども園見学 Kodomo-en Tour
宮里暁美園長 Akemi, MIYASATO
(Principal, Bunkyo-ku Ochanomizu Kodomo-en)
- 11:50~12:50 昼食 Lunch (Rm.103)
- 13:00~14:00 附属幼稚園見学 Kindergarten Tour
- 14:10~15:00 附属幼稚園レクチャー Kindergarten Lecture (Rm.103)
伊集院理子副園長 Michiko, IJUIN
(Vice-principal, the Kindergarten attached to Ochanomizu University)
- 15:00~15:30 コーヒーブレイク Coffee Break
- 15:30~17:00 いずみナーサリー見学 Izumi Nursery Tour
菊池知子主任保育士 Tomoko, KIKUCHI
(The Chief, Izumi Nersery)
※キャンパスツアー Campus Tour
- 【6/14 (Tue)】 14:30~17:00 場所：本館 103 会議室 (Rm.103)
- 14:30~14:40 ご来賓挨拶 Greetings from the Guests
米山春子氏 Haruko, YONEYAMA
(Fellow, China Research and Communication Center, Japan Science and Technology Agency)
- 14:40~14:50 副学長(研究所顧問)挨拶 Greetings from the Vice-president
榊原洋一研究所顧問 Yoichi, SAKAKIHARA
(Supervisor, Institute for Education and Human Development)
- 14:50~15:20 清華大学日本研究センターご発表 Presentation from Research Center
for Japanese Studies, Tsinghua University
庄英甫先生
- 15:20~16:20 研究所「保育・教育実践研究部門」部門レクチャー

	Lecture by Childcare and Education Research Division, IEHD 浜口順子教授 Junko, HAMAGUCHI (Leader, Childcare and Education Research Division, IEHD)
16:20~16:30	コーヒーブレイク Coffee Break
16:30~16:45	日本と中国における子育て(発表) Reports on Childcare and Education in Japan and China 姜那氏、孫怡氏
16:45~17:00	意見交換会・まとめ Free discussions and Evaluation

②スリランカ政府訪問団受け入れ

人間発達教育科学研究所(保育・教育実践研究部門)では、2017年9月20日(水)9:00~12:00、スリランカ民主社会主義共和国(Democratic Socialist Republic of Sri Lanka)政府訪問団を受け入れ、学内施設の視察見学や研究者との学術交流をサポートした。

今回お茶の水女子大学を訪れたのは、スリランカの幼児教育や保育を担当する Ministry of Women and Child Affairs(MWCA)の3名と MWCA と共に同国で幼児教育支援プロジェクトを展開する世界銀行の教育専門官1名の計4名。同団は9月18日から22日まで日本に滞在し、文科省や国立教育政策研究所をはじめ、日本の幼児教育関連施設を視察訪問した。

人間発達教育科学研究所では、保育・教育実践研究部門のメンバーを中心に、お茶大附属幼稚園や文京区立お茶大こども園の協力を得ながら、以下のようなスケジュールで見学・視察を行った。

【日時】2017年9月20日(水)9:00~12:00

【場所】文京区立お茶の水女子大学こども園、お茶大附属幼稚園

【訪問団】計5名

- Ms. Chandrani Senaratna, Secretary, Ministry of Women and Child Affairs, Sri Lanka
- Ms. Nayana E. Senaratna, Director, Children's Secretariat, Ministry of Women and Child Affairs, Sri Lanka
- Dr. Ravi Nanayakkara, Project Director, Early Childhood Development Project, Sri Lanka
- 世界銀行 荘所さま他1名

【受け入れ先】人間発達教育科学研究所、お茶大こども園、お茶大附属幼稚園

<対応者> 浜口順子教授(IEHD 保育・教育実践研究部門長)
宮里暁美教授(IEHD、こども園園長)
上坂元絵里先生(附属幼稚園副園長)
内海緒香特任講師(IEHD)

【視察スケジュール】

- 9:00～9:50 文京区立お茶の水女子大学こども園見学
 10:00～10:50 お茶の水女子大学附属幼稚園見学
 11:00～12:00 (附属幼稚園園長室にて) 討議、交流



③中国蘭州・西寧・北京)の幼稚園を訪問して～ユニバーサルな保育はあるのか～



【日時】2017年11月29日(水) 18:00～19:30
 【場所】お茶の水女子大学 本館3階344室
 【報告者】浜口順子、小玉亮子、蘆中潔

④公開シンポジウム「中国における幼児教育の現状と課題」



【日時】2018年10月12日(金) 13:30～17:00
 【場所】お茶の水女子大学 本館3階306室
 【定員】150名
 【使用言語】中国語(通訳あり)、日本語
 【概要】本シンポジウムでは中国の幼児教育の専門家をお迎えして中国の幼児教育の現状について学ぶと同時に、幼児教育におけるダイバーシティについて考える。

【プログラム】

- 13:30 開会
 三浦徹 お茶の水女子大学副学長挨拶
 胡志平 中国駐日本大使館公使参事官ご挨拶
 13:45 シンポジウム

鄭名（西北師範大学教授）

「量から質へ：甘粛省の農村における就学前教育を促進する政府の動き」

龍紅芝（西北師範大学准教授）

「対チベット援助型の保育実習生の専門的資質の育成に関する研究」

張国艶（西北師範大学准教授）

「児童の学習と文化：中国西部の農村幼稚園における実践」

劉曉東（華東師範大学教授）

「児童の地位と未来の哲学」

15:50 休憩（10分間）

16:00 コメント

浜口順子（お茶の水女子大学教授）・小玉亮子（お茶の水女子大学教授）

質疑応答

17:00 閉会

⑤お茶大 ECCELL-BP ミニフォーラム「2019-2020 保育者のアンラーニングは今」



【日時】2021年3月22日（月）18:20～19:50

【形式場所】Zoomによるオンライン開催

【講師】武田信子先生（前・武蔵大学教授）

「人生100年時代の継続学習による専門性開発」

【使用言語】中国語（通訳あり）、日本語

【概要】お茶の水女子大学 ECCELL「保育・子育てラーニングプログラム」は、文科省からブラッシュアッププログラム（BP）の認定を受けてもうすぐ2年になる。2年間のBPプログラムの報告（浜口順子、内海緒香）とともに、武田信子先生をお迎えし、専門家のご意見や皆様の声をお聞きする機会としたい。

【プログラム協力】

- ・守随香先生（共立女子大学教授）
- ・宮里暁美（文京区立お茶の水女子大学こども園園長、本学教員）
- ・浜口順子、小玉亮子、刑部育子、内海緒香、松島のり子（人間発達教育科学研究所）

【人間発達基礎研究部門】

①第1回国際セミナー「複雑性悲嘆：喪失後ストレス障害？ “Complicated Grief: A Post-Loss Stress Disorder”



【日時】2016年7月22日（金）15:00～16:30

【場所】お茶の水女子大学生活科学本館1階会議室

【講演者】

Dr. Thanh-Huy Eric Bui, Ph. D.

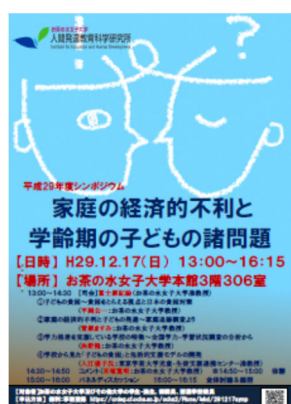
Research Fellow, Massachusetts General Hospital -
Harvard Medical School (ハーバード大学医学大学院：
マサチューセッツ総合病院リサーチフェロー)

【概要】

愛する者の死は、遺族が経験する最も苦しく困難を伴う出来事である。多くの遺族の場合、激しい悲嘆や生活上の混乱は、数週間あるいは数ヶ月で治まる。しかしながら、他の約7%の遺族は、悲嘆を統合し、その後の生活をあらためて前に進むというより、大切な人の死後数年の長期にわたって、強い苦痛を伴う激しい悲嘆や機能不全を経験する。この状態は、複雑性悲嘆（Complicated Grief）と呼ばれ、健康を損ねる深刻な症候群と考えられている。DSM-5（精神障害の診断と統計マニュアル第5版）には、「持続性複雑死別障害」という名称で暫定的に含まれている。講演では、複雑性悲嘆の識別・治療・予防に関する最新の研究を概説する。

②人間発達教育科学研究所 H29 年度シンポジウム

「家庭の経済的不利と学齢期の子どもの諸問題」



【日時】2017年12月17日（日）13:00～16:15

【場所】お茶の水女子大学本館3階306号室

【司会】富士原紀絵（お茶の水女子大学准教授）

【開催趣旨】人間発達教育科学研究所では、人間発達に関する基礎研究と実践研究・臨床研究を結びつけるなかから革新的・効果的な成果発信と提言を行ない、子どもたちの教育的・社会的格差の解消を志向する研究などを含め、少子化を質的・量的に改善する施策や、子どもから青年期以降までの発達の質の向上に向けた施策の策定に貢献することを目標としている。

【プログラム】

- 13:00～13:05 人間発達教育科学研究所長あいさつ（菅原ますみ）
- 13:05～13:30 発表1：平岡公一（お茶の水女子大学教授：IEHD 研究員）
子どもの貧困～貧困をとらえる視点と日本の貧困対策
- 13:30～13:50 発表2：菅原ますみ（お茶の水女子大学教授：IEHD 所長）
家庭の経済的不利と子どもの発達～家庭追跡調査より
- 13:50～14:10 発表3：浜野隆（お茶の水女子大学教授：IEHD 研究員）
学力格差を克服している学校の特徴～全国学力・学習状況調査の分析から
- 14:10～14:30 発表4：入江優子（東京学芸大学児童・生徒支援連携センター准教授）
学校から見た「子どもの貧困」と包括的支援モデルの開発
- 14:30～14:50 コメント：耳塚寛明（お茶の水女子大学教授：IEHD 研究員）
————— 休憩（10分）※質問紙回収 —————
- 15:00～16:00 発表者によるパネルディスカッション
- 16:00～16:15 全体討論&総括

【開催報告】

当日は82名もの参加者があり、大学の教員・学生のみならず、教育・福祉行政関係者やNPO職員等、子どもと関わるさまざまな専門家の方々が参加した。事後に行われたアンケートでは、プログラムの内容に「満足」「やや満足」と回答した人が94%、「今後のご自身の研究・活動にとって有益だと思う」と回答した人が98%にも上り、非常に有意義な研究交流の場となった。シンポジウムに対する意見や感想は以下のとおりである（一部抜粋）。

- ・子どもの貧困を多角的に考えることができました。自分にかけている視点を気づけ大変良かったです。
- ・家庭と学校の両側面から、日本における子どもの貧困についての知見が深まりました。
- ・領域接続的な知見を知ることが出来て良かったです。
- ・大変勉強になりました。ライフコースにおける累積的不利を総論として理解できたため、その後の各先生方の各論がより深く考えられました。
- ・4人の先生方のご報告自体、内容の濃いものでしたが、コメンテーター（耳塚先生）のコメントも、視点、着眼点、今後の取組（改善の方向を考える意味で）を考える意味で極めて有意義なものがありました。経過時間（概して時間の割に盛沢山な発表）に比べ、コストパフォーマンスが高いシンポジウムであったと思います。多くの刺激を頂きました。
- ・今後の研究の成果を定期的に知りたいです。施策等に活かしていきたいです。非常に学びの多い機会となりました。

③国際セミナー「マインドフル・イーティング」Mindful Eating: Eating Less and Enjoying It More



【日時】2018年5月15日(火) 15:00~16:30
 【場所】お茶の水女子大学文教育学部1号館第一会議室
 【講師】Jean Kristeller, Ph.D. (インディアナ州立大学 名誉教授)

【司会・進行】大森美香 (お茶の水女子大学)
 【言語】英語 (通訳なし)

【概要】マインドフル・イーティングは、食べることと、私たちのからだやこころの状態を結びつけるものである。具体的には、空腹感、満腹感、そして味覚という感覚に敏感になることによって、食べ物と私たちのからだとのより良い関係性を築いていく。本講演では、マインドフル・イーティングの理論や基本概念を紹介し、またエビデンスについてもレビューする。

④国際セミナー” Interruption Driven Academia: Staying afloat and on task”



【日時】2019年10月24日(木) 12:10~13:10
 【場所】お茶の水女子大学生生活科学部本館 135 室
 【講師】Rachel Rodgers Ph.D (ノースウェスタン大学 准教授)

【司会・進行】大森美香 (お茶の水女子大学)
 【言語】英語 (通訳なし)

【概要】「論文が書けない!」「研究が進まない!」と頭を抱えている学生 (特に院生、ポスドク) を対象とした研究の生産性向上のためのセミナー。



【日時】2019年10月24日(木) 16:40~18:10
 【場所】お茶の水女子大学生生活科学部本館 135 室
 【講師】Rachel Rodgers Ph.D (ノースウェスタン大学 准教授)

【司会・進行】大森美香 (お茶の水女子大学)
 【言語】英語 (通訳なし)

【概要】

Rachel Rogers 先生は、日本学術振興会外国人招へい研究者として来日し、ボディイメージや食行動研究では、国際的にも第一人者の研究者である。今回は、メディアや産業といった社会文化的な視点から、ボディイメージおよび食行動に関してご講演を頂く。

Many factors in the sociocultural environment may increase risk for body image and eating concerns including the media, and other for profit industries. This talk will review these factors as well as evidence for their contributions to body image and eating concerns. In addition, approach to individual level and universal prevention targeting sociocultural factors will be discussed.

【発達臨床支援研究部門】

①子育て支援 in セブ島～現地コーディネーターが語る



【日時】2017年5月9日(火) 13:30～15:00

【場所】お茶の水女子大学生活科学部本館 135 号室

【講師】Regina Palencia 先生

【コーディネーター】青木紀久代(お茶の水女子大学)

【言語】英語(通訳あり)

【共催】お茶の水女子大学グローバル協力センター

【概要】講師の Palencia 先生は、セブ島の一カトリック教区内の貧困地区で、社会福祉施設を運営。日本の NGO やオランダ、ドイツ等の支援団体のカウンターパートとして、長年にわたり貧困地区の子どもと家庭の福祉に貢献している。幼児教室や放課後プログラム、奨学金制度等、これまで発展させてきた様々な支援システムに触れながら、求められる支援のあり方について話し合う。

②国際セミナーⅡ「音楽療法と発達理論～Schumacher 博士をお迎えして」



【日時】2017年7月8日(土) 15:00～18:00

【場所】お茶の水女子大学生活科学部本館 103 号室

【定員】30 名

【参加資格】守秘義務を果たせる音楽療法家または心理臨床家

【スーパーバイザー】

Schumacher 博士(ベルリン芸術大学)

【通訳】鈴木クリスプ園子(音楽療法士)

【事例発表】鈴木はるみ(北海道医療大学) 他

【コメンテーター】青木紀久代(お茶の水女子大学)

【概要】

Schumacher 博士をお迎えして、博士の開発された音楽療法における自閉症児の「関係性の質アセスメント (AQR)」について、日本での事例をもとに学ぶ。AQR は乳幼児研究と愛着理論を基盤に開発された。今後の自閉症児の理解と支援のために、音楽療法と発達臨床心理学が交流し、貴重な示唆が得られる機会となる。

③国際セミナー「心理療法の文脈的モデル」The Contextual Model of Psychotherapy: Scientific Evidence and Implication



【日時】2018年7月25日(水) 14:30~17:30

【場所】お茶の水女子大学生生活科学部本館 135 室

【講師】Hui Xu Ph.D. (ロヨラ大学シカゴ校 助教授)

【コーディネーター】青木紀久代 (お茶の水女子大学)
水女子大学)

【言語】英語 (通訳あり)

【概要】

What makes psychotherapy work? Which psychotherapy approach is the best? How to be a good psychotherapist? To explore these questions, this seminar introduces the contextual model of psychotherapy with a focus on its scientific evidence and implications for clinical services and training. The contextual model of psychotherapy differs from the medical model of psychotherapy in that it attributes psychotherapy efficacy to contextual or common factors within a variety of treatment modalities (e.g., therapeutic relationships) rather than modality-specific factors (e.g., dysfunctional beliefs)

(4) 年度別 部門共催/後援イベント等

【2016年度】



第3回ライフ×アート展（共催）

【日時】2016年8月2日（火曜日）～4日（木曜日）

11時～18時 ※4日は～15時

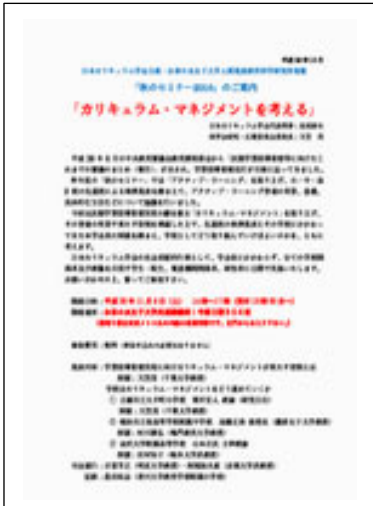
【場所】お茶の水女子大学構内 Student Commons

【主催】お茶の水女子大学アート実践研究会

【共催】ECCCELL（「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業：代表者 浜口順子）

人間発達教育科学研究所「保育・教育実践研究」部門
研究課題名「環境・空間・活動のデザインプロセスに関する研究（代表者 刑部育子）」

【内容】この展覧会は、アート・美術教育実践にかかわるお茶の水女子大学附属校園関係者が展開するアートプロジェクトです。今年はお茶の水女子大学こども園も新しくメンバーに加わり、ひとのライフ〈生・生活・人生〉にうまれるアートを、さまざまな角度から捉え、展示し、表現する展覧会を開催します。



日本カリキュラム学会秋セミナー「カリキュラムマネジメントを考える」（後援）

【日時】2016年11月5日（土） 14:00～17:00

【場所】お茶の水女子大学 共通講義棟1号館3階304

【主催】日本カリキュラム学会

【内容】学習指導要領実現に向けカリキュラム・マネジメントが果たす役割とは（解説：天笠茂（千葉大学教授））

学校はカリキュラム・マネジメントをどう進めていくか

①上越市立大手町小学校 朝井宜人教諭（研究主任）

解説：天笠茂（千葉大学教授）

②横浜市立南高等学校附属中学校 高橋正尚前校長（鎌倉女子大学教授）

解説：村川雅弘（鳴門教育大学教授）

③金沢大学附属高等学校 山本吉次 主幹教諭

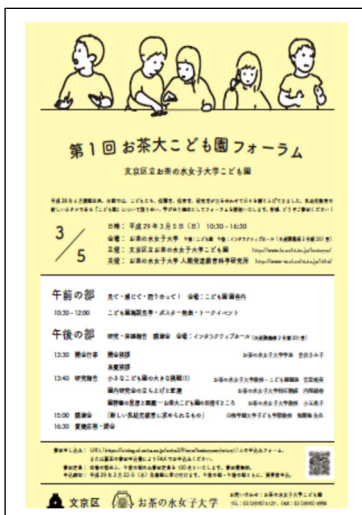
解説：田村知子（岐阜大学准教授）

話題提供者：

- ①廣瀬日美子氏（認定NPO 法人文化学習協同ネットワーク三鷹事業部研修責任者）
- ②清水和義氏（足立区福祉部くらしとしごとの相談センター生活相談係長）
- ③岩藤裕美氏（お茶の水女子大学特任講師）

指定討論者：

- 早川東作氏（東京農工大学教授・保健管理センター所長）
- 青木紀久代氏（お茶の水女子大学准教授・東京都ひきこもりサポートネット監修者）



第1回お茶の水女子大学大子ども園フォーラム（共催）

【日時】2017年3月5日（日） 10:30～16:30

午前の部：10:30～12:00 午後の部：13:30～16:30

【場所】午前の部～文京区立お茶の水女子大学子ども園
午後の部～お茶の水女子大学講堂（徽音堂）

【主催】文京区立お茶の水女子大学子ども園

【共催】人間発達教育科学研究所「保育・教育実践研究部門」

【内容】＜午前の部＞ 見て・感じて・語り合っ！

10:30～12:00

子ども園施設見学・ポスター発表・トークイベント
＜午後の部＞研究・実践報告、講演会

13:40～ 研究報告

(1)小さな子ども園の大きな挑戦(1)

お茶の水女子大学教授・子ども園園長 宮里暁美

(2) 園内研究会の立ち上げと変遷

お茶の水女子大学特任講師 内海緒香

(3) 園評価の思想と課題ーお茶大子ども園の目指すところ

お茶の水女子大学教授 小玉亮子

15:00～ 講演会 「新しい乳幼児教育に求められるもの」

白梅学園大学子ども学部教授 無藤 隆先生

【2017年度】

第8回 「子ども学カフェ」
Good, Bad, and Unknown – 子どもとメディア
 講師：榎原洋一先生
 (子ども学会理事長・小児科医)

子ども学会では、研究・開発委員会を中心として、一つのテーマをめぐり、カンファレンス・シンポジウム・チャイルドサイエンス特集など、さまざまな形で知識と議論を深め、学会としての発展の糧としてまとめて社会に発信するプロジェクト活動を進めようと考えています。その第一弾のテーマが「子どもとメディア」(メディア・リテラシー)です。

「メディア」は、これまで日本子ども学会がその創設の発起人から入れて取り組んで来たテーマです。時代の移り変わりとともに、新たなメディアの登場に子どもたち巻き込み、常に新しい悩みや問題、そしてさまざまな側面が広がっています。それに対応して、科学的研究もさまざまな角度からなされ、有識な知見が蓄まりつつあります。このテーマに詳細的に取り組み発信をされた榎原洋一先生(子ども学会理事長)による、今回の子ども学カフェにご参加ください。

日時： 2017年4月22日(土) 12:30~14:30
場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 101教室
参加費： 会員・学生 500円、一般 1000円
定員： 100人(事前予約をお願いします)
共催： お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所

▶ 予約・お問い合わせの連絡先: huko@biglobe.jp
 4月20日までに、お名前、ご所属、連絡先を明記の上、上記メールアドレスまでお申し込みください。
 メール件名は「子ども学カフェ申込み」としてください。

“子ども学カフェ” 第8回講演会「Good, Bad, and Unknown – 子どもとメディア」(共催)

【日時】 2017年4月22日(土) 12:30~14:30

【場所】 お茶の水女子大学 共通講義棟 101 教室

【主催】 日本子ども学会

【共催】 人間発達教育科学研究所「人間発達基礎研究部門」

【内容】 講師：榎原洋一(お茶の水女子大学教授)

ひきこもりサポーター養成研修

ひきこもりの若者は、全国で50万人を超えられています。彼らには、自分を理解して社会参加を後押ししてあげる、身近な存在が必要です。ここでは、そうしたひきこもりの人々の支援者となる「ひきこもりサポーター」を養成するための講座を開催します。ご参加のある方は、是非ご参加ください。また、サポーターとなった方は、近所地域の課題に応じてボランティア活動を行っていただけます。

内容

- Session1「ひきこもりの理解」
- Session2「ひきこもる若者のこころ」
- Session3「ひきこもり支援のあり方」

対象 都内で若者支援活動を行うことができ、以下の①~③のいずれかに該当する18歳~30歳までの方で、18歳以上親元を離れたいと考えている方。

- ① 心理・教育・福祉・医学のいずれかを専攻する大学・大学院生
- ② 都内の支援団体等で若者支援を行っている方
- ③ 自治体・地域において若者支援を行っている方

日時： 7/14(金)・7/28(金) 13:00~17:00 (いずれの日曜も一泊です)

申込期限： 平成29年7月7日(金)

場所： お茶の水女子大学 ※研修会場の詳細は、後日AXあるいはメールにてお知らせします。

コーディネーター： お茶の水女子大学大学院 基幹研究院 准教授 榎木 紀久代
 東京都ひきこもりサポートネット 監修者

主催： 東京都 東京都ひきこもりサポートネット事務局
 お茶の水女子大学 人間発達教育科学研究所
 (東京都ひきこもりサポートネット)

お問い合わせ・お申込み
 お茶の水女子大学 人間発達教育科学研究所
 東京都ひきこもりサポートネット事務局
 電話：03-5291-2111
 Email: hikomori@komori-tokyo.jp

※この研修事業は、お茶の水女子大学が実費負担しております。

参加をご希望される方は募集の申込書をダウンロードしてお申し込みください。

ひきこもりサポーター養成研修(共催)

【日時】 2017年7月14日(金)、28日(金) 13:30~15:00

【場所】 お茶の水女子大学生活科学部本館 135 号室

【主催】 東京都ひきこもりサポートネット

【共催】 人間発達教育科学研究所「発達臨床支援研究部門」

【対象】 都内で若者支援活動を行うことができ、以下の①~③のいずれかに該当する18歳~30歳までの方。

①心理・教育・福祉・医学のいずれかを専攻する大学・大学院生

②都内の支援団体等で若者支援を行っている方

③自治体・地域において若者支援を行っている方

【内容】 セッション1：ひきこもりの理解

セッション2：ひきこもる若者のこころ

セッション3：ひきこもり支援のあり方

「Joseph J. Tobin 教授と林安希子さんを囲んで」懇話会

【日時】 2017年7月27日(木) 13:30~15:00

【場所】 お茶の水女子大学本館 330 号室

【主催】 お茶の水女子大学三園合同研究会

【共催】 人間発達教育科学研究所「保育・教育実践研究部門」



第4回ライフ×アート展（共催）

【日時】2017年8月2日（水）～4日（金）

11時～18時 ※4日は～15時

【場所】お茶の水女子大学構内 Student Commons

【主催】お茶の水女子大学アート実践研究会

【共催】ECCCELL（「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業：代表者 浜口順子）

人間発達教育科学研究所「保育・教育実践研究」部門
研究課題名「環境・空間・活動のデザインプロセスに関する研究（代表者 刑部育子）」

【内容】アート・美術教育実践にかかわるお茶の水女子大学附属校園関係者が展開するアートプロジェクト。ひとのライフ〈生・生活・人生〉にうまれるアートを、さまざまな角度から捉え、展示し、表現する展覧会。



日本双生児研究学会主催第37回双生児研究会（共催）

“The power of collaboration: lessons learned from the CODATwins project”

【日時】2017年8月18日（金）13:00～15:00

【場所】お茶の水女子大学文教育学部1号館第一会議室

【主催】日本双生児研究学会

【共催】人間発達教育科学研究所「人間発達基礎研究部門」

【内容】講師：カッリ・シルベントイネン博士
(ヘルシンキ大学 社会学部教授)

The Power of Collaboration: Lessons Learning
From the CODATwins Project

司会：横山美江先生（大阪市立大学）

通訳：本多智佳先生（大阪大学）

日本カリキュラム学会「秋のセミナー2017」（後援）

「学び続ける教員像～教員養成・研修のカリキュラムをもとに考える」

【日時】2017年11月4日（土） 14:00～17:00

【場所】お茶の水女子大学共通講義棟2号館1階102教室

【主催】日本カリキュラム学会

【後援】人間発達教育科学研究所「保育・教育実践研究部門」

2017年度
日本カリキュラム学会主催 「秋のセミナー2017」のご案内
学び続ける教員像
―教員養成・研修のカリキュラムをともに考える―

日本カリキュラム学会 代表理事 坂下 隆代
立派な教育実践者の育成 1017 開催

近年、教職大学院の設置を通じて、教職研修の重要性がますます高まるとともに、各地の急速な変遷の中で、知識・技術の更新が求められるようになってきた。教員養成のあり方、教職研修のあり方、教職大学院のあり方などについて、本学会が主催する「秋のセミナー」では、教員養成・研修のカリキュラムをともに考える。また、教職大学院の設置を通じて、教職研修の重要性がますます高まるとともに、各地の急速な変遷の中で、知識・技術の更新が求められるようになってきた。教員養成のあり方、教職研修のあり方、教職大学院のあり方などについて、本学会が主催する「秋のセミナー」では、教員養成・研修のカリキュラムをともに考える。

このセミナーは、教職大学院の設置を通じて、教職研修の重要性がますます高まるとともに、各地の急速な変遷の中で、知識・技術の更新が求められるようになってきた。教員養成のあり方、教職研修のあり方、教職大学院のあり方などについて、本学会が主催する「秋のセミナー」では、教員養成・研修のカリキュラムをともに考える。

このセミナーは、教職大学院の設置を通じて、教職研修の重要性がますます高まるとともに、各地の急速な変遷の中で、知識・技術の更新が求められるようになってきた。教員養成のあり方、教職研修のあり方、教職大学院のあり方などについて、本学会が主催する「秋のセミナー」では、教員養成・研修のカリキュラムをともに考える。

開催日時：2017年11月4日（土）14時～17時（受付13時30分）
開催場所：立派な教育実践者の育成 1017 開催
参加費：無料（資料費のみ別途お支払いください）
申込期間：10月15日（月）～10月25日（水）

① 倉本 哲男（愛知教育大学）
「教職大学院、及び教員研修プログラムにおける理論と実践の融合とは？」
② 金馬 国晴（横浜国立大学）
「学部生が理想の授業・学級・学校を描く講義―教職課程でできるカリキュラム・マネジメント―」
③ 遠藤 貴広（福井大学）
「地域・学校に根ざした長期実践研究をコアにした教師教育カリキュラム―教師教育担当者のカリキュラム・マネジメント―」
④ 上田 綾子（石川県教員総合研修センター）
「教員に求めるカリキュラム・マネジメントに関する知識・意識とは？―県センター研修の取り組みから―」

申込先：村川 雅弘（甲南女子大学） 小柳 和喜雄（奈良教育大学）

【内容】(1) 倉本哲男(愛知教育大学)
「教職大学院、及び教員研修プログラムにおける理論と実践の融合とは？―カリキュラムマネジメント&アクションリサーチを中心に―」

(2) 金馬国晴(横浜国立大学)
「学部生が理想の授業・学級・学校を描く講義―教職課程でできるカリキュラム・マネジメント―」

(3) 遠藤貴広(福井大学)
「地域・学校に根ざした長期実践研究をコアにした教師教育カリキュラム―教師教育担当者のカリキュラム・マネジメント―」

(4) 上田綾子(石川県教員総合研修センター)
「教員に求めるカリキュラム・マネジメントに関する知識・意識とは？―県センター研修の取り組みから―」

司会進行：村川雅弘(甲南女子大学)
小柳和喜雄(奈良教育大学)

お茶の水女子大学
子どもたちの世界をのぞいてみよう
part7～身近な自然“おやま”であそぶ～

現在は子どもたちにより子どもと関わる機会が減少しています。この機会、子どもと関わることを体験し、子どもたちの成長を社会で育てていくことを考えていただく機会を提供いたします。本学会が主催する「子どもたちの世界をのぞいてみよう」シリーズの第7回は「身近な自然“おやま”であそぶ～」をテーマに開催いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

◎ 男性教員の参加も大歓迎です！
◎ 遠方参加された方もお申込みいただけます。
◎ 職員研修の対象になります。
◎ 子ども観光学（11月13日）と両方参加も可能です。
◎ いずみナーサリー（11月13日）と両方参加も可能です。

2017年11月6日（月）9:30-11:30

開催場所：大学本館1F 第二会議室（本館113室）
参加対象：本学教職員、学生
申込先：お茶の水女子大学 国際交流センター 国際交流課
〒162-8601 東京都文京区本郷3-1-1 113号室
TEL: 03-3826-1111（受付時間：11月2日（土）9:30～17:00）
※お茶の水女子大学は、障害者に対する配慮を講じています。ご来場の際は、ご自身の障害やご都合をお知らせください。

お問い合わせ
お茶の水女子大学 国際交流センター 国際交流課
〒162-8601 東京都文京区本郷3-1-1 113号室
TEL: 03-3826-1111（受付時間：11月2日（土）9:30～17:00）

第7・8回「子どもの世界をのぞいてみよう」（共催）

【日時】2017年11月6日（月） 9:30-11:30
「子どもの世界をのぞいてみよう part7 ～身近な自然“おやま”であそぶ～」（いずみナーサリー）
2017年11月13日（月） 15:00-17:00
「子どもの世界をのぞいてみよう part8 ～ものに関わり人と関わる～」（文京区立お茶の水女子大学子ども園）

【集合場所】大学本館第二会議室（113室）

【内容】両日共通
事前レクチャー 20分、施設見学・子どもたちとのふれあい60分、フォローアップ 20分

【主催】グローバルリーダーシップ研究所 COSMOS
【共催】人間発達教育科学研究所「保育・教育実践研究部門」
いずみナーサリー
文京区立お茶の水女子大学子ども園

お茶の水女子大学
子どもたちの世界をのぞいてみよう
part8～ものに関わり人と関わる～

現在は子どもたちにより子どもと関わる機会が減少しています。この機会、子どもと関わることを体験し、子どもたちの成長を社会で育てていくことを考えていただく機会を提供いたします。本学会が主催する「子どもたちの世界をのぞいてみよう」シリーズの第8回は「ものに関わり人と関わる～」をテーマに開催いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

◎ 男性教員の参加も大歓迎です！
◎ 遠方参加された方もお申込みいただけます。
◎ 職員研修の対象になります。
◎ 子ども観光学（11月13日）と両方参加も可能です。
◎ いずみナーサリー（11月13日）と両方参加も可能です。

2017年11月13日（月）15:00-17:00

開催場所：大学本館1F 第二会議室（本館113室）
参加対象：本学教職員、学生
申込先：お茶の水女子大学 国際交流センター 国際交流課
〒162-8601 東京都文京区本郷3-1-1 113号室
TEL: 03-3826-1111（受付時間：11月2日（土）9:30～17:00）
※お茶の水女子大学は、障害者に対する配慮を講じています。ご来場の際は、ご自身の障害やご都合をお知らせください。

お問い合わせ
お茶の水女子大学 国際交流センター 国際交流課
〒162-8601 東京都文京区本郷3-1-1 113号室
TEL: 03-3826-1111（受付時間：11月2日（土）9:30～17:00）



第1回お茶大こども園スペシャル研修会（共催）

「子どもが幸せに育つために・・・」

【日時】2017年11月27日（月）18:30～20:40

【場所】お茶の水女子大学共通講義棟2号館201室

【主催】文京区立お茶の水女子大学こども園

【共催】お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所
お茶の水女子大学三園合同研究会

【プログラム】

- ・趣旨説明
- ・講演「子どもが幸せに育つために」 汐見稔幸先生
- ・鼎談「遊びや生活の中から10の姿を見つけて」
汐見稔幸（白梅学園大学学長）
浜口順子（お茶の水女子大学教授）
宮里暁美（お茶の水女子大学教授・文京区立お茶の水女子大学こども園園長）

東京都若者社会参加応援事業「社会参加準備支援講座」（共催）

【日時】2017年12月1日（金）18:00～20:00

【場所】お茶の水女子大学本館カンファレンスルーム

【主催】東京都ひきこもりサポートネット

【共催】人間発達教育科学研究所「発達臨床支援研究部門」

【内容】ひきこもり等の状態にある若者が社会参加に向かうためには、仲間と目標を共有しながら活動に取り組むことを通して、人や社会とつながる自信を育てていくことが大切である。この講座では、様々なプログラムを通して社会参加への準備支援を行っている団体の取組みを紹介する。



第2回お茶の水女子大学大こども園フォーラム（共催）

【日時】2018年2月18日（日） 9:30～16:40

午前の部：9:30～12:45 午後の部：13:00～16:40

【場所】午前の部～文京区立お茶の水女子大学こども園
午後の部～お茶の水女子大学講堂（徽音堂）

【主催】文京区立お茶の水女子大学こども園

【共催】人間発達教育科学研究所「保育・教育実践研究部門」
お茶の水女子大学附属幼稚園
お茶の水女子大学いずみナーサリー

【内容】

<午前の部> 実践や体験を通して語り合い学び合う！

9:30～11:30 ワークショップ・分科会 1～5

12:10～12:45 あそびうたの会+ポスター発表

<午後の部> 研究・実践報告、講演会

13:10～ 研究報告

(1) 小さなこども園の大きな挑戦(2)

お茶の水女子大学教授・こども園園長 宮里暁美

こども園主任保育士 森永路子

(2) つながりを生み出す子育て支援の在り方

こども園施設長 私市和子

お茶の水女子大学研究協力員 田尻さやか

14:50～ 座談会「保育はやっぱ面白い！」

吉村真理子（元松山東雲短期大学教授）

渡邊英則（認定こども園ゆうゆうのもり幼保園園長）

宮里暁美（お茶の水女子大学教授・こども園園長）



東京都ひきこもりサポートネット平成29年度活動報告会 (共催)

【日時】2018年2月20日(火) 15:00～17:00

【場所】お茶の水女子大学共通講義棟2号館102号室

【主催】東京都ひきこもりサポートネット

【共催】人間発達教育科学研究所「発達臨床支援研究部門」

【対象】区市町村職員の方、地域でひきこもり等の若者支援
に携わっている方、支援に興味のある方

【内容】第1部 活動報告（平成29年度活動内容及び調査
研究結果等の報告・事例紹介）

古志 めぐみ（お茶の水女子大学 人間発達教育科学研
究所 特任講師・東京都ひきこもりサポートネット 主
任相談員）

第2部 シンポジウム 『ひきこもりの若者支援：当事
者に寄りそった支援とは』

〈シンポジスト〉

木村 ナオヒロ（ひきこもり新聞 編集長）

佐藤 吉行（NPO 法人グッド 副代表）

岩藤 裕美（お茶の水女子大学 人間発達教育科学研
究所 特任講師・東京都ひきこもりサポートネット 主任

相談員)

〈コメンテーター〉 田村 毅 (田村毅研究室 所長 精神科医) 青木 紀久代 (お茶の水女子大学 基幹研究院 准教授・東京都ひきこもりサポートネット 監修者)



困難を抱える子どもたちと本の役割「JBBY 希望プロジェクト」学びの会 第4回「原子力災害が福島の親子に与えた心理学的影響の研究がとらえた事実」(後援)

【日時】2018年3月3日(土) 14:00~16:30

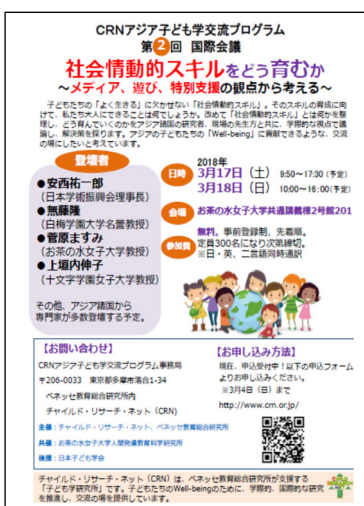
【場所】お茶の水女子大学本館カンファレンスルーム

【主催】一般社団法人日本国際児童図書評議会 (JBBY)

【後援】お茶の水女子大学児童学科・発達臨床学講座・発達臨床心理学講座同窓会 (ジネット)

人間発達教育科学研究所「保育・教育実践研究部門」

【内容】講師：筒井雄二教授 (福島大学災害心理研究所長)



CRNアジア子ども学交流プログラム
第2回 国際会議
社会情動的スキルをどう育むか
～メディア、遊び、特別支援の観点から考える～

子どもたちの「よく生きる」に欠かせない「社会情動的スキル」。そのスキルを養って、私たちができることは何でしょうか。改めて「社会情動的スキル」とは何かを理解し、どう育てていくのかアジア諸国の研究者、臨床の専門家と共に、学際的に議論し、協働を探ります。アジアの子どもたちの「Well-being」に貢献できるような、交流の場をしたいと思います。

【開催日】2018年 3月17日(土) 9:50~17:30(予定)
3月18日(日) 10:00~16:00(予定)

【会場】お茶の水女子大学共通講義棟2号館201

【参加費】無料。事前登録制。先着順。定員300名になり次第締切。※日・英・中二言語同時通訳

【お問い合わせ】CRNアジア子ども学交流プログラム事務局 〒206-0033 東京都千代田区水戸1-34 ベネッセ教育総合研究所内

【お申し込み方法】URL: 申し込み中! 以下の申込フォームより申し込みください。 ※3月4日(日)まで <http://www.crn.or.jp/>

CRN アジア子ども学交流プログラム第2回国際会議「社会情動的スキルをどう育むか～メディア、遊び、特別支援の観点から考える～」(共催)

【日時】2018年3月17日(土) 9:50~17:30

同18日(日) 10:00~16:00

【場所】お茶の水女子大学 共通講義棟2号館201

【言語】日英中三言語同時通訳 (一部逐次)

【主催】チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) ベネッセ教育総合研究所 (BERD)

【共催】人間発達教育科学研究所「人間発達基礎研究部門」

【後援】日本子ども学会

【内容】社会情動的スキルを育む「環境」について

分科会① 新しい時代のメディアと子ども

分科会② 遊びを科学する

分科会③ 特別なニーズをもつ子どもたちへの支援を考える

基調講演：菅原ますみ (お茶の水女子大学教授)

パネルディスカッション「国際調査からみる社会情動的スキルと親子のかかわり」

榎原洋一 (お茶の水女子大学名誉教授)

【2018年度】



第5回ライフ×アート展（共催）

【日時】2018年7月31日（火）～8月2日（木）

11時～18時 ※2日は～15時

【場所】お茶の水女子大学構内 Student Commons

【主催】お茶の水女子大学アート実践研究会

【共催】ECCELL（「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業：代表者 浜口順子）

人間発達教育科学研究所「教育・保育実践研究」部門
研究課題名「環境・空間・活動のデザインプロセスに関する研究（代表者 刑部育子）」

【内容】アート・美術教育実践にかかわるお茶の水女子大学
附属校園関係者が展開するアートプロジェクト。ひとの
ライフ〈生・生活・人生〉にうまれるアートを、さまざま
な角度から捉え、展示し、表現する展覧会。



国際セミナー「イギリス幼児教育におけるプロジェクト実践とその展開」（共催）

【日時】2018年9月26日（水）17:00～19:00

【場所】お茶の水女子大学 共通講義棟2号館102号室

【言語】英語（通訳あり）

【共催】人間発達教育科学研究所 保育・教育実践研究部門
お茶の水女子大学三園合同研究会
科研費基盤研究B「プロジェクト・アプローチの展開とその教育思想」

【講師】ルイズ・ローイングス先生（英国マデリー幼児学校校長）

【概要】ルイズ先生は、イギリスのテルホードにあるマデリー幼児学校の校長先生として、スウェーデン、アイスランド、スペイン、ルーマニアの学校の国際的な連携ネットワークに参加しており、このネットワークのイギリスのコーディネーターである。また、ルイズ先生は、幼児教育に携わる人たちのための研修の講師経験も豊富で、探究に基づく実践、社会的学習、親とのパートナーシップ、子どもの思考、アートと科学実践、そして、デジタルメディアといったテーマを扱ってこられました。今回は、マデリー幼児学校におけるプロジェクト実践について講演する。

お茶の水女子大学 ECCELL 公開講座
乳幼児の表現をはぐくむワークショップ
 乳幼児の「音楽」・「造形」経験をよりゆたかに

保育園の中で講義・体験双方によるアクティブラーニング
(地方・こども園職員等も職員、お茶の水女子大学卒業生も参加)

第1回 造形へのアプローチ
 講師：鮫島良一先生 (前期) 鮫島良一先生 東京大学大学院 教育学研究科 教授
 園児が作り出した作品を子ども自身もまた表現する楽しさを体験し、そのことを園児に伝えるという講座です。
 10/31(水) 18:20~20:30 参加料 1,500円

第2回 音楽経験へのアプローチ
 講師：吉永早苗先生 東京家政学院大学 教授
 子ども自身が発見した音楽を表現する楽しさを体験し、そのことを園児に伝えるという講座です。
 11/23(金) 13:20~17:00 参加料 2,000円

会場 文京区立お茶の水女子大学 2F 東館 文京区立お茶の水女子大学 2F 東館 文京区立お茶の水女子大学 2F 東館
対象 保育園で働く方、保育に関心のある社会人・大学院生 (定員各回40名)
申込方法 FAXお申し込みは、①イベント名 (1日1回の参加も可) ②氏名 ③〒がわかる住所 ④メールアドレス (お申し込みの連絡先) ⑤締切日 10月15日 (月) までにお申し込み

お茶の水女子大学 ECCELL 公開講座 (後援)

「乳幼児の表現をはぐくむワークショップ~乳幼児の「音楽」・「造形」経験をよりゆたかに」

【日時】 第1回 「造形へのアプローチ」 鮫島良一先生
 2018年10月31日 (水) 18:20~20:30

第2回 「音楽経験へのアプローチ」 吉永早苗先生
 2018年11月23日 (金) 13:20~17:00

【場所】 文京区立お茶の水女子大学 2階

【協力】

宮里暁美教授 (文京区立お茶の水女子大学 2階 園長)
 浜口順子教授 (お茶の水女子大学)

お茶の水女子大学
 第9回 卒内子どもと一緒に楽しむ会
子どもの世界をのぞいてみよう part9 ~ゆっくりじっくり遊ぶ子どもたち~

現在は卒内子どもと関わる機会が限られてしまっています。この機会、子どもと関わることを実践し、子どもの成長を社会で育てていくことを考えていただく機会を目的として、本学学生・教職員を対象に、卒内施設「自然にふれる」(11/13)と高方参加も可能です。

○ 男性教職員の参加も大歓迎です！
 ○ 過去参加された方もお申し込みいただけます。
 ○ 職員研修の対象になります。
 ○ いずみナーサリー (11/13 (火)) と高方参加も可能です。

2018年11月13日 (火) 16:00-17:00

参加対象 大学本館 1F カンファレンスルーム (本館 113室)
申込 参加対象：本学教職員、学生
<https://forms.gle/8a8a8a8a8a8a8a8a>
 (定員 10名程度 (申込)、11月9日 (金) 19時締切)
 ※ 申し込みは必ずお茶の水女子大学 卒内施設「自然にふれる」にてお申し込みください。

内容
 事前レクチャー 20分
 施設見学・子どもたちとのふれあい 60分
 フォローアップ 20分

集合場所
 グローバルリーダーシップ研究所
 卒内施設「自然にふれる」(11/13) 高方参加 (11/13)

卒内施設「自然にふれる」(11/13) 高方参加 (11/13) 高方参加 (11/13)
 ・グローバルリーダーシップ研究所 (11/13) 高方参加 (11/13)
 ・人間発達教育科学研究所 (11/13) 高方参加 (11/13)
 ・文京区立お茶の水女子大学 2階

第9・10回「子どもの世界をのぞいてみよう」(共催)

【日時】 2018年11月13日 (火) 15:00-17:00

「子どもの世界をのぞいてみよう part9 ~ゆっくりじっくり遊ぶ子どもたち~」(文京区立お茶の水女子大学 2階 園長)

2018年11月20日 (火) 9:30-11:30

「子どもの世界をのぞいてみよう part10~キャンパスの自然にふれる~」(いずみナーサリー)

【集合場所】

(こども園) 大学本館 1F カンファレンスルーム

(いずみナーサリー) 大学本館 1F 第二会議室 (113室)

【内容】 両日共通

事前レクチャー 20分、施設見学・子どもたちとのふれあい 60分、フォローアップ 20分

【主催】 グローバルリーダーシップ研究所 COSMOS

【共催】 人間発達教育科学研究所「保育・教育実践研究部門」

いずみナーサリー

文京区立お茶の水女子大学 2階 園長

お茶の水女子大学
 第10回 卒内子どもと一緒に楽しむ会
子どもの世界をのぞいてみよう part10~キャンパスの自然にふれる~

現在は卒内子どもと関わる機会が限られてしまっています。この機会、子どもと関わることを実践し、子どもの成長を社会で育てていくことを考えていただく機会を目的として、本学学生・教職員を対象に、卒内施設「自然にふれる」(11/20)と高方参加も可能です。

○ 男性教職員の参加も大歓迎です！
 ○ 過去参加された方もお申し込みいただけます。
 ○ 職員研修の対象になります。
 ○ こども園見学 (11/20 (火)) と高方参加も可能です。

2018年11月20日 (火) 9:30-11:30

参加対象 大学本館 1F 第二会議室 (本館 113室)
申込 参加対象：本学教職員、学生
<https://forms.gle/8a8a8a8a8a8a8a8a>
 (定員 10名程度 (申込)、11月16日 (金) 19時締切)
 ※ 申し込みは必ずお茶の水女子大学 卒内施設「自然にふれる」にてお申し込みください。

内容
 事前レクチャー 20分
 施設見学・子どもたちとのふれあい 60分
 フォローアップ 20分

集合場所
 グローバルリーダーシップ研究所
 卒内施設「自然にふれる」(11/20) 高方参加 (11/20)

卒内施設「自然にふれる」(11/20) 高方参加 (11/20) 高方参加 (11/20)
 ・グローバルリーダーシップ研究所 (11/20) 高方参加 (11/20)
 ・人間発達教育科学研究所 (11/20) 高方参加 (11/20)
 ・文京区立お茶の水女子大学 2階



第3回お茶の水女子大学大こども園フォーラム（共催）

【日時】2019年2月17日（日） 9:30～17:00

午前の部：9:30～11:30、12:15～13:15

後の部：13:30～17:00

【場所】午前の部～文京区立お茶の水女子大学こども園
お茶の水女子大学共通講義棟講義室

午後の部～お茶の水女子大学講堂（徽音堂）

【主催】文京区立お茶の水女子大学こども園

【共催】人間発達教育科学研究所「保育・教育実践研究部門」

お茶の水女子大学附属幼稚園

お茶の水女子大学いずみナーサリー

【内容】

<午前の部> 実践や体験を通して語り合い学び合う！

9:30～11:30 ワークショップ①②③、分科会①②③

12:15～13:15 ポスター発表

<午後の部> 研究・実践報告、講演会

13:10～ 研究報告

(1)小さなこども園の大きな挑戦(2)

お茶の水女子大学教授・こども園園長 宮里暁美

こども園主任保育士 森永路子

(2) つながりを生み出す子育て支援の在り方

こども園施設長 私市和子

お茶の水女子大学研究協力員 田尻さやか

14:50～ 座談会「保育はやっぱ面白い！」

吉村真理子（元松山東雲短期大学教授）

渡邊英則（認定こども園ゆうゆうのもり幼保園園長）

宮里暁美（お茶の水女子大学教授・こども園園長）



第2回シンポジウム「小中高の体系的指導で育てる統計的問題解決力～PPDACの授業を見童生徒とどうつくるか～」

(共催)

【日時】2019年3月21日(木・祝) 9:30～12:00

【場所】お茶の水女子大学 生活科学本館 306室

【共催】人間発達教育科学研究所 保育・教育実践研究部門

お茶の水女子大学附属学校園連携研究算数・数学部会

【内容】

- ・附属小学校での実践事例

岡田 紘子 (お茶の水女子大学附属小学校 教諭)

- ・附属中学校での実践事例

大塚 みずほ (お茶の水女子大学附属中学校 教諭)

- ・附属高校での実践事例・・・三橋 一行 (お茶の水女子大学附属高等学校 教諭)

- ・講評と講演 「AI時代の学校で、統計的探究プロセス PPDAC をどう具体化するか」

青山和裕氏 (愛知教育大学 准教授)

【2019年度】



国際セミナー「ドキュメンテーションとストーリーによるアメリカの幼児教育における評価とは」(共催)

Assessment in Early Childhood through documentation and story

【日時】2019年5月24日(金) 17:30～19:30

【場所】お茶の水女子大学 共通講義棟 2号館 101号室

【言語】英語・日本語(逐次通訳あり)

【共催】・科研費国際共同研究加速基金(国際共同研究強化

(B))「子どもの育ちと学びの記録による保育評価とその国際的ネットワークの展開」

- ・お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所(保育・教育実践研究部門)

- ・三園合同研究会(お茶の水女子大学附属幼稚園・いずみナーサリー・文京区立お茶の水女子大学子ども園)

【講演者】

- ・ Linda R. Kroll Professor Emerita, School of Education Mills College

- ・ Daniel Meier Professor, San Francisco State University

- ・ Isauro M. Escamilla, Las Americas Preschool, San Francisco City



第4回ライフ×アート展 (共催)

【日時】2019年8月6日(火)～8日(木)

12時～18時 ※8日は15時まで

【場所】お茶の水女子大学構内 Student Commons

【主催】お茶の水女子大学アート実践研究会

【共催】ECCELL (「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業：代表者 浜口順子)

人間発達教育科学研究所「保育・教育実践研究」部門
研究課題名「環境・空間・活動のデザインプロセスに関する研究 (代表者 刑部育子)」

【内容】アート・美術教育実践にかかわるお茶の水女子大学
附属校園関係者が展開するアートプロジェクト。ひとの
ライフ〈生・生活・人生〉にうまれるアートを、さまざま
な角度から捉え、展示し、表現する展覧会。



お茶の水女子大学 ECCELL 公開講座 (後援)

「乳幼児の表現をはぐむワークショップ～乳幼児の「音楽」・「造形」経験をよりゆたかに」

【日時】第1回 「造形へのアプローチ」 鮫島良一先生

2019年10月26日(土) 14:00～17:10

第2回 「音楽経験へのアプローチ」 吉永早苗先生

2020年2月15日(土) 14:00～17:10

【場所】文京区立お茶の水女子大学子ども園 2階

【協力】

宮里暁美教授 (文京区立お茶の水女子大学子ども園園長)

浜口順子教授 (お茶の水女子大学)



Peter Moss & 佐藤学スペシャルトーク

「レッジョ・インパクトを再考する」(共催)

【日時】2019年12月3日(火) 17:30～20:00

【場所】お茶の水女子大学共通講義棟2号館201室

【講師】

Peter Moss (University college London, emeritus Professor)

佐藤学 (学習院大学特任教授)

イタリアのレッジョ・エミリア市幼児学校での実践が、

幼児教育にとってどのようなインパクトをもたらしたのか、私たちはそこから何を学ぶことができるのかについての講演と対談。



中日における就学前教育交流論壇～華東師範大学学術報告
(共催)

【日時】2019年12月12日(木) 16:40～18:10

【場所】お茶の水女子大学本館135室

【講師】

宮里暁美教授(文京区立お茶の水女子大学こども園園長)

浜口順子教授(お茶の水女子大学)



第4回お茶の水女子大学大こども園フォーラム(共催)

【日時】2020年2月16日(日) 9:30～17:00

午前の部: 9:30～11:30 午後の部: 13:00～17:00

【場所】午前の部～文京区立お茶の水女子大学こども園
お茶の水女子大学共通講義棟講義室

午後の部～お茶の水女子大学講堂(徽音堂)

【主催】文京区立お茶の水女子大学こども園

【共催】人間発達教育科学研究所「保育・教育実践研究部門」
お茶の水女子大学附属幼稚園

お茶の水女子大学いずみナーサリー

【内容】

<午前の部> 実践や体験を通して語り合い学び合う!

9:30～11:30 ワークショップ①～⑦

12:15～13:05 ポスター発表(0歳児の保育 他)

<午後の部> 研究発表・研究報告、講演会×対話

13:00～ 開会

13:05～ 研究発表 小さなこども園の大きな挑戦④

*2019年度お茶大こども園の歩み

宮里暁美(お茶大こども園園長)

*7つの分科会の報告 分科会報告チーム

*カリキュラムの創造・実践・省察・改善の取り組み

「カリキュラム」研究チーム

14:20～ 実践報告 実践×講話×対話×絵記録

社会の中にある保育とは？

* 実践報告 『出雲崎のお獅子を作りたい』

松延毅 (社会福祉法人浄勝会出雲崎保育園)

* 実践報告 『子ども子育て中心の街作り』

柿沼平太郎 (認定こども園こどもむら)

* 講話 『園とデザインスクールを行き来できるトンネルをつくったら？』

須永剛司 (東京藝術大学名誉教授/公立はこだて未来大学特任教授)

丸山 素直・小柳景義・岡村綾華 (東京藝術大学美術学部 デザイン科)

コーディネーター 刑部育子 (お茶の水女子大学)

16:20～ あそびうた× 話

『あそびうたを心の架け橋に』 福田翔 (ソングブックカフェ)



第3回シンポジウム「小中高の体系的指導で育てる統計的問題解決力~PPDAC を通して方法知を身に付ける」(共催)

【日時】2020年3月20日(金・祝) 9:30~12:30

【場所】お茶の水女子大学 生活科学本館 306室

* 新型コロナウイルス感染症の情勢に鑑み、開催方法を「お茶の水女子大学附属学校園連携算数・数学部会 Web サイトでの登壇者資料公開による開催」とした。

http://www-p.fz.ocha.ac.jp/renkei/d_math/result.html

* 登壇予定の先生方の資料(PDF)をウェブ上で公開。

【共催】人間発達教育科学研究所 保育・教育実践研究部門
お茶の水女子大学附属学校園連携研究算数・数学部会

【内容】

- ・ 附属小学校での実践事例 岡田 絃子 (お茶の水女子大学附属小学校 教諭)
- ・ 附属中学校での実践事例 大塚 みずほ (お茶の水女子大学附属中学校 教諭)
- ・ 附属高校での実践事例 三橋 一行 (お茶の水女子大学附属高等学校 教諭)
- ・ 「統計教育に関する方法知」の系統(ver.1)の提案 藤原 大樹 (お茶の水女子大学附属中学校 教諭)
- ・ 講評と講演「学校教育におけるデータサイエンスのこれから~何のために、誰のために~」 西村 圭一氏 (東京学芸大学 教授)

【2020年度】



2020 年度保育・子育て支援ラーニングプログラム公開講座

「子育て支援フィールドワーク」(共催：オンライン)

「乳幼児の表現をはぐくむワークショップ～乳幼児の「音楽」・「造形」経験をよりゆたかに」

【日時】 第1回：2020年11月14日(土) 14:30～17:30

第2回：2020年2月15日(土) 9:00～12:00

【対象】 保育現場で働く方、保育に関心のある社会人、外部生、本学学部生・院生(先着30名)

【講師】

松延毅先生(社会福祉法人浄勝会 出雲崎こども園園長)

宮里暁美教授(文京区立お茶の水女子大学こども園園長)

浜口順子教授(お茶の水女子大学)

【協力】 出雲崎こども園

第83回教育実際指導研究会(後援：オンライン)

「学びをあむ～新領域“てつがく創造活動”を中核とする教育課程の開発～」

【日時】 ①2021年2月20日(土) 13:20～16:20

②2021年2月20日～28日 オンデマンド講演会配信

【主催】 お茶の水女子大学附属小学校

NPO法人 お茶の水児童教育研究会

【後援】 人間発達教育科学研究所

【プログラム】

①課題別協議会 13:30～14:40

(本校独自の領域である「てつがく創造活動」の研究内容や実践、本校の低学年教育課程について、子どもたちの活動やそれを支える理論などを提案発表。本研究所からは、浜口順子、富士原紀絵、武藤世良が参加した。)

教科・食育協議会 15:10～16:20

(各教科と食育について、子どもたちの学びの姿や活動、それらを支える理論などを、提案発表。本研究所からは、小玉亮子、刑部郁子、岡田了祐が参加した。)

②オンデマンド講演会配信

・きたやまおさむ先生(精神科医・作詞家)

・鳥飼玖美子先生(立教大学名誉教授)



第4回統計教育シンポジウム「身の回りの問題を統計的によりよく解決する力を身に付けよう～生きて働く知識を小中高を通して獲得する」(共催：オンライン)

【日時】2021年3月20日(土・祝) 10:00～12:00

【形式】Webexによるオンライン開催

【主催】お茶の水女子大学附属学校園連携研究 算数・数学

【共催】人間発達教育科学研究所 保育・教育実践研究部門

【内容】

- ・ 附属小学校での実践事例
 - 岡田 絢子 (お茶の水女子大学附属小学校 教諭)
- ・ 附属中学校での実践事例
 - 大塚 みずほ (お茶の水女子大学附属中学校 教諭)
 - 三橋 一行 (お茶の水女子大学附属高等学校 教諭)
- ・ 附属高校での実践事例
- ・ 講評と講演「学校教育におけるデータサイエンスのこれから～何のために、誰のために～」
 - 西村 圭一氏 (東京学芸大学 教授)



第5回お茶の水女子大学大こども園フォーラム (後援：オンライン)

【日時】研究発表 (ライブ配信)

2021年3月28日(日) 13:20～16:30

分科会 (オンデマンド配信)

2021年3月28日(日) 17:00～4月4日(日)

【形式】Webexによるオンライン/一部オンデマンド開催

【主催】文京区立お茶の水女子大学こども園

【後援】人間発達教育科学研究所

【内容】

<研究発表> 小さなこども園の大きな挑戦⑤

- ・ 文京区立お茶の水女子大学子ども園 5年間の歩み
- ・ 4つの提案 (カリキュラム・評価・環境と援助・保護者との連携)
 - (お茶大こども園園長 宮里暁美)

<講演> 認定こども園の現状と課題

(認定こども園 ゆうゆうのもり幼保園園長 渡辺英則)

【2021年度】



【Special Lecture】ドイツ社会の多文化化と移民の子育て支援—1970年代から今日まで Multiculturalization of German Society and Support for Child Raising in Immigrant Families-From the 1970s to Today (共催：オンライン)

【日時】2021年9月28日(火) 18:00～20:00

【形式】オンライン (zoom meeting) 定員 300名 (先着順)

【言語】英語 (同時通訳あり)

【主催】科研費基盤C「家庭的保育による多文化家庭の地域支援の試み—英独の多文化経験に学ぶ家族支援策」

【共催】お茶の水女子大学プロジェクト

「保育マネジメント及び保育実践講座」

人間発達教育科学研究所「保育・教育実践教育部門」

【講師】ドナータ・エルシェンブロイヒ氏

(Dr. Donata Elschenbroich)



2021年度保育・子育て支援ラーニングプログラム公開講座「乳幼児の暮らしA/B」(共催：オンライン)

「乳幼児の表現をはぐくむワークショップ～乳幼児の「音楽」・「造形」経験をよりゆたかに」

【日時】「乳幼児の暮らしA」：10月27、11月10、24日

「乳幼児の暮らしB」：12月1、8、15日

全6回(水)、18:30～20:30(120分)

【対象】保育現場で働く方、保育に関心のある社会人、外部生、本学学部生・院生(およそ70名：先着順)

【プログラム】

<乳幼児の暮らしA>

①講義・対話 乳幼児の暮らし：お茶大こども園の実践から見えてくる「食・創・遊」

②講義・対話 乳幼児の暮らし：アートの視点で考える

講師：丸山素直先生(東京藝術大学 美術学部デザイン科 非常勤講師)

③グループワーク・発表 「居心地のよさ」をかたちにしてみたら・・・

<乳幼児の暮らしB>

④講義・対話 乳幼児の暮らし：お茶大こども園の実践から見えてくる「紡がれるもの」

- ⑤講義・対話 乳幼児の暮らし：暮らしの中の行事「冬至」「お正月」に焦点をあてて
講師：すとうあさえ先生（絵本作家）
- ⑥グループワーク・発表 「暮らし」的アプローチをかたちにしてみたら・・・



2021 年度保育・子育て支援ラーニングプログラム公開講座
「からだ・表現ワークショップ A/B」（共催：オンライン）

【日時】「からだ・表現ワークショップ A」：2月20日
「からだ・表現ワークショップ B」：2月27日
全2回（日）、9：30～12：30（各回180分）
【対象】保育現場で働く方、保育に関心のある社会人、外部生、
本学学部生・院生（およそ60名：先着順）

【プログラム】

- <からだ・表現ワークショップ A>理論編：「バリアフリー絵本について」
講師：攪上久子先生（女子美術大学非常勤講師・日本国際児童図書評議会 世界のバリアフリー児童図書展実行委員長）
- <からだ・表現ワークショップ B>実践編：「絵本の読みあいワーク」
講師：村中李衣先生（ノートルダム清心女子大学教授）
- AB 進行：浜口順子（本学教授・文京区立お茶の水女子大学こども園園長）



第6回お茶の水女子大学大こどもフォーラム（後援：
オンライン）

【日時】2022年3月20日（日）14：00～16：30
全体会・講演会（ライブ配信）
2022年3月20日（日）17：00～4月18日（月）
分科会（オンデマンド配信）
【形式】Zoomによるオンライン/一部オンデマンド開催
（先着順500名）
【主催】お茶の水女子大学 保育マネジメント及び保育実践講
【共催】文京区立お茶の水女子大学こども園
人間発達教育科学研究所

【プログラム】

- 3月20日（日）13:20～16:30 全体会・講演会（ライブ配信）
13:30 入室開始

- 14:00～14:05 開会の辞 文京区立お茶の水女子大学こども園園長
お茶の水女子大学教授 浜口順子
- 14:05～14:50 豊かな保育の実現に向けて ～保育マネジメントの課題と可能性と
文京区立お茶の水女子大学こども園6年目の歩み～
お茶の水女子大学特任教授 宮里暁美
- 14:50～15:00 休憩
- 15:00～15:45 講演 演題「「遊び」のパラドックス」
東京大学・青山学院大学名誉教授 佐伯胖先生
- 15:45～16:25 対話：佐伯先生と語ろう
コーディネーター：お茶の水女子大学准教授 刑部育子
対話者：附属幼稚園・いずみナーサリー・お茶大こども園 保育者
- 16:25～16:30 閉会の辞 お茶の水女子大学教授 小玉亮子

●オンデマンド配信による分科会（視聴期間：2022年3月20日17:00～4月18日）

分科会1：子どもの「やりたい！」が発揮される生活～環境や援助の在り方～

お茶大こども園の先生たち・宮里暁美（お茶の水女子大学）

分科会2：一人一人が豊かに育つ乳児保育の在り方

日本乳幼児教育・保育者養成学会乳児部会メンバー

分科会3：楽しいアートな生活～子どもと一緒に作って遊ぼう～ 実技編

丸山素直（東京藝術大学）

分科会4：おいしく食べる生活～子どもと一緒に作って食べよう～ 実技編

藤吉陽子（菓子研究家） 川島雅子（お茶大こども園）

分科会5：季節と共にある生活～伝承行事を親子で楽しもう～

すとうあさえ（絵本作家）

分科会6：「創る」が身近にある生活を語る その2

鮫島良一（鶴見大学） 宮里耕太（もの・モノ・mono）

杉浦正衛（お茶大こども園）

第 5 回統計教育シンポジウム「身の回りの問題を統計的によりよく解決する力を身に付けよう」(共催：オンライン)

【日時】2022年3月21日(月・祝) 10:00~12:15

【形式】Webex によるオンライン開催

【主催】お茶の水女子大学附属学校園連携研究 算数・数学部会

【共催】人間発達教育科学研究所 保育・教育実践研究部門

【プログラム】

- ・開会の挨拶： 加々美 勝久
(前お茶の水女子大学附属中学校 副校長、日本数学教育学会 実践研究推進部長)
- ・附属小学校 実践発表：久下谷 明 (お茶の水女子大学附属小学校 教諭)
- ・附属中学校 実践発表：松嶋 美佐 (お茶の水女子大学附属中学校 教諭)
- ・実践発表についての質疑・応答
- ・小中の実践発表を受けて・大学での取組
吉田 裕亮 (お茶の水女子大学 教授、お茶の水女子大学附属高等学校 校長)
- ・講評と講演：「算数・数学における統計的探究プロセスの学習では何をめざすのか」
藤井 良宜氏 (宮崎大学 教授)
- ・閉会の挨拶： 真島 秀行 (お茶の水女子大学 名誉教授)

< 資 料 >

1. 人間発達教育科学研究所 運営会議メンバー一覧 (2016-2021 年度)
2. 人間発達教育科学研究所 メンバー一覧 (2016-2021 年度)
3. 人間発達教育科学研究所 規則
4. 人間発達教育科学研究所 成果概要報告 (2022. 3. 14 最終評価発表資料)

<2016-21 年度 人間発達教育科学研究所 運営会議メンバー一覧>

●は研究所長、◎は部門長、－は退任/退職

氏名	部門名 ※()は学内委員	2016	2017	2018	2019	2020	2021
菅原ますみ	人間発達基礎研究部門	●◎	●◎	◎	◎	◎	－
大森美香	人間発達基礎研究部門	○	○	●	●	●	●
宮里暁美	保育・教育実践研究部門	○	○	○	○	○	－
上原 泉	人間発達基礎研究部門	○	○	○	○	○	○
今泉 修	人間発達基礎研究部門				○	○	○
浜口順子	保育・教育実践研究部門	◎	◎	◎	◎	◎	◎
富士原紀絵	保育・教育実践研究部門	○	○	○	○	○	○
浜野 隆	人間発達基礎研究部門	○	○	○	○	○	◎
篁 倫子	発達臨床支援研究部門	◎	◎	◎	◎	○	－
岩壁 茂	発達臨床支援研究部門					◎	◎
青木紀久代	発達臨床支援研究部門	○	○	○	－	－	－
伊藤亜矢子	発達臨床支援研究部門	○	○	○	○	－	－
清水徹郎	(基幹研究院人文科学系教授)	○	○				
藤原葉子	(基幹研究院自然科学系教授)	○	○				

※所属（職名）は前掲「研究所メンバー一覧」を参照

- 「国立大学法人お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所規則」より一部抜粋
- 第10条 研究所に、研究所の運営並びに研究及び業務に関する事項を審議するため、人間発達教育科学研究所運営会議（以下「運営会議」という。）を置く。
- 2 運営会議は、次に掲げる者をもって組織する。
- (1) 研究所長
 - (2) 第4条第1項第2号に掲げる教員
 - (3) 第4条第1項第3号に掲げる研究員
 - (4) その他ヒューマンライフイノベーション開発研究機構長が必要と認めた者
- 3 運営会議の議長は研究所長をもって充て、議長は運営会議を主宰する。
- 4 運営会議の構成員は、第2条の目的を達成する上で必要な事項について、運営会議での審議を求めることができる。
- 5 研究所長が必要と認めたときは、構成員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。
- 6 本条に定めるもののほか、運営会議に関し必要な事項は、別に定める。

<2016-21年度 人間発達教育科学研究所 メンバー一覧>

人間発達教育科学研究所長

【2016～2017年度】菅原ますみ(基幹研究院 人間科学系 教授)

【2018～2021年度】大森美香((基幹研究院 人間科学系 教授)

●は研究所長、◎は部門長、一は退任/退職(職位順、五十音順)

身分	氏名	所属・(職名)	部門名	2016	2017	2018	2019	2020	2021
専任教員	宮里暁美(※)	人間発達教育科学研究所(教授) 文京区立お茶の水女子大学こども園園長	保育・教育実践研究部門	○	○	○	○	○	—
	上原 泉	人間発達教育科学研究所(准教授)	人間発達基礎研究部門	○	○	○	○	○	○
	今泉 修	人間発達教育科学研究所(助教)	人間発達基礎研究部門			○	○	○	○
研究員	岩壁 茂	基幹研究院 人間科学系(教授)	発達臨床支援研究部門			○	○	◎	◎
	大森正博	基幹研究院 人間科学系(教授)	人間発達基礎研究部門	○	○	○	○	○	○
	大森美香(※)	基幹研究院 人間科学系(教授)	人間発達基礎研究部門	○	○	●	●	●	●
	小玉亮子	基幹研究院 人間科学系(教授)	保育・教育実践研究部門	○	○	○	○	○	○
	坂元 章	基幹研究院 人間科学系(教授)	人間発達基礎研究部門	○	○	○	○	○	○
	坂本佳鶴恵	基幹研究院 人間科学系(教授)	人間発達基礎研究部門	○	○	○	○	○	○
	菅原ますみ(※)	基幹研究院 人間科学系(教授)	人間発達基礎研究部門	●◎	●◎	◎	◎	◎	—
	篁 倫子	基幹研究院 人間科学系(教授)	発達臨床支援研究部門	◎	◎	◎	◎	◎	—
	浜口順子	基幹研究院 人間科学系(教授)	保育・教育実践研究部門	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	浜野 隆	基幹研究院 人間科学系(教授)	人間発達基礎研究部門	○	○	○	○	○	◎
	平岡公一	基幹研究院 人間科学系(教授)	人間発達基礎研究部門	○	○	○	○	—	—
	富士原紀絵	基幹研究院 人間科学系(教授)	保育・教育実践研究部門	○	○	○	○	○	○
	耳塚寛明	基幹研究院 人間科学系(教授)	人間発達基礎研究部門	○	○	○	—	—	—
	米田俊彦	基幹研究院 人間科学系(教授)	人間発達基礎研究部門	○	—	—	—	—	—
	青木紀久代	基幹研究院 人間科学系(准教授)	保育・教育実践研究部門	○	○	○	—	—	—
	石丸徑一郎	基幹研究院 人間科学系(准教授)	発達臨床支援研究部門			○	○	○	○
	伊藤亜矢子	基幹研究院 人間科学系(准教授)	発達臨床支援研究部門	○	○	○	○	—	—
	大多和直樹	基幹研究院 人間科学系(准教授)	人間発達基礎研究部門				○	○	○
	刑部育子	基幹研究院 人間科学系(准教授)	保育・教育実践研究部門	○	○	○	○	○	○
	高橋 哲	基幹研究院 人間科学系(准教授)	発達臨床支援研究部門					○	○
	山田美穂	基幹研究院 人間科学系(准教授)	発達臨床支援研究部門						○
	武藤世良(※)	基幹研究院 人間科学系(講師)	保育・教育実践研究部門						○
	齊藤 彩	基幹研究院 人間科学系(助教)	人間発達基礎研究部門						○
	砂川芽吹	基幹研究院 人間科学系(助教)	発達臨床支援研究部門						○
	辻谷真知子	基幹研究院 人間科学系(助教)	保育・教育実践研究部門						○
	松島のり子	基幹研究院 人間科学系(助教)	保育・教育実践研究部門		○	○	○	○	○
特任講師	岩藤裕美(※)	人間発達教育科学研究所特任講師	発達臨床支援研究部門	○	○	—	—	—	—
	内海緒香	人間発達教育科学研究所特任講師	保育・教育実践研究部門	○	○	○	○	○	○
	古志めぐみ(※)	人間発達教育科学研究所特任講師	発達臨床支援研究部門		○	—	—	—	—
	佐藤聡美	人間発達教育科学研究所特任講師	発達臨床支援研究部門		○	—	—	—	—
	谷田征子	人間発達教育科学研究所特任講師	発達臨床支援研究部門	○	—	—	—	—	—
特任AF	田村恵美	人間発達教育科学研究所特任AF	保育・教育実践研究部門	○	○	—	—	—	—
	松本聡子	人間発達教育科学研究所特任AF	人間発達基礎研究部門	○	○	○	○	○	○
	山崎洋子	人間発達教育科学研究所特任AF	保育・教育実践研究部門			○	○	○	○

連携研究員(校種別/任順)	山岸由紀	学校教育研究部(特任准教授)	保育・教育実践研究部門			○	○	○	○
	岡田了祐	教学IR教育開発学修支援センター(講師)	保育・教育実践研究部門			○	○	○	○
	武藤世良(※)	教学IR教育開発学修支援センター(講師)	保育・教育実践研究部門			○	○	○	—
	玉谷直子	お茶の水女子大学附属高等学校(教諭)	保育・教育実践研究部門			○	○	—	—
	藪内ありさ	同上	保育・教育実践研究部門					○	○
	木村真冬	お茶の水女子大学附属中学校(教諭)	保育・教育実践研究部門			○	—	—	—
	藪部幸枝	同上	保育・教育実践研究部門				○	—	—
	大塚みずほ	同上	保育・教育実践研究部門					○	○
	片山守道	お茶の水女子大学附属小学校(教諭)	保育・教育実践研究部門			○	—	—	—
	久下谷明	同上	保育・教育実践研究部門				○	○	—
	岡田泰孝	同上	保育・教育実践研究部門						○
	佐藤寛子	お茶の水女子大学附属幼稚園(教諭)	保育・教育実践研究部門			○	—	—	—
	杉浦真紀子	同上	保育・教育実践研究部門				○	○	○
	中澤智子	いずみナーサリー(保育士)	保育・教育実践研究部門			○	○	○	○
森永路子	文京区立お茶の水女子大学子ども園(主任保育士)	保育・教育実践研究部門			○	—	—	—	
内野公恵	同上	保育・教育実践研究部門				○	○	○	
特別招聘研究員	秋篠宮妃殿下	人間発達基礎研究部門			○	○	○	○	○
客員教授	神尾陽子	一般社団法人 発達障害専門センター(代表理事)	人間発達基礎研究部門			○	○	○	○
	菅原ますみ(※)	白百合女子大学 教授	人間発達基礎研究部門						○
客員研究員	仁木和久	国立研究開発法人 産業技術総合研究所人間情報研究部門 招聘研究員	保育・教育実践研究部門			○	○	○	—
	西村直之	医療法人 卯の会 新垣病院(医師)	人間発達基礎研究部門			○	○	○	○
	宮里暁美	アカデミックログクッション教授	保育・教育実践研究部門						○
研究協力員	安治陽子		保育・教育実践研究部門	○	○	—	—	—	—
	岩藤裕美(※)		発達臨床支援研究部門			○	—	—	—
	大蔵みどり		保育・教育実践研究部門			○	○	—	—
	王傑		人間発達基礎研究部門	○	○	○	—	—	—
	川辺尚子		保育・教育実践研究部門			○	○	—	—
	菊地 知子	お茶の水女子大学附属いずみナーサリー主任保育士	保育・教育実践研究部門	○	○	○	○	○	○
	岐部智恵子		人間発達基礎研究部門				○	—	—
	古志めぐみ(※)		発達臨床支援研究部門			○	—	—	—
	崔 美美		保育・教育実践研究部門			○	—	—	—
	島田祥子		人間発達基礎研究部門			○	○	○	○
	田尻さやか		保育・教育実践研究部門			○	○	—	—
	土谷香菜子		保育・教育実践研究部門			○	—	—	—
	富田貴代子		発達臨床支援研究部門			○	—	—	—
	中西啓喜		人間発達基礎研究部門	○	○	○	—	—	—
	中根千香子		発達臨床支援研究部門			○	—	—	—
	長谷川武弘		保育・教育実践研究部門	○	○	—	—	—	—
	原 葉子		人間発達基礎研究部門	○	—	—	—	—	—
	宝月理恵		人間発達基礎研究部門	○	○	—	—	—	—
	松浦 素子		人間発達基礎研究部門			○	○	○	○
	宮崎あゆみ		人間発達基礎研究部門	○	○	○	—	—	—
	室橋弘人		人間発達基礎研究部門	○	—	—	—	—	—
谷田征子		発達臨床支援研究部門			○	○	—	—	
山崎 寛恵		保育・教育実践研究部門			○	○	○	—	
山宮 裕子		人間発達基礎研究部門			○	○	○	○	
AA	猪股富美子	人間発達教育科学研究所 AA	人間発達基礎研究部門	○	○	○	○	○	○

(※)は年度途中で職位/身分が変更になった者

国立大学法人お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所規則

平成28年4月1日制定
平成29年4月1日改訂
平成30年4月1日改訂

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人お茶の水女子大学ヒューマンライフイノベーション開発研究機構規則第4条第2項の規定に基づき、国立大学法人お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所（以下「研究所」という。）に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 研究所は、ヒューマンライフイノベーション開発研究機構に附属する研究所として、人間の発達と教育に関する総合的、国際的な研究及び調査を行い、国際研究拠点を構築することを目的とする。

(研究及び業務)

第3条 研究所は、前条の目的を達成するため、次に掲げる研究及び業務を行う。

- (1) 人間発達に関する基礎的研究
- (2) 教育実践および保育実践に関する研究
- (3) 発達臨床支援に関する研究
- (4) その他前条の目的を達成するために必要な業務

(組織)

第4条 研究所に、次に掲げる職員を置く。

- (1) 研究所長
- (2) 教員
- (3) 研究員
- (4) 連携研究員
- (5) その他学長が必要と認めた職員

2 研究所に、次に掲げる職員を置くことができる。

- (1) 特任教員
- (2) 客員教員
- (3) 客員研究員
- (4) 研究協力員

(研究所長)

第5条 研究所長は、基幹研究院人文科学系、人間科学系及び自然科学系の系会議構成員である教授のうちから学長が任命する。

2 研究所長は、研究所の業務を掌理する。

- 3 研究所長の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。
- 4 研究所長が辞任を申し出たとき、又は欠員となったときの後任の者の任期は、前任者の残任期間とする。

(研究員)

第6条 研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に従事する。

- 2 研究員は、本学専任の教授、准教授、講師及び助教のうちから、学長が任命する。
- 3 研究員の任期は2年とし、その終期が研究員となる日の属する年度の翌年度の末日を超えることとなる場合は、翌年度の末日までとする。ただし、再任を妨げない。

(連携研究員)

第7条 連携研究員は、第3条に掲げる研究及び業務のうち、特定の研究及び業務に従事する。

- 2 連携研究員は、本学各附属学校、保育所及びこども園の専任職員並びに本学特任教員及び任期付教員のうちから、学校教育研究部長によって推薦された者を学長が任命する。
- 3 連携研究員の任期は1年とし、その終期が連携研究員となる日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(客員研究員)

(客員教員／研究員)

第8条 客員教員／研究員は、第3条に掲げる研究及び業務に参画する。

- 2 客員教員／研究員は、本学専任の教員以外の者を、学長が委嘱する。
- 3 客員教員／研究員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(研究協力員)

第9条 研究協力員は、第3条に掲げる研究及び業務に協力する。

- 2 研究協力員は、本学専任の教員以外の者を、研究所長が委嘱する。
- 3 研究協力員の任期は1年とし、その終期が委嘱する日の属する年度末を超えることとなる場合は、年度末までとする。ただし、再任を妨げない。

(運営会議)

第10条 研究所に、研究所の運営並びに研究及び業務に関する事項を審議するため、人間発達教育科学研究所運営会議（以下「運営会議」という。）を置く。

2 運営会議は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 研究所長
- (2) 第4条第1項第2号に掲げる教員
- (3) 第4条第1項第3号に掲げる研究員
- (4) その他ヒューマンライフイノベーション開発研究機構長が必要と認めた者

3 運営会議の議長は研究所長をもって充て、議長は運営会議を主宰する。

- 4 運営会議の構成員は、第2条の目的を達成する上で必要な事項について、運営会議での審議を求めることができる。
- 5 研究所長が必要と認めたときは、構成員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。
- 6 本条に定めるもののほか、運営会議に関し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第11条 研究所の事務は、研究協力課が行う。

(雑則)

第12条 この規則に定めるもののほか、研究所に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成28年4月1日から施行する。
- 2 国立大学法人お茶の水女子大学人間発達科学研究所規則は、廃止する。
3. この規則は、平成30年4月1日から施行する。

令和4年3月14日（月） 14:00 – 17:00 オンライン

ヒューマンライフイノベーション開発機構評価委員会

人間発達教育科学研究所 成果概要報告

所長：大森美香



「健やかで活力ある人生を作る「こころ」と「からだ」の健康イノベーション創出

～ヒューマンライフイノベーション開発研究機構による研究・開発・実践～ 【戦略4-5】

戦略 健康科学・人間発達科学分野における国際的研究拠点形成

少子高齢化社会における社会的諸問題について「こころ」と「からだ」両側面から、QOLの向上を目指し、本学の強みである生命科学・生活科学・人間発達科学・教育科学の融合研究によるイノベーションの創出と成果の社会的発信を行い、健康長寿社会の実現を目指す。

人間発達教育科学研究所

重点領域：人間発達科学、教育科学

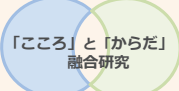
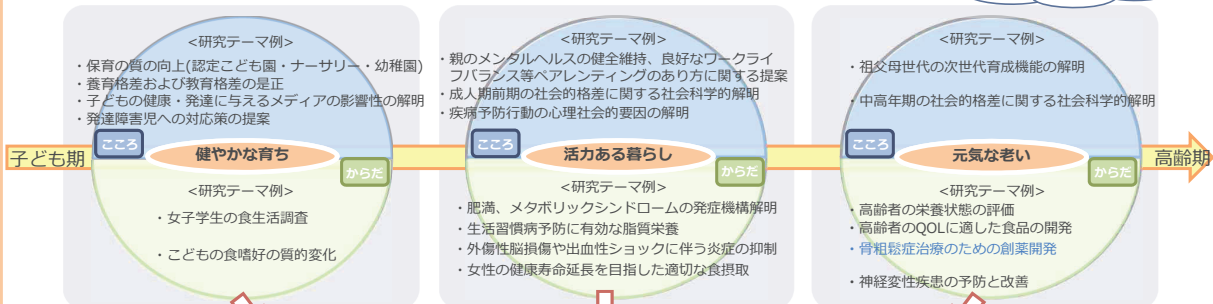
本学の強み・特色である人間発達科学、教育科学分野における研究教育拠点形成事業（COE, GCOE）の実績を基盤に、子ども期からの生涯にわたる健やかな人間発達とこころの健康維持を支える社会環境に関する探究を深め、良質な養育および保育・教育に関する研究成果の社会実装や、教育・社会格差解消に役立つ施策に関する提言を行う。

ヒューマンライフイノベーション研究所

重点領域：生命科学、生活科学

本学の強み・特色である生命科学と生活科学における健康科学に関する豊富な研究資源を基盤に、生化学・代謝学部門と栄養科学部門等を組織化し、基礎から応用まで連携して研究を推進する。人生百年時代を見据え、一生を通してQOLの高い生活を送ることのできる「からだ」を作るため、企業や国内外の他機関と連携して医薬品や機能性食品の研究・開発を行う。

人の発達段階に応じた様々な課題に対して、「こころ」と「からだ」の両面からアプローチ → 各研究所の成果を蓄積・発信



QOLの向上をキーワードとした「こころ」と「からだ」の融合研究による「健康支援・教育プログラム」の開発・実践

ヒューマンライフイノベーション開発研究機構

～プログラム概要～
 コア・コンテンツ(令和元年度開発予定)
 発達障害「子ども期」、炎症・感染症「成人期」、
 生活習慣病「成人期」
 3つの発達段階に即した9プログラム開発
 ・子ども期、成人期、高齢期

教育研究・実践の場
附属学校園、文京区立お茶の水女子大学こども園、平成30年度新設心理学科、子ども学コースと学内連携強化

健康長寿社会の実現

連携・共同・受託研究
国内外大学、研究機関、企業、行政等
国立精神・神経医療センターと「連携・協力に関する協定」を締結

本日の内容

1. 研究所概要
 - 沿革
 - 第3期中期計画中の目標
 - 組織
 - 保育・教育実践研究部門
 - 人間発達基礎研究部門
 - 発達臨床心理支援研究部門
2. こころとからだの健康のための研究開発
 - 学内科研による文理融合研究
 - Q & Aシリーズ実用化の試み
3. 中間評価以降のとりくみ
4. 第4期中期計画

沿革

2002年 「子どもの発達研究センター」
(学内措置センター)

2003年 「子ども発達教育研究センター」
(文部科学省より認可)



(2002年 - 2006年 21世紀COEプログラム)

誕生から死までの人間発達科学
Studies of Human-Development from Birth to Death

2008年4月 「人間発達教育研究センター」に改組
(2007年 - 2011年 グローバルCOEプログラム)



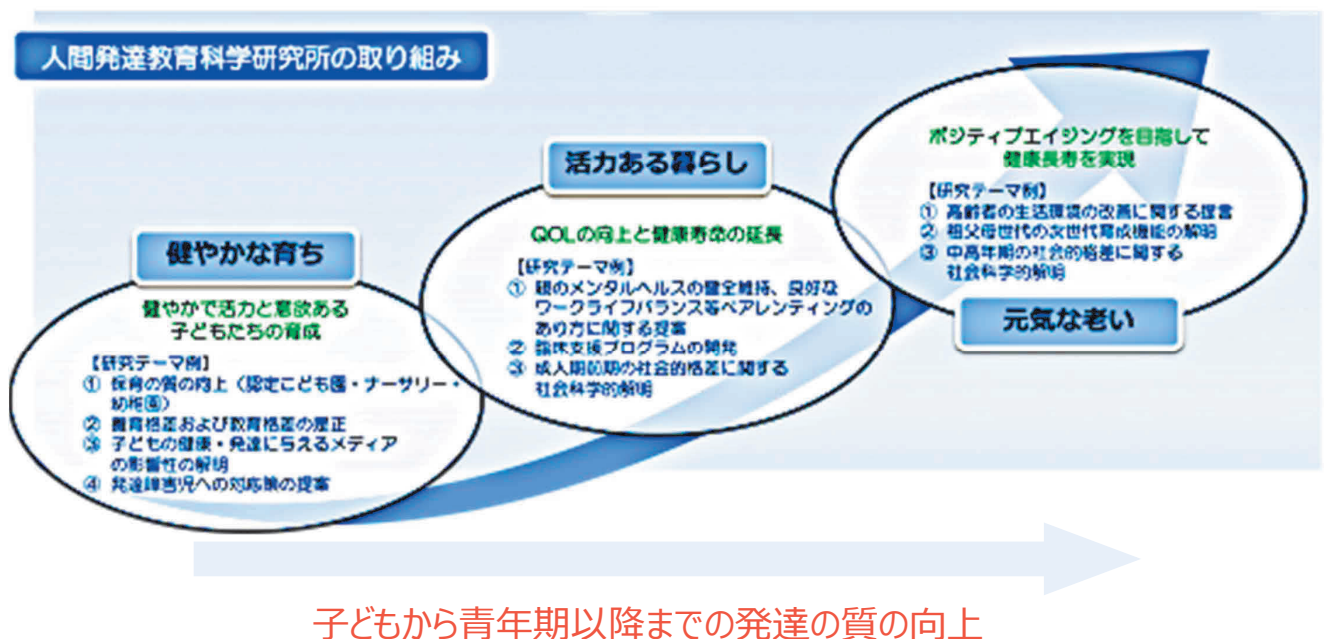
2015年4月 「人間発達科学研究所」に改組

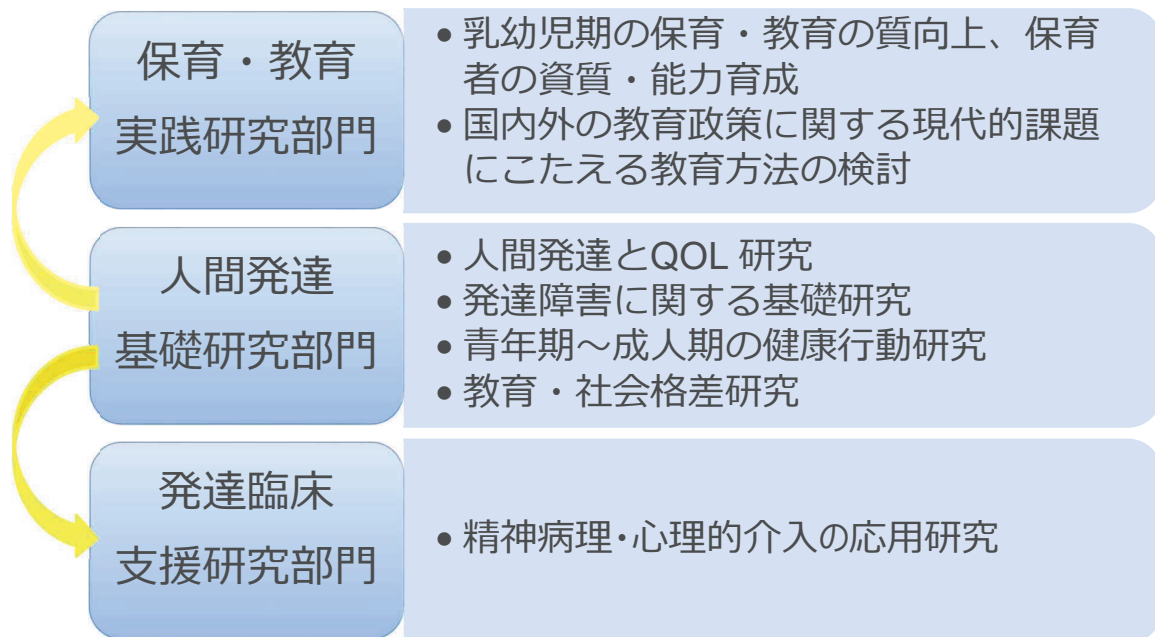
2016年4月 ヒューマンライフイノベーション開発研究機構
「人間発達教育科学研究所」に改組

第3期中期計画中の目標

- 人間発達に関する基礎・実践・臨床研究
- 革新的・効果的成果発信と提言
- 子どもたちの教育的・社会的格差解消を志向する研究
- 子どもの発達の質の向上のための施策策定に貢献

第3期中期計画中の目標





保育・教育実践研究部門

—地域に向けた研究成果の発信 (1)

浜口順子（部門長 お茶の水女子大学こども園園長）、小玉亮子、刑部育子、松島のり子、辻谷真知子、内海緒香

● 0歳からの生涯発達を見据えた教育カリキュラムの開発と研究成果の発信

- お茶の水女子大学こども園を実践の場とした研究
科学研究費補助金基盤研究（C）
「認定こども園教育・保育カリキュラムの開発：地域・社会に開かれた教育課程の視点から」
- 地域に開かれたフォーラムの開催
お茶大こども園フォーラム（2018年度～計5回開催）
2021年度は第6回お茶大こども園フォーラムを開催予定

● 乳幼児教育・保育の質の評価方法を開発・研究

- こども園園内研究会のデータをもとにデザイン思考と
発見共有型プロセスによる保育環境評価を公表
『ていねいに観ることから始まる子どもの探求を支える保育環境を評価するときの「5つの視点」』

—地域に向けた研究成果の発信 (2)

● ECCELL社会人講座の運営と検証

- 保育者の現職研修の提供
- 文部科学省BP（職業実践力育成プログラム）認定(2019 -)
Hamaguchi, J. & Utsumi, S. (2020). Unlearning-Based Professional Development for Early Childhood Care and Education: Survey of the ECCELL Program at Ochanomizu University, Japan Higher Education and Student Support, 11 pp.25-31.

● 「保育マネジメント研究会」

- 三園合同研究会（附属幼稚園、いずみナーサリー、こども園）、Life×Art展（附属学校園教職員や有志者）等を母体とした研究者と実践者による共同研究

一本学附属校園との連携

富士原紀絵、武藤世良、岡田了祐、山崎洋子

- **附属校園の研究・教育活動への参加と協働**
 - 附属校園テーマ別部会に**連携研究員**が参加
 - 附属校園連携研究部会とのシンポジウムの共催
例 「算数・数学部会」統計教育
 - 公開研究会にアドバイザーとして参加
例 附属中学校「社会科」
- **大学連携研究員による研究**
 - 本学附属高等学校と筑波大学附属高等学校とのキャリア教育に関する合同研究
 - 小学校新教科「てつがく」・新領域「てつがく創造活動」の影響の研究
- **機構と附属校園との共同の取り組み**
 - 健康支援・教育プログラムQ&Aシリーズの教材化

人間発達基礎研究部門

生涯にわたる「こころ」と「からだ」の健やかな発達のあり方に関して、 心理学・教育学・社会学の領域から研究を展開

上原 泉、大森美香、坂元 章、今泉 修、齊藤 彩、浜野 隆（部門長）、坂本佳鶴恵、大森正博、大多和直樹
神尾陽子、菅原ますみ、西村直之、松浦素子、山宮裕子、松本聡子、猪股富美子

「人間発達とQOL」グループ

- 養育環境のあり方が子どもの健康や発達に及ぼす影響性
- 両親の心身の健康や発達に及ぼすワークライフバランスや職場環境の影響性について長期的な観点からの研究を展開

👉 家族全体のQOLについて実証的な知見を提供する

「思春期・青年期・成人期の健康行動研究」グループ

- 個人の心身の健康や発達に関する健康心理学的な基礎研究
- インターネットやギャンブル依存に関する調査研究

👉 リスク行動の発現機序や予防に資する知見を提供する

「教育格差研究」グループ

- 保育や教育にあらわれる格差とその発達への影響に関する長期追跡研究・国際比較研究を展開

👉 教育的・社会的格差の解消に向けた提言をおこなう

研究活動の概要：2016～2018

【2016 年度】

- 妊娠期から子どもが成人期に達するまでの家族の健康とQOLに関する長期追跡研究（**科研費基盤研究（A）**）（**人間発達とQOL研究**）
- 子育て世帯のワークライフバランスとQOLに関する国際比較研究の実施（**ドイツ日本研究所との共同研究**）（**人間発達とQOL研究**）

【2017 年度】

- **多施設共同**の発達障害児の追跡調査研究（国立精神・神経医療研究センター，所沢市）（**人間発達とQOL研究**）
- 成人期のギャンブル依存の調査研究（**健康行動研究**）
- スリランカ中高生の食行動に関する調査（**健康行動研究**）
- 公開シンポジウム「家庭の経済的不利と学齢期の子どもの諸問題」の開催（**人間発達とQOL研究／教育格差研究**）

【2018 年度】

- メディアと子どもの発達に関する乳児期から児童期に至るまでの長期縦断研究に関する成果発信（**人間発達とQOL研究**）
- 初等中等教育における教育情報化に関する英文図書に寄稿（**教育格差研究**）

【2019 年度】

- **全国学力調査の大規模全国データの分析**を実施（メディア掲載、新・学習指導要領解説資料への反映）（**教育格差研究**）
- ボディイメージや摂食障害などに関連する**国際セミナー**2件の開催（**健康行動研究**）

研究活動の概要：2020～

【2020 年度～】

- Q&A シリーズ「発達障害 ASD 編」、「ADHD 編」、「LD、発達性協調運動障害、チック障害編」編集・発刊、ダウンロード用PDF公開 **（人間発達とQOL研究）**
- COVID-19ロックダウン中の健康行動への影響に関するフランスほか4か国国際共同研究 **（健康行動研究）**
- インフルエンザワクチン接種意図におよぼすメッセージのフレーミングの影響に関する高校生を対象とした調査研究の実施 **（思春期・青年期の健康行動研究）**
- Q&A シリーズ「感染症」の執筆（ヒューマンライフイノベーション研究所（IHII）との共同作業）
（思春期・青年期・成人期の健康行動研究）
- 全国学力調査の大規模全国データの保護者調査の分析を実施（メディア掲載、学会における議論喚起、行政への指導助言） **（教育格差研究）**



発達臨床支援研究部門

精神病理・心理的介入の応用研究

岩壁茂（部門長）、石丸徑一郎、山田美穂、高橋哲、砂川芽吹

- **発達障害者・児に関する研究**
発達障害児の親を対象としたペアレントトレーニングの実施、心理的効果の検討
- **LGBTQに関する研究**
インターセックス / 性分化DSDsとトランスジェンダー
- **心理療法のプロセスや効果に関する研究**
エモーションフォーカストセラピーのプロセスと効果の検討
- **司法領域における研究**
少年鑑別所入所者の自傷行為に関する総合的な研究
- **ひきこもり支援事業（東京都事業2018年まで）**

臨床実践・支援研究（2021-）

自閉スペクトラム症（ASD）のある女兒を対象とした親子支援グループ

あまなつ茶あむ

2021年度よりスタート
@お茶の水女子大学心理臨床相談センター

あ： あそぶ
ま： まなぶ
な： なごむ
つ： つながる
茶あむ： お「茶」大+「チャーム charm」

ASDの
ある女の子
からだ
こころ

あまなつ茶あむは、ASDのある女の子の思春期に関連するテーマについて、「こころ」と「からだ」からのアプローチを行う。知識を学ぶだけではなく、実際にからだを動かしながら、グループで楽しく学ぶ。女の子たちが、自分のこころとからだを素敵なものだと感じられることを目指す。

【2021年実績】

- ・院生スタッフが参加する臨床教育・トレーニング実施
- ・オンラインセッションの開始（2021年度後期～）
【介入】「ちしき」と「からだ」のセッションから構成されたグループプログラム
【効果検証】生活の質、メンタルヘルスについて、介入前後の変化を測定、効果検証

主要な研究成果（論文数・学会発表）

年度	論文発表数		国際学会での発表数		シンポジウムなど開催
	件数	うち英文	件数	うち口頭	件数
2016	41	6	29	6	9
2017	36	10	18	1	19
2018	65	19	33	17	10
2019	45	16	20	6	9
2020	52	23	9	1	6
2021	41	20	13	1	9

こころとからだの健康のための研究開発
－学内科研による文理融合研究
－Q & Aシリーズ実用化の試み

学内科研による文理融合研究

女子青年における食生活と心身の健康との関連に関する縦断的研究 —本学学部生を対象としたパネル調査 (2018-2019)	発達障害児の養育等の環境要因に対する脳神経学的な解析 (2020)
申請時メンバー 【研究代表者】 小林哲幸 (HLI, 細胞生化学) 【研究分担者】 藤原葉子 (HLI, 栄養化学) 赤松利恵 (HLI, 栄養教育、公衆衛生) 石川朋子 (HLI, 分子栄養学) 大森美香 (IEHD, 健康心理学) 菅原ますみ (IEHD, 教育心理学) 岩壁 茂 (IEHD, 臨床心理学) 内海緒香 (IEHD, 教育心理学) 調査実施担当メンバー 松本聡子 (IEHD, 特任AF, 環境心理学) 山崎洋子 (IEHD, 特任AF, 健康心理学)	【研究代表者】 宮本泰則 (HLI, 神経生物学・分子細胞生物学) 【研究分担者】 上原 泉 (IEHD, 発達心理学) 後藤真里 (HLI, 脂質生化学) 今泉 修 (IEHD, 認知心理学) 毛内 拓 (HLI, 神経生理学・生物物理学)

学内科研による文理融合研究

「女子青年における食生活と心身の健康との関連に関する縦断的研究
—本学学部生を対象としたパネル調査」

研究内容

- 機構目標の子ども期から高齢期までを対象とした「健康支援・教育プログラム」の開発およびその教育場面における実装の推進。
- 女子青年の心身の健康に関する文理融合の調査研究を実施。

調査内容

- 調査時期: 経年2時点のデータ収集
 - Time1: 2018年11月～12月・Time2: 2019年11月～12月
- 対象者:
 - 全数調査: 本学の全学部学生・インテンシブ調査: 本学一部の学部学生
- 調査内容:
 - 心身の健康 (例:発達障害傾向)
 - 生活習慣 (例:睡眠習慣)
 - 個人差要因 (例:パーソナリティ傾向)

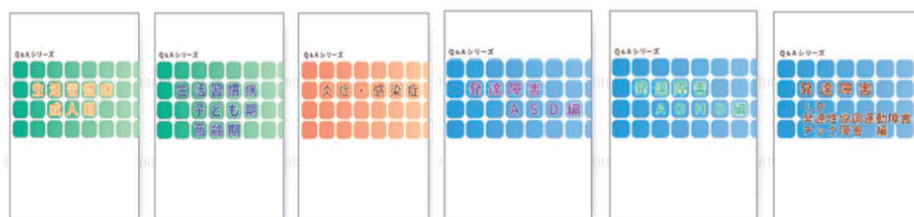
学内科研による文理融合研究

「女子青年における食生活と心身の健康との関連に関する縦断的研究
—本学学部生を対象としたパネル調査」

成果発信 (機構全体、2020年以降の成果に)

- 論文 国際誌 4件
 - Development and validation of Expanded Mindful Eating Scale. *International Journal of Health Care Quality Assurance*, 33 (4/5), 309-321.
 - Later chronotype is associated with unhealthy plant-based diet quality in young Japanese women. *Appetite*, 166, 105468.
- 学会発表 国際学会 4件
 - The association between orthorexia nervosa and Instagram use among Japanese women. International Conference on Eating Disorders 2020, Online, June 11-30, 2020.
 - Association between dietary intake patterns and psychological factors. The 32th International Congress of Psychology, Online, July 18-23, 2021.
- 学会発表 国内学会 2件
 - Instagramの写真の閲覧・投稿行動とボディイメージとの関連 日本健康心理学会第33回大会 2020.11.16-11.22.

健康支援・教育プログラム (Q&Aシリーズ) 実用化の試み —附属校園での教材開発



附属校園での教材開発



附属校園教材・論文データベースへ

Q&Aシリーズ教材化・授業案

校種	使用コンテンツ	科目・活動	授業案
附属幼稚園	炎症・感染症 生活習慣病	保護者会	保護者あての保健便りを取り上げ、関心をもった保護者に冊子とアンケートを配布
附属小学校	発達障害：LD	個別支援 小1	小1 LD児に対する教室実践 トークンと「SOAP」記述を用いた自尊感情と社会的スキルの涵養～個別支援と学級の文化形成の関わりに着目して～
	生活習慣病	社会科 小6	縄文時代と弥生時代はどちらが健康かについて食（栄養素）から考える 「縄文と弥生、生きるならどちらが幸せか」の活用事例
	炎症・感染症	保健体育 小6	新型コロナウイルス感染症ワクチンの接種等の予防行動について考える 「病気の予防 感染症の歴史から学ぼう～withコロナの時代を生きていくために」
附属中学校	生活習慣病	保健体育 中3	生活習慣の予防 健康な生活と疾病の予防
附属高等学校	生活習慣病	保健体育 高1	がん教育 がんを理解し、実生活で何ができるか考える
	生活習慣病	保健体育 高2	女性の健康：骨量やホルモンの変化（更年期障害等） 加齢と健康より「骨のはなし」

25

Q & Aシリーズアンケート（「発達障害」）

満足度	人数 (%)
とても満足	23名 (46)
満足	25名 (50)
どちらともいえない	0名 (0)
やや不満	1名 (2)
不満	0名 (0)
記入なし	1名 (2)
計	50名 (100)

理解度	人数 (%)
理解が深まった	39名 (46)
初めて知ることがあった	15名 (18)
知っていることが多かった	6名 (7)
役立つ情報があった	24名 (29)
記入なし	0名
計	84名 (100)

（コメントより）

- Q&A形式がとても要点がまとまっていてわかりやすかったです。本人、家族、支援者が共通のツールで共有し理解できると思うので活用したい。ライフステージごとにポイントがわかり、また切れ目のない支援という視点でもよいと思いました。
- 幼児期等の診断を受けて間もない子のお母さんお父さんへはよりわかりやすく見通しのもてるものとなると思います
- 文章表現がやや難しく、内容が理解しづらいところもあった。
- 実践している現場の者としては、文章から想像していただくことができました。
- 普段から疑問に思っていることの多くを実際のQに見つけることができました。また、問いに対する解説は非常に明確に説明されていたので、多くの人の疑問（または不安）を解決できるのではないかと思います。学齢期の対策が詳細に説明されており（ASD、ADHDは成人期も！）特に参考になりました。

中間評価への対応

項目	中間評価コメント	中間評価以降の活動
国際的教育研究 拠点形成・ 国際連携	・組織レベルでの海外との交流 ・外国人研究者、国外の研究機関との研究交流の活性化	・オンラインセミナーの開催。 ・留学生の研究への参画
文理融合・ 異分野連携・ 学内外連携	・2研究所の研究教育活動が有機的に結びついていない ・組織レベルでの国内大学や研究機構、民間企業との連携	・国立精神・神経医療研究センター / 所沢市との連携研究の継続 ・他大学ムーンショット研究提案への参画
研究テーマ・ 研究業績・活動	・特定のテーマに限定した協働研究を検討するとよい	・発達障害の感覚異常、感覚異常と食行動の関連などの共同研究の開始
人材育成	・学生を積極的に巻き込むことで、広い視野をもつ次世代リーダーを育成することができる	・「女性の発達障害の理解」と「多職種連携支援」に関するオンライン研修
お茶大ならではの 取組	・本機構での研究や啓発活動を、学生生徒の教育にどのように活かしていくか。 ・女性ならではの視座や洞察	・附属と連携、Q&A集にもとづく教材開発 ・2022年度設置ジェンダード・イノベーション研究所との連携

第4期中期計画

- 超高齢化社会に対応できる「こころとからだの健康」の増進維持
- 「食」をこころ（発達科学研究）とからだ（ライフサイエンス研究）の橋渡しとして焦点を当てる。
- ヒューマンライフサイエンス研究所と人間発達科学研究所が連携した研究の推進。
- 企業・研究機関と連携し実用的アウトカムを目指した実装研究を進める。